

PL Chikamatsu, Shuko
803 Chikamatsu Shuko kessaku
I4 senshu
1937
v.3

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

德正上字
田宗司野
秋小白小
聲鳥劍二

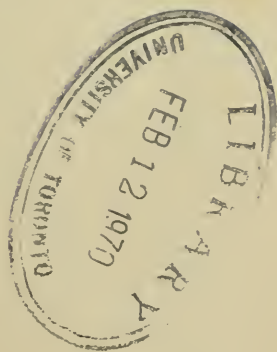
監
修

第
三
卷

近
松
秋
江
傑
作
選
集

中
央
公
論
社
刊

PL
803
I4
1939
v. 3



第三卷 目次

子の愛の爲に……………一

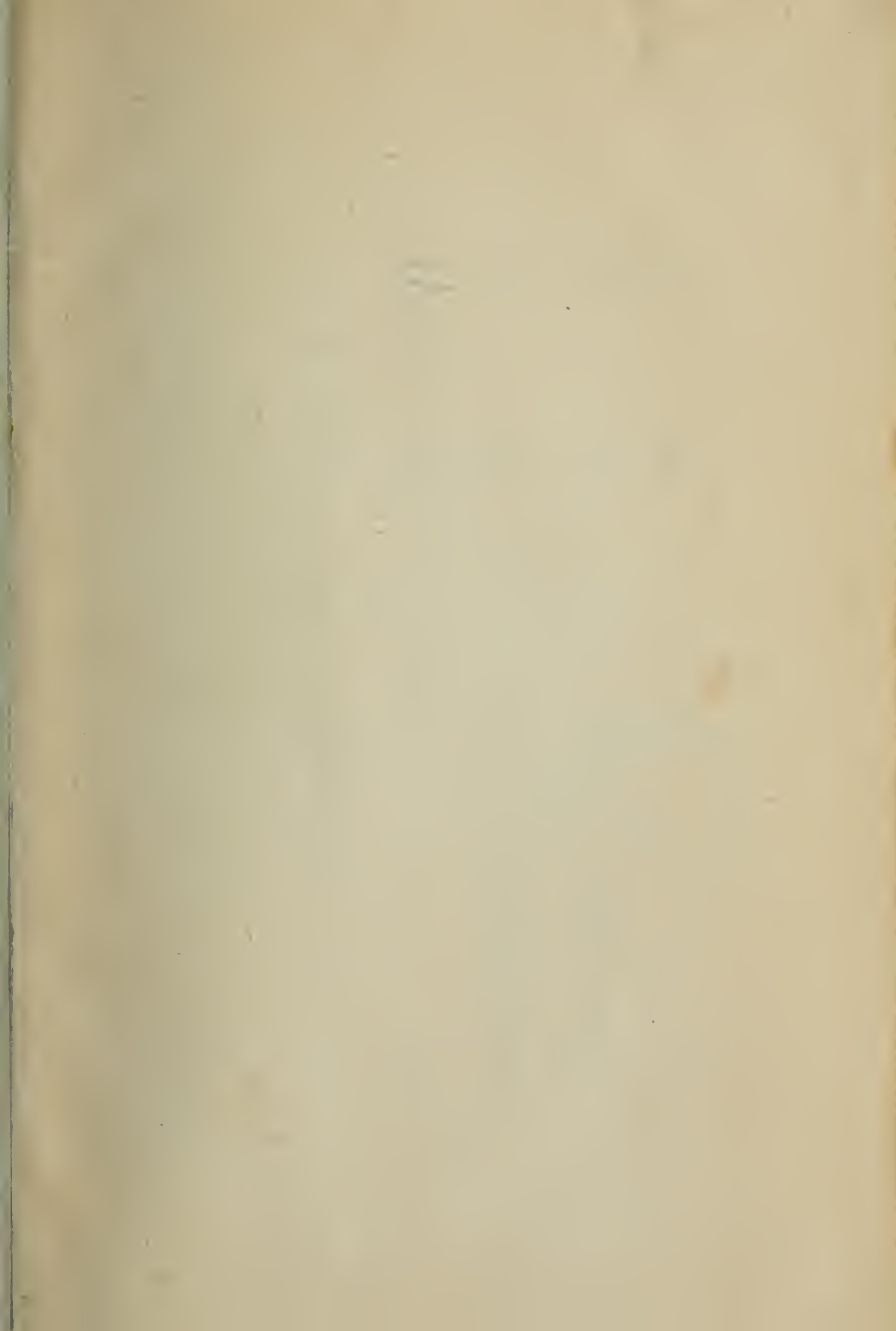
意氣なこと……………一五五

夏 姿……………一八七

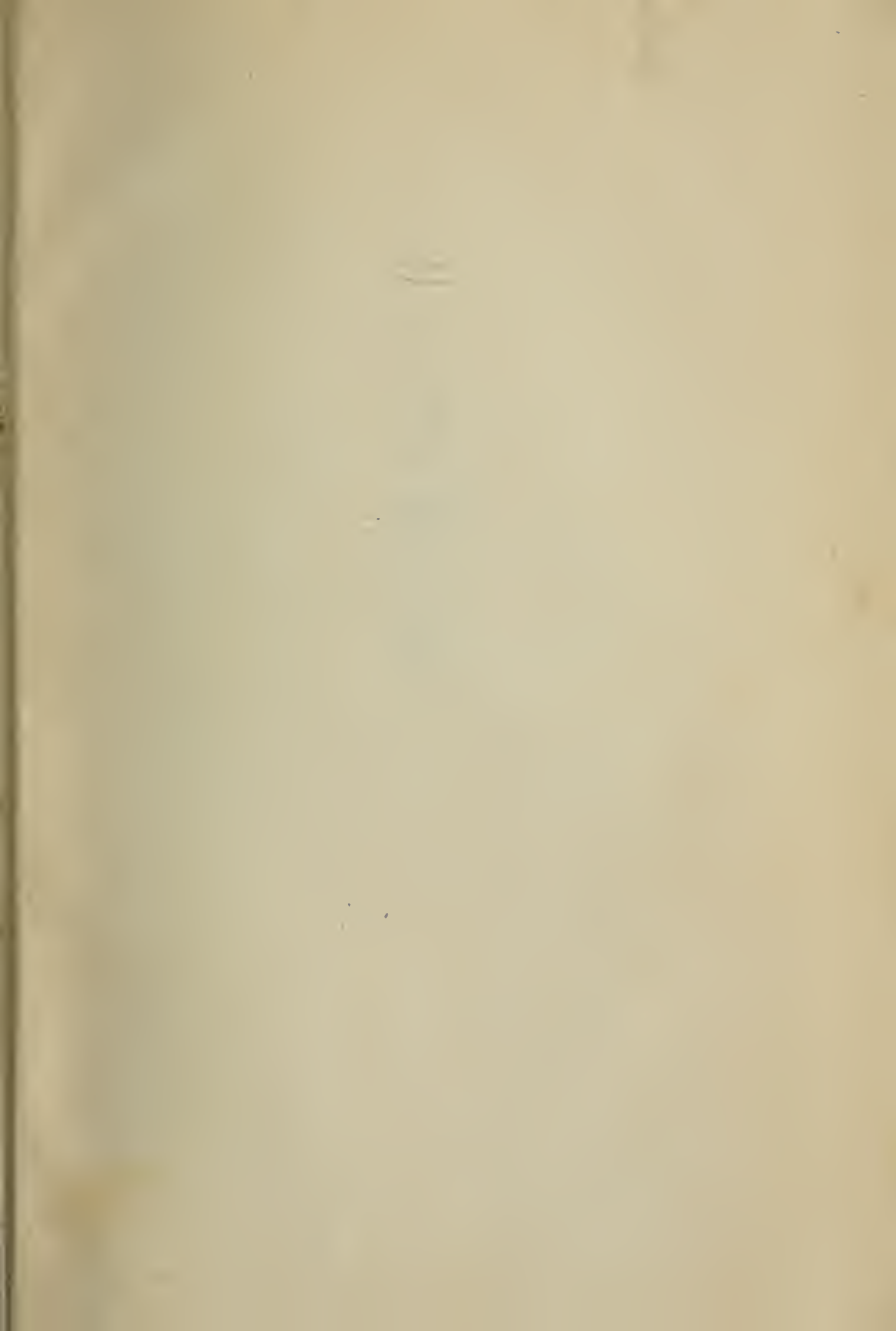
小 猫……………二八七

苦 海……………三〇五





子の愛の爲に



五十に近くなつて思ひがけもなく子供を持つた宇治は、それまで長い過去の生活を
通して専ら兩性の愛慾に向けられてゐた愛情の目的を今度は子供のうへに置くことに
なつた。それはしかし、彼が故意に努めてさうするのでなく、嘗て自分の戀する女に
向つて注いだ時と同じやうな深い本能性に基づくものであつた。

宇治の性質として、これまで女を戀した場合の、彼の氣持や行爲によつてみても、
ある一つの目的物に向つて全力の愛情を傾倒してゐる場合には、丁度鹿を逐ふ獵師の
眼に山が見えないといふ譬のとほり、その一つの目的物よりほかのものは殆ど考へら
れなかつたのであるが、長い間幾度かの戀の失意の境遇を経て來て、彼が漸く戀にも
異性にも倦み疲れた時分には、彼の精神にも肉體にも戀愛の情火の自然に消熄すべき
五十に近い年であつた、そしてちやうど西鶴が萬の文反故の中に「もはや女房持中候
力も御座なく候。」といつてゐると同じやうに、戀をする力もなくなつてゐるところへ
以て來て、不思議の運命は彼に一人の子供を與へたのであつた、さういふわけで、今
まで異性に向つて注がれてゐた愛情——その愛情は、溢れるほどの愛情でありながら、
不幸なる彼には、いかなる運命の惡戯かその愛情を傾倒すべき目的物を彼に與へなか

つた。——を、子供の愛に向つて注ぐやうになつたのは極めて自然の變化であつた。

世俗の習慣からいふと、何故か、異性の愛に溺れることは不道の行爲であるやうに考へられ、之に反して子供を愛することは、いくら深く愛しても、それは不徳でないばかりか、親の慈愛として道徳的行爲の如くに考へられるのは矛盾したことと思ふのであるが、とにかく宇治が、そんな成り行きから、愛情の對象を異性から子供の上に移したことは、又自然に彼の世間的の信用をいくら回復する結果をも持ち來したことは事實であつた。

宇治の生活が、そんな次第で、これまでよりも、世間的の眼で見て、遂に眞面目なものになつて來た事は争はれなかつた。尤も彼自身では以前の生活とても決して不眞面目なものであつたとは思つてゐないのであるが、さうかといつて、今の生活が眞剣であることも、彼自身にとつて一點僞りのないことであつた。彼は、今までとても生命が惜しくないことはなかつたが、年をとつてから、早婚の人間にしては孫といつてもいゝくらゐの子供を持つてみると、これまでよりも一層生命は大事であるといふ事が犇々と感じられた。そして又今までとても錢かねの欲しくないことはなかつたが、さう

して生ひ先の遠い子供の親といふものになつてみると、從來に幾層倍して錢が大事であるといふことも眞劍になつて考へられた。

子供が出来てからの彼の念頭を絶えず往來してゐることは、かういふことであつた。

「四十八で子供を持つて、この先運よく十年生きてゐたところで、子供は、やつと十歳になつたばかりである。慾をいふなら、どうか子供が女學校を卒業するまで生きてゐたいものだが、それは、これから先十七八年もかゝることである。自分の壽命が今後十七年も十八年も保てることは絶望的なことである。すると、いつかは悲しい死別の時が早晚來るにちがひない。同じ子を持つなら、もつと早く持つことが出來たら、せめて今少し長く親となり子となつて現世の縁を悅樂することが出來たらうに：」と、仕舞ひには、そんな取越し苦勞もしてみたり、果ては愚痴になつてもみたりするのであつたが、それも結局宇治自身の心得が長くそつちの方へ定らなかつたから、今となつては致方もないことである。またそれを格別後悔もしなかつた。

そして、以前戀に熱中してゐた時分に、藝術は藝術として又異つた意味で、それが彼に取つて大事であつたと同じやうに今は子供の愛情を中心にして生きてゐるのであ

つても、藝術の大事には少しの違いもなかつたが、自分の死んだ後で子供とその母親とが困らないだけのことは考へて置かなければならぬと思つた。否、さうなると、甚しく杞憂家の宇治は、もう明日の日にも自分は死にはせぬかといふやうな觀念に脅かされるのであつた。實際こんなことをいふのは、落語にでもあるやうな神經病みのやうであるが、今日の東京市中の交通機關の現狀などを考へ出すと、道を歩いてゐても電車に乗つてゐても、何處に忌はしい運命の神が潜んでゐるか分らないやうな氣がするのであつた。それゆゑに、無事に生きてゐる間に一日も早く自分の亡き後の謀をして置かなければならないと、丁度何ものかに後を追ひ駆けられてでもゐるかのやうに心が急かれるのであつた。

たつた半日東京の市中に出てゆくだけでも、自動車にも轢かれず電車の事故にも遭はず、無事に、郊外の自宅に歸つて來る時には、わづかに、停車場から五六町と隔たらぬ道をも、いつもの、子供が風呂に入つて、それから寢床に入る時刻に、どうかして

少しでも遅れることがあると、宇治は大抵俵に乗つて道を急いだ。そして、何より先に、

「坊主はどうした。何事もないか。」と、訊いてから靴を脱いだ。

子供の母親のお悦は、

「これがゐるから、今年はもう、あんまり遠いところへ幾日もいつて居られないでせう。」といつて笑つてゐた。

愛樂がそこに集まつてゐる以上は、今のところ、子供の爲に脚止めをされてゐても格別不満にも感じなかつた。それに毎年ひどく夏負けのする宇治も今年の夏はそんなことで氣の張つてゐる爲か、いつもほど弱りもしなかつた。丁度暑氣に向ふ六月の初めから始めた新聞の連載小説はある事情のために途中で止めたが、それでも殆ど七月一ぱいは書いた。盆前の急劇な暑さ、それから土用に入つてからは息をも吐かせないほどの九十度の酷暑にも抵抗しつゝ、來訪者がみんな、「このお座敷は涼しいでせうなあ。」といふ、見掛け倒しばかりの、風通しの悪い二階座敷に閉ぢ籠つて、行者が行でもするやうな勇猛心を鼓して机に向つた。搗てて加へて、去年と丁度反對に梅雨が空

つゆであつた上に土用前後の二十日ばかりといふもの、藪も枯れるかと思ふばかりの日照りが續いた。

平素は健康體を自信してゐるお悦も、去年の秋その子供を生んでから、四六時中絶えずその子供の爲に惱まされてゐた。生れて五六ヶ月の春の頃には夜半に何度も眼を覺ますので、彼女はその爲に常に睡眠が不足勝ちであつた。それから段々夏になつてそろ／＼子供が這ひ出す時分になると、今度は、夜はよく寝るかはりに、朝の六時頃から晩の八時頃まで十四五時間の間といふもの、子供は殆ど晝寝もせず、一ン日母親の膝のまはりに絡まつて絶えず乳房を銜へてゐなければ承知しなかつた。

「せめて二時間でも晝間、床の上にひとり寝てみてくれると、愈なまくらの女中が一日がかりでするくらゐのことは、さつ／＼とやつてしまふ。」と、彼女は零してゐた。

子供は、生れ出るまで、宇治がいろ／＼に氣遣つたほどでなく、三人ばかりの醫者に健康診断をしてもらつたところによるも、何處に異状もない健かな體質であつたが、

ただ一つの缺陷はよく眠らないことであつた。乳兒は二十時も眠らなければならぬといふに、十二時完全に眠らなかつた。醫者はそれを遺傳性の神經質であるといつたが、その點は、ちやうど子供の眉毛や眼の切れ目、額の形などが生寫しである如く、明瞭と父親の遺傳をうけてゐたが、母親にもヒステリイ性の不眠性はあるのであつた。

「どうも遺傳とすれば、これは仕方がない。」といつてゐたが、母親は、その夏の間に見るみる健康が傷けられてゆくのが見えてゐた。宇治は、毎日それを目撃してゐて、親が子を育ててゆく状態に、何となく或る凄慘味を感じてゐた。生物學者の丘淺次郎博士の説によると、親は子を生みさへすれば、それで生物としての機能を了るのであつて、子を生めば間もなく死ぬのが本當であると、嘗ていつてゐた。宇治は、母親が一人の乳兒の爲に四六時中惱まされてゐるのを見るにつけても、屢々そのことを想ひ浮べてゐた。そして、乳こそ與へないが、彼自身も考へてみれば、近頃の自分は、絶えず爲ること考へることが、子供のことを出立點としてゐるのであつた。

「この金食ひ蟲めが！」といつたり、「この、親の生命取りめ！」といつて、宇治は、一日に何度となく子供の傍に寄つて、ぺつと、圓く肥つた頬を指の先で愛撫するので

あつたが、そんなに母親の凄惨として惱まされてゐる有様を見たり、又自分が今はただ子供の將來のことで苦勞してゐることが分つてゐても、不思議にそれが、不満でないばかりか、却つて愛樂であるやうに考へられるのであつた。

しかしお悦は、口でこそそんなに元氣さうなことをいつてゐたが、事實ひどく疲勞してゐた。半病人のやうになつて、子供を持って剩してゐた。ヒステリーのやうに、「さあ澤ちやんお呑みなちやい、いくらもお呑みなちやい、みんなお前のだから：：可愛いんだからねえ、かはいいんだからね。」と、大きく垂れた乳房をあてがつて添乳をしながら、きゆつと抱締めてゐたりするが、土用の眞晝間、九十度の炎熱にじりじり煎り付けられながら、やつと少しの晝寢をしかけたかと思ふと、ものの二十分も経たぬ内に、目を覺まして、わあツと泣き出す子供を賺し煩うて、

「これの爲に體中の物をみんな吸ひ取られてしまふ。」

と、母親はこぼし／＼してゐたが、傍はたの見る眼にもまつたくそんなやうに思はれた。乳兒も八ヶ月からになれば、母體から乳を一日に六合から吸收するといふことだが、親の生命力を犠牲にしても本能的に發育してゆかうとする乳兒の生きる力は凄じかつ

た。

お悦は体内の水分がさうして毎日々々子供の爲に吸取られるからでもあるまいが、連日の旱天ひでりのためにも亦体内の水分が乾涸かれてしまふかと思ふやうに、煩はしげな顔を擧めて、恐ろしいやうに照りつゞけてゐる空を絶望的に見上げて、

「雨が降つてくれるといゝがなあ。……どうして今年はかう雨が少いんだらう。」

と、啣つやうに繰返していつてゐた。新聞の夕刊などには涼しい雨を持つてくる颯風がもう沖繩群島あたりまで來てゐるやうなことを書いてゐたが、それ等はいつも空頼みにをはずつた。

夏には殊に弱い宇治は、いつの年でも降雨に戀ひ焦がれることは一入であつたが、今年は不思議にそれほど思はなかつた。それだから幾らか暑氣に對しても抵抗力が出來たのかとも思はれた。そして彼は格別炎天つゞきを零すほどのこともなく、毎日眞裸體になつて、蒸すやうな二階で何か知ら机に凭つて職業の筆を動かしてゐた。

お悦は偶に子供を抱いてその二階に上がつて來ることがあると、

「おゝ暑い。とても階下したとは比べられない。……おゝ暑いあつい。」といつて遁げるや

うに直ぐ階段を下りていつた。

まめな宇治は、その階段を一日の中に、數へたら、おそらくは四五十遍は上つたり下りたりした。

お悦は、女中と、

「とても、あの眞似は出來ない。」と、笑つていつてゐたが、彼女はそこに上つて行くのが、東京までも出てゆくやうに億劫であつた。

それに宇治の家では、いつも好い女中のないのに困つてゐた。不思議とその居まはりには好い女中が多かつた。中には一つ家に五つになる上の坊ちゃんが生れて間もなくからずつと五年も勤めてゐて、次の三つになる嬢ちゃんは、

「お嬢ちゃんは、誰の子？」と問へば「時の子。」といふほど馴付いてゐるのがあつたり、さうかと思ふと、やつと二十か二十一の小柄の女で、五つを頭に、三つに一つの三人の子供がある家に、これももう四年も勤めて居て、一人を負つて、二人の子供を両手に引いて、まるで鈴のなつたやうな形た姿りをして、そのうへ遠くへ物を買ひに行つて來たり、そんなによく働いてゐても、その細君は女中冥利といふことをまだよく

知らぬと思はれて、何か氣に入らぬことでもあると、女中などは上野の公設市場へ行けば降るほどある。」と、そんな捨てぜりふを言ふといふ話も聞いたりした。その他身装も振りも構はず、せつせと働く女中は、餘處よその家には、そこら中に居つた。一つ井戸を使つてゐる相貸家に住んでゐる銀行員の家にも、足掛け三年勤めてゐる女中がゐて、傍またの見る眼にも感心するほどよく働いてゐた。それにも拘はらず、宇治の家では去年の秋子供が生れた時からもう、十四五人の女中が、まるで木賃宿か何ぞのやうに始終出つ入りつしてゐた。

お悦は、何よりも餘處の女中のことばかりを、毎日のやうに口に出して羨んでゐた。それで、彼女はそれ等の女中と、子供を抱いて互に表に立つてゐたりして自然に親しい口を利き交はすやうになつた時に、そつと給料などのことを訊いてみると、何處の家でも、宇治の家で遣つてゐる月々の給料に比べて大抵三圓から五圓は少なかつた。宇治の家には、子供が生れてからは、中途で一人のこともあつたが殆ど常に二人の女中が居た。宇治が、年を取つて持つた子供の可愛さから、出来るだけのことをして子供に手敷を掛けることを厭はなかつた。それにも拘はらず、餘處眼に見てゐても、そ

れ等の近所の女中が一人で爲てゐることを、宇治の家の女中は二人も居つて、……又どうかすると、出代りで三人にも重り合つたことがあつたりするが……それほど働かなかつた。

「何處の家でも、あんな好い女中を何處から目つけて來るんだらう……ほんとに、
内で、どんな非道いことでもしてゐるかと思はれて、始終木賃宿のやうに出たり入つたりして外聞が悪くて仕様がな、お悦は躍起になつて絶えず零してゐた。食べる物なども、お悦は、毎時も自分と同じ物を女中に與へて、一つ餉臺で食べてゐた。

それでも中に一人だけ、働くことは鈍かつたが、宇治の家ではめづらしく二月から來て、八月の差入りまでやつと六ヶ月だけ居つた女中が、これも、初め來た時には、二三年は居るつもりで銚子在の田舎から出て來たのであつたが、もう來て四五ヶ月めの六月末に、出し抜けに親から本人にあて、手紙が來て、主人の方へは御厄介になつたとも何とも一言の挨拶もなく、この書着き次第嫁にやるから戻つて來いといつて來

た。女中がそのことをお悦に話したから、彼女は、女中に、

「それならお前何時歸るつもり？」と訊くと、

「明日歸るつもりです。」と、いつた。

お悦はそれでひどく心の中で腹を立てたが、

「あ、さう……」といつたきり、それ以上のことはいはなかつた。口に出さずに腹の中に持つてゐるだけ、それだけ彼女の氣持はくしや／＼した。無論そんな、條理の解らない者を、こちらから手を突くやうにいつて、何時までも引留めて、居てもらはうとする氣はなかつたが、宇治の家にとつて間の悪いことは、その女中を自分の郷里から世話をして伴れて來た、二十四五になるも一人の婦人が、——これは女中といふわけでもなく、去年宇治の家に子供が生れた時分から、出たり入つたりして、宇治の家で居つて働いてゐた。それは、宇治が今の家に移つて來る前、やつぱり近い處で、先の家の隣家の細君であつたが、去年の六月頃、そこを離縁にされた。それについて深い事情をよく知つてゐる譯でもなかつたが、その出され方が傍眼はためにも随分非道い仕方であつたのと、その婦人が温順しい性質で臺所まはりのことから何から、よく働く人

間であつたために、宇治夫婦はひどく彼女に同情して、いろいろ心配したこともあつたのであつた。そして、そのころもう妊娠してゐたお悦のお産のことなどを考へて、宇治の家では彼女に、ずつと當分居つて家事を手傳つてもらひたかつたのであるが、眼と鼻との隣家同志でゐて、まさかそれもならなかつた。だが今度の家は先と大分距離が隔つてゐるので、子供が生れて一月ほど経つてから、——一時震災の後銚子在の郷里の方へ歸つてゐたのであつたが——又出て来て宇治の家へ来て手傳つてくれてゐた。彼女は針の方のことも可なりよく出来て、臺所まはりのことを片付けてしまふと一寸の間でも直ぐ裁板の前に来て坐るといふ風であつた。宇治夫婦は、何處か好い處があつたら、彼女を嫁に世話をしたいと思つてゐた。そのうち年末に迫つて一つ、五つになる男の兒のあるところへ、好きさうな縁口があつて、向うも大分乗り氣になつてゐたが、ある故障からその方の話は、いけないことになつた。すると彼女は、その前から遠縁の従姉妹になる婦人の方で話のあつた、三河島とかへ嫁かたづく氣になつて、年暮くれの二十五日か六日になつて、風呂敷包みをも一つ抱へたきりで往つてしまつた。宇治の家では生れて、やつと二ヶ月経つかたゝない赤兒を抱へてこれから冬季ふゆに入らう

とするのに忽ちその日から困つてしまつた。その縁先きといふのは、お悦が彼女から、ひととほり様子を訊いたところによると、向うはまだ奉公をしてゐる身體で、此方も嫁に行くといふよりも、何の事はない奉公に行くやうなもので、甚だ彼女の爲に香ばしくなかつたけれど、人が縁があつて、自分が格別不満も感ぜずに嫁してゆかうとするものを、宇治の家で強ひて留める譯にもいかなかつた。あんまりいふと、宇治の方で勝手にいふと思はれるのを遠慮して、たゞ十分の注意だけを與へておいた。

その時も、彼女は、自分が去つてしまふと、宇治の家の手づかへを察して、自分の郷里の方から、ぜひ一人女中を世話しようと思つたのであつたが、出て來ようといふ者が二人もあつたが、どちらも、その間際になつて、掌を返すやうに約束を裏切つた。一度など、彼女は、いよ／＼その女中に來るといふ者が、あちらを三番の汽車とかで立つて、兩國のステーションに何日の何時に着くから、出て待つてゐてくれ、よろしい、迎へに出てゐるから違へず來てくれといふ約束の手紙を交換して置いて、十二月の十七日の日に、早くから宇治の家を出て兩國の驛について、約束の三番の汽車の到着するのを待つてゐたが、それらしい者の姿は見えなかつた。きつと乗り遅れたのだ

らうと思つて、四番の汽車を待つても來ない、五番のを待つても終つひに來ない、十二月半ばの寒空に、焼跡で吹き曝しの兩國驛で、四五時間も立ち盡して、たうとう待ち呆うけを喰はされたことがあつた。

宇治の家では家で、その晩は、給料は世間並に比べて、不足のないやうに、これ／＼出て來る汽車賃も、そちらで持つてもらひたいといふ手紙であつたから、それも持つ。來たら、すぐ渡さうと、もう幾日も前から再三の葉書や手紙で約束してあるので、まるで嫁でも來るのを待つやうに宇治夫婦は日の暮れまでには、きつと二人で歸つて來るであらうと、頸を長くして待つてゐた。が、日が暮れて夜になつても二人の姿はおろか、迎へに往つた彼女さへ戻つて來なかつた。始終新聞などで見るからだから、もしかしたら、電車か自動車にでも轢かれたのではあるまいか、と、宇治とお悦は、寂しい電燈の下で、互に不安さうな表情を見交しながら、頻りに氣を揉んでゐた。

「何か間違ひでも出來たのぢやないでせうか。」

「さうだなあ。……あんまり遅い。」

「お咲さんは、これまでも、よく、朝出て行く時には、今晚までには必ず歸つて來ま

すといつて、さもく歸つて來さうに堅くいつてゐて、千住とか深川とかへ泊つて來ることが多いんだから：でも今日にも一人連れがゐるから。：：」

「うむ、今日はそんなことはないだらうと思ふがなあ。」

そんな、同じことを、何度も無駄に繰返してみたが、到頭その夜は戻つて來なかつた。

「あんまり、出て來るに手間が取れて遅くなつたから、二人で千住の從姉妹の處に泊つて、今日は早く歸つて來るでせう。」と、お悦は、その翌朝になつて、手を受けて待つやうな思ひをしてゐたが、その日も晩まで待つたが、又戻つて來なかつた。

「一體どうしたといふんだらう?!」お悦はそろく腹を立て、焦れて來た。

すると、お咲は、たうとう二晩泊つて、中まる一日置いた、その翌日の夕方になつて、ふらりと戻つて來た。しかも、田舎から出て來た女も伴れずに、彼女一人で歸つて來た。そして、火鉢の向うに坐つて遅くなつた譯を述べた。それは兩國でいくら待つても來なかつたので、自分も向つ腹を立てたまゝ千住の從姉妹の處に往つたついでに、この間から話のあつた、自分の方の縁談を、從姉妹に、いつまでも愚圖々々して

ゐないで、年の内に早く極めてしまへと、喧しく勧められたので、その氣になり、一昨日あの晩、これからすぐ見合ひに往けといはれて、伴れてゆかれて、今日その話がいよゝ極まるまで待つてゐたので、えらい遅くなりまして、申譯がありません。といつて、彼女は濟まぬ顔をして詫びた。

それを聽いてゐたお悦も宇治も共にあいた口が塞がらなかつた。

そして彼女は、あと五六日經つて二十三日に一遍銚子在の郷里に自分の用事で、いつて來るつもりだから、その時は必ず誰か一人は伴れて來ますといつてゐたが、お悦はあんまり當てにもしなかつたけれど、

「お咲さん、誰でも一人ぜひ伴れて來て下さい。頼みます。」といつてゐた。

そしてお咲は、中一日置いて二十五日には必ず歸つて來ますといつて、二十三日に又郷里に向つて立つたが、二十六日の午頃戻つて來たけれど、やつぱり空しく一人で歸つて來た。

「わたし、腹が立つてく。自宅へ嘔鳴り込んでいきました。十七日に、あんなに來ると云つておいて人を散々待たして……わたしの家でもお父さんもお母さんもひどく

怒つてゐました。あの昨夜までお母さんが、向うの來るといふ娘の家へいつて、お咲の話の家へせひ往つてもらひたいといつて頼むと、往きますと堅く約束をして置きながら、明る朝今日往くといふ日になつて、どうも行けないから止めにするといつて斷りに來たんださうです。それで、お父さんも、もうあんな連中は對手にならないといつてゐました。」

それつきりで、お咲さんは一人で歸つて來たが、その二十六日の晩は眞似のやうなことでも一寸そのしるしをするのだといつて、二時間ばかり、居づらさうに宇治の家にゐて、晝飯を食べると間もなく小さい風呂敷包み一つ抱へたまゝ三河島へ嫁にいつた：：のか、女中にいつたのか。

それから間もなく新年狀の葉書を一枚寄越したきり、何のたよりもなかつたが、今年の二月になつてから、間もなく、彼女は一人の娘を伴れて突然宇治の家の勝手口に珍らしく姿を現はした。

「まあ、めづらしい、どうしました。」

と、お悦が訊くと、五六日一寸又、田舎の舊のお正月で行つて來ました、丁度この

人が東京へ奉公に出るといふので、一緒に来てもらひましたといふのであつた。

宇治の家では、去年の暮に押迫つて彼女が居なくなり、派出婦などを頼んでどうかうかやつてゐたが、それも碌な者がないので、又新聞に廣告などを出して、それから二三人の女中が出つ入りつしてゐた場合であつたから、やうと愁眉を開いたやうな氣持がして喜んだ。

そして、お咲自身も、宇治の家で想像してゐたと少しも違はず、三河島の嫁に行つた先が飛んだ氣に入らぬ處であつたので、それから三四月の頃までにたうとう話が切れて、彼女は又宇治の家へ轉げ込んだ。宇治の家では彼女が伴れて來た女中のほかにもう一人派出婦から女中に直つて、事情があつて、五十日ばかり置いてくれといつて居つた、よく働く年増の婢せんながあつたが、丁度三月の中ごろになると、それも暇を取つたので、又候お咲は宇治の家で暫時働いてゐた。その間にも彼女は、宇治の家では女中としては殆ど最高給の給料を與へてゐたにもかゝらず、もつと金の取れる處にいつてみたくなつて、東京から遠くないある温泉場へ、淺草邊の周旋屋の世話で五拾圓の前借をして料理屋のやうな處へ働きに出ていつた。その時も宇治の家では、人の自

由意志を妨げはしなかつた。すると、行つてものゝ五六日も経たないうちに、ある朝早く、彼女は又宇治の家の勝手口に一抱へもある大風呂敷を抱へて姿を現した。それは温泉場からその朝暗いうちに、そうつと足抜きをして遁げ歸つたのであつた。彼女は乗物にも乗らず、二三里の山道を、風呂敷包みを背負つて駈け下りて來たので、四五日の間といふもの、足や腰が痛くつてびつこを引いてゐた。宇治もお悅も苦笑したが、そのまゝ又好い顔をして働いてもらつてゐた。温順しい、骨を惜まずよく働く女であつたが、彼女は宇治の家に一と月靜ちつとして働いてゐると、もう何處かへ早く嫁ぎたくなつて、肩で青息を吐いて、針仕事をしながら沈んでゐた。

すると、お悅が、去年以來自分の處へ出入りしてゐる産婆に話してゐたところから、縁談の口があつた。向うは小さい二人の子供を遺して細君に死なれて女手に困つてゐる、生活には困らない、柄の悪くない商人であつた。たうとうその話が極つて宇治の方を假りの親元として、六月の月内に向うへ行くことになつてゐた。そして、一方ちやうどその當日の前日になつて、彼女が折角骨を折つて二月に伴れて來た女中が又、そんな譯で歸るといふのであつた。

年中女中のことではかり毎時氣を腐らしてゐたお悦は、その、むしやくしや腹を何處へ持つて行き場もなかつたか、傍に居るお咲やその女中の聽いてゐる處で、彼等に當り付けるやうにいつて、満足な者の一人もない女中の不平を零した。

「わたしの處では、碌に用もない時には、いつも轉々二人も三人もゐて、居なくなる時には、一人も居なくなつてしまふ。みんな勝手なことばかりして。どうしてかう、少し、……せめて一年でも續けて辛抱の出来る女中が居ないんだらう。何處の家でもさうかと思ふと、其處らの女中は何れも三年も四年も居る。そして、二人も三人も子供のある家で安い給料で、又よく働く。」お悦は顔の血の色を變へて愚痴つぽく零したが、それは本當であつた。

翌日暇を取つて向うへ行くことになつてゐるお咲は黙つてそれを聽いてゐたが、實際自分の都合の好い時ばかり、何時でも轉げて來さへすれば好い顔をして置いてくれるので、何度といふことなく出たり入つたりしてゐたことを思ふと、神經の鈍い彼女にも随分耳は痛かつた。

しかし、お悦は、そんなに向つ腹を立てても、今度のお咲の縁談は、自分も一と口

口を利用してゐる上に、先方では最も宇治の家を信用して、もらひたいといふのであるから、幾ら自分の處で手づかへをするからといつて、それを何うする譯にもいかなかつた。

すると、女中の方は、つい先刻さつきそんな手紙が親元から來たと話してゐるところへ、ある男が宇治の家の勝手口の外から顔を出して、昨日お父さんから手紙が來てゐる筈であるが、自分は、今度の縁談のある男の友達で、今一緒に深川の方に、銚子から船で來てゐる、一寸これから行つて會つてもらひたい、晩までには戻つてもらふからといつて來た。その男は丁度女中が井戸で水を汲んでゐたところへやつて來た。

女中が入つて來てそのことをいふから、お悦は、お咲に向つて、どうしたものであらうと相談を掛けたが、お咲は一寸勝手口から井戸の處に立つてゐるその男を覗いて見たが、見知らぬ人間であつたけれども、口不調法な女中のいふことなどから想像しても別條もなささうに思はれたので、

「ぢや、いつてもいゝから晩までには必ず歸つて來てもらはないと、自分うちの方で心配するから。」と、お悦は念のうへにも念を押し出して遣つた。でも、その晩歸つて來

るには、かへつて來た。

「それでお前向うへどういつて返事をしたの？」とお悦が訊くと、田舎者まる出しの女中は、

「わたし一人で今返事をする譯にはゆかないから、歸つてお父さんとよく相談をした上で返事をするやうにいひました。」

「ぢや、お前歸る氣なの？」とお悦は訊ねた。

「ええ。」

「いつ？」

「明日歸るつもりです。」女中は澁みながらいつた。

お悦は、それで又赫と頭が燃えるやうに腹が立つた。

「それぢや、私の處で困つてしまふ。」と、いつたが、そんな十八やそこらの、物を知らぬ者を對手にしても仕方がないと思つた。そしてお咲に向つて、その女中の親ども、あんまり術すべを知らない勝手を攻撃した。

「あつちの方の者はみな誰もかれも、かうなんですかねえ。」お悦は、お咲に向つて當

り付けるやうにいつた。

それで、ともかくも一人代りのあるまでは居つてもらはねば、お咲自身もこの家に對して困ると、彼女から話して聞かした。女中は殆どまだ自分の自由意思といふものを持つてゐなかつたが、宇治の家ではそれから必死になつて處々方々へ口を掛けてゐたが、何時になつても代りは出来なかつた。そのうち暑い七月になり、八月になつて、土用が明けてから一層殘暑が酷きびしかつた。女中の代りはないが、その後も親から度々手紙が來て、早く歸れと迫つて來た。それで田舎は舊曆のお盆なので、お悦もそれまでには必ず返さねばならぬといつて、十日の日にたうとう女中を返した。

女中が一人も居なくなると、宇治の家では困つてしまふのは眼に見えてゐた。宇治の仕事が忙しいうへに、あれから一層暑さ負けのしてゐるお悦は、朝六時から夜の八時九時まで一日、毎日々々、譯いたづらも分らず徒戲いたづらのはげしい子供の爲に苦められてゐた。

どうかかうか人の顔が分るやうになる二月から半歳ばかり續けてゐた、その女中には子供もよく懐いてゐて、父親の宇治が手を出しても、そつぱうを向いて行かうとは云はないのに、その女中には、おつぱいをくれる母親と同じやうに喜んで行つた。祖

母といつたやうな年寄りの手のない宇治の家ではそんな女中に往つてしまはれると、やつと、少し肩の抜けてゐたのが、又、子供のことはお悦一人に押被さつて來た。

宇治はもう疾うから、夏になつたら、確りした留守居を頼む者を見付けて、何處かの涼しい處へお悦を子供と女中を伴れて遣つて置きたいと思つてゐたが、そんな次第で、留守居をしてくれるやうな者はおろか、女中さへも差支へた。たうとう夏中を何處へも行かずに過して來た宇治は、それでもさすがに八月の中頃になつてからは大分疲勞を感じて來た。それに、その十日に、役に立たぬやうでも半歳もゐて、家の事がやつと飲込めて來たところで女中に去いかれてしまつては、一月から二月頃も二た月ばかり出つ入りつして雇つてゐた派出婦を雇つてゐたが、そんな處から來る渡り者には横着な者も多かつたし、そんな通りすがりのやうな者に大事な子供を抱かしたりするのが、宇治にもお悦にも厭であつた。

家の中に年寄りといふ者の必要なことを、つくづく感ずる。大抵若い母親などとい

ふものは、子供をお祖母さんに育ててもらふやうなものだ。宇治は心からそれをいつて、仕方のないことを零した。

「そりやお祖母さんがあるといゝんですよ。晝の間は大抵お祖母さんが見てくれるから。お悦もいつたが、何方を向いてみても宇治の方にもお悦の方にもそんなお祖母さんはありはあつても、高齢であつたりそつちにも手が足りなかつたりして役に立たなかつた。

仕方なくお悦の肩や手を休める爲に派出婦が代つて子供を抱かうとしても、馴染むまでには、どうしても四五日はかゝつた。そしてその四日か五日も居ると彼等は、多くの場合、その横着なのに、此方から愛想を盡かして人をさし代へてもらつた。

「私も大分疲れて來た。二三日で一と仕事區切りが付いたら、一寸一週間ばかり何處かへいつて息をついて來たいなあ。それには、好い女中は急に望めないとしても、せめて派出婦に好いのが來てくれないかなあ。」宇治は、早魃に低氣壓を望むよりも、む

しろその方を待ち望んでゐた。

そして、階下の北に向いた三疊の室に小机を置いて、それで仕事に掛つてみたりしてゐたが、子供は座敷中を這ひ廻つて、何にでも手を出した。又彼は二階の、定つた場所に駆け上がった。それでも彼は二十二日までには必ず書いて渡さねばならぬ物があるの、やつぱり蒸暑い二階でせつせと筆を動かしてゐた。

二人めに代つて來た派出婦も、五六日居て、横着なところが眼に着くと、お悦は、「あんた、慣れない仕事で疲れたでせう。疲れたら、暫く他の人に代つて休んでもらつていゝんですよ。」といつて、體よく斷つて歸した。そして、いくら眼に餘るほどの横着者であつても、それが去つてしまふと、あとは忽ち差支へてしまつた。一つ井戸を汲み合つてゐる隣家には、去年の震災後そこに越して來る前からもう足掛け三年も居るといふ、二十ばかりの女中がすつと一人續けて一日よく立ち働いてゐるうへに、そこには十四五の男の子が一人あるきりであつた。細君など滅多に井戸端に出て水を汲んだりすることもなかつた。お悦は、ちつとも靜としてゐない子供に惱まされながら宇治と顔を突合はしてゐると、何といふことなしに、氣が焦々として來るやうであ

つた。

「こんなに手数のかゝる子供を見たことがない。」

始終愚痴のやうに零してゐた。一體お悦は愚痴っぽい女であつた。どうかすると彼女は子供の生れたことすら、よく愚痴を零した。しかし、宇治はそんなことの對手になつてゐなかつた。

「そんなことを今更いつたつて仕様がなない。」

宇治は、ない時には子供を望みもしなかつたが、出来た子供を、これが生れなかつたならばなどと、後悔したことは一度もなかつた。そして、子供が生れると同時に、それまで入籍してゐなかつたお悦の入籍の手續きをも済ました。お悦と宇治とは、これまでの境遇や經歷の相違、その他の關係から、今後の生涯を共にするのは、必ずしも、さうするのが、お互の將來の幸福であるか、どうかは考へ物であつたが、しかしこれまで長い間相應に世間といふものを見て來てゐる宇治は、お悦さへ宇治に順應して行く氣さへあるならば、彼女を生涯の同伴者とすることに格別不都合を感じなかつたのである。といふのは、教育の程度が低いとか、彼女の實家がどうであるかといふ

やうなことは、血統などに別條のない限り、宇治は、今となつては、それを兎や角云つてゐなかつた。たゞ彼女が、宇治によつて營まれる、今後の、些やかな一家の生活をお互に幸福なものにする上に聰明なる理解を以て順應し、自分達の老後の生存の安全を保證する方法を立てるうへに就いても宇治の心持をよく飲込んで、和合しさへすればよいと思つた。

すると、お悅の方では、自分と宇治とのつり合をどう考へてみてゐるのか、始終邪推と僻見と嫉妬に悩まされた。何時でも宇治の爲に放り出されさうな氣がしてゐるのであつた。宇治も、もう相當に考へを定めての上のことであるから、自分では少しもそんな氣もなかつたのであるが、殆ど生來の病的ともいつていゝお悅の、さういふ不安は直らなかつた。宇治は自身で、以前の自身と大分違つて來てゐることを、十分確信してゐるが爲に、お悅のそんな不安を、可笑しくも思つたり、可哀さうにも思つたりするのであつたが、あんまり没分曉わからずやの、お悅のそんな性癖を露骨に見せ付けられると、彼女の生ひ立ちとか教育の不足とか、從來の生活の境遇とかいつたやうなことでなしに、その現前の悪い性癖に手古摺らされて、その爲に、何も彼も我慢してゐる

お悦が厭はしくなることが度々であつた。

一度など、宇治が、彼の先輩や友達と五六人で久し振りに親しい夕食の會合を日本橋の方でする晩であつた、彼が衣服を更めてこれから出掛けようとすると、穩かならぬ顔をしてゐた彼女は突いきなり如宇治の胸倉に打突つて來て、羽織の紐を千切つたり、宇治が大切にしてゐる結城の袖口を綻ばしたりした。宇治はたとひ藝者遊びに行くのであつてさへ、そんなことを、お悦がするのは可くないと思つてゐるのに、さういふ性質の會合へ出掛けようとする場合であつたから、つく／＼お悦の病的な邪推と嫉妬に愛想の盡きる思ひがした。この女を、大分見違へてゐたな。しかし、自分の不明だから仕方もないが……と心の中で思ひながら、不快な氣持を胸一杯にして出ていつた。

お悦は突いきなり如自分の方から宇治の頭に手を上げて打つて掛つたり、まるで猫のやうに宇治の手だの顔だのを引搔いたりする病的行爲は、先の生傷がまだすつかり癒り切らぬ時分に絶えず發作的に始まつた。一度など、お悦は、平掌を上げて不意に宇治の額を厭といふほどひつばたいたので、宇治は眼から火が出るほどの目に遭つた。その時は、宇治も流石に心から憤つた。

「俺の身體は金がかゝつてゐる身體だ。何の爲にそんな不埒なことをするんだ。俺の兄弟はみんな田舎にゐるが、それ等の家内に一人だつてお前のやうな者はない。」といつたが、彼は、もう段々年も取つて來たことであるし、殊にどうかして靜かな生涯を送りたいと、そればかりを思つてゐるのに飛んだ女に係り合つたものだと思つた。宇治は彼女に、そんなことを毎度繰返されても、なほ耐へて置かねばならぬほど、惚れでも居なければ氣に入つてもゐなかつたが、さうして、世間體を公然と一旦一緒に棲んでゐる者を、又出すの別れるのといつては、折角年齢相當に、近頃大分落着いて來て、世間からもさう見られてゐる自分の行爲を破壊したり、延いては多少の信用を傷けるのが残念さに、どうかしてお悅のそんな厭ふべき性癖を直したいと思つて忍耐してゐた。彼は、今から一と息若かつた先の獨り身の時分と異り、今は自分に浮氣な慾望など殆ど全くといつていゝくらゐ無いことを自分で知つてゐるので、お悅のそんな病的な嫉妬や邪推や僻見に原因する不作法なる亂暴に、一點の割引きをして考へなければならぬところはないと思ふのであつたが、お悅を出して又ほかの女に取替へるなどといふことは、自分の利害と道徳上からは、そんな次第なので、毛頭差支へないこ

と、思ふのであつたが、それを實現するのが面倒臭いと思はれるほど、彼はもう、そんなことを億劫がつてゐたのであつた。そして、何時かは、いくら病的のお悦でも、宇治の日常を觀察してゐる間には、よく彼の心持が解る時が來るであらうと、思つてゐた。

けれどもお悦のその性癖は、生來のものと思はれて、とても直りさうになかつた。宇治が少し小言でもいふと、彼女はすぐ、

「氣に入らなければ早く出せ！」といつた。宇治は呆れた顔をして、

「氣に入らなければ早く出せつて、出すくらゐなら、小言も何もいはない。」

「口から出まかせをいふない。出すには金が要るから、その金が惜しいんだらう。」まるでそこらの印半纏を着た土方か何ぞのやうな口を利いた。

「金が惜しいんぢやない。お前のその悪い性質を直さなければ、その悪い性質で、お前自身、自分の境遇を破壊してゐるやうなものぢやないか。」

「利口ばつたことをいふな。」彼女は栃木訛りでいつた。

宇治はつくづく、持て餘したやうに、

「お前といふ人間は、損な性分だなあ。」と腹の底から呆れてゐた。

そんなことは始終のやうにあつた。自分でも、そんな場合には、愚かど知りつゝ少しも負けて居られない性分の宇治ではあつたが、年を取つて勘辨がつくやうになつたのか、宇治は何時でも最後には自分の方から黙つてしまつた。そして、これでは到底駄目なものだらうと、彼は腹の中で考へてゐた。不思議なものといはうか、夫婦喧嘩は犬も喰はぬといふ譬のとほりか、そんな状態のところへ彼女はいつしか妊娠してゐたのであつた。

普通に結婚した、精神の健全な婦人でさへ、妊娠期には、往々いろんな心理的變態を來して、泣いたり憤つたり、又は夫を打つたりするものださうであるが、平常でさへそんな病的性癖の強いお悦が妊娠後にそれが一層募つて來たのはいふまでもなかつた。宇治が偶々女中に優しい口を利くのさへ、屢々彼女の神經を刺戟した。宇治は遂にお悦に絶望してゐた。

胎兒についても宇治はこれまでの生活の結果から、自分の體內に有りはせぬかと思ふ病毒の遺傳を甚く氣づかふとともに、母親のそんな病的な精神状態が胎兒に影響す

ることを、より以上に心配してゐるので、世間的に少しも樂天的な期待などを持つことが出来なかつたけれども、今の場合一人子供が生れたからとて、格別生活上に差支へを生ずると思はなかつた。丁度胎兒が九ヶ月の時に、あの恐ろしい大地震があつたが、その頃健康の優れてゐた宇治は、東京市の慘狀を一應見て歩きたいと思つたけれども、お悦の不安をすこしでも少なからしめたいと思ふのと、自分が慘たらしい焼死體などを見て來た話などをして、それが胎兒に悪い影響を與へたりすることを恐れて、震災後半月ばかりは何處へも出て往かずに、ずつと家に落着いてゐた。

そして、その翌月の月半に安々生れた子供は、宇治がひどく杞憂してゐたよりも健全であつた。これまである不安と不足とに驅られてゐたお悦の境地もそれで一段落つて、確實なものになつた。

宇治は一日の中にもう何度となく赤ん坊の顔を覗いて、早く子守を付けて幼稚園に遣る時の姿などを空想して、それを口に出してゐた。お悦も一と月ばかりするうちに産後の健康も元に復して、それから冬を越して春になるまで約半年ばかりの間は無事と平和との間に過して來た。そして四月五月頃になると、どうした譯か又彼女の悪い

地金が折々出て來た。ひどくなると、宇治が何か一寸した組織的な小言をいつたのに腹を立て、突如^{いきなり}子供をそこに抛り出しておいて、立ち上つて來て、瘦せた宇治の身體を、ぐい／＼胸倉をとつて小突きながら、壁や襖に押詰めて、處嫌はず噛み付いた。宇治は時によると指の肉の千切れて下るやうな負傷をさへした。彼は、自分でも、どうして自分はかう眞剣に腹が立たなくなつたのであらうと、不思議に思はれるほど、そんな狂暴なる亂行に對しても勘辨づよくなつてゐた。さうかといつて、お悅には、どんなことをせられても甘受するといふやうに、彼女に惚れてもどうしてもゐるのでは決してなかつた。が、唯ひたすら冷靜な思慮から、子供が可愛さゆゑに何も彼も眼を瞑つてゐた。それでも心の中では、こんな事も度々繰返してゐる間に、いつ、どうした機みに子供を蹴殺すか踏み殺すか又は自分の方でも、もつとひどい負傷をするやうな事がありはせぬかと、それを氣づかつた。

お悅は、宇治よりも腕力が強かつた。大抵十度が十度までお悅の方から先に手を出すのであつたが宇治は仕方なく正當防禦のつもりで、後には好い手を思ひ付いた。お悅が狂暴の眼の色をして、いきなり立ち上つて武者振り付いて來る時、彼は自分の方

でも負けずに機先を制してお悦の頭髮かみを掴んだ、そして、自分の腕の痛いほど、それを掌に絡んで、お悦の攻勢を防いだ。彼女は頭髮かみを掴まれて、倍々ますます猛り狂ひながら隙を狙つて宇治の腕を引掻いたり、噛み付いたりした。そして足を舉げて宇治の腹を蹴つた。腹を蹴られて、もし内臓に負傷でもするやうなことがあつては大變であると思つて、やつぱり後には宇治の方から手を放して逃げ出すのであつたが、どうかして、うまく頭髮かみを掴まれてそこに横倒しになつて、ひい／＼肩で息をしてゐるお悦に向つて、彼は、涙こそ流さぬが、腹の中では男泣きに泣きながら、毎時いっしょいふことを言葉に力を入れて繰返していつた。

「實になさけない人間だなあ。お前は一體何で、そんなことをする。どたばた／＼荒れ狂つて。……近所隣りへこの物音が聞えずにゐない。お咲さんやお竹などの手前見つともないぢやないか。……私のいつたり、したりすることに何處に不足がある。この罰當りめ！ 私はな、そんなことを今更いはなくつても、お前にも分つてゐるだらう。外に出て唯の一度だつて餘計な小遣錢を使ふではないし……私はこのとほりあんまり健康でない上にもういゝ加減年を取つてからの子供だ。運よく十年生きてても、私

が死んだ後で、まだ十歳かそこ／＼で、父親の亡くなつた子供がそこを歩いてゐる姿が今から眼の先きに見えてゐる。：：そんな時のことを思ふと、片時も安心してゐられない。どうかして三人の者が無事の日を暮して、私の死んだ後でも、あとの者が二人路頭に迷ふやうなことがないやうにと思つて私が苦心をしてゐることが解らないのか。：：私のすることに何處に不足がある。この罰當りめ！」宇治の聲は涙と憤りとに慄へてゐた。彼はさういひつゝ宛も猛獸の傍を離れるやうに急いで飛び退くと彼女は又むくりと跳ね起きて躍り掛つて來るのであつた。

「お咲さん、子供に負傷をさせぬやうに氣を付けてみて下さい。負傷をせぬやうに氣を付けて下さいよ。」宇治は繰返し／＼、子供を抱いて遠くへ離れてゐるお咲に聲を掛けながら、座敷中猛獸を遁げて廻つた。

初めてその光景に接したお咲と女中のお竹とは、何うして可いか、唯はら／＼して仲に入つて引留めてゐたが、後には、そんなことが度重なるので、あんまり争ひが凄くならない限り、遠くから二人の氣勢に氣を付けつゝも餘處眼に見てゐた。

そして幾らか彼女の鎮まつたところで、宇治は、心の中で、今の自分の年になつて

こんな見つともない粗野な騒ぎをしなければならぬのを、つくづく情けなく思ひながら、彼女に向つて、

「何が不足だ。……罰當り！」と憤りを含んで叱るやうにいつた。

すると、不貞々々とむくり返つてみたお悦は、何處までも悪たれるやうに、

「憚りながら、罰は當らないんだから、……まだ罰が當つて病氣になつたことは、唯の一度もないんだから、……手前こそあの態は何だ。頭痛がして嘔吐を吐いたのは誰のお蔭で癒つたと思つてゐるんだ。」

「そんなことを今更云はなくつても、よく解つてゐる。お前の療治で癒つたことは、承知してゐるよ。」

「そんなら黙れ！」

「そんなら黙れつて。……そんなことは今關係がない。」

宇治はもうそれ以上相手にしなかつたが、それでも黙つて居られず、もし何か組織的な訓戒めいたことを少しくどく續けていふと、お悦は、狂氣のやうに、

「知らんくくくくくくく」と、自暴になつて、両手で耳に蓋をしてしまふ。

宇治は、そんな時よく、彼女に向つて、

「お前は芝居でする鬼怒川の累かさねのやうな解らず屋だ。まるで、憑者つきものでもしてゐるやうだ。」と口に出していつたが、腹の中でも全く、これは何か憑いてゐるのではあるまいかと思ふことがあつた。與右衛門が心の中で男涙に、何といつて搔きつ口説きつ道理をいつて聞かせても、それをいふほど梅幸の扮した累は凄味になつて、女性に固有の邪推と僻見と嫉妬の結晶になつていつた。お悦がそんなものゝやうに思はれた。

兩性の立場から見た女のことについては、もう何もかも諦めてゐる宇治は、嘗て一度もお悦について贅澤な不足がましいことを口に出していつたことはなかつた。たゞ日常の生活について相當に細かい注意が行届きさへすれば、それでよいと思つてゐるのであつた。その點については質素なお悦は節儉をすることも知つてゐれば、又汚れた物を何時までも押入れの中に突込んで置くやうなこともなかつたが、彼女は、宇治が、お悦自身でもよくその用向きを知つてゐる外出先から歸つて來ても、快く、「お歸んなさい。」と言葉を掛けたこともなかつた。何處から歸つて來ても、そつぱうを向いて、知らん顔をしてゐた。實際、外で無駄な金づかひをせぬ宇治は、用向きの分つ

た外出のほかには、たゞ銀座の方を散歩するとか、牛込あたりの知人を訪問するとか、又は武藏野の田圃を歩いて來るくらゐのものであつた。一體が細かい事にまめた宇治のことであるから、元から、着物の出し入れや、自分の寢床の上げ下ろしから、脱ぎ棄てた洋服にブラッシを掛けて始末をすることまで、みんな彼が自分の手でして、お悦や女中の手を煩はすことはなかつた。

宇治が、子供が出來てから、俄に、泥棒を捕へて繩を綱ふ譬のとほりに、出來ぬ中から少しづつ何かの形で金を遺して置かうとして、そんな用事などで外を歩き廻つて疲れて内に戻つて來たりした時にお悦の、そんな佛頂面を見ると、思はず勃然とするのであつたが、そんな時でも自分の方から先きに言葉を掛けた。それでも彼女は返辭をせぬことが多かつた。

宇治は心の中で、いつもく不貞腐れたやうな顔をして、この女は何が一體不足なんだらうと思つた。紙を張つた支那鞆一つの中に貧しい衣類を少しばかり持つてゐるだけで、銘仙の單衣より上等の物を着たこともなかつたのであるが、宇治は自分がそんな物に興味を持つてゐるところから、高價な結城縮の單衣だの、薩摩上布などを黙

つて買つて與へた。

「わたしなんか、そんな物を着ると、勿體なくつて身體が腫れてしまふ、自分で仕立てて着たらいゝでせう。」といつてゐたが、無論彼女は買つてもらつて、決して悪い氣持はしなかつた。

「なに、私は、そんな物を一とほり持つてゐるんだから餘計に入らない。ごた／＼つまらん物を持つてゐるより、季節々々の上等な物を一とほり持つてゐれば、女だつてそれでいゝんだよ。」

お悦には、宇治と一緒にゐる前に、何處か郷里の方で妻子のある男との間に出來た五六歳の女の子が一人あつた。それは彼女の親の處で大きくしてゐた。彼女は行々はその子を育てて獨立して自活するつもりであつたが、宇治の方へ入籍することになつた時、お悦の父親と相談の結果あとで差當り三百圓の金をその娘の養育費に遣ふことにした。そして宇治は、この後もう二人と出來さうにない自分の方の子供の友達として、行々はその子供をも自分の方に引取りたいやうな意向を洩してゐた。去年の春、まだ自分の方の子供の生れぬ時分にも、宇治が一ヶ月ばかり郷里の方へ歸省してゐた

間、お悦が留守居の氣まぎらしにその女の子を呼ばして置いたこともあつた。

それで派出婦が去つてしまふと、お悦は又、あとの代りが来るまでは自分で重い井水を汲んだり、襦袢を洗つたりしなければならなかつた。獨りでは晝寝もせず一日一人はかゝりつきりでゐなければならぬ子供を、背に結付けてそんなことをするのが著さに疲勞した身體には大仕事であつた。尤もこれまでも、女中の碌な者に出會はさず、派出婦が始終出代つたりしてゐた、冬の時分にも、彼女が一人で井戸端に出たりしなければならぬやうなことがあると、何か不穩な決心したやうな表情をして、夜など二階で静と机に凭り掛つてゐる宇治の處へ子供を抱いて上つて来て、

「わたし、どうしても暇をもらひたいんです。その方が私にもいゝんです。」といつた。宇治はその度に静思を脅かされたやうな氣がして、眼を上げてお悦の顔を不思議さうに見守つた。

「どうして？」

「どうしてつて、……さうした方がお互に好いんです。」さういふ彼女の意味は、女中がなくて、自分が水働きなどをするのが厭だといふのでないことは、宇治にもよく解つてゐるのであつた。それでかういつた。

「暇をくれつて。ぢや、生れてまだ三月か四月の子供をどうするといふんだ。……そりや、女中が居なければ、こんな赤ん坊のある家では、誰でも自分でいろんなことをしなければならぬ。決して見つともないことはない。女中の好いのが居ないためにお前に暇をやつて、家を疊むといふことは本と末とを穿きちがへるといふものだ。」

「わたしが居なくつても、これの世話をしてくれる人はありますよ。」

「それが今、おいそれと直ぐにある譯はないぢやないか。女中にさへ困つてゐるのに。……そのみならず、入籍までして、ちやんと片付いてゐるものを、半歳も経たないうちに、どうしてそんなことをするか理由が立たない。」

「そんなことは何でも有りやしない。」彼女はまるで反故でも引つ裂くやうな調子でいつた。

「私は、そんな考へではゐない。たつた紙片一枚でも、それには堅い考へが入つてゐ

る。」

お悦はそれで仕方なく又二階を下りていつた。

お悦は、それでその晩も碌に夕飯も進まず早くから子供と一緒に蚊帳の中に入つてしまつたが、宇治も晝間の暑さと執筆とに疲れて、この頃はいつも宵を少し過ぎると、自分で二階に寢床を敷いて、蚊帳の中に獨りで横はつた。そして翌朝六時頃になつて、階下の座敷で、子供が眼を覺まして機嫌好きさうに「やい／＼／＼やい／＼。」と、いたいけな聲で譯の分らぬことをいつてゐるのを耳にして楽しんで起き上るのであつた。

殊に今日——二十二日——は、一寸した書きさしてゐる物を完結して、なるべく午前中に自分で向うへ届けてそのついでに新聞に女中入用の廣告を出さうと思つてゐたので、なほ毎時より早くはね起きて階下^{した}に下りていつて、母子の寢てゐる蚊帳の裾をはねて、中に入つた。お悦はまだ仰向けに寢ながら、脇の下から體温器を抜きとつて見てゐたが、

「七度八分ある。」と、ひとり語のやうにいつた。

子供は傍で這ひながらひとりで遊んでゐた。

宇治はそれを聞くと、怯えたやうに吃驚した聲を出して、

「それ見なさい。だから言はないことぢやない。醫者に見てもらひなさい」と、毎日のやうにいつてゐるのに、醫者に見てもらはないから可けない。：：女中は居ないし、私は仕事が忙がしいし、此のうへお前の身體でも悪くなつたら、お前も困るし、子供をどうするのだ。ひどくならない内に醫者に診てもらつて薬を服まないと可けないぢやないか。」

宇治がそれを繰返して少しうるさくいつてみると、お悦は仰向きになつたまゝ、もう氣に入らぬやうな調子で、

「薬代を惜むぢやないか。」と、たつた一と口にして悪たれた。

それを聴くと、さすがの宇治も一時に憤りが頭に上つたやうな氣がして、頭を一つがんと喰はしたいやうな氣が逸るのを凝と耐へながら、性急せうかちに言葉をどもらせて、

「なにが、私が薬代を惜むか。：：この間も私が、それは自分も一寸腹工合が悪かつたから、薬をもらひたいと思つたからでもあつたが、それは付けたりで、わざ／＼村松さんの處へ行つて、午後此方の方へお出でになつた序に一寸寄つて診て下さいと頼

んで置いたのに、それを後でお前が自分で断つたとかいふぢやないか。：：何の據處よりどころがあつて、この私が薬代など惜むといふ。そんなことをいふお前の根性が卑しい。」宇治はその時、朝むくり起きから眞剣になつて腹を立てた。

それは六七日ばかり前のことであつた。宇治は懇意なかり付けの村松醫師の處へいつて、六月頃からどうも食欲の進まない、暑中負けのしてゐるらしいお悅のことが氣に懸つて、殊にそのまゝに放つておくと、今、ぐん／＼發育盛りの乳兒に悪い影響があるのを氣づかつたので、序に來診してくれるやうに頼んで、ぢや晩方までに往つて診ますといふ返事を聞いて歸つて來た。そして、夕方になつても村松醫師が來てくれないので、「村松さんにも困るなあ。だらしがなくつて。」と、二度も三度もお悅の居る前で零してゐた。たうとうその晩村松醫師は來なかつた。そして翌日になつても、そんなことは決して忘れたり、おろそかにせぬ宇治は、尙ほ村松醫師を零してゐた。すると、その時になつてお悅は、はじめて實を明かした。

「昨日柘本の酒屋が來た時に、私の方は診に來て戴かなくつても、大したことはないのですから、わざ／＼おいでをねがはなくても、ようございませと、さういつてくれ

といつて、此方から斷つた。だから來ないんだ。」

「何だ、人が折角いつて頼んだのを斷つたりして。」

そんなことがあつた。宇治は今又そのことを繰返していつた。

「自分が勝手に醫者を斷つておいて、この私が藥代を惜むとは、何を以つて、そんなことをいふか。」

宇治はもう、お悅の三十七度八分の熱よりも、むしろさういふ惡たれた厭ふべき性情について、心から慨歎するやうな聲を、朝の蚊帳の中で發した。

するとお悅は何處までも逆に、道理を宇治に託けて自分の非を飾らうとするやうにいつた。

「先月、村松さんの藥代が五圓八十錢あつたといつて、何度も繰返していつたぢやないか。」

宇治はそれを聽いて、益々心外に思つて憤つた。

「何度も繰返してと、仰山なことをいふな。それはお前が、何時でも、村松さんから貰つて來た藥を、散藥でも水藥でも半分くらゐ服んで、あとを残してゐるから、折角

高價なものを、勿體ないから、さういふのぢやないか。自分の落度を棚に上げて、何も彼も、この私のせみのやうにいふ。何といふお前は不心得な女だらう。呆れ返つて物がいへない。」

尤も、はつきり覚えぬが、この二三ヶ月前から村松醫師の處では藥價を二三割方引上げたやうである。宇治が時々腹工合が悪いといつて二日か四日分くらゐ貰ふ藥代も先の時分に比べて、こんなに金嵩になつてゐるかと思ふやうなことが一寸々々あつた。そこへ持つて來て、七月の末に村松から掛取りに來た時の書付には、お悅の服んだ分が五圓七八十錢になつてゐた。宇治はお悅がその書付を、自分の傍に持つて來て見せた時、

「五圓八十錢。今月はこんなに服んだのか。随分高いねえ。藥代も馬鹿にならぬ。」といつた。

するとお悅は、

「えゝですよ。それは私の小遣から出して置くから。この間貰つたのが丁度そのくらいある。」

「なに、藥代は私の方で出すさ。」

「えゝんですよ。それは私が自分で出す。」彼女はもうすねるやうにいつた。

「さうか、それなら今とにかくさうして置け。又後で私の方から戻せば同じことだ。」
宇治はその時丁度晝飯を食べてゐた。

お悦はそれで、自分の財布からその五圓八十錢の分を取り出して拂つたやうであつた。一體他の商賣や何かとちがつて、主人の職業に女の手を少しも煩はすことのない宇治の家では、お悦が自分の働きによつて入る金はなかつた。彼女は本來、その免許状も持つてゐるマッサージの技術は確かに上手であつた。宇治の四五年續けて惱まされた痼疾もその爲に癒つたことは事實であつた。彼女は獨立してその職業で自活する筈であつたのが、つひに宇治の痼疾を癒したやうなところから、初めて同棲するに至つたのであつた。宇治の身體からだには、今帝國大學の病院で眞鍋博士の物理治療科で用ゐてゐる按摩を絶えずやつてゐなければ、十分に健康が保てなかつた。それで宇治は屢

屢お悦に向つて、

「私の身體には、どうも、これを始終やつてゐなければいけない。私の經濟では女中を二人雇ふのは、精一杯のところだ。子供が可愛いから、それも厭ひはせぬが、尙ほこの上に毎日一圓の料金を拂つて、按摩をすると、女中二人の費用と一緒にして一ヶ月に百圓は掛る。女中が一人ならば他から按摩を呼ぶが大抵二人居るんだから、お前が毎日やつてくれれば、小遣のつもりで五十錢でも七十錢でも出すよ。」と笑つていつてゐた。

するとお悦は、

「七十錢でなくつとも、五十錢にまけて置く。」

といつて、自分の氣に向いた時には宇治を揉んでやつたが、それが三日と續くことはなかつた。そして、

「誰だつて、揉まなくつても小遣くらゐは呉れる。」と、我儘をいふのが常であつた。

「そんなことをいふのは可くない。私の身體が少しでも達者でゐて、出来るだけ今の内に勉強して置かぬと、子供が後で困る時が来るのは眼に見えてゐる。金に不自由の

ない者でも親に早く別れるのは不幸である。況して私などは、今のまゝで死んだら、どうする。」宇治のいふことは毎時^{いっしょ}そこに落ちてゆくのであつた。

「可くなくつても構はない。もう散々揉んでやつたぢやないか。揉んでやつたから、こんなことになつたのぢやないか。」

「こんなことになつたとは、何がだ？」

「自分で考へてみたら分る。」

お悦は自分が、宇治の痼疾を癒したのが、そも／＼の原因で、宇治と一緒になつたり、子供が生れたりしたのを後悔してゐるやうな愚痴を、何かにつけて零すのが常であつた。宇治は、そんな阿呆なことに對手になつてゐられないと思つて、口を緘むのであつた。

お悦が今、自分の小遣から出して置くといつたのは、その按摩をして宇治から貰つた錢であつた。お悦は、それを、

「もらふんぢやない。取るんだ。」と、何につけても物に角を立てゝいつた。

宇治は半分戯談のやうにそんな規則を立てゝ、お悦に小遣を渡してゐたが、夏以來

彼女がずつと衰弱してゐるので、そんな錢も溜らなかつた。しかし、宇治は、格別お悦に、區別を付けて小遣錢を渡す必要を覺えなかつた。名目の立つた少し金目の出費は無論宇治の方から出すのであつた。お盆過ぎに、その薩摩上布を、お悦の思ひがけもなく宇治の買つて來た時にも、彼は自分の方が楽しさうに、

「お前に今日、大變な物を奮發して買つて來たよ。」といひ／＼紙包みを解いて、

「どうだ、この縞柄は好いだらう。私は金が少ないから負惜みでいふのぢやないが、自分のでも縞よりも縦縞の方が好きなんだ。どうだ、これは意氣でゐて、それで素朴な柄だから、お前なんかにも悪くない。……高い金目の物は、かうして私が買ふから、あとの細々した物は、お前が働いて買ふさ。」

お悦はそれに背いてゐたが、たゞその時きりで、後は我儘をいつて、決して従順に宇治の療治をしようとはしなかつた。

それで宇治がさういふと、お悦は飽くまでも負けて居らず、

「あの時の藥代だつて私の小遣錢を出して拂つたんだ。餘計な事をいつて貰はない。」
宇治はそれを聽いて、つく／＼と、もう、到底こんな女には何といつて聽かせても駄目だと思つたが、やつぱり黙つて居られず、

「お前の小遣だの、自分の小遣だのといつて、私の家には、そんな區別はないつもりである。一體私の家では——私の郷里の家でもさうであるが、一家の中にそんな區別のある内證金を女が、ちやら／＼財布の中ではしたりしてゐるのが、私の死んだ父親からしてさうであつたが、今の兄もそれが大嫌ひだ。私もさう信じてゐる。……又あの時の藥代が高かつたと、この間から二三度繰返していつたのは、何もその金を惜むのぢやない、そんな高い藥をお前が皆まで服まないから、それでさう云つたのぢやないか。いつだつて半分以上飲み残して、茶籠筒の上に載せたまゝになつてゐるぢやないか。……これほどに誠意を籠めてゐる私の言葉を、お前は一體何と聽いてゐる？」
宇治は腹の中で泣き出したくなつてゐた。對手が、そんな卑しいことを言ひ出せば自分の方でも、やつぱり、そんなことを口に出さなければならぬので辛かつた。するとお悦は、

「何と思つて聽いてもゐない。うるさい！」といつて、仰向きになつてゐた身體を、くるりと寝返りをして向うにむいて、亂れた頭髮かみを敷蒲團に押付けてしまつた。

暫くそこにひとりで遊んでゐた子供は又泣き出した。宇治はたゞ黯然として、寢穢いじけたなく、伏せつてゐるお悅の不貞腐れた様子に凝乎と見入つてゐた。近頃は夜中に眼を覺ます子供の爲に起されることが度々あるので、殊にさうであつたが、彼女は、子供のない時から、朝寢で、宇治より遅く起きることも、めづらしくなかつた。やゝあつて宇治は、心の中にひどく思ひ決するところあつて、蚊帳の裾を跳ねて外に出た。そして自分で井水を汲んで急いで顔だけ洗つて、そゝくさと家を出ていつた。

彼はそれから中野の町まで往つてお悅の父親にあててスグキテモラヒタイといふ意味の電報を打つた。：：もう、それまでにも、假令代りがなくつてもどうしても女中を返さねばならなくなつた時、先にも暫く來てゐたことのあるお悅の末の妹を手傳ひに貸してほしいと、彼女から再三いつて遣つたのであつたが、それは何故か貸して寄越よこさなかつた。毎時じつ借りつ放しで返したこともないのだが、まさかそんなことくらゐで貸して寄越さぬのでもあるまいと、宇治はいろ／＼に氣を廻して考へてみた。確か

な留守居も見付からなかつたので、家中で何處かへ暫く避暑にゆきたいと思ふ計畫は成立たなかつたが、

「小さい子供など連れて餘處へ行くより自家にかうしてゐる方が、どんなに氣樂だか知れない。」とお悦がいふので、

「ぢや、私一人で何處かへ十日ばかり往つて來よう。」

宇治はさういつて、お悦に、彼女がいつかも云つてゐた、何處か旅行でもして宇治が不在になる時には彼女の父親が遊びかたぐゝ來てやるといつてゐたといふ話を思ひ起して、お悦にそんなことを書いて出さしたが、一向むかうからは返事もなかつた。

それにお悦が夏中どうも健康が優れないので、宇治自身からも一度遊びかたぐゝせひ來てくれるやうに再三手紙を遣つたのであつたが、妹も今のところ、何か皮膚病を患つてゐて外に出されないし、父親も多忙で往けないといふ、お悦の母親からの手紙であつた。お悦の母親は假名まじりの文字ではあるが筆蹟など誰よりも巧みであつた。

宇治はお悦が、そんな譯でとかく從順でなかつたり、眞面目に藥を服まなかつたりするのに毎度手古摺るたびに中つ腹になつて、

「私はもと他人だからいゝやうなものゝ、お前はさうぢやない。娘が手不足であつたり身體が悪くつて困つてゐるんだから、誰か一度、あれほど度々手紙を遣つて頼むのだから来てくれゝばよささうなものだ。私は、自分の方で出来るだけのことをしてゐるつもりだ。」彼のさういふ腹には、親元にゐるお悦の子供に對する仕打ちからいつても、決して不足のある筈はないと思つてゐるのであつた。

そして宇治は、電報を打つて戻つて来る道すがら、先刻からの不愉快な憤怒の餘熱がまだ消えず、生れてやうやく十ヶ月、母親の乳よりほかの物をまだ少しもやつたことのない子供を母親の手から離すことの可哀さから、出来るだけ忍耐して來てゐるのであるが、とても手の付けやうのないお悦の悍執にすつかり愛想が盡きてしまつたので、父親が出京するのを待つて、これまで嘗て口に出さなかつた彼女の平素の我儘悍執狂暴を有體に話して十分に父親から訓戒を加へてもらふつもりであつた。お悦は平素の口吻からも母親はそれほどでなかつたが、父親には感服してゐるらしかつた。父親は郷里のその村でもなか／＼物の事理ことわりの解つた人間で、常に人に依頼依頼されて口を利いてゐるといふことも宇治はお悦から度々聞かされてゐた。もう六十を二つ三つ出

た、でつぶり肥満した人物で、不斷は優しい眼許に始終笑みを湛へてゐた。

宇治はそれで、これまでもお悅の悍執を持て餘すたびに毎時^{いっも}心で呆れながら考へた。お悅の親達は自分の娘のこんな悪い性癖を知つてゐないのであらうかと。尤も宇治に對しては常にそんな狂暴であつて、その癖ひどく小心で含羞^{はにかみや}性の彼女は、他人の前では便所の掃除屋にまでも馬鹿丁寧な口を利くのであつた。たゞ一ととほりにお悅を知つてゐる者は、彼女にそんな病的な性癖があることを知らなかつた。宇治も、これが人から強ひられたといふのでもなく、相當思慮分別の熟してゐる彼の自由意思でしたことであるから、何とかしてその性癖を直すより他に仕方がなかつた。そして毎時^{いっも}お悅の悍執と狂暴とが募つて持て餘すたびに宇治は、子供を脅かすやうに、

「國から親父さんに來てもらつて、すつかり話してしまふ。お前の親父さんは、もつと物がよく解つてゐる筈だ。……手紙でこの事を書いてやる。」といつてゐた。宇治は單に脅かすばかりでなく、實際腹からさう思つたことも度々であつたが、遂に委しいことは一度も書かなかつた。それでも彼女は、そんなことは父親に話されるのを憚つた。そして、

「何も、こんな下らないことを親父に話す必要はない。二人のことは二人で話が出来る。」といふのであつたが、宇治は、つく／＼持て餘すたびに眞面目に考へてゐた。

宇治は中野の町の郵便局からの歸途、ひどく興奮した。悲しいとも寂しいとも分らないやうな氣持で、自分はやつぱり長い間通して來たやうに一人で居る方が好かつたのだといふやうなことをも考へながら、パンとバタを買つて戻つて來た。そして臺所で瓦斯の火でパンを焼いて、好きな番茶を焙じてそれでパンを食べて、奥の蚊帳の中の子供のことは氣にかゝりながら、どんなことがあつても母親の本能として、子供には非道いことはせぬといふ安心があるので、そのまゝ颯々と二階へ上がつて、今日どうしても午ままでには終にして持つて行かうと思つてゐた原稿を急いで書き續けた。そして、自分は何處までもこの仕事を大事にしてさへ居ればよいのだと思つて、不愉快な佻しさを強ひて高尙な心持にして慰めようとしてゐた。一寸した物であつたが、筆はどん／＼進んで、思つたよりも早く濟んでしまひ、それがすむと、折柄雨天であつたので、宇治は寢卷のまゝの浴衣の上へ洋服のうへに被るレインコートを引掛けて、足駄穿きで停車場へ急いだ。そして丸の内に行つて新聞社へ原稿を届け、用を達すと

又すぐ引返して省電で歸つて來た。その内空も晴れて來た。歸つて臺所の方で泥の着いた足を洗はうとして、そつちへ廻ると、流し元に二十二の若い女が居て洗ひ物をしてゐた。おゝ、もう派出婦會から代りの女が來たのだなと思つて、ほつとした。そして足を洗つて玄關の方に来ると、門の内に植木屋が來ていつぞや頼んで置いた西日よけの篠竹を持つて來て植ゑてゐた。あゝ、植木屋も來てくれたなと、それにも満足を感じて、木戸からずつと縁側の方の庭に廻ると、植木屋は、それも頼んでおいた芙蓉を丁度いゝ位置の處に植ゑて土をかけてゐた。

お悦は、朝の蚊帳の中の、寢いまだ穢ない不貞た様子は、けろりと忘れたやうな顔をして子供を縁側で遊ばしながら懇意な植木屋と話してゐる處であつた。宇治は好い機嫌の顔をして、

「どうもご苦勞でした。」と、植木屋に言葉をかけた。それからお悦の方を向いて、
「代りが早速來てくれたな。」といつた。

お悦は機嫌が直つて、

「えゝ、今度のはなか／＼働けさうです。村松さんの處に五十日も居たんですつて。」

「あゝ、さうか。村松さんにそんなに長く居つたのなら、性も知れてゐる。」

宇治もお悅も、何だか好きさうな派出婦が来てくれたのを、口に出し合つて悦んでゐた。

「まあ、二三日爲ることをよく見て、安心出来るやうだつたら、私も暫く何處かへいつて、も少し仕事を急がなければならぬ。」宇治は、いつてゐた。八月の一日限りにある會社へ少許の金を纏めて拂込まなければならぬのが、延期してもらつてゐて、どうしても月一杯には遅くも拂はなければならなかつた。

「今度のは好きさうですから、家は大丈夫です。留守になつたら誰も來るものがないから……」

植木屋は芙蓉を植ゑてしまつて、尙ほ一つ二つ芭蕉などの位置を植ゑ替へたりして、綺麗に土をならし、ついでに腰から剪刀を抜き取つて、そこらの樹木の枯枝を拂つたりしてくれた。

「やあ、どうも御苦勞さま。お蔭で綺麗になりました。」宇治はさも氣持が、さつぱりしたやうにいつた。

「まあ、休んで下さい。」

植木屋は、近いところの柏木の可なりの大地主であつた。

お悦は、女中に氷を取つて來させて、シトロンを注いで植木屋に勧めたりした。

お悦が、はじめ、宇治が自分で、折角わざ／＼頼んで來た醫者を斷つてやつたりしたのも、一つは彼女自分だけの腹の中では、ひよつとしたら、又もしか妊娠でもしてゐるのではないかといふ軽い疑念も抱いてゐるからであつた。あまりに無智な強情を張つたのが原因で、めづらしくない言ひ合ひを宇治とした時、お悦は毎時の口癖を又はじめた。

「そんなに氣に入らなければさつ／＼と出せ。」

「何も、そんなことをいはないぢやないか。……そんな下等な口を利くのが氣に入らないのだ。」

「いくら云つたつて、これで今まで通つて來たんだから直らない。」泣くやうに我鳴つ

た。

「直さうと思はないから直らないんだ。」

「直さない。……こんな處に居ないから直さなくつてもいいんだ。」

「あゝ。ぢや、お前の好きなやうに出ていつてもらはう。出ていつてくれ。」

宇治は幾度となく、そんな決心を腹の中でしたが、乳兒のことを思ふと、毎時鐵のやうな強い決意が、すぐに鉛を熔かしたやうに弱く鈍るのであつた。が、一度そんなことのいひ争ひをしたあとで、宇治は例にない、ひどく決心した顔をしたまゝ、棄てぜりふを残して、颯々と二階の書齋に上がつてしまつた。あとで、お悦は——その時も丁度、女中も派出婦も來てゐない時であつたが——子供を背中に結付けたまゝ階下の座敷に這伏さつて、近所にも響く聲をあげておい／＼泣いてゐた。宇治は、古人の云つた婦女と小人は養ひ難しといふ金言を今更のやうに思ひ起してみたりしたが、もう同情も可憐も打消されてしまつてゐるので、獨りで頭振りかぶりをふる氣になつて、そんな愚かしいことに大切な頭腦を疲らせまいと努めた。

そして又少時して宇治が階下においてゆくと、彼女は、今までの泣き顔を、きつと

した表情に更めて身體の異狀について實を明かした。

「これさへどうかしてもらへば、わたし此處に居ないんです。……その方がお互に好いんです。」といつた。

宇治は、初めてそんなことを聽かされて變な氣持がした。そして頻りに小首を傾けながら、

「さうかなあ！」と二度も三度も繰返していつてゐたが、それがもし、その通りであつたとしても、お悦自からの、常に心の落着かないやうな病的の性癖さへ何事もなくなれば、兄弟友達が、あとも一人くらゐ有るのは、たとひ定命であつてさへも結局早く父親に死別れねばならぬ運命の下に生れて來た子供の爲には寧ろ悦ぶべきことと思つた。

「そんならそれで、早くその事をいはなければ可けないぢやないか。……たゞ、これが、もう一年後だと申分ないんだがなあ。」

「こいつが、こんな手数料がかかる上に、又そんなことにでもなつたら、とても身體が續かない。……これが可哀さうだ」といつて、お悦は背からおろした子供を抱きと

つて、大きな乳房をあてがつた。

「なんにしてもそんなら直ぐ村松さんに診てもらひなさい。今日でも明日でも急に」
宇治は急がした。

その翌日又宇治が散歩の足で頼みにいつて、村松醫師は一度往診のついでに立ち寄つてくれたのであつたが、もつと十分に診なければ何ともいへぬから、一度自宅へ来て委しく診察するやうに云つて歸つた。しかし、お悦は又そのまゝに二三日往かずに居つた。

宇治は、昨夜まで一寸仕事に匂切りがついたのと、今度雇入れた婦人がどうやら安心の出来さうなのとで、いくらか氣持も軽くなつたやうで、これならば、來月の物の執筆かたぐい月末まで五六日何處かの涼しい温泉場へでも行つて來ても差支へないと思つてゐた。そしてさうするには、その前に、もう疾うから話を仕掛けてゐる借地のことを決定して置きたいと思つて、省線に沿うた二つ三つ先の停車場附近まで散歩

に出ていつた。そして、又盛返して來た九十度の秋暑を汗だくになつて田圃や林の中を歩き廻つて戻つた。

お悦は彼の留守の間に、昨日來た女中に子供を預けておいて急いで村松醫師まで行つたといつて、新しい顔に馴染まぬ子供が、蟲の起るほど泣いて持て餘してゐたのを隣家の細君が抱いて賺すすしてくれながら、横町の辻口まで、誰かの歸つて來るのを待つてゐた。

「これは、どうも難有ありがたうございました。どうも濟みませんでした。をばちやまに抱つとして頂いて、よかつたなあ。」といつて、宇治が子供を受取つてゐるところへお悦も丁度戻つて來た。診察の結果は、それが事實であつた。

その晩お悦は又宇治と、つまらぬことからいひ争ひをはじめた。役に立ちさうな好い派出婦が來てくれて、晝間お悦が村松醫師から聞いて來たところによるも、よく働く確かな者であることが分つたので彼女はそんなことにも一寸安心し調子に乗つたやうになつて、今までの女中や派出婦のどれも、揃つて可けなかつたことを又お浚へして口惜しさうに饒舌つてゐた。腹が立つて、堪らないといふやうに夢中になつて

興奮してゐるその聲がだん／＼高くなつていつたところから、彼女が自分で持て餘しながら、やつとの思ひで折角ぐつすり睡つた子供が又その爲に眼を覺ましてしまつた。宇治も、お悦の、そのあまりに愚かな粗野が堪らなくなつて、彼も亦聲を高くしてお悦をたしなめた。すると彼女は、「あ、喧しい。さつ／＼と二階に上がつていつて寢ろ。」宇治に向つて又喰つてかゝつた。

「それは一體何といふ言葉だ。……何も今まで居つた女中のあらを此處でお凌へする必要はない。そんなことはいはなくつたつて分り過ぎてゐるぢやないか。用のあることとで大きな聲を出さなければならぬことがあるのなら仕方もないが、そんな無用なことに大きな聲を出して、折角寢付いた子供を起すといふのはお前の愚かといふものだ。……お前のやうな下等の人間が居つては女中も居つてはくれない。」宇治は、著苦しい晩とて、まだ開放した縁側に立つて呶鳴りながら、不快に満ちて、どん／＼二階の自分の室に上がつてしまつた。その後でお悦は一晚中氣分を悪くして寢てゐた。そして、又夜中に起上がつて泣きながら郷里にあてゝ、長い手紙を書いたりした。それを夜の明けけるのを待つて自分で郵便を出しに行つた。

翌日になつて、一昨日來たばかりの派出婦は、朝からひどく蟲齒が痛むといつて優れぬ顔をしてゐたが、お悦は近い處の齒醫者を教へて行つて來させた。女中は間もなく歸つて來て前より一層疼み出したといつて、暫く女中部屋に横になつてゐたが、

「まことに濟みませんが、今日一日だけお暇をいたゞいて宿へ歸らしてもらひます。そして休んでみて明日になつても、まだ可けないやうでしたら早速他の人に代つて來てもらひます。」といふ。

宇治もお悦も、今度こそ折角好ささうな女が來てくれたと思つて喜んでゐたところなので、ひどく落膽しながら、同じやうに、

「今日一日くらゐ何もせずと、家で休んでゐてもいゝからせひ居つておくれ、ちつとも遠慮は入らぬから。」と言葉を盡して留めたが、女中はそれでも、高い給料を戴いた上に一日休ましていたゞいては申譯がないといつて、風呂敷包みを始末して歸つていつた。

宇治もお悦も等しく失望の眼で、女の歸つてゆくのを見てゐたが、昨夜からの不快な氣持が悪い宿醉ふつかゑひの如く二人とも残つてゐるので、彼等はお互に口も利かうとしなかつた。そして又しても年中惱まされてゐる手不足の不安が暗く押被さるやうに彼等を襲うた。宇治は又黙つたまゝ二階に引揚げた。

と、それからものの三四時間も経たない、午過ぎになつて、又三十近い他の女が派出婦會から上りましたといつてやつて來た。まあ上がれといつて、上には通したが、そんな者には馬鹿丁寧な口を利くお悦もさすがに暫時は向うから何か話し掛けても返事もせず不機嫌な顔をしたまゝ黙り込んでゐた。お悦も宇治も、なるべく今朝行つた女が戻つてくれゝばよいがと心待ちにしてゐたのが、又もや見も知らぬ者が來たので自分の家が餘處の家か何ぞのやうに落着かぬ散らけた氣持にならされた。

でも、それから少時して働かしてみると、爲ることは思つたより丁寧であつた。

二三日して宇治は、今度の雇女はどうやら、自分が不在にしても安心出來さうなの

で、こゝ五六日の間を急ぐ執筆をする爲にいよ／＼何處かの温泉場へでもいつて仕事をしようと思つてお悦にそのことをいふと、彼女は、

「もう四五日のことだから待つて下さい。この間親父に——彼女は父親を呼ぶに父とお父さんともいはなかつた。——手紙を遣つてあるんですから、何處へも行かないで親父おやぢが来るのを待つて、わたしの事の話ことばを、さつぱり付けて、行くなら、どこへでもいつて下さい。」と、眞顔になつていつた。

つまり暇を取るんだから、その結末を付けてくれといふのであるが、そんなことは宇治が何か一寸した小言こごとをでもいふと、必ず二の句に彼女の口から出ることであつたから、宇治もめづらしくないことと思つてゐるのであつたが、しかし、そんなことを何かといふと、すぐに軽々しく口に出すやうなことでは、どんな小さい家庭であつても、この先到底和樂な一家を續けることは不可能であると思つて、宇治も近頃は、心の中だけで少し眞劍になつて考へてゐた。

するとその晩か翌日お悦の父親から宇治にあてた手紙が來た。それは二三日前宇治からの電報を受取つた後で書いたものであつたが、どうあつても多忙で今のところは

出京出来ぬといふのであつたが、そして、その手紙のをはりに、自分の方の孫がこの間百日を濟ましたから、そのことをお悦に傳へてくれと特に書いてあつた。その孫といふのは家をやつてゐる、父親の次男の長男であつた。宇治はそれを見て、何といふことなしに、その子供の誕生の祝ひ物を催促せられたやうな氣がした。さう思つたのは何か祝ひのしるしをしなければならぬと心に掛けながらも、連日の炎暑とお悦の夏病みやら、宇治自身の多忙やらで、ついそのまゝにしてゐるので、その爲に宇治の方で多少邪推したのであつたかも知れぬが、宇治自身としては、何時となくほのかに洩れ聞いてゐる、お悦の次弟に當るその次男が、お悦が先に産んだ女の子を、その弟に世話を掛けながら、勝手に宇治と同棲したり、又、子供を産んだ結果、籍まで移して宇治の處に嫁入したりしたことについては、ひどく惡感を抱いてゐて、その爲に父親や、妹などが東京に来て偶たまに宇治の處に客になつたりすることを常に嫌つてゐるといふことを知つてゐるので、子供の厄介を掛けてゐるお悦の立場としても兎も角も、宇治はそんな話を耳にする度に、格別それくらゐのことを氣にも留めなかつたが、しかし、常にそんなことを考へてゐるといふお悦の次弟に對しては少しの好意も持つこと

が出来なかつた。お悦との同棲が世間普通の婚姻に成つたものでなかつたので、勿論宇治は、お悦の實家も知らなかつたし、東京に定住してゐる彼女の弟妹の他はその次第などにも會つたことはなかつた。それで、何となく祝ひ物の催促でもしたらしいその文面を見ては、軽い不快を感じたのであつたが、高が銘仙の半反や一反やそこら、何でも無い宇治は、そのうち序の時で可いと思つてゐた。

その手紙の様子では、父親に、お悦は又自分で、どんなことを云つてやつたか知らないが、彼女のいふやうに急に東京するらしくも思はれなかつたのと、いくら彼女が口癖のやうに、明日にもすぐこの家を出て行くといふやうな興奮したことをいつてゐても、いよゝゝ實際となると、そんなことは容易に斷行せらるべきものでもなく、宇治は固より、何より第一に子供の爲にそんな輕舉に出でることを甚だ好まなかつたので、そんな無益な言ひ争ひに、さうなくてさへ暑苦しいこの頃の目を續けてゐるのがほと／＼馬鹿らしくなつたので、どうあつてもこの五六日の中にぜひ片付けてしまはなければならぬ執筆の仕事を携へて伊香保の温泉に往くことにした。晦日のことなども滞りなくお悦にいひ残して、彼女は宇治の小道具を入れる手鞆の始末をしたりして

彼は二十九日の朝立つて行つた。

伊香保は宇治の想像してゐたとほり、夏中雑沓してゐた避暑客が丁度月末ついでになつて殆ど全部引揚げて去つた後で極めて閑靜であつた。彼は、好い時に來たと思つて夏中つゞけて氣急きせきしなかつた體が、はじめて、やつとのんびりとした氣持になつた。さう思つて安心すると、何だか長い間の疲れが一時に發したやうで、却つて妙に神經衰弱に罹つたやうな氣持さへするのであつたが、出來るだけ心を焦あせらぬやうに四五日の間は、つとめてたゞ湯と散歩とに消してゐた。

それでも空氣が清澄なるにつけ、山々の眺めが美しいにつけ、温泉ゆづの香が懐かしいにつけ、宇治は毎日まだ秋暑の凌ぎ難さを思つて、お悅と子供との無事を心に祈りながら一日に一度は必ず繪葉書か手紙を出してゐた。お悅からは來た晩すぐ宿をしらしてやつてから三日目に、簡単な用事の手紙が來たきりであつた。

そして五日目の午前、宇治はいつものとほり涼しい木蔭の道を散歩して歸つて來て一浴して汗を流し、座敷に戻つて休息してゐるところへ女中が電報を持つて來た。何處からか、書く物の催促であらうと何の氣もなく受取つてみると、表には發信人のし

るしもなく、封を切つて讀むと、

オクビヤウキオカヘリタノム

とある。宇治は初め一寸判じかねたが、たつた一人の兄が長く東京に年期を勤めてゐて、つい半月ばかり前にその兄が死んだといつて、ひどく憂ひに沈んでゐた係りの女中が傍でその文句を見て、

「奥様が御病氣でいらつしやるんでせう。」といつたので、はじめてそれと分つた。さう分ると宇治は、つんと胸を一つ突かれたやうな氣持がした。電文で想像すると、留守を頼む女中が打つて寄越よこしたものらしい。

それから俄に支度を調べて歸途に就いたが、宇治は電車の中や汽車の中で、病氣ほどの程度の病氣であらうかと想像してみたが、自分の慾目かそんなに重態のやうには思はれなかつた。それでも歸つて見なければ安心出来ず、心の急ぐほど汽車が遅いやうに思はれ、まだ東京までは二時間もある内に日は遠くの秩父連山の彼方かたに沈んで窓外の野は暗黒に包まれてしまつた。

そして上野驛からすぐ自動車に乗つて、東京西郊の自宅まで急がしたが、だん／＼道が近くなるほど頻りに氣が焦つて來た。門の外で自動車から飛び下りて、入口を入ると、そこへ立ち現れたのは、お悅の直ぐの弟の慶吉であつた。宇治は玄關に突立ちながら、靴をも脱がず、

「おツ！ あんた何時來た？」

「う、私は今日少し先きに來たばかりです。」

「病氣を知つて？」

「いえ、たゞ何といふことなく、ふらりと來たのです。」

「さうか。それでも、それは丁度好かつた。……そして病氣はどんな工合かね？」

「何にも分りません。夢中です。」

宇治は庭に突立つたまゝ吃驚してしまつた。そして開いた口を閉ぢる力も抜けたやうに、

「何にも分らない、夢中だ。そんなに悪いのか、そりや大變だ。一體どうしたといふ

んだ。」

宇治はぶる／＼慄へるやうになる指先に力を入れて急いで靴を脱ぎ棄て、上がつて来た。奥の蚊帳の中ではお悦がまるで狐の憑いたやうな眼を据ゑて、又しても起き上らうとするのを、弟の慶吉が一生懸命になつて鎮めながら抱いて寝かさうとしてゐるが、すぐ又狂人のやうな表情をして跳ね起きようとする。

宇治は洋服も脱がずに蚊帳の外に突立つたまゝ、そこに子供を抱いて居る女中を顧みて、

「醫者はどうした。村松さんは何といふんだ？」と早口に訊ねた。

宇治の立つ四五日前に雇つたその女中は、主人の不在おき中に突發した急變に、もうおどおどして、聲を亂しながら發病前後の經過を語つた。

宇治が立つていつて三日目かの三十一日の朝であつたか、お悦は今朝は少し頭が重くなつて熱もあるやうだからとて、女中をかゝり付けの村松醫師まで迎へに遣つた。

醫師は早速來診してくれたが、心配するほどのことでもないといつて、後から藥を取りに来るやうにいひ残して歸つた。そして月末の諸拂ひもお悦が寢床にゐて女中に渡

して支拂ひをさせた。その翌日の九月一日になつても大した變化もなかつたが村松醫師は來診してくれた。二日もそのとほりであつた。が症状は輕快にはならなかつた。

主人から、伊香保にいつてからも繪葉書を寄越してくれども留守のことを頼まれてゐる女中は氣になるので、村松醫師を玄關まで送つて出ながら、

「旦那さまへお知らせいたしませうか、どんなものでございませう。」と、いつて訊くと、村松醫師は事もなげに笑ひながら、

「いや、そんな御心配はありませんよ。」といつて、歸つて行つた。

女中はもうそれまでにも、度々お悅に向つても、

「奥さま、旦那様にお知らせ申しませうか。」

と、相談するやうに勧めてみたのであつたが、平素から自分の健康を信じてゐると、宇治が急ぐ仕事をする爲に折角靜養かたゝ行つてゐるところを驚かすのは要らぬことと思つたらしく、

「なに、いつてやらなくつてもいゝんです、わたしは達者な身體なんですから、この頭痛のするのさへとれゝば、何でもありません、と仰有いましたもんですから、早く

お知らせもいたしませんでした。」といつて、女中は幾度も詫びた。

するとその翌曉の三時頃になつて、子供のひどく泣く聲に、次の室（ヤ）に寝てゐたお芳といふその女中は眼を覺まして、起きて八疊の蚊帳の中を覗いてみると、子供は蒲團の上に抛（は）り出されたまゝ火の付いたやうに泣き入つてゐるにもかゝはらず、奥さんは傍で知らん顔をして寢床の上に半分起きてゐるので、

「お嬢さん、どうなさいました。……奥さま、御気分はいかゞでございます。」と聲を掛けて蚊帳の中に入つたが、奥さんは黙つて、眼をきよとくさせながら、返事もしない。赤ちゃんは割れるやうに泣くばかりである。すると、奥さんは、變な眼付でお芳の方を見て、

「あんた今日國へ歸るんですか。」と、とつてもつかぬことを云つて訊いた。お芳は、その眼許といひ、先刻（さつき）からの様子が少し變なので、夜明の肌寒にやゝ慄然（おそ）と感じながら、

「いゝえ、奥さま、わたしは國へなど歸りません。」と答へると、

「さうですか。でもあなた今日國へ歸るといつた。」と今度は正面の方を向いて、ひと

り語のやうにいつた。

お芳は、これは、いよ／＼大分違つてゐる、朝になつたら早速旦那様に電報を打たうと思ひながら、

「さあ、お嬢ちゃん、わたしが少し負ぶしませう」といつて、背を向けて抱上げようとすると、奥さんは、

「さうですか、どうも濟みません。」といひながら、自分で子供を抱き取つてお芳の背に載せ、結く紐まで掛けてくれた。そして、少しも早く夜の明け放れるのを待つて、この間旦那が立つて行つた翌日、ほかから又一人來た若い女中にいひつけて、それに電報を打たしに行かしたのであつた。

「旦那様のお留守を預かつて置きながら、もつと早くお知らせすればよろしかつたのに、そんな譯で遅れて本當に申譯がございません。」

といつて、彼女は又わびた。

宇治はまだそこに坐りもせず、突立つたまゝでそれを聽いてゐたが、

「なに。：：あゝ、さうか／＼。よし／＼」といつて頭は宛然電の如くばち／＼八方

に亂れて飛ぶかのやうに、お芳の抱いてゐる子供の方に悲しい慈愛の眼を留めて、

「お、坊主。……それから子供はどうした。乳は？」

と訊くと、母親がそんな工合であるので、一昨日から牛乳にしてみたが、始めの日にやつと一合飲んだきり、昨日もそのくらゐであつたが、今日はその牛乳もどうしても飲まないのおもゆで重湯おもゆに變へてみたがそれも飲まない。

「今日は朝から何にもお上りしませんのです。」お芳は九州辯でいふ。

「あ、さうか。そいつは可けない。子供が干乾ひばしになつてしまふ。……ちやもう一度新しい重湯をこしらへて。」

と、いひながら、宇治はお芳に抱かれて睡つてゐる子供の顔をそうつと覗込んでみたり、額に軽く手を當て、

「うむ熱はなさうだな。」と、いつたりしながらも、痛心に堪へない表情をして、

「あ、これは大變なことになつてしまつたなあ。」と、唸るやうな太息たいきを吐いて、今度は又奥の病人の方に戻つて來て、

「なに、村松さんがこんな急病人を見て、今朝、何でもないといつて歸つた？……何

をいつてゐるんだ。何でもないとは何の事だ。あの藪醫者にも困つたものだ。」宇治は自分の留守の間に起つた家内の急變に手の下しやうもないといつた有様で、やつぱりまだそこに突立つたまゝ暫く考へてゐたが、

「とにかく村松さんを、これから直ぐ誰かいつて呼んで來てもらはう。」

「村松さんは晩にも亦來て診てくれたんです。」

「今日は二度來て下さいました。」

慶吉とお芳が交々いふ。

「あゝ、さうか、晩にも來たのか。それで何といつた？……何時頃？」

「なに、まだ一時間か、二時間にならないくらいです。」

「それで、何といつた？」

「別に何ともいひませんでした。變りはないんでせう。」慶吉がいふ。

「もし變つたことがあつたら、すぐ使をよこしなさいと仰有いました。たゞ氷で頭をよく冷すやうにと、それだけいつてお歸りになりました。」お芳がいふ。

宇治は自分ですぐ村松醫師の處に駈付けて委しい話を聽かうかと思つたが、自分の

體もひどく疲れてゐるので、こんな場合又自分でも倒れたら、暗闇だと思つたので、注意しつゝ、すぐ近所の坂下にある別な醫者を迎へに遣つて、來診してもらつた。それは子供を一二度診てもらつた若い醫者であつたが、一とほり丁寧に診た後で、首を傾げながら、

「まあ、何處かへ入院さした方がいゝですな。」

といつて、その序に子供をも診て歸つた。

その醫者が歸つた後で直ぐ又宇治は、どうしても安心出來ないので、使を遣つて村松を迎へた。村松醫師は看護婦を伴れて十一時頃に來てくれたが、病人は、慶吉が始終付きつきりで抑へてゐないと、どんなに寝かしても、すぐ跳ね起きて、何か云はうとするが、口は少しもいふことを利かない。何をいひかけても解る様子もない。たゞ子供が遠くの方で泣いてゐる聲だけは耳につくと思はれて、常に子供を寝せてゐた、自分の寢床の脇を、手でそうつと叩く眞似をする。それで明朝新宿の方のある病院長に來診してもらふことに相談を定めて村松醫師は歸つた。

それから重湯が出來たので、宇治は、子供を二階の自分の蚊帳の中に入れて、それ

を飲まさうとしたが、匙で三つか四つ飲んだきり、どうしても餌に付かない。そつと寝かして置くと、十分間も経たないうちにすぐ眼を覺まして泣いた。たうとうその晩は徹宵よひびと、お芳が背中に負つたまゝ、自分はまんじりともせず彼女の蚊帳の中に坐つて一夜を明かした。

宇治はさうなると、今日伊香保から急行程で歸つて來た身體の疲勞よりももう精神の疲勞の方を餘計に感じて、病人は慶吉と看護婦とに任しておいて、自分は二階の自分の室に上がつて綿のやうになつた身體を蚊帳の中に横たへたが、すこしく假睡うつろひとしかけたかと思ふと、すぐ跳ね起きて階下したに駈け下りてみた。宇治は、寢てゐても幾度となく唸るやうな太息ためいきを吐いて、これは飛んだことになつたものだと思つた。

翌日早く、係り醫の村松醫師が新宿の方の病院の博士を案内して來診してくれた。來診の結果、現在の症狀は腦の疾患から來てゐるものか、或は極度のヒステリイなどの昂じた神經系統に屬する病氣であるか、博士はまだ十分の疑ひを抱いてゐるものゝ如く詳に語らなかつたが、割合に熱の低いのが腦の疾患ではなささうに思はれたりした。それでもし神經系統の異狀に基づくものとすれば、それは、それで又心配の種で

あつた。どちらにしても、まるで闖入者に入り込まれたやうな憂慮と不安は去らなかつた。

そして宇治が乳兒にも困つてゐることを話したところ、博士は自分の知合の、牛込の方の小兒科の醫院を紹介してくれて、一時そこへ預けることを勧められたので、宇治は早速先づ子供をそこへ伴れていつて預けることにした。

もうこの三日間——といふよりもその前から幾日の間碌々食餌を攝取してゐない乳兒は、昨夜徹宵、女中の背中に結付ゆひつけられたまゝ、夜を明かしたのであるが、朝になつて見ると、ぐつたりとなつて、女中の背に凭たれたまゝ、時々元氣のなささうな聲を發して泣かうとするけれど、その聲も、嗄枯しはがれて泣く力もなく、たゞ鳥のやうな聲を出すばかりで、唇の色も白く青褪めてゐる。宇治は、それを見て、まるで、胸がつぶれるやうな氣がした。

とにかく子供の方を先に始末をせねば、病人の方に手が出せないのです、宇治は、博士を送り出すと、それから、直ぐ支度をして一人の女中とともに子供を伴れて牛込の小兒科に往つた。外來患者を診察してゐた小兒科の院長は博士の紹介狀を讀むとすぐ

宇治に會つてくれて、

「よろしい、分りました。貴方の方のは病人ではないけれど、急に母乳を離れて、手馴れぬので困つてゐるから、これから段々牛乳なり重湯なりで食餌に付くやうにしてほしいといふのですから。：：丁度あちらに一室あいてゐますから私の方で確かに御引受け致しました。」見るから精悍な活動家らしい院長は頼母たもしさうにいつてくれた。

宇治はそれから、家の方が心配なので、一人の女中は先に返して、一人の女中はすつと病院にゐて子供に附添はすことにしておいて、自分は他にその邊に用事があるので、一二ヶ處寄つて一時間ばかりして又病院へ戻つて來ると、子供はこの間中の空腹と睡眠不足とのせゐもあつたらうが、大きな寢臺の上に大の字になつてぐろく／＼熟睡してゐた。宇治はそれを覗込むやうにして、

「どうした？ よく寝てゐるな。」

「牛乳を一合おいし相まに召上りました。」傍についてゐたお芳は安心したやうにいふ。

「うむ、さすがに専門だ。違ふな。」

「先程先生が御診察もして下さいました。他に變つたことは少しもないけれど、いか

にもお腹が空き切つてゐるのだと仰有つてゐました。」

「さうか、可矣々々。」宇治はそれで子供のことは先づ一と安心して、ジリ／＼と照りつける九月初めの日中を急いで自宅に歸つて來た。

朝のうち少し落着いてゐた病人は、歸つてみると又動き出して弟の慶吉が男の手でいくら抑へても抑へても身を跳もびいて、何かいひながら跳ね起きようとしてゐる處であつた。その枕頭には郷里から出て來たばかりの父親があぐらをかいてゐた。

昨夜父親に知らさうか、どうしたものであらうといふ相談を、慶吉から云ひ出した時、宇治はあたりまへならば、無論知らして遣る筈であるが、夏以來ずつとお悅の健康の優すれなかつた事、その他のことについては、せひ共一度父親に東京してもらひたいと思つて、再三再四の手紙なり電報なりを以て、さういつてあるにも係はらず、一向それに應じてくれなかつたので、

「それは知らしてやるのも可いが、知らしてやつたつて駄目だ。何度さういつても、

その氣にならないんだから……」

といつて、宇治の方は知らさうともしなかつたが、かうして俄かに出て來たところを見ると、慶吉の方から昨夜電報でも打つたものと見える。

父親は、意外のお悅の重態に驚いたものと思はれ、始終痛心の面をして、頻りに暴れ出さうとするお悅の様子に凝乎と眼を据ゑてゐたが、

「すこし寢ろ。」と、高い聲で一と口いつた。けれどもお悅には固よりそれが分る筈もなかつた。

さうした場合、子供を手放して他へ預ける事は止むを得ぬことでもあつたし、又、醫者の方でも頼母しく云つて引受けてくれたけれども、宇治は感情の上で何とも云ひやうのない哀憐と寂寞とを感ぜずに居られなかつた。が、又一方理性ある親としての態度を考へると、一時のセンチメンタルな盲愛などに囚はれて、躊躇してはゐられなかつた。

そして宇治は、子供のことだけは、あくして置けば先づ一と安心だと思ふと、昨日からの自分の精神の疲勞を又頻りに覺えて來た。それは病人の方は、死ぬか生きるか、

もし生きても、とても三日や五日では癒るものとは思はれないので、宇治は何より、これから先き長い間の計畫を考へて置かなければならなかつた。そのうち病人も又暫く睡眠に落ちたので、そつちの方は慶吉と看護婦とに任しておいて二階の自分の室に上つて、横になつた。

日の暮れになつて症状は一層悪化して來た。病人は眼が覺めれば、すぐに起き上らうとして意味の分らぬ單音を發しながら頻りに跳いた。そして、瞳は上の方の瞼の奥に隠れて、白眼の多くなつた眼は、まるで魂の失せたものゝやうに遠くの方を見て据つてゐた。

夕方になつて又來診した村松醫師は、宇治や慶吉や父親の前で、
「どうもこの病人は経過が良くないですなあ。今の間に通知して置く處があるなら、通知してお置きになつた方がいゝでせう。」

と、恐ろしい運命を宣告するやうにいつた。宇治は、それを聽いて自分の身體がそこに坐つてゐる力を一時に失つたやうな衝動を感じた。

「はあ、経過が良くないですか。」彼は醫者のいうたとほりを、たゞ鸚鵡返しに口の中

で繰返してみて、突如として起つた恐ろしい運命について黙想してゐた。

慶吉と父親とは、やうやく薄暗くなつて來た向うの座敷の隅で、何か絶望的な囁きをしてゐた。

宇治は不斷から口癖のやうに、自分は、長くて、あともう十年生きれば奇蹟であるといつてゐたのであるが、かうなつて見ると、平常健康を、本人自分でも傍でも信じてゐたお悦が先きに死ぬことになつてしまつた。宇治と違つて、嘗て自分の死などといふことを考へたこともなかつた彼女に思はぬ死が見舞うて來た。まだ三十五か六で死ぬる當人の不幸はいふまでもないが、今日小兒科の病院に預けた子供を、母親の死んだ後で、これから長い生ひ先きを誰に頼んで世話をしてもらはう？……宇治はそれを考へると、急に世界が暗くなつて來るやうに思はれた。

しかし宇治は、自分の慾目であるか知らぬが、村松醫師は、恐ろしい運命を宣告するやうにいつて歸つたけれど、自分だけの直覺では、どうも病人は死ぬものゝやうな氣がしなかつた。それで彼は、密々ひそくと言葉を交しながら、絶望の色に鎖されてゐる父親や慶吉の前で、彼等の氣を引立てるやうに、

「あんなことをいつたつて、村松のいふことなど當てにならない。……當てになつて死んだら困るが……何だ、つい昨日の朝までは、女中が訊いたら、なに大したこともないといつておいて、今日になつて経過が悪いなんて。そりや経過は悪いだらうが、そのくらゐの診断なら、私達素人にだつて言へることぢやないか。……私は、この病人は死なないと思つてゐるんだ。」

と、樂觀的にきつぱりといつたが、父親や慶吉はそれでは安心出来なかつた。

夜に入つてからは、昨日から二日ぶつ通しの看護に、慶吉も看護婦もぐつたりとなつてゐた。病人の少し鎮まつてゐる暇をみては、みんな交代に轉寢ころねをしてゐた。夜の更けるにつれて、仕切りなしに取換へる氷枕や氷袋の氷を碎く音ばかりが、臺所の方で寂しく聞えてゐた。宇治も二階に上つて蚊帳の中に入つてゐたが、やつぱり眠れなかつた。そして、すこしの間うと／＼となつて、何か階下したの病室の方で高い女の聲がすると思つて眼を覺まして、はつと思ひながら耳を澄ますと、それは、府下の方に嫁

いでゐるお悦の妹のお茂の聲であつた。遅くなつてお茂が見舞ひに來たものと見える。さう思つてゐると彼女は、戸を閉め切つた深夜の家に鳴り響くやうな泣聲をあげて、

「姉さん、どうしたんですよう：：わたしは分らないんですか。わたしはお茂ですよ、お茂ですよ。：：こんなにいつても、ちつとも分らない。：：姉さん生きてゐる間に私のことで散々心配を掛けて、すこしもその恩返しをしないうちに、私達を遺しておいて、今死んだらどうするんですよ。これ姉さん、氣を確かに持つてゐて下さいよう。死んぢやいけないよう姉さん。」

と喚いてゐるのが、絹を裂くやうに、切れぐに耳を劈いた。

宇治は枕から頭を擡げて、その様子に聞入りながら、お茂が見舞ひに來てくれたのもいゝし、瀕死の姉を悲しむのも自然の情であるが、それが爲に、絶對安靜を要する病人に悪い影響を與へなければいゝがとか、その消魂けたましい女の泣く聲が、深夜の戸を洩れて、近所に聞えなければいゝがとか、そんなことをひたすら氣づかつてゐた。

そして、お茂のひと仕切り泣き喚く聲が靜まつた時分に又病室に下りて來た。お茂

は慶吉と看護婦に代つて自分で姉の枕頭に付いてゐたが、宇治がそこに出て來たのを見て、いきなり、

「こんなにひどくなるまで何故わたしに知らしてくれなかつたのですか。」と不足をい
つた。

「あんまり大きな聲を出して泣いたりすると、可けない。」宇治がさういふと、お茂は、
「誰も泣かないから……」と不貞腐れた。

宇治は一々それに返答もしなかつた。

夜はもう彼これ一時をも過ぎてゐたらうか、晝間はまだ秋暑が堪へがたいやうでも、
深更になるとさすがに薄ら寒い冷気がすうつと肌にしみて來た。

病人は、お茂の大きな聲に憎かされたせゐでもあるか、もう先のやうに跳ね起きよ
うとする元氣もなく、咽喉の奥の方で微かな音をたてるばかりで、白い眼は全く死相
を呈してしまひ、瞳はまるで瞼の下に上がつてしまつた。もう今にも事は切れるもの
と思はれた。家の中は森として、幽かな電燈の影に一座は悉く深い沈黙に鎖されてし
まつた。

宇治はしかし、そんな絶望の淵に立つてゐながらも、素人考へには、眞白に上がつてしまつたその眼の尙ほ動いてゐる有様が、まつたく息の絶える利那の様子とは少しく異つてゐるやうに思はれた。まだ／＼死にはせぬと思はれた。そんなことを感じながら八疊につゞいた納戸の三疊の方を見ると、父親は悲しみの面を隠すやうに向うの壁の方をむいて腹這ひになりながら、幽かな電燈の明りで何か手紙のやうなものを披いて讀んでゐた。宇治はそれを見るときもなく、病人の枕頭を離れてそつちに寄つて行きながら、何氣なくその手紙の文字に眼を留めてみると、それは、たしかにお悅から父親に遣つた手紙らしく、

「……たつた五圓八十錢の藥代をさへ齊んで、藥代がいつた／＼と何度もそのことをいひ、小遣さへ一錢もくれず、その藥代も自分の小遣で拂つたのです……」
といつたやうな意味のところか眼に入つた。

宇治はそれと氣が付くと、お悅がこの間もいつてゐたことを、自分の思つてゐるまゝに、父親に書いてやつたものと察した。さうして、その無理解と不埒とについて忽ち非常な不快と立腹を感じた。そして、いきなり、「何だ、そんな手紙をやつてゐる！」

何で私が藥代を吝んだ！」と激昂の語を發した。

すると、そこに腹這ひになつてゐた父親は、起き上つて來てあぐら跣坐になりながら、きつとなつた顔をして、宇治に向ひ、

「貴方がさういふなら、いふ。私もいふ。……事實に無いことを手紙に書く筈はない。藥代を吝んだと書いてあるのも、貴方が吝んだから、そのとほり書いたものに相違ない。」

それを聞くと宇治は、この間も既にそのことで、お悅に對して、ひどく立腹したのであつたが、他のことと違ひ、自から必要と信ずる物を吝んだなどといはれては、それが全然自分の氣持と正反對な言ひ前であるだけに一層腹が立つた。

「何で私が藥代を吝んだ。この私が物を吝むなど、事實を誣ふるにも事に依る。どこにそんな事實があるか。」

宇治は、お悅に向つていふ如く父親に向つて喰つて掛つた。

すると父親の方でもますます開き直つて來ながら、

事實ないことを夫婦の間で書く道理がない。……それに、小遣まで碌に當てがはな

いといふのは、貴方は悦を虐待しとるぢやないか。」と呶鳴つた。

しかし、宇治は、自分の意中に強い自信があるだけに、そんな言ひ分を聞くと、腹の中で稍々可笑しくなつて來た。

「何で私が虐待をしてゐる。何處に私が、彼女に不自由をさせた事實がある？」

「不自由をさせて居るぢやないか。虐待してゐない事實がないものが、何でこの手紙を書く？……追掛けおつかけ、始終このとほり手紙が來てゐる。」といつて、父親は見たところ十通ばかりの嵩かさのある手紙を束にしたのを取り出した。それはお悦から遣つたのばかりでなく宇治の方から遣つた物と一緒にしがつた。

「このとほり手紙が來てゐる。」といつてゐたが、彼は興奮の極に達したものの如き有様で、

「これが虐待でなくて何だ？……元のとほりの身體にして返せ！」

と呶鳴りながら、手紙の束を疊の上に、ぱたと叩き付けた。

宇治はその劍幕に吃驚り呆れたが、その直ぐ後の瞬間、妙に人間として自分の優越を感じた。——といふのは、宇治自身に何處を突いても兎の毛ほどもさういふ不足を

いはれる缺點がないといふ強い確信があるからであつた。事實、宇治はお悅を虐待するどころの騒ぎではない、平素から宇治自身の方がお悅に虐待せられてゐると云つても決して不當ではないのであつた。もう長い間、お悅の病的な狂暴に手古摺るたびに今度こそは父親に會つて一伍一什の事情を委細打ち明けて懇談しようと思つたことは幾度あつたか知れぬが、何より、毎時勉強の方のいそがしさに、そんな詰らぬことに暇を費してゐるのが億劫おつくで馬鹿げてゐるのと、お悅の缺點を數へ立てるといふことは取りも直さず、自分がお悅の如き者を入れて妻にしたといふ自己の不明を悟らねばならぬことになるので、それが、宇治自身の、相當思慮あるべき筈はずの年配を省みて出来ないことであつた。そんな時は屢々自分と同じ職業の大先輩であるところの瀧澤馬琴の私生活を思ひ出した。馬琴は老境に入りて、無智悍執なる妻の狂暴に苦められてゐた。彼はその事を日記に書いて且つ悔い、且つ慚ぢ、且つ歎いてゐる。宇治は嘗てそれを讀んで、ひどく、この大家の老後に同情したことがあつた。彼は、馬琴でさへ無智の愚妻にあつてはそんな困惑をしてゐると思ふと、やゝ諦めも付くのであつた。

それで、いよ／＼最近お悅の狂執が募つて、どうにも始末におへなくなつたところ

から、父親の出京を促して、長い間腹に溜めてゐた顛末を洗ひざらひ話さうと思つてゐたのであつた。それに何事ぞ、お悅の手紙の端に認めたところによると、宇治の方から父親に談じようと思つてゐたことを、それをいはれては、困るところから、彼女自身の方で先潜りさきくゞをして、事實を曲げて、宇治の處置を讒訴してゐるのであつた。宇治はお悅の淺慮な狡智に不快を感じた。そして、子に愚かなる父親は自分の娘のいふとほりを眞實だと信じてゐる様子である。宇治は平素から夙に、お悅の親達は、お悅のこの性情の缺點を知つてゐないのであらうかと思つて、親達の賢愚にまで想ひ及ぼしてゐたのであつたが、かうなつてみると、その土地では、物の解る人物といはれて立てられてゐるといふ父親の相場も大抵知れてゐる。

宇治がそれで、父親の、年效としなまもなく興奮した劍幕を驚くよりも呆れた顔をして、少しく笑ひを含みながら、言葉をやゝ和けて、

「元のとほりにして返せ。」と、父親のいつたとほりの言葉を鸚鵡返しに一遍口の中で繰返して、

「……だから、このとほり病氣の手當をしてゐるぢやないか。今、そんなことを此處

でいつてゐる時ぢやない……」

と、口を吃らせながら尙何か後をいはうとしてゐるところで突然宇治はびしやりと頭腦を殴き潰されたやうな氣がして、眼からさつと火が迸つたと思つて、そのまゝ眼が眩んでしまつた。幸ひにして坐つたまゝ倒れはしなかつたが、少時暗くなつて明を失してゐた。

さうして、何だらうと、稍々意識を回復しかけてゐるところへ、再び後から、びしやりと、又頭を打つた。それと同時に宇治の背後で慶吉の聲がして、

「この野郎！」と嘔鳴つたのが分つた。

それで、宇治は、慶吉が理不盡にも自分の頭を毆打したものであるとはじめて氣が付いた。

宇治は、眞暗から段々明るくなつて來る眼を雙掌で抑へて、これは盲になるのではないかと氣づかひながら、

「何を爲る！」と、いひさま背後を振向いた。慶吉は尙手を上げて打つて掛らうとすると、ところを、も一人そこに居る、先に父親の處の使用人で、今東京のある店に奉公し

てゐる若いものが手を以つて制してゐた。

宇治はまるで蠻人の群に包圍されてゐるやうな不安を感じた。そして忽ち念頭を走つたものは、自分が今こゝで死んだら、今朝病院につれていつた子供を誰が世話するかといふことであつた。そして哀憐の感は湧くやうに胸を突いて起つたが、慌てもせず、そこに靜ちつと坐つたまゝ、

「何を爲るんだ？……眼が見えなくなつてしまふぢやないか……私が今死んだら子供をどうすることも出来ないぢやないか……」

と、いひつゝ、そんな兇暴を敢てする自分の倅の行爲を何と見てゐるであらうかと正面を向いて、父親の顔を見ると、彼は、慶吉の無法なる行爲を格別制止しようとする風もなく、二十貫に餘る巨軀を小山の如く大跣坐をかいいて微動もしないである。宇治はそれを見ると一層癢に障つた。そして又お悦がそんな宇治に對して背信の手紙を父親にあてて書いた。——自分の非を飾らんが爲に、それを宇治に轉嫁しようとする狡ずるい惡徳を憤る念が湯煙の如くに頭を騰つた。しかし言葉はつとめて穩おだやかにしながら、「私が藥代を吝む、何處に藥代を吝んだ。……小遣錢を與へないといふが、何時私が

彼女に不自由をさせた？」

宇治は、お悅を蛇蝎の如く憎惡する毒氣を父親に向つて吐いた。すると宇治の背後に尙ほ手を振上げてゐた慶吉が、

「虐待ぢやないか、碌に小遣もやらないで自分では勝手な事をしてゐるぢやないか。」と、呶鳴つた。

宇治はそれで倍々憤激しながら、斜にそつちを振向くやうにして、

「私が何處に勝手な事をしてゐる。外に出て餘計な小遣一つ遣ふといふではないし：假令自分が外で自分の取つた金で藝者遊びをしてさへ何處に遠慮も入らないのだがと、腹の中で思ひながら、急語した。そして又振返つて父親の方の顔を見て、

「何處に私が、彼女に不自由をさせてゐる。：：たとへば月々の諸拂ひにしても、ただの一度だつて、お勝手口で晦日に、出入りの商人に勘定の遅れる斷りを言はせたことがあるか：：。」

宇治はさういひながら、ひとり胸の中で、自分の十年も十五年もの以前の生活と思ひ比べて感慨に堪へないのであつた。

すると、父親が始終沈黙してゐるにも拘らず、慶吉が後から顔を差出して、差出がましく又口を出した。

「そりやお前、いくら物質的に不自由をさせないでも精神的に虐待してゐれば、やつぱり虐待ぢやないか……」と、さもく利口さうに云つた。

慶吉は小學校だけ卒業したにしては筆蹟なども割合に巧みで、三十二か三にしては世間的の知識にも暗い方ではなかつたが、精神的だの物質的だのといふ言葉を用ゐて理窟をいひ出したので、宇治は本氣で今對手になつてゐる心もしなかつたが、

「精神的に何處に虐待してゐる？」と言葉を返した。そして今こんな苦々しいことが始まるまで氣が付かなかつたが、今日晝間、子供を小兒科に預けて戻つて來た時、後で、お悅の枕頭に父親の跣坐をかいてゐた處へ、宇治がこの間伊香保からお悅に當て寄越した手紙の開封したのが置いてあつたことを、ふと思ひ浮べた。その手紙は九月の二日に書いて出したもので、

「……留守居があれば、お前と子供と來るとよいのだが。こちらには、何も、びらしやらした男や女ばかりも來てゐない。普通のおかみさんや、子供も來てゐる。子供

を温泉に入れてやりたいと思ふ。伊香保のぜんまいを少し送つた。よく干して置くといふ。煮てたべなさい。

私が不在るすちう中でも時々武藏屋の鰻を取つて食べるべし。滋養をとらねば、母子ともにいけない。ついでに十日頃までも、ゐたいものだが。

九月二日

ひとり娘のお父さん

お悦さん

と、いつたやうな愛情濃こまやかなる手紙であつた。宇治は、それを晝間お悦の枕頭で見ただのであつたが、二日の正午に向うで出したものであるから早くて三日の午前でなければ着かぬ。そしてお悦は三日の早曉から症状が急變してゐるのであるから、その手紙を自分で開封したか、どうか甚だ疑はしい、多分自分では見なかつたであらう。すると枕頭に開封のまゝ置いてあつたのは、或は慶吉でも臨機に開封して讀んで見て、それを又その日に出京した父親に見せたものであらうといふやうなことを、心の急しく顛倒してゐる場合とて、ゆつくり考へてみる暇もなく、自分の書面であるから、そのまゝ手にも取上げなかつたが、今となつてよく考へてみると、お悦がゐるんなこと

を書いて遣つた手紙によつて、父親等はお悦の言葉を一から十まで信じ、いかにも宇治が、お悦を虐待してゐるかの如く思ひつめて、そんな手紙まで、宇治の不在ゐ中に慶吉と二人で取出して読み返してみたものと思はれた。何處までも虚心坦懐なる宇治はさういふ邪推と僻見とを以つて物を見てゐる彼等の中にあつて、丁度都人を見馴れない田舎犬に寄つて集たつて吠えられてゐるやうな、仕方のない氣がした。

さう思ひながら、ふと背後の方でお悦が頻りに苦しさうな息を吹返して、何か物でもいはうとしさうに、床に横はつたまゝ身を跳いてゐる様子が耳についた。宇治はこの場合お悦の不徳を憤り、無智を憎んでいゝか、どうか分らないのであつたが、彼女の、今にも息の絶えんとする苦しい呼吸の音を聴くと、又別の哀憐の感が新しく起つた。そして、先さつきまでは眼を白くしたまゝ少しく靜まつてゐた彼女が、さうして又急に身を跳いてゐることを思ふと、彼女は、こちらの方でたゞならぬ物音高聲がするのを半無意識の中に知つてゐて、それで何かいひたい、どうかしたいと思つてゐるのではないかと察しられた。宇治は、父親と慶吉の間に挟まつてゐた座を突如として起ち上りお悦の枕頭に歩み寄つて、その顔を覗いて見て、他の者の方に向つて、

「あゝ、もう、うるさいツ！……肝心の病人を打つちやつておいて何のこつた。」と、叱咤するやうにいつた。

宇治は一言さういつて、自分にも反省すると同時に彼等に向つて警告を與へたが、自身の憤激の感情は少しも納まらなかつた。そして又元の座に近く戻つて來ながら、「私が彼女を虐待してゐるとは、一體どういふ譯だらう。何處に虐待してゐる？」と激昂した。そして心の中で、虐待どころか、お悅の方で平素自分をどんなに待遇してゐるかといふことを、考へ出すと、山ほど言ひたいことが募つて來たが、今眼の前で斷末魔の苦しい呼吸をしてゐる病人の非違を數へる氣には、どうしてもなれなかつた。宇治は苦しい思ひを凝乎と堪へてゐた。

すると、慶吉と病人の裾の方との間に横になつたまゝ自分の子供に添乳をしてゐた妹のお茂が、口を出した。

「姉さんは此處の家に居ない方がいゝんだよ。……居なくつたつて立派に食つて行かれるんだもの。」と擲げ付けるやうにいつた。

宇治はもう、此奴等を對手に物を言ふだけ自分も一緒に愚かになるといふ氣がして

出来るだけ黙つて居らうとした。彼等の常識と道徳とから判断すると、食つて行かれりや女は一旦嫁しても勝手に出ていつても一向差支へないものと受取れた。

お茂は今居る場處が宇治の家であるか、それとも父親や兄の慶吉や姉の居る傍であるから、自分達の家であるとも思つたのか、さながら家の中に一杯になつたやうな調子で、又疊みかけていひ放つた。

「姉さんは何時か、わたしに處に来て、いつてゐたことがあるよ。……わたし一寸人を見違へてゐたといつて、後悔してゐたことがあつたよ。」

それを聴くと宇治は、何處までも黙つて居らうとしても、つい堪へ切れずして、
「ほう、人を見違へてゐた。私を見違へてゐた。」

とたゞ中音に聲を發したが、あんまり呆氣にとられた形で言葉に力も入らなかつた。そして又心の中だけで、人を見違へるとは、それは此方の方から先きにいひ出すことであると思つたが、その見違へたのも、自分の不明であつてみれば、現在このとほりの活劇を演じなければならぬ始末になつたのだと思つた。

お茂は又いつた。

「何も彼も聞いて知つて居るよ……此處に居た女中からも聞いたことがあるよ。」とさも宇治の悪い事實を明かに知つてゐるやうにいつた。

「うむ、いろ／＼聞込んでゐる事もある。」親父もその後についていつた。

宇治は又黙つてゐられなかつた。

「ほう、何を聞いて知つてゐるか知らないが……」

と、いひさしてそのまま後の言葉を吞込んでしまつた。そして又腹の中だけで考へてゐた。——女中からも聞いて知つて居る。何を聞いて知つてゐるのだ？ お茂が此

家の女中と二人ばかりで會つたこともない。又女中から、お茂が聞かされて、それを宇治が迷惑したり、申開きに差支へるやうなことは露ほどもない。すると記憶の好い宇治はすぐにかういふことを思ひ浮べた。いつであつたか、お悦が宇治と言ひ争ひをした時、先頃まで半歳居つたといふ女中が、旦那様は随分ひどいですねえ、昨日渡した金はどれだけ入つてたなんて、朝から、お金のことなんか訊いて、といつたことがあるといつて、お悦が、

「あんなものさへ、そんなことをいつてゐた。」といつた。その時宇治は、

「何だ、それが。毎日々々聞くのぢやあるまいし、私の方でもあの時一寸都合のあることがあつたから、それでそちらに幾ら小遣が残つてゐるかと思つて訊いたのぢやないか。あんな半端人間が、たゞそれだけ聞き囁つただけで、私がどんな事を考へてゐると云ふことの大體を知つてゐる譯ぢやないぢやないか。そんなことをいふとお前までも半端人間ぢやないか。：私がかうして無事でゐる間は、まあ今くらゐな生活は、どうかかうか出来る。たゞ食つて通つただけでは私が死んだ後でどうする事も出来ない。」

宇治はその時も、毎時口癖にいふことを云つた。お茂はきつと、そんなことでもお悦から女同志のびちや／＼ばなしに聞いてゐるのかも知れぬと思つてゐた。と、お茂は一人で又口を出した。

「何だ小遣も碌にやらないで。何處に行つたつて、世間にそんな家はありやしない。」
宇治はそれで、黙つてゐた口を又切つた。

「小遣をやらないつて、それを大變な不足のやうにいふが、小遣が入るなら、入るだけやるぢやないか。何に使ふといふ使ひ途の分つてゐる小遣をやらない筈はない。そ

れどころぢやない、買つて呉れといはない物をも偶には買つてやつてゐる……そりやあ、あれも欲しいこれも欲しいといふ段になればこの家の道具だつて不足だらけだ。

……これで私が外で餘計な小遣を無駄につかふといふではないし。」

といひかけると、今度は慶吉が又横から利口ぶつた口を出して、

「餘計な金を使ふぢやないか、病人を放棄うつつやらかしておいて、自分は伊香保などにいつて勝手なことをしてゐるぢやないか。」

宇治はそれを聞いて、少しく苦笑ひを含みながら、

「伊香保に行つたのが何で勝手だ。何も病人を放棄らかしていつたのではない。私に家に居ると、二人で互に詰らん喧しいことばかりいつてゐるから、私が少時しばらく留守にした方がいゝと思つたのだ。それに自分も夏中疲れてゐたから……」

宇治は、そんな自分の一家の事まで立ち入つて口を容れられたり、又此方から、これについて一々説明する必要もないと思つたが、禮儀といふことを知らず、いふべきことの分限さへ辨へてゐない彼等が勝手放題なことをいふのが耳に入ると、彼の性質としてそれを黙つてゐては氣が濟まなかつた。そして、今度は先つきから始終凝乎と

黙つてゐる父親の方に向つて、感慨めいた調子になり、

「小遣を碌に出来ないとは、一體どういふ考へでゐるのか知れないが、私としては實に出来る限りの暮しをしてゐるつもりだ。彼女にも始終いつて聞かせてゐる筈です。

私がかうして生きてゐる間は可い。唯食つて通つただけでは死んだ後で二人の者がどうすることも出来ないから、今の内に少しでも残す分別して置かなければならぬと思つて、何も彼も儉約をしてゐる……」

といひかけると、又慶吉が横から利口らしい口を出した。

「平常儉約をしたつて、病氣になるまで儉約をして、それが何の役に立つか。」と、嘔鳴つた。

宇治は又それで、言葉の半ばで口を結んでしまつた。さうして少時しばらく苦い笑を含んでゐたが、やつぱり言はなければ氣が濟まず、

「何も病氣になるまで、私がどんな儉約をした？」

宇治は、馬鹿共を對手にしてゐると思へば腹も立たないのであるが、さういふことをいはれるとやつぱり、心外で堪らなかつた。そして又心の中で思つた。現に傍に居

るお茂などは、去年お悦よりも三四ヶ月早く子供を産んだのであるが、もとより女中一人使つてゐる譯でもなかつた。爪の先に火を點すやうにして小金を残す一方の堅人である彼女の亭主には一人の母親があつた。その姑は、自分では毎晩のやうに揉み療治をやつても、お茂が始終子供を負ふので肩がいたくつて堪らぬから、一遍療治をしてもらつたらといふと、なに、若い者はそんなことをしなくつても、私は年寄りだからといつてお茂に療治一つさせなかつた。それを又お茂の亭主は、姑のいふとほりになつてゐた。それで肩の凝りが原因もとでこの夏は中耳炎を起して、遠くの大森の方から慶應病院に暫く通つてゐた。その時彼等は夫婦連れで來て宇治の處に寄つて休んでゐた。それに比べると、宇治の家では女中は大抵二人で一人の時は少なかつた。お悦には、氣を置かなければならぬ年寄りといふ者もなかつた。宇治は外で金を使はぬ代りに、家では毎日欲しいと思ふ物を食べてゐた。

——宇治はそれで、小遣をも碌に出来ない、何かに付けて皆ながいふところを少し不思議だと思つて考へてみると、お悦はなるほど宇治の家に居て、格別日々の事に不自由をしてゐるほどでもないのだが、自分の先に産んだ子供の厄介を掛けてゐる郷

里の次弟の方などへ思ふとほりの義理をすることが出来ぬのを始終心苦しく思つてゐるのではあるまいかと、宇治には考へられた。しかし、それもお悦が、平常眞面目に宇治のいつてゐるとほりを果たしさへすれば何でもないのであつた。宇治自身としては、初めから自分の方へ餘り好意を有つてゐないらしい、お悦の次弟の方へまで始終氣を配つて世間並の義理をしなければならぬとも考へなかつた。宇治の頭はそれよりももつと大事なことに忙がしかつた。彼は、學生時代から始まつて、ずつと中年にかけて長い間に數千圓といふ金を貰つてゐる自分の郷里の兄に孫が生れても、自分で氣の向いた時でなければ、改まつて祝儀もしなかつた。その代りにどうかすると東京中を探して、田舎の者の眼を驚かさやうな物を買つて遣つたりした。

前後の口裏くちうらでは、どうやらそれが、お悦の次弟に二度目の男の兒が生れて、その百日が過ぎてても、お悦、宇治の方で祝儀もせぬのが、お悦に碌に小遣も與へぬといふことが、重大な感情問題になつた原因の一つらしかつた。それと察しられると、宇治は一層厭な氣がした、夏中ひとりで齷齪して暮しを立てた宇治は、そんなことを、もし向うで根に持つてゐるとすれば、いよゝゝ以つて仕方がないと思つた。

さうするとお茂が又口を出した。

「姉さんは獨りになつて自分で働く方が好いんだよ。……立派な腕を持つてゐるんだもの……さうしてあちらの子供を自分で育てる方がいゝんだ。……あちらの子供が可哀さうぢやないか……」と、いひながら、仕舞ひの方の聲は涙に濡れた。

宇治は又それを黙つて聞いてゐながら、お茂は自分には亭主があつても、姉のお悦には夫が無くつても可いと思つてゐるのであらうかと思つてゐた。

すると、今まで少時黙つてゐた父親は、

「去年子供が生れた時に、悦を此方へ入籍することを承諾したのは、私の方では、貴方に恩恵を施したつもりであるんだ。」といつた。その語裏には勿論、自分の方ではお悦をお前の處などへは寄越されないのであるが、お前の懇望に任せて寄越した。それにも拘はらず、お悦を虐待するとは何といふことであるといつてゐるやうに思はれた。それで宇治は心の中で、お悦がそんなに勿體ない女であるならば、何時でもお引取りをねがふのだと考へたが、今止むを得ずして母乳を離したばかりの子供のことに一度思ひ及ぶと、宇治は體中の勇氣が悉く挫けるやうな氣がした。

宇治はさうしてゐるかと思ふと、心は絶えず八方に散らかつてゐるやうに、恰も彈條仕掛けの如く又すつと起ち上がつて病人の枕頭に歩み寄り一寸様子を覗いて見て、「あゝもう、うるさいく。そんな話は何時でも出来る。今この死にかゝつた病人を放棄つておいて、そんなことをいつてる場合ぢやない。：：助かる者をも殺してしまふ。」と、ぶつ／＼言ひながら、又今度は横の方から父親だの慶吉の居る脇に寄つて來て坐つて、

「まるで皆な此處の家を破壊してしまふやうなことをする。」と、沈痛な情を顔に浮べて啣つやうにいつた。

すると、慶吉は、又のり出して來ながら、

「破壊してしまふやうぢやない。もう破壊してしまつてゐるぢやないか。子供なんか死んだつてかまはない。病人はもうあのとほり死んでしまつてゐるぢやないか。貴様が殺したんだ。貴様もついでに殺してしまつてやる。」

といつて、そこにあつた瀬戸の手提げ火鉢に手を伸ばした。傍に付いて居たさつきの若い者が又それを制した。

宇治は呆れた眼をして靜ちやうとその態を見てゐたが、何か一つ自分の方でいひ出せば、どれもこれも妙な道理をこじつけて棄て鉢をいひ出して、果てはこれ以上にどんな兇暴を働かないとも限らないので、もしそのために實際、救たすかるべき病人を死に到らしめては、悲痛も悲痛であるが、一家の主人として宇治自身の人格と品位をどれだけ傷けるか知れないと思ひ、どんなに腹が立つても凡て後日に譲り、滿腹の耐忍を以つて今はもう一切何にも言はぬことに定めた。そして却つて彼等の淺慮なだなる興奮を宥めるやうなことをいつた。

「あゝ、よし／＼。もう皆な分つた／＼。私が悪いんだよ、わるいんだよ。」といひながら、又座を起つて病人の方に寄つていつた。肝心の病人はその騒ぎに、誰も顧みる者なく、二晩打つつゞけの看護に疲れた看護婦などは女中部屋に轉寢をしてしまつて枕頭まくらもとにはその日また新しく雇つた雇女が、呆氣に取られたやうな顔をして手持不沙汰に控へてゐた。

病人はいくらか又落着いて、白眼の瞳も元の處に表はれてゐた。宇治はその顔を覗き込んで、

「氷を飲むか。」と訊ねると、微かに青く色を見せた。宇治はそれだけでも自分も元氣づいたやうな氣になつて、

「あ、氷を飲むといふよ。死にはせぬ〜。」と聲を發した。そして小さい氷の碎片カケラを五度口へ持つていつてやつた。するとお茂もそこに摺り寄つて來た。又氷の碎片を立てつゞけに口に含ませた。

「そんなに無暗にやつても可けない。」

「なに氷くらゐ少し餘計にやつたつて構やしない。」宇治は、お茂のその粗野を厭うてついと又座を起ち上がった。そして、

「この模様ならまだ死にはせぬ〜。」と、ひとりで景氣づいたやうにいつた。

父親は先の處に跌坐をかいたまゝ、宇治の方を見て、

「二階にいつて少し寝るといふ。……又惡かつたらさういふ。」といつた。

「惡くつては困る。」といつて、宇治はそのまゝ二階に上がつて來た。

そして蚊帳の中に入つて身體を横へたが、極度の心勞と憤激をに胸の中は焰の如く火照り、呼吸をする力も絶え絶えに掠れた。宇治は、苦しい息を吐きながら、この際自

分までがもし倒れるやうなことがあつては、何も彼も破滅だと思つて、努めて氣を張り、心を平靜に保たうとして、眠られぬまゝに仰向けあふむになつたまゝ胸を開いて大きな呼吸をつゞけた。さうしてみると、先刻慶吉に毆打された時したゝか眼に觸つたものと思はれて、ぢつと眼を開いてみると、瞼に曇りが懸つて電燈の灯影がぼんやり霞んで見える。これは、もしかしたら視力を傷けたのではあるまいかといふやうなことが又頻りに氣になつて來た。宇治は、飛んでもない野蠻人の一族に係り合つたものだと思ふと、三十餘年の長い間、ともかくもして今日までストラッグルして修養して來た自分の生涯を、すつかり棒に振つてしまつたやうな氣がした。自分の身體には金銭からも精神からも大變な資本がかゝつてゐるのだといふやうなことも考へられた。いろいろな思想が矢の如く往來して神經は一層興奮して來た。彼はそれを強ひて紛らさうとして、うん／＼聲を出して深い息と一緒に唸りながら、とろ／＼と假睡まどろんだ。

昨夜深更になつて少しく落着いて眠つた病人は、翌曉になると又夢中に眼を覺まして、暴れ出さうとするやうに手を蹴いた。それは、いくら灌腸をしても快く通じがないのと、夢中ながらにも、便通を感じながら、床の上ではどうしても思ひ切つて用を

足すことが出来ないので、自分で起つて便所へ行かうといふ意思を表はしてゐる動作とも受取れるのであつたが、變に白眼を見据ゑてゐる形相を見てゐると、どうしても憑つきものでもしてゐる精神患者とよりほかには思はれなかつた。そして、傍に付いてゐる者が、いくら賺すかしても説いても應じないで、たうとう自分で起つて便所にいつた。

それは醫者としては、最も嚴禁するところであつたが、その時はまだ宇治も二階の寢所から下りて來なかつたし、傍に付いて居つた看護婦や弟の慶吉ももう散々持てあつかつた後なので、どうせ駄目な病人なら、好きなやうにさせたがよからうと思つたのであつた。すると病人は兩方から扶けられながら途中の縁側で、もう堪へ切れなくなつて、そこへ放尿してしまつた。着物も縁側も海のやうに濡れてしまつた。

宇治もその騒ぎに眼を覺まして二階から下りて來た。大きな聲をする妹のお茂などが大勢の雇女と一緒に仰山にいつて、病人の穢れた着物や蒲團などを洗つてゐた。

やつと利尿の通じた病人はそれで又少しは氣の落着いたやうに仰向きになつて、すやすやしてゐるかと思ふと、すぐに又瞳の隠れてしまつた白い眼を見開いて、何かいはうとするやうに無意味な單調音をたゞ「うゝゝゝ」と發するのみで混沌としてゐた。

宇治は病人の枕許に獨りで坐つてゐたが、昨夜と同じやうに夢中にそんな氣味の悪い白い眼を見据ゑてゐるにも拘はらず、彼の慾目にか、また、これで死ぬ病人とは、何となく思はれなかつた。熱もさう高くはなかつたし、脈も確かであつた。

父親は朝飯を濟ましてから、又いつものとほり病室の奥の納戸の三疊に來て大きな跌坐をかいてゐた。開け放した北向の肱掛窓から雨氣を含んだ濕つぽい風が流れてゐた。窓の外は、やつと一坪ばかり空地を残して、すぐ裏隣りとの境の目隠しになつてゐた。そして、そちらの方の屋根の上には、地主の庭の大きな櫨の枝が、高い空を蔽うてゐた。

宇治は又そこへ來て無造作にその肱掛窓に凭れかゝつて朝の風にあたりながら、そこに黙つて煙草を吹かしてゐる父親の方を向いて、
「病人をどうしたもんでせう。どうも病院に入れた方が好くはないかと思ふ。」さういつた。

昨日の朝新宿の方の病院の河村博士が來て診てくれた時には腦の疾患から來てゐるものか、又は神經系統の病に屬するものか、輕率に診斷を下さないで歸つたのであつ

だが、宇治が素人で氣遣ふのは、もしそれが神経系統の病であつた場合には、病人自身の難澁はいふまでもなく、實に宇治にとつて殆ど運命的な不幸で、悲惨なことであると思つた。そんなことを、いろいろ胸に描きながら思案に餘つてゐると、病室の方に居つた慶吉がそこへ顔を差出して來て、嘲るやうな荒々しい調子で宇治に向ひ、

「お前そりやあ昨日親爺が此處へ來た時にいふことだ。今それをいふのは遅い。」
と、窓際に寄つてそこら中に響くやうな大きな聲を出した。そこからは目隠し一つ隔てた裏隣りの家でする靜かな話聲さへよく聞えて來るのであつた。

宇治は、又しても慶吉の不作法千萬なる物の言ひざまによつて、昨夜深更あれから自分の自制力によつて、いくらかなごんでゐた憤怒の感情が、再び赤裸のまゝ神経をつゝかれるやうな氣がして、勃然となつたが、こんな馬鹿者を對手にしてゐると、自分もそれと同じ馬鹿者にならなければならないと思つて、凝乎と沸き返る胸を抑へて、それには知らん顔をしてゐた。すると慶吉は尙も宇治の方へ屈みかゝつて來て鼻の先へ顔を覗けるやうにしながら、

「お前はまるで鬼子母神のやうな人間だ。自分の子さへ大事にすればいゝんだ……」

慶吉がさういふと、先刻から黙り込んでゐた父親も又宇治自身も口を開かうとしな
い前に、そつちの方で自分の子供に乳を飲ましてゐた妹のお茂が横から口を差出した。
「自分の子が可愛ければ、姉さんだつてお父さんにとつては、やつぱり自分の子だか
ら大切だ：：」お茂は、そんな明白なことをも宇治が心得て居ないもののやうな大き
な聲を出した。

「一昨日お前が餘處から戻つて來てからといふもの、たゞの一度だつて病人の傍に少
しは付いてゐて優しく介抱したことでもあるか。それが自分の家内に對する仕方か？」
慶吉は圖に乗つたやうにさういひ續けた。

昨夜は夜も更けて、四隣あたりも寢靜まつてゐたし、戸も鎖してゐたので、少しくらゐ高
い聲を出しても容易に外へ洩れる氣づかひもなかつたが、早朝開けつ放してした端近
い處でそんな人聞きの悪い、下等な聲を出されたので、宇治は何よりも先きに、それ
が、すぐ目と鼻との間である隣家へ聞えるのを恥しく思つた。無骨で淺慮な慶吉やお
茂などがこの混雜の際一寸一日や二日來てゐて、たゞ皮相な觀察をしただけで、彼等
に相當の見解から、かうでもあらうと、宇治の心事を見當違ひして僻ひがんでゐるのは、

宇治の立場からいふと、それは、むしろ彼等の愚昧と無智とを憫んでいゝことになるのであるが、彼は、其等の者共によつて自分に加へられた卑俗な悪罵を憤るよりも、そんな者等を弟や妹に持つてゐるお悅を自分の妻としてゐることが、自分に對して、いひやうのない侮辱であると思つた。しかし、それも、傍から誰が強ひてさうしたことでもなく、宇治自身の一存でさうしたのであることを思ふと、今更悔んでも取返しのかかぬことであつた。それで、さうだとは諦めて居るものゝ、お悅もまた其等の弟や妹と甲乙のない愚昧な兄弟の一人であることを考へると、その爲めには如何なる事をも自分は忍ばうとするくらゐ可愛くてならない自分の子供に、其等の者共の愚昧で無智で端はしたない性情の血筋が繋がつてゐるのだといふやうなことにまで、自然思ひ及ぼし、自分の一命に代へても厭はないと思つてゐる愛するその子供が潰つぶされてゐるものやうな冷酷な幻滅を感じた。自分の可愛い子供がこんな奴等の血ちゆうぎ續であるといふことは何といふ情けない皮肉な運命であらう、と思ふと、宇治は、これから先き子供を育てる希望も興味も大半素然として來て、自分の生きて居る世界が急に暗くなつたやうな氣がした。何の因果で、是等の者共の血筋の通うてゐる子供を自分は愛さなくて

はならぬのだらうと思ふと、そこに存する矛盾の筈しもとが苛責のやうに辛かつた。こんな奴等の一族と一生の縁を結んだことは、取りも直さず宇治の生涯を破滅させたのも同然であると思つた。

つい昨日まで母親の手から離れたことがなく、母乳よりほかの物をやつたことのない乳兒を他人の手に放任して置くことは、宇治にしては實に斷腸の思ひであつたが、瀕死の病人を抱へて、子供の世話まで自宅でしてゐることは、困難であつた。慶吉やお茂等の淺薄な考へから僻んで見ると、それが、宇治は子供の事ばかり心配してゐるもののやうに思はれた。たつた一人で、この降つて湧いたやうな病難に當らなければならぬ宇治は、自分でお悅の枕頭にばかり付つきりでは居られなかつた。

宇治は、慶吉やお茂の顔を見てゐるのも、聲を聞くのも嘔吐を催すやうな不快を感じた。そんな人間が大きな顔をして居る場處が自分の家であるといふことは、宇治にしては全く自殺したいくらゐな侮辱であつた。勿論この上の言葉を交はすさへ厭で堪へられなかつたが、それでも宇治は、やつぱり黙つてばかりも居られず、

「自分が一人で八方に心を配らなければならぬんだから、私が落着いて介抱などし

て居ることは出来ないぢやないか……」

宇治がさういふと、それでも父親は年功だけに、さすがに少しはその子供達よりは物が解つてゐると思はれて、

「うむ。」とたゞ口の中でいつた。

さうしてゐるところへ又村松醫師が早朝から來診してくれた。

病人は先刻利尿が通じたところで、少しは落着いてうとくとしてゐたが、やつぱり何か知らぬ解らぬ譫語うはごとのやうなことを時々いひながら白眼を仰向けて、「あゝく。」と單音を發するのみであつた。

醫師は例のとほりざつと診察したあとで、見込のなささうな顔をしながら、

「どうも経過が良くありませんなあ。」といつた。

宇治は、昨夜深更氷の碎片を少しばかり口に入れた時の模様では、昨日の晩方村松がいつたほど、さう悲觀したものではないと思つてゐたのであつた。そして今朝になつても、そんなに悪化したとは思へなかつた。

宇治は醫師の顔色を見守りながら、

「今朝は早くそのとほり利尿もありました、昨日あたりよりか大分落着いてゐるやうですが、それでも可けませんのですかなあ……？」

「えー、やつぱり好い變化は認められませんよ。別に落着いてはみませんよ。このとほり夢中でゐるんですから。」村松さんは苦笑を含みながら、遠慮のないことをいつた。

父親は慶吉やお茂などと皆な傍に来て居竝んでゐた。

宇治は、醫者がそんなにいつても、まだ直ぐに死んでしまふものとは思へなかつた。「何處か病院に入れたら、どんなものでせう……？」

宇治の素人考へには、やつぱり精神に異状を來してゐることを憂へてゐた。たとひ幾らか回復しても、永久に狂人として癡人になられるのが心配であつた。

村松醫師は精神病院に入れることの不可を唱へた。

「病院に入れると、あんた、こんな病人は却つて悪くなる。あんな處ぢや手や脚を縛りつけたりして、酷いめに遇はずやうなことをする。」

村松醫師がさういふのに嚇かされた父親は、

「病院に入れることは私も反對です。」と、賛成した。

すると妹のお茂もその言葉尻に乗つて、

「わたしも病院に入れるのは好くはないと思ひます。」といつた。

勿論宇治にしても、そんな手荒い狂人扱ひをする病院へ入院させることを思つてはゐなかつたが、一昨日の晩から殆ど不眠不休で附添つてゐる看護婦や慶吉の疲れることを思ふと、今の状態でこの先幾日も手数を掛けさせられたら、傍の者がみんな參つてしまふことが心配になつた。しかし宇治をはじめ素人にも、病人のことは少しも見當がつかなかつたと同じやうに村松醫師にも確かな見極めはつかなかつたのである。醫師はたゞ、この病人は死ぬ病人であるといふことを、婉曲に、どうも経過が良くないといつてゐるに他ならなかつた。けれども宇治にしては、醫師が見放した病人だからといつて、そのまゝ空しく死ぬのを待つても居られなかつた。どうしていゝか實に途方に暮れてしまつた。

「急變があつたら、知らして下さい。すぐまゐります。」といつて、村松醫師は、それから歸つていつた。

病人は相變らず上を仰いで白眼を半ば開きながら、「あゝ〜。」と微かに唸つてゐるばかりであつた。そして夢中に時々讒言うはせごとを發した。

妹のお茂は、その枕頭に坐つて讒言から正氣のことを訊き取らうとした。

「あらツ、あんな人、とても見込みがないといつてゐる。」

病人が、おぼろげにそれと聽き取れるやうな言葉を發したのを、明かにさう翻譯していつた。

それが父親にもお茂にも慶吉にも、病人が不常ふだん宇治に對して心に思つてゐることが、夢中ながらも讒言になつて洩れたるものと受取れた。

宇治は、そんな重患者などの取扱ひについて深い思慮も慎みもない無智な、お茂のやうな者が、偏へに婦人の俗情から、瀕死の病人を弄ぶやうなことをするのが、ひどく反對であつたが、それを制止することは、その場合二重の意味で看過してゐない譯にはいかなかつた。その場合もし宇治が、それを強ひて制止しようとしたならば、彼等は、病人のいはうとすることを訊くのが何で悪いと、つまりぬ理窟をいふに定つてゐる。そして、宇治自身が、讒言の間に、自分に都合の悪いことでもいはれるのを嫌

つて、それを止めるかと思はれるのが厭であつた。

「あんな人、とても見込みがない……」

そんな病人の謔言を父親やお茂がもし、彼等の邪推の通りに信じてみるとしたならば、實に何ともいひやうのないほど、彼等は、身の程知らずであると、宇治は苦い顔をして、堅く口を緘くはんでゐた。

さうしてゐると病人は又、何か知ら譯の解らぬことを口走つてゐたが、お茂はその中から今度は、次のやうなことを聞き取つた。

「あらツ、よく揃つた二人だといつてゐる。」

お茂は何か深い意味のあるやうな聲でそれをいつた。

宇治は黙つて父親やお茂や慶吉の顔をぢつと見わたした。父親はその時枕頭を離れて毎時いっも自分の居る場處にしてゐる納戸の方について大跌坐をかいてゐたが、彼は、お茂の翻譯した謔言の中にもお悦の不幸なる境遇を讀み取つてゐるものゝやうに、口邊に忿怒の色を浮べながら、鬼のやうな恐い顔をしてそうつと涙を拭つてゐた。

宇治はその時思つてゐた。病人の發してゐる謔言が少しでも正氣が交つてゐるとす

ればするほど、お悦が平常心の底にいくらか思つてゐること、彼女の父親や弟妹どもが皆なで思つてゐることとに、一點共通した疑惑が潜んでゐるのであつた。それは、宇治が凡ての點でお悦のやうな女を妻にして満足してゐる道理がないといふことであつた。それは、お悦や彼女の一族の者がさう思ふのが本當であつた。まだお悦に子供の生れない前、彼女が宇治の處に何といふ名目もつかずに同棲してゐた時分弟の慶吉は妹のお茂夫婦と三人で姉のお悦に向つて随分手厳しい苦言を呈したのであつた。その時お悦は、

「あの人は今まではどうであつたか知らないが、もう今はそんな氣はないんだ。自分でもさういつてゐる……。」

といつて、宇治を信じてゐるやうなことをいつた。すると慶吉は言下に姉を冷笑していつた。

「馬鹿！ お前は何といふ馬鹿だ。甘いにも程がある。今に放り出されるのを知らないで。騙されてゐることが解らないんだ。」

それにも拘はらず宇治のその後ずつと實行して來たことは、お悦の信じてゐたとほ

りであつた。しかし、お悅にしても、それがあまりに自分の意外であつたりするところから却つて疑心暗鬼の眼を以て宇治の腹を邪推するやうなことが多かつた。そしてそんな邪推が彼女の不謹慎な言行となつて表はれることが屢々あるので、その爲に宇治の心を驅つて、動もすれば却つてお悅の妄想してゐるやうな方面に向はしめようとする傾きがないでもなかつたが、宇治の方ではそんな関係を鳥瞰的に觀察してゐるのと、彼の長い間の經驗から體得した節制力との爲に、彼は決して自暴自棄には陥らなかつた。宇治は、自分の行爲に一點の非難を容れられざることを確信してゐるのであつた。

それゆゑに病人の謔言から、何か平常お悅が親や兄弟にも打明かすことを憚つてゐるやうな祕密を胸に抱いてゐて、それで苦しんでゐるのではないかといふやうな事實の端緒を得ようとしてでも居るらしいお茂などの淺薄な所作が宇治には腹が立つといふよりも、そんなことがお悅等一族の者相當の知識程度であるといふことを考へて、宇治は、どこまでも嫌惡を感じた。そこで、どうしたら自分の子供を彼等との關係から、さつぱり絶つことが出来るかと思ふと、それは血續上どうあつても出来ないこと

であるのが、宇治をして厭世的にならしめるのであつた。

父親は、昨夜も取り出して読み返してゐたお悦の手紙のこと、今夢中に病人が口走つてゐることなどを前後考へ合してみると、たしかに宇治がお悦を非道く虐待してゐるに相違ないと思つた。彼は宇治に對する憤怒とお悦に對する憐憫との興奮のあまり鬼のやうな恐い顔をぶる／＼慄はしながら、

「これでもし死にでもしたら……」

といつて、又手巾で涙を拭ひながら、どんなことをしても娘の仇を取るぞといつたやうに、悔しさうに唇を噛みしめてゐた。

對手が皆な揃つた野蠻人であるだけに、宇治は實際、これでこのまゝお悦が死んだら、面倒なことになると思つてゐた。飛んでもない者に繋り合つたものだと後悔した。そのうち病人は何かいふのを止めて、又少し眠りさうになつたので、

「あゝ、もうそんないろいろなことを訊かうとしないで、そうつと眠らさないといけない。」

宇治は、尙枕頭に、覗いて何か話しかけようとするお茂をたしなめた。そして心の

中で、全く仕方のない無智な連中だと思つてゐた。

父親は昨日の朝電報を見ると早速飛んで出て來たので、一應お悅の容態を見届けたらうへで、今日はこれから一旦歸國して、二三日して又出直すことにしてゐた。そして何處までも不満に堪へないやうな顔をして凝乎と黙り込んでゐた。

宇治は一昨日の晩遅く旅行先から歸つてみるとその騒ぎで、まだゆつくり前後のことを考へてみる間もなかつた。五日不在の豫定で出ていつた自分の留守中月末の諸拂ひや當座の小遣は間に合ふだけお悅に渡して置いていつたのであるが、留守を頼んでゐた女中に訊くと、三十一日の拂ひは、お悅が寢床に居て、まだ自分で金を出し入れしたといふのであるが、それから後のことは一切分らなかつた。少許の證券や保險證書のやうなものを一包みにしてお悅に藏はしておいたのであるが、そんな物を何處に置いてゐるやら分らなかつた。

宇治は一昨日からずつと打通^{ぶつとほ}しに病人のことゝそれに伴つて子供の始末については

かり、一方向きに心を奪はれてゐたのであつたが、これから先き病人が何らになるにしても金の準備をして置かなければならぬと思つた。宇治はもう昨日から、時々それを思ひ出してそんな大事な物の藏つてある處を探してゐたのであつたが、押入れの夜具の中にその包みを見出した。

「あゝ、此處にあつた、こゝにあつた。」といつて、宇治はそれを取り出しながら、

「別に銀行に金を預けて居る譯でもないし、これでも賣つて金を拵へよう。」といひながら、包の中から數枚の債券を抜き取つてそこに居た父親に見せた。

父親はそれを見ると、やゝ顔色を和けてゐた。

宇治は心の中で思つてゐた。お悦が父親に宛てた手紙の中には、宇治が碌に小遣さへ與へないで、たつた五圓なにがしの薬代をさへ吝むといふやうな不埒な讒誣をしてゐる文句を、昨夜遅くあの手紙の中でちらりと見たのであるが、宇治の一家の生活にはどんな節約をしても、一ヶ月に三百圓から四百圓の金は消えた。それはたつた三人の小家族にしては決して少い經費とはいへなかつた。彼は、お悦が何の據處よりどころがあつてそんなことをいひうるかと思つた。そして、夏の中よく「私には罰なんか當らないん

だから、まだ一度も病氣になぞ罹つたことはないんだから。……手前こそ何だ、あのさまは。げい／＼嘔吐へどをついて。」と、お悦が自分に向つて毒づいたことを、ふと思ひ起した。宇治は實際、今度のお悦こそ俺の罰が當つたんだと思つてゐた。

お茂はそこで自分の子供の泣くのを賺すかしながら、乳を飲ましてゐたが、

「お父さん今度出て來る時、一遍お芳を連れて來て見せてやるといゝねえ。……見じまひだよ。お芳が可哀さうだよ。」と鼻聲を出した。

お芳といふのはお悦が田舎の方に居る時産んで祖父母の手許で育てゝゐる子であつた。

宇治は傍でそれを聽いてゐて、無理からぬことであるとは思つたが、今病人は生死の瀬戸際に立つてゐるのである。少しでもその神經を刺戟させたくない。それが爲に宇治は自分の子供でさへ實に斷腸の思ひをしながら、人手に任せて餘處へ預けてゐる次第なのである。病人はそんなに夢中で、他の事は何をいつても分らないにも拘はらず、一昨日の夜もあちらの室で子供がひどく泣いてゐると、その聲ばかりは不思議に耳に入ると思はれて、いつも添乳をする時のやうに、自分の寢床の脇をそうつとたゝ

く眞似をしてゐた。宇治は男涙をちつと噛みしめて、そんな感傷的な氣持を抑制してゐるのであつた。

「子供を連れて來たりすることは何うかなあ？」

とお茂のいふことに反對の意向を表はした。

すると慶吉はすぐ宇治に反對した。

「神經を刺戟するのが悪いといつたつて、もう神經も何も無いぢやないか。あのとほり夢中で居る者の處に連れて來たつて構やしない。」

彼は、いかにも尤もらしいことをいふやうに、そんな屁理窟をいつた。

宇治は、こんな連中を對手にしたつて、とても仕方がないと思つて、そのまゝ黙つてしまつた。

「一生の別れだ。口は利けなくつても、たゞ一と目見せるだけでいゝんだもの。」お茂は又いつた。

宇治はもう何にもいはなかつたが、心の中では、何を犠牲にしても、今は瀕死の病人の生命を取留めることが第一であるにも拘はらず、思ひ分けのない俗情に構かまけたこ

とをいつてゐて、それで萬一の事でもあつたら、やつぱり、自分の所爲せゐにして、没分めくぶん曉やなことをいふにちがひないと思つた。

「子供を傍に置いとくと病人に障ると思ふから、病院に預けたのだ。」

宇治は不満な顔をしていつた。そして、自分がこれほどに感傷的な氣持を腹の中で殺してゐるのに無分別なことをいふと思つてゐた。

するとお茂は又いつた。

「乙女ちゃんおんなちゃんは宇治さんが付いてゐるから仕合せだよ。お方は親はあつても無いも同じおんなだから可哀さうだよ。」

宇治はもうその相手にはならなかつたが、昨夜からのことを思ふと、どうしても腹が癒なえなかつた。父親を初め弟妹が、お悦が平生宇治に對してどんな仕向けをしてゐるかといふことを、少しも知らないで一途に宇治の人格を無視してゐるのは、何度思つても、彼等の無智蒙昧な理解力に相當した考へであつたにしても、やつぱり彼にしては、さうまで自分の方だけで料簡を廣くして思ひ分けては居られなかつた。

そこへお茂の子供がわあツと泣き出した。

「あゝ喧しい。……自分の處の子供でさへ病人に障ると思つて此處に置かないやうにしてゐるんだ。」

宇治は大きな聲を出した。そして、自分の家宅うちが、何だか彼等の爲に踏み荒らされてゐるやうな氣がしてゐた。

暫く黙り込んでゐた父親は、その時どう思つたか、憤激した調子で、
「さあ、皆なもう歸らう。」と、蹴立てるやうにいつた。

「あゝ歸らう。」慶吉もお茂も聲を揃へて父親に和していつた。

「それでは困る。」

と、宇治は云つた。彼の本心をいへば、この連中に居つてもらひたくはないのであつたが、彼等が皆な居なくなつて、もしお悦に萬一の事があつたら、とても始末にならぬことを言ひ掛けるであらうと思つたのであつた。

宇治はやがて又、わざと笑ひを含んだ顔をして、父親の方に向つて、
「どうです、大抵私のいふことは解つたですか。」と言葉を掛けてみた。

「うむ。本人があのとほり口を利かないんだから。」と顎で病人の方をしゃくるやうに

いつた。

「癒つたら、よく分るですよ。」宇治は又笑ひながらいつた。

「今日はまあ一と先づ歸るから。二三日の間に又必ず出て来る。昨夜の話は少し後にしよう。その時は私もあなたに向つて、いひたいだけのことはいふから。」

父親は又殺氣立つた顔をしてさういつた。宇治もそれに對して決して負けてはゐなかつた。

「えゝ、」と、宇治は確信の面持をして、つよく首肯いて見せた。「その時は私の方でもいひたいことがうんとある。」

宇治がさういふと、父親はそのまゝ黙つてしまつた。宇治は實際いひたいことが山ほど胸に痞へてゐるのであつた。

しかし宇治は、そこばかりに落着いては居られなかつた。昨日連れていつた牛込の病院の子供の様子も見に行かなければならなかつたし、急にどんなことがあつても、まごつかないだけの金の準備も調へて置かなければならなかつた。少時茶の室の方の用を足しては、又父親等の傍に戻つて來て、決心したやうな顔に微笑を浮べながら、

「それでは取つときの債券を三百圓ほど賣つて來るかな。これは私が病氣にでもなるとか、死んだ後でないと手を付けぬ事にしてあつたのだが……」と獨り言のやうにいつた。そしてさういひながら彼はやつぱり落着いて居られぬやうに又すぐ起つて今度は病人の枕頭について、覗いて見ながら、「私の方が先へ死ぬと思つてゐたのに……」といつたが、夢中ですやくとしてゐる病人の顔を見ると、さすがに咽喉が塞がつたやうであとの口が利けなかつた。

宇治には、いろ／＼なことが思ひ浮んで來た、ついこの間頃のことであつた。子供ももう生れて十月くらゐになつたので、母乳ばかりでなく少しづつ牛乳を吞ましたり、軽い菓子（うぶこ）のやうなものをやつてもいゝのだが、それにはまだ八月で氣候が好くないから、今に涼風（すずかぜ）が立つやうになつてからにしようといつたりしてゐたのであつた。それが十日も経たぬに、最も健康體であると誰も思つてゐたお悦（おどろ）がこんなことにならうとは夢にも思はなかつた。十月の中旬は滿一年の誕生であるから、その時には、生れた時餘處（よそ）から祝つてもらつて、まだ仕立てずに藏つてある錦紗の着物をこしらへてやらうなど、母親と二人で話し合つて居たことも、宇治にしては、もうこの先き誰を對手

に、子供の爲にそんなことを話し合ふことも、出来ないものであると思ふと、今死なうとしてゐる者に對する憐憫と、母親の死ぬことも知らずに居る幼兒こどもに對する不憫と、そんな哀れみを獨りで味はゝなければならぬ彼自身の悲しい不幸の感情とが一つに融け合つて、たゞ悲しい果敢ない氣持が、ひた／＼と胸むねに染にじんで來た。人の生命くらゐ當てのないものはないといふやうな朝露の感がした。

父親はやつぱり元の座に坐りながら、

「病氣になつてから、貴方のしてゐることに異存はない。」といつて、何處までもお悅の發病が宇治の所爲せゐであるのを慄おそむやうにいつた。

これを聽くと宇治は又、今純眞な感情で病人を悲んでゐた氣持が忽ち消散するやうな反感が起つて來るのを覺えた。病人のお悅が平生さうであつたばかりでなく、彼等の一族は凡て自分達の僻見や邪推によつて、本當ならば感謝しなければならぬ宇治の尊い感情を傷けてゐるのであつた。

しかし宇治は今は何にもいふまいと強く決心をしてゐた。

そのうち朝から落ちて來さうな空模様であつたのが、ばら／＼降つて來た。

「あゝ雨が降つて來た。お父さん急がないと。」

お茂は自分でも歸りを急いだ。

「うむ。」といつて、父親も歸り支度をしながら、

「生命のないものなら、それは仕方もないが……かうなるまでの事が残念だ。」

といつて、もしこれで死んだならば、たゞ事では濟ます譯にはゆかないといふやう

な氣勢を見せて宇治の方を、じろり／＼白眼で睨みつけて、

「今日はまあ一と先づ歸るから。二三日の内に又必ず出て來る。」

「えゝ、どうぞ早く。」

宇治はそれに返辭をしてゐたが、彼にとつてはお悅の生死が自分の運命を試す一つの大きな賭博のやうなものであつた。

弟の慶吉を一人だけ手傳ひに居残らしておいて、父親はお茂と連れだつて立ち出でた。宇治はそれを玄關まで送り出したが、父親もお茂も宇治に向つて左様なら宜しく頼むともいはずに、膨れつ面ふくらをして歸つていつた。

その連中が引揚げて去つてしまふと、家の中がやつと靜かになつた。

病人も今のところ一寸落着いてゐるので、宇治はその間に用を達しかたゞ、昨日あれからどうしてゐるか、子供の様子を少しも早く行つて見たかつた。

附添ひの女はいろんなことを氣にすと思はれて、「こんな着物を着てゐるのは内のお嬢さんだけだ。」といつて、昨日病院へ行く時一緒に送つていつた、も一人の女中が歸つて來てから、女同志で話したらしい、そんなことをいつて聞かしたので、宇治は子供に着せる物などを押入の中から取り出した。そんなことは母親がして居たことなので、何處に藏つてあるのか分らなかつた。宇治はそこら中の入れ場を探しながら、押入の中に顔を突込んでゐると、ひとりでに熱い男涙がぽた／＼と頬に傳うて來た。お悅がいよ／＼死ぬやうなことになる、生れてやう／＼十ヶ月しか經たぬ子供を男親獨りの手に抱へて、これから先き、このとほり子供の着物のことまで氣を付けてやらねばならぬのだ。死んで行く者の哀れはいふまでもないが、後に殘された子供は長い生ひ先きにどんなに寂しい思ひをしたり、不幸を啣つことであらう。宇治は他の者に見せぬやうに、いつまでも押入の中を探してゐる風をして、少時黯然としてそこに佇んでゐた。そして昨夜慶吉の爲に眼が眩むほど非道く頭を打たれた時指先が左の眼

瞼に觸つた處がいくらか眼球の膜をとがめたと思はれて、涙とともに眼に霞がかゝつたやうで、取り出す着物の文色あしほをはつきり見分けかねた。

昨日は、急いだったので、家で着てゐたまゝを連れていつたのだが、平常着飾つて外に連れ出すことなど殆どないので別に餘處ゆきの着物もなかつた。お悦は縫ひ針の仕事など達者な方であつたが、いつも子供に手が掛かるので、落着いて仕事などに坐つてゐる間もなかつた。宇治はやつと子供の物の入つてゐる處を探しあてた。その中にはネルの單衣だの、ついこの間仕立てたまゝのモスの單衣などがあつた。それは丁度今の季節にふさはしい紅と水色とのぼかしの秋の七草を染め出してゐた。

今日は雨が降つてきたほどあつて、まだ九月の差入りであるが急に秋涼を感じた。宇治はそのほかに、そこにあつた、ちゃん／＼なども一緒に風呂敷に包んだ。それを女中に持たして、自分もすつかり雨具に身を固めて出掛けていつた。

昨夜からの苦々しい家内の醜狀が嘔吐を催すやうに胸に痞へて、彼は自分の家でありながら、まるで地獄のやうな感じのする其處から一刻も早く遁げ出したかつた。まるで不意打ちを喰つたやうな一昨日からの騒ぎに、二た晩といふもの殆ど熟睡しない

で心配をし通しにしてゐるので、身體は締のやうに疲勞してゐたが、彼は出来るだけ氣を張つてゐた。本來お悅などゝ比較にならぬほど虚弱な自分が又今此處で倒れるやうなことがあつたら、それこそ暗やみだと思つた。そしてまだ何の性根しやうねもない子供の立場を思ひやつて考へて來ると、その母親は醫者から見放されて、たゞ死を待つばかりであるところへ、その父親を、一時眼の暗くなるほど毆打なぐつたりする慶吉を、子供に性根があつたならば、果して何と思ふであらう：しかし宇治は今の場合凡てを隱便いんべんにしてゐるより他ほかはないと思つて、凝乎と胸を靜めるやうにしてゐた。

昨夜は子供は病院でどうして一夜を明かしたであらうと、それが氣懸りながら、行つてみると、診察室に顔を覗けた宇治を見て、院長は快活に、

「やあ、大變好いですよ。よく牛乳を飲みますよ。」と、聲を掛けた。宇治には、それがさながら天國からの響のやうに思はれた。

「あゝさうですか。難有うございます。」と、彼は心からの感謝の辭を洩しながら、

れからすぐ縁側づたひに、すつと奥まつた處にある病室の方に通つてゐた。随分古くなつた普通の住宅をそのまゝ病室に用ゐてある座敷は、しとくと降り出した秋雨あきさめにいとゞ薄暗くて陰氣であつた。子供は大きな寢臺の上に小さい身體を載せて、すやすやと眠つてゐる處で、その傍には附添ひの女がぼつんと坐つてゐた。宇治はそこへ入つていきながら、

「どうだね。」

と、聲を掛けると、彼女は笑顔で迎へながら、

「いらつしやいませ。今よくお寢やすみになつていらつしやいます。」

「あゝさうか。そして牛乳はどのくらゐ飲む？」

「牛乳は昨日あれから又夜までに二合召上りました。今日はまだ一度ですけれど、もう又直きお晝の分が來る時分です。先生も看護婦さんも、これから段々多くしてゆくと申されて居ります。今日はおほかた四合か五合くらゐになりますでせう。甘うまさうに召上りますから。」

宇治は安心したやうに、

「さうか、可し／＼。家に居ては、あのとほり困つたが流石にお醫者さんだなあ。」

「ええ、私も、こちらに来てはよく召上るのに感心して居ります。」

母乳を離れてからこの間中三晩か四晩どうしても他の物を口に入れないので手古摺つてゐたのであつた。

「寝るのはどうだ、よく寝ないだらう。」

「ええ、夜はやつぱり時々眼を覺まして泣かれます。」

「そいつは困るなあ。」

そんなことをいひながら、宇治はレインコートを脱いで、さも疲勞し切つたやうに、子供の足の方に寢臺の上にとどつかと腰をおろした。

そして、ネルの着物を着て、小さい手や脚を投げ出して無心に寢入つてゐる子供の顔をぢつと見入つてゐると、宇治の心は獨りでに子供を愛する氣持によつて、だんだん柔らいで來るのを覺えた。それとともに今まで緊張し切つてゐた心に弛みが出て來て、彼はそのまま子供の裾の方にぐつたり横たはつた。そして心地よいクッションに體を載せてゐると、もう起きあがるのが大儀たいぎになつて、何時までもいつまでもさうし

て居たいやうであつた。天地の間に唯子供ばかりが自分の最も親しい道づれであるといふやうな氣がして來た。彼はさうしてゐると何だか引込まれるやうに眠氣を覺えて來て、いつしか前後も知らずにそこに昏睡してゐた。

それから三十分ばかりして、ふつと眼を覺ましたが、家には今死にかゝつてゐる病人の居ることが催促するやうに又胸を突いて來た。

「あゝ疲れた。」と太息ためいきを吐くやうにいつて、彼はそこから跳ね起きた。

「ぢや、一寸これから用を達して、又來るからね。」といつて、宇治はそれから秋雨の降る街中まちなかに出ていつた。

やがて彼は雨の中を自動車で郊外の家に急いで戻つて來た。

きつと、歸つてみると病人は死んでゐるであらうと思つた。生か死か。それを知るのが恐いやうな氣持で門の外で自動車を飛び降り、玄關に入ると、そこへ出迎へた者に、いきなり、

「どうだ、死んだか？」

と訊ねた。すると、

「いえ、今落着いていらつしやいます。」

といつたので、案外な氣持がしながら、彼はいくらかほつとして、

「あゝ、さうか。落着いてゐるか。」

といひながら、急いで靴を脱いで玄關から病室の方に入つて來た。と、座敷の中は
靜閑しんかんとして、枕頭には看護婦と女中が付いてゐた。慶吉は端の方で轉寢ころねをしてゐた。

なるほど病人は、先刻宇治の出て行く時よりは、もつと落着いて、すやく眠つて
ゐた。

「おゝ、落着いてゐるゝ。あれからずつとこの通りか。」

「えゝ、ずつとお眠りになつてゐます。」

「さうか、それはいゝ。」

宇治は少し安心した。

「お氣はなか／＼確かでいらつしやいます。先ほど、一寸お眼をお覺ましになつて、

私に、どうも濟みませんねえ。あちらにいつて少し休んで下さいと仰有いました。」

傍に居た、村松醫師の處から今朝手傳ひに来てくれた女中はさういつて話した。

「あゝ、さうか。そんなことをあんたに向つていつたか。：：うむ、それは確かだ。」
「なか／＼お確かでいらつしやいます。それから、こちらの手に蚊が一匹留まつてゐたのを、かうお手をお上げになつて、そちらの手でお打ちになりました。」

「うむ、そんなことをしましたか。そんなことをするやうでは、なか／＼確しつりしてゐる。今朝までそんな様子はまだなかつたのだ。」

宇治は、今朝村松醫師がいつたことが、どうやら好い方に外はうれさうな氣がして來た。
「あゝ、この調子なら大丈夫だ。」

宇治はやつといくらか自分の身體になつて來たやうな氣がして、それから二階に上がつて、一昨日旅先から歸つたまゝにしてゐた鞆などを片付けて一休みすることが出來た。

その夜も別に變つたことがなくて夜が明けた。

翌朝になつても氣は一層確かであつた。

宇治はその騒ぎにまぎれて、訊いてもみなかつたが、二三日前から臺所の板の上に大きな西瓜がひとつ轉がつてゐるのを知つてゐた。それを今朝になつて漸く、

「これは誰が持つて來たのだらう？」

と訊くと、

「お掃除屋さんとかが持つて來て、これを上げますといつて置いていつたのだといつてゐました。」

そこに居つた者がさういつた。

「あゝさうか、分つた／＼。」

といつて、宇治はうなづいた。それは三四里も離れた武藏野の方から便所の掃除に來る百姓があつた。いつも來る時には自分の處で作つた野菜を積んで新宿の方の市場へ持つていつた歸りに寄つていつた。お悅はその百姓から新しい青物を買つたりしてゐた。そして縁先で辨當を使つたりする時に土瓶に茶を汲んで出したりして、その百姓をいたは勞つてゐた。

宇治はその大きな西瓜に付いた泥を洗はして、それを兩手に抱いてお悅の枕許に持

つていつて、

「おい、これが分るか」と訊いてみた。

すると病人は大分軽い顔をして、

「西瓜でせう。」と、細い聲を出した。

「うむ西瓜だ。これはねえ、便所を汲みに来るお百姓があるたらう。あのお百姓がこの間くれているのだ。どうだ大きい、好い西瓜だらう。」

「えい、好い西瓜ですわえ。」

お悦も宇治も西瓜は大好物で、夏の中は氷は飲まなくつても毎日のやうに西瓜をたべてゐた。

「どうだ、これを少し食べてみる氣はないか。」

「食べてみませう。」病人は微かにいつた。

それから宇治は又臺所にそれを持つていつて、自分で庖丁をあてた。眞青な皮を割くと、中味は眞紅に甘熟してゐて、何ともいへない西瓜特有の香ばしい匂ひが鼻に通つて來た。それを洋皿に二片ばかり載せて食鹽を添へて病人の傍に持つていつて、匙

を以つて口に入れた。病人はそれをさも／＼甘さうにして三角形の西瓜を二片とも綺麗に食べてしまつた。宇治はそれで、もう病人が癒つたやうにひどく勇んで來た。

「おい／＼西瓜を食べたよ。」と家の中にふれた。

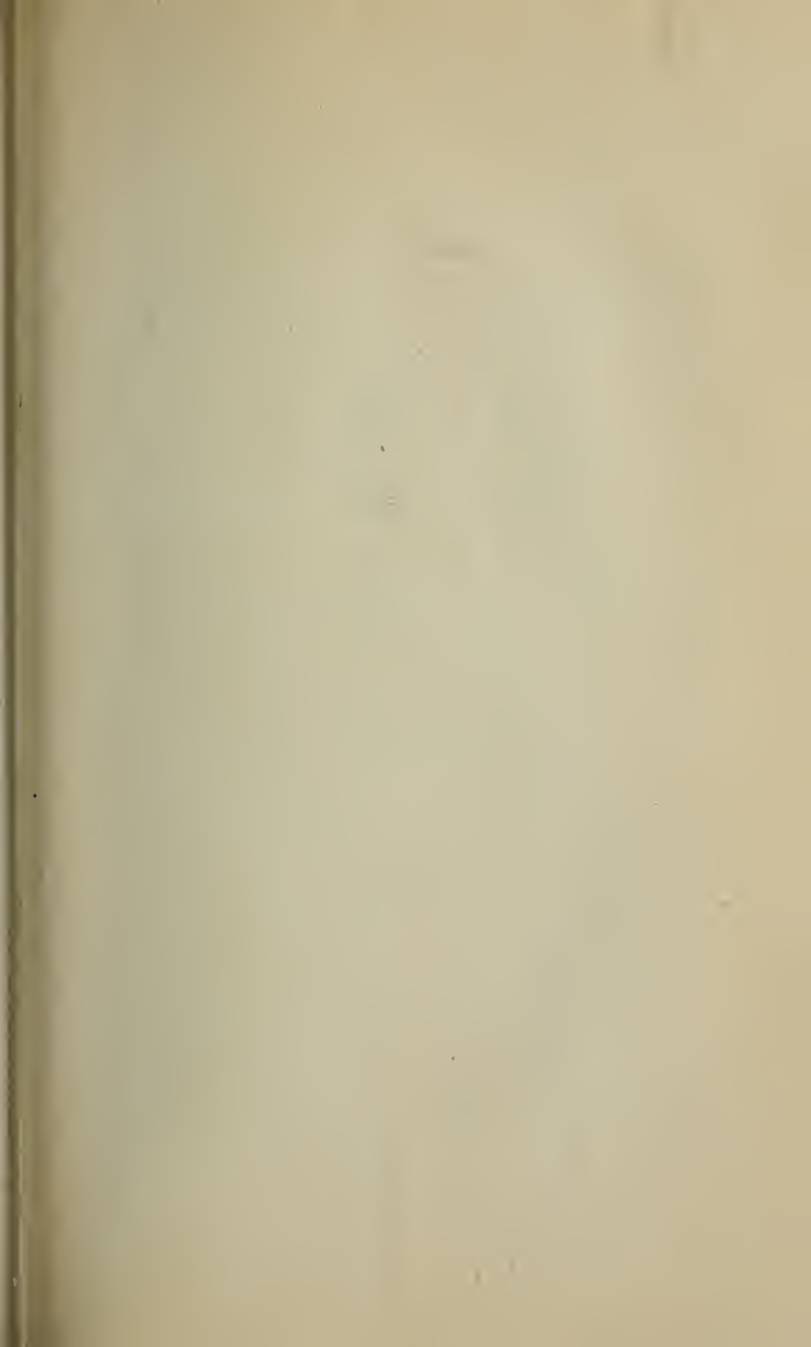
その時病はやつと峠を越したのであつた。

その翌日、大學の博士達の來診を仰いだ結果、病人は大學病院に入院させることになつた。

宇治はそれから毎日二ヶ處の病院を見舞つてゐたが、どういふものか母親の病院の方には足が快く進まなかつたにも拘はらず、子供の病院へは、丁度戀する者が戀人の處に通つて行くやうな楽しさと慰めとを感じて、そつちの方へは毎時足が輕かつた。片方の苦々しい悪感、さうして子供の顔を見てゐる間だけは忘れてゐることが出來た。病が癒えてくれなければ困るといふことは分つてゐるにも拘はらず、憎んでいゝか憐れんでいゝか分らぬお悅の病室を見舞ふのは、宇治には重い義務のやうな氣がす

るのであつた。宇治はお悦の病室を遁れ出ると、すつかり別な氣持になつて子供の處へ急ぐのであつた。そして牛乳臭いにほひのする、汚れた頬ぺたに自分の頬をぺつたり押し當て、その柔かな皮膚を感じてゐると、宇治は凡ての勞苦をすつかり忘れてしまつた。子供の慈愛に軽く浮き上がるやうな心地がして、小さい體をまた犇ひしと抱きしめた。宇治は咽喉の塞がるやうに涙が込み上げて來るのを覺えた。

意氣なこと



十月のところであつた。亘理は、その日は一日家にゐたので、妻の初榮を子供と一緒に親類まはりに出してやつた後は女中を對手に障子張りをしてゐた。

そこへ誰か玄關に音なふ聲がしたので、彼は糊の着いた手をして、自分で出て行つてみると、磨り硝子の嵌つた格子戸の外で女の聲で、

「ご免下さい」といふ者がある。

「はア」

といひながら、亘理は晝間も用心のために差して置く釘を抜いて、がらりと格子戸を開けると、そこには思ひがけなくお澄が立つてゐた。

「誰かと思つたら君か。……どうして來たんだ」

そんな時、亘理の癖で、突返したやうな無愛想な顔をしてさういつた。

女はそれでも笑顔で會釋しながら、

「ついそこのお父さんの家まで來たもんですから、一寸お寄りしました。」

「東京へは何時來たんだ。」

「一昨日」

亙理は、むつゝりした顔をしながら、爲方なさうに、

「今日はこのとほり障子張りをしてゐるんだが、まア上り給へ。」

と、いふと、女は體裁だけ一寸遠慮したやうに、

「お差支へないんですか。……でもお邪魔でせう。……奥さんは。」

「今日は親類に行つて、子供も皆な居ないよ。女中がゐるきりだ。」

「さう、ぢや一寸御邪魔をしていきませう。」

さういひながら、彼女は亙理の後について座敷の方に通つた。

「好いお住居ね。」

「なに狭くつて爲方がないんだ。先にはすぐそこに居つたんだ。今、君が入つて來る時に左側に大きな二階があつたらう。あそこに居つたんだ。」

亙理は糊のこはゞつた手で、そつちを指しながら、

「話しながら、序にやつてしまふから。」

「どうぞお構ひなく。」

彼女はさういひながら袂から敷島をとり出して火を點けた。

「お父さんの家つて、何處だ。」

「ぢきこの近所ですの。……關口水道町です。」

「あゝ、關口水道町か。ぢや、すぐだ。」

「あそこの公園の一寸脇の處です。……あたしまだ二三日は居りますから、お暇でしたら、どうぞ遊びにいらしつて下さい。」

彼女は煙草を二三本吹かしながら、しばらくそんな話をしてゐたが、

「お邪魔をして、どうも濟みませんでした。……奥さんのお留守の間に上つて。おいとまませう。」

さういつて女は歸りさうにしたけれど、亙理はせつくと障子を張りながら、強ひて留めようとはしなかつた。

「さうか。今日はこんなことをしてゐるので。」

「——ぢや、御免下さい。もうどうぞお構ひなく。」

女は亙理が玄關まで立つて來ようとするのを、しなやかな手附で制するやうな恰好をしながら歸つていつた。

今から一月ほど前であつたから、まだ暑い時分であつた。亘理は、會社の用事やら、いつも面倒な財産問題などが起るたびに自分が、その相談相手のやうになつてゐる福島縣の郷里の方の親戚の事で、そつちの方へ行つてゐた時であつた。ある日福島で用事を済まして、そこからまだ四つ五つステーションを隔てた處にある親戚の家に歸らうとして停車場に入つて來ると、そこでばつたり出逢つた女があつた。自分の方でも何だか顔に見覚えのある女のやうな氣がすると思つてゐると、向うでもさうであつたと思はれて、笑顔を向けてちつと此方を見てゐたが、

「あなた亘理さんでせう。」といつた。

「えゝ、亘理だ。君はお澄ちゃんぢやないか。」

「えゝ、お澄です。」

亘理は女の風俗をじろ／＼見守りながら、

「どうしてこんな處に來たんだ。」

「去年から此方に來てゐるんです。……わたし……やつぱりほゝゝゝ。……まア。随分しばらくですわ。」

「あゝさうか。随分しばらくだ。聲を掛けられなかつたら、氣がつかかなかつたかも知れない。君も年を取つたねえ。」

「でも、あなたは、あんまりお變りにならないわ。」

お澄はさういつて、洋服を着て突立つてゐる亘理の顔を又しげくと眺めた。

さう云はれて亘理は四十男に似げなく、一寸羞づかしさうな瞬きをしながら、

「いや僕も變つたよ。よく君は僕を覺えてゐたねえ。」

「それは覺えてゐますわ。」

亘理が學校を出て、まだ二三年にしかならない時分であつた。ある新聞の經濟記者をして兜町の係りであつた時、父の遺産として遺された金が四五千圓あつたのを資本にして、始めて株相場に手を出してみたところ、それがうまく當つて、一年立たぬうちにとん／＼拍子で四五萬圓儲けた。お澄はその頃新橋で知つた女の中の一人であつた。その頃彼女はまだ一本になつたばかりの子供で、初めは亘理の馴染の藝者の座敷に一座して知つてゐる時分には、本當の名のお澄で、澄ちゃん澄ちゃんと云つてゐた。

その後二三年も經つてから二三度二人で待合で逢つたことがあつた。それつきりで

あつた。

その頃十八で何となく赤襟くさかつたお澄は、あれからだから、もう、そつちこつち三十に間近い筈だが、小柄の爲に先から二つ三つは若く見える方であつた。常磐津がうまくつて、其時分から座敷の面白い妓であつた。

「今日はこれから何處へ行くのか。」

「えい、今日はこれから飯坂へゆくんですの。……ステーションへは一寸人を送りに來たんですけれど。」

亙理は、福島の方の用事も都合よく濟んだし……その日はそれから四つ五つ先の驛の親類に歸つて寝るのも何だか詰らないやうな氣がして、

「さうか、飯坂へ行くんなら、僕も久し振りに温泉に浸つてもいい。これから一緒に往かう。」

亙理が急に弾はじんだやうにいふと、彼女は笑つて、
「可けないのよ、今日はお客と一緒になんですから」

すると亙理も微笑んで、

「お客と一緒にだつて構はないぢやないか、なにも僕が君と一緒に泊らうといふんぢやないもの。」

「さうぢやないのよ。そんなことは構はないんですけど、今日は大勢で自動車で行くんですから：しばらく振りでわたしもゆつくりお目に掛かつて東京の話が聞かしていただきたいと思ひますから、一遍目を變へてお遊びにいらしつて下さい。：：あなただ東京へは何時お歸り？」

「僕はまだ三四日は此方にゐる。此處にはゐないが、此處からも少し先の親類に泊つてゐるんだ。これからそこへ歸るところなんだ。」

「ぢや、東京へお歸りになる前には是非一遍いらしつて下さい。若松町の：：ごぞんじでせう：：あそこで春吉といつて聞いて下すつたら、すぐ分りますから。」

「あゝ、さうか、ぢやそのうちにゆく。」

亘理はそこで春吉と別れた。

それから汽車で一時間ばかり、まだ東北に寄つた處にある親類の家に歸つた。そこには従兄弟も居り従弟に嫁してゐる妹なども居つた。二三日して、その親類から又親

類になつてゐる生絲問屋の三野村に出會つた時、

「どうだ、福島へ往かうぢやないか。」

と、水を向けると、遊び好きの三野村は、亘理のその一言で、すぐ、これは普通の用事ではないと呑込んで、亘理の顔を見て笑ひながら、

「何か福島に面白いことでもあるのか。」

「うむ、あるんだ。」

と、いつて春吉のことを話すと、

「そいつは面白い。……春吉なら僕も知つてゐる。行つてもいいが……」といつたが、一寸思案するやうな顔をして、

「春吉でない、誰か他のだつていいだらう。」といふ。

「どうして？ 君、春吉をどうかしてゐるのか。」

「いや、そんなことはない。」

「そんならいゝぢやないか。僕は別に若松町に往きたいこともないが、そのお澄に、一遍會つてみたいと思つたから。……君がどうかしてゐたつて構はないよ。僕はお澄

をどうしようといふんぢやないから。」

「なにそんなに斷らなくてもいい。君ならどうかしたつて構やしないさ。だけど、あの妓は若松町ぢや指折りの姐さん株なんだ。東京ぢやどうだか知らんが福島では不見轉ぢやないんだよ。」

「そりやさうだらう。新橋にゐる時分だつて不見轉ぢやなかつたんだもの。」

亘理はその頃から話の面白い、さつぱりした、好い男で、新橋でも女にはよく好かれた方であつた。

それで三野村は實を言つた。

「實は僕ぢやないんだが、丸三の大將がコレなんだ。」

と拇指を見せて、

「君がどうかしようといふなら、僕も一緒ぢや甚だ具合が悪いんだ。……春吉の方でも僕の手前がいけないだらう。」

「あゝ丸三が旦那か。好いドル函を捉へてゐるなあ。」

丸三といふのは、三野村には又親問屋ともいふべき屈指の生絲屋であつた。

しかし三野村は、一旦はずみの附いた福島ゆきを、もう中止する氣になれなかつた。「ぢや、かうしよう。これからすぐ往くことにしよう。そして向うでは別々に清泉樓へいつて、君は春吉を招んで、僕と偶然廊下で出會つたことにしよう。さうすりや構はない。」

それから二人は俄に思ひ立つて四五の停車場を乗越して福島まで來た。凡てが都合よくいつて、その晩はたうとう皆で自動車で飯坂へいつた。

亘理は、何にも分らない奴でも女中がゐなかつたら、もつとお澄を置いて障子を張りながら話したかも知れなかつたが、自宅まで立寄つたりするのでは後難を恐れて愛想もせず歸してしまつた。無論お澄の方でも、これから亘理にどうといふ、そんな初心な考へのあつた譯でもなかつた。たゞ昔馴染といふだけで、色氣なしに遊びに來たのであつた。

次の日であつた。亘理は夕方に歸つて來て、晩飯を濟ましたところで、妻の初榮は一番末の兒に乳を含ませながら火鉢の傍に坐つてゐたが、

「昨日女の人が訪ねて来たんですか。」

亙理は一寸不意を喰つたやうな氣持がした。

お澄が昨日ふらりと立寄つたことは彼女には、それが何でもなかつた。と同じやうに亙理にとつても何でもないことであつた。それゆゑ、用事の多い、いつも頭の急しい亙理は、今日になつてはもうお澄の來たことなどは、てんで忘れてしまつてゐたのであつた。もし彼女に訪ねて來られたことに多少の意味を加へて妻に訊かれたりするやうな氣づかひがあるとすれば、彼は昨日女中に口留めをして置くのであつたが、別にそんなことをする必要を感じなかつたので、それつきりにして置いた。

亙理は空腹の後に快い滿腹を覺えながら妻楊枝で齒をつゝいてゐたが、いつも一本に定めてゐる晩酌の微醺に肉附の好い顔を火照らして、

「うゝ、來たよ。……それがどうした……おかね、貴様しやべつたな。」

そんな時の亙理の常の調子で、一寸高飛車にいつた。

初榮はしほくとした愛嬌のある眼元に少しく笑ひを浮べながら、
「別にどうもしないんですけれど……藝者でせう。」

「うむ、藝者だ。：：おかね、お前によく藝者と素人との見分けがつかないなあ。」

亘理は少しもひるまない調子で、板の間で何かしてゐる女中のおかねに當つた。おかねは、先達つても往つてゐた亘理の郷里の方から連れて來た女中で、十六の時からもう足掛け四五年もゐるのであつた。眼に一丁字の教育もない者であつた。たゞ身體が頑健で、何でも亘理のいふことを従順に聽いてよく働くので、彼も眼にかけて、いゝろんな面倒を見てやつてゐた。

旦那にそんなに云はれると、おかねは赤ら顔を一層赧くしながら、濟まないことでもしたやうに黙つて動いてゐた。

「おかねにだつて、藝者かさうでない女かくらゐは分るねえ。」初榮は肩を持つやうにいつた。

「：：何處の藝者です？」彼女は又亘理の方を見て訊ねた。

「田舎の藝者だよ。」亘理は一喝するやうにいつた。

初榮は容易に信じない風で、

「田舎の藝者？　田舎の藝者がどうしてこんな處へ來てゐるのですか？」

「馬鹿！……田舎の藝者だつて来るさ。」

若い時から散々道樂をしたうへに、世間通である亘理は、堅氣一方の自分の妻の、物の解らぬのを罵るやうにいつた。そして、昨日藝者が訪ねて寄つた筋道など話して聞かす必要もないと思つた。

初榮の想像は、もつと入組んでゐた。これは、きつと亘理が新橋か何處かの女を他に圍うてゐるのにちがひないと思つた。けれども、今それ以上執拗く訊きほじらうとすると、何でも頭ごなしにする夫のことだから、なか／＼本當のことをいふ氣づかひはないと思つて、そこではそのまゝ口を噤んでしまつた。

その翌々日かであつた。亘理は、晩飯の後の初榮との茶の室まの話など、もうすっかり忘れてしまつてゐる時分に野田の爺さんが、亘理は、自分では、別に呼びにもやらないのに、何か用でもありさうにやつてきて、火鉢の傍に坐つた。

野田といふその爺さんは、亘理の家の番頭のやうにして、始終老人夫婦で亘理の家に立入りして、急しいことのあつた時など手傳つてゐる人間であつた。倅は一人あつたが、もう十年近くも外國の方に出稼ぎに行つてゐた。亘理は何彼につけて年寄の面

倒も見てやつてゐた。

にや／＼笑つてゐた野田の爺さんは、そこでバットを吸ひ付けながら、

「亘理さん、あんた近頃大層意氣なことがあるさうぢやありませんか？」

出し抜けにそんなことを言つた。

亘理はその、目から鼻へ抜けるやうな顔を少しく吃驚したやうに見張つて、

「何だ出しぬけに、……味なことをいふぢやないか。」

爺さんはわざとせゝら笑ふやうな調子になつて、

「白ばくれなざるな。……亘理さん、私に見込まれたら、さつぱりと實を明かした方

がいゝんですよ。」

亘理はさういはれても、本當に解らない顔になつた。

「それは一體何の事なんだ。意氣な話だの、白ばくれなさんだの、俺にはちつとも

譯が分らない。」

爺さんは、すると、

「ちえツ！」と、馬鹿にしたやうな聲を發して、「白狀しなさいよ。何處に置いてゐ

るんです。：：貴下あなたももう子供が二人も出来て、四十も二三年前に通り返した年配ぢやありませんか。やつぱり雀百までとやらで、油断も隙もならない。」

亘理はそんなに言はれても、まだその譯がはつきり分らなかつた。今度は呆けたやうな顔になつて、

「いくら云つても、俺にはお前のいふことが譯が分らない。何處に置いてゐるなんて俺が何處かへ女でも隠してゐると思つてゐるのかい。」

「當り前ぢやありませんか。」

亘理は可笑しくなつてきた。

「どうしてそんなことが分つた。あつはゝゝゝ：：」

爺さんは此處ぞといふやうに突込んで、

「それゝ。語るに落ちずして、問ふに落ちるといふのが、そのことだ（どうしてそんなことが分つた）もう七十に手の届く年になつても貴方とは、これで三十年に近い知合なんですから、大抵此方で見當を附けたことは外れやしない。」

亘理は笑ひもならず、怒りもならずといふやうな表情をして、

「いや、そんな、言葉尻を捉へたつて爲方がない。どうしてそんなことが分つたといつたのは、お前の方で何も彼も知つてゐるやうなことをいふから、俺の方から訊いてみたのだ。俺が何處に女を隠してゐるといふんだ。」

「ちえつ！　まだそんなことをいつて、：：一昨日細君の留守に此處へ訪ねて來たでせう。」

爺さんは急所を抑へるやうにいつた。そこで亘理は實際の有りのまゝを云つた。それでも野田の爺さんは、たゞせゝら笑ふやうにいつて、いくら辯明しても本當にしなかつた。

「亘理さんのことは、私は若い時分から知つてゐるんですから、あなたが細君をうまく騙すやうに、私を騙すことは出来ませんよ。」

「いや騙しやしないよ。今いつたよりほかにいひやうがないんだ。」亘理は笑つてゐた。「そりや口は調法なもんですからね。」

野田老人は老眼鏡の奥から、凝と亘理の腹の底を透かして見るやうな厭な眼付をして、これも笑つてゐた。亘理が事もなげに笑つてゐるほど、事實を隠してゐるものゝ

やうに野田の方では思つてゐるのであつた。亘理はそれを心に察しながら、この野田の年寄りも、なるほど、以前まだ銀座裏にゐて三四人の職人を置いて理髪屋の親方で盛んにやつてゐた時分に比べて近頃大分老けて来たなと思つた。

そしてあんまりうるさく疑つてゐるので、亘理は少しく勃然としたやうな顔をそつちに向けて、

「うむ、圍うてゐるがどうした。：：女一人位俺の働きで圍うてゐたつて、内の子供や鼻に不自由な目をさす譯ぢやないし、構はないぢやないか。それが何うした。」

亘理がいくらか棄て鉢の調子でさういふと、野田の老人は今までにや／＼してゐた顔を、これも少しく緊張させたやうにひるませて、

「いや、貴方の働きで女を圍うて居ることを私が喧しくいふには當らないことですが、貴方も私と始めて知合になつた時分の貴方と萬事が異つてゐるんですからね。三人の嬢ちゃんがある今の貴方でそんなことをしたんぢや、第一奥さんが心配するぢやありませんか。」

野田の老人は眞剣になつていつた。たうとう亘理が外に女を置いてゐることを本當

にしてみました。

「そりや解つてゐるよ。」

「分つてゐるなら、止さないといけませんよ」

「……だつて止すも止さないもないぢやないか。」

「またそんなことを言つてゐる。貴方は一體私達のいふことを馬鹿にするからいけないんだ。」

「いや、馬鹿にしゃしないさ。馬鹿にはしゃないけれど、お前達が事實無いことを疑心暗鬼で本當にしてしまふから、俺は却つて可笑しくなつてゐるんだ。」

野田は又苦笑しながら、今度は細君の方に顔を向けて、

「奥さん、この方は昔からとても手におへないんですからね。」

「まあ、可いよ。今日は、そのくらゐにしておいてくれ。君達に心配をさせやしないよ。……俺もいくらやくざな人間でも去年で四十を越して、さきの遠い子供が三人もある身だから。」

それで殆ど事は落着してゐたところへ、それから三四日してお澄が復た亙理の家を

訪ねて來た。その時亙理は留守であつたが、妻の初榮は、取次ぎに出た女中から、「奥さん、この間の藝者が來ました。」といふので、どんな女か、見たいと思つて、主人は今不在であるが、とにかく座敷に通すやうに女中に命じた。彼女は、この間自分が訪ねて來たために、亙理の家でそんな悶着があつたことを少しも知つてゐる筈もないので、いはるゝまゝに一寸上つて初榮と話して去つた。その時彼女は、

「これから福島の方に歸ります、どうぞ旦那様によろしく。」

と、云つて、一寸した菓子折を置いていつた。

その晩に亙理が外から歸つてくると、初榮は大分相形を變へて、此間の女が又訪ねてきたことを話した。

亙理は腹の中で、お澄も仕方のない奴だな、そんなに訪ねて來たりなどしなければいゝのになと思つたが、生半なまなかそんなことを口に出していつたりすると、却つて初榮の疑念を深くするばかりだと思つたので、膠にもなく、たゞ、

「さうか。」といつた。

それでも初榮はそれだけではどうしても氣が濟まなかつた。自分で本人の藝者を見

てからは一層嫉妬心が募つてくるのをどうすることも出来なかつた。

亘理は又亘理で、妻のいふことを本氣になつて取上げるのも馬鹿々々しく思つてゐた。

それから又一と月ほどして十一月の末であつた。ある日お澄がひよつくり訪ねて來た。その時は亘理も妻の初榮も家にゐた。亘理は心の中で、また困ると思つたが、それをお澄に明らさまにいふわけにもいかなかつた。家内が詰らぬ焼餅をやいて困るから、自分の家へ來ることはしないでくれとは、どうしても男の口から云へなかつた。そして初榮の居る處で、ことさらに明るい世間話をして三四十分も居つて歸つた。

「お父さんが今度たうとう可けなくなつたものですから、又一寸出て來ました。」
そんな話をして、福島の手土産に持つて來た。

初榮も始終傍に居つてお澄の話の様子を見て、大分今までの疑ひが解けて來た。するとその晩にはお澄は俵屋に手紙を持たせて近い處の鰻屋に來てゐるからそれに乗つて一寸來て貰ひたい、少しおねがひがしたいことがあるからと云つて來た。物好きでまめな亘理は、夜は暇にしてゐるので、その俵に乗つて出掛けて行つてみた。すると

そこにはお澄の他にも一人、彼女の客と思はれる男が居つて酒を飲んでゐた。お澄はその男を互理に紹介して、

「この方が互理さんと仰有るんです。」といつた。

その口振りによつて、互理は、自分のことがもうお澄の口から屢々その男との間に噂に上つてゐることを察した。

そしておねがひしたい用事といふのはかうであつた。その男は想像したとほりのお澄の旦那でやつぱり福島の方の請負師であつた。——その男が今度彼女を落籍することになつたので、手附金として五百圓だけその晩お澄に渡すことになつたが、男は誰か確りした人に仲に立つて、二人の話をよく聽いておいてもらひたいといふところから、お澄の發議で、それならば互理さんといつて新橋時分から懇意にしてゐる人で、そんなことを頼むのに丁度好い人が、すぐこの近い處に居るからといつて、互理に来て貰つたのであつた。

「どうも初めてお目にかゝりまして、とんだ御迷惑なことをおねがひいたしまして相済みません。」

といつて、彼は亙理に酒盃を差した。

お澄は傍から、

「そしてこのお金をお前にたゞ持たして置いたんでは確かでないから、誰かに預かつてもらつて置けといふんですから、亙理さん貴方濟みませんが、どうぞ暫くの間これを預かつておいて下さいな。」

といつて、札束を亙理の前に出した。

亙理は酒盃を飲みほして、

「いや、そんな大金を預かつて置くのは心配だ。」

大分好い酒の廻つたその男は「旦那、突然こんな御無理なことをお願いいたしました申譯がありませんが、どうぞおねがひします。」

といつて、重ねて、亙理に酒盃を差向けた。

「え、そりやあんた方二人の間の話は私もよく聞いておくですが、しかし、この金は君が持つてゐたらいゝぢやないか、僕が預かつておいたつて心配だ。もし減らしでもすると後で困る。」

お澄の方に向つていつた。

「えへ：：どうぞお使いなすつて下さいまし。これに持たしておくより安心でせう。」
「済みませんが暫く預かつておいて下さいまし。」お澄もいつた。

「いや金を預かるのは眞平だ。その代りこの席の話は後になつて、もし私が出る必要が生じた場合は何時でも立ち合ふです。」

亘理は剛愎な調子でいつた。

その晩のことがあつてから妻の初榮の胸には又新しい疑雲を翳した。そして又野田の老人の處にいつて訴へた。亘理は有體のまゝを野田に説明して聞かした。すると初めは初榮と同じやうに半信半疑であつた老人も、世間の事を知つた年寄りであるだけに、ほゞ亘理のいふことに信を措いて來た。

「それぢや亘理さんかうおしなさい。奥さんは、私がいくら辯解したつて、もうそれに違ひないと思ひ込んでゐるんですから、此上辯解するのは無効です。それよりも、貴方があつた女を圍うて置いたことを、奥さんの思つてゐるとほり事實にしてしまふん

です。」

「うん、さうしてどうする。」

「本當あつたことにして置いて、その上で奥さんの納得するやうに女と綺麗に手を切つたことに見せたらどうです。」

「うむ、それでもいい。」

それから野田の老人は初榮に向つて、亘理があつた女を圍うて置いたのも事實であつたが、此度いよゝゝ手を切ることにしたから、さらりと安心するやうに説き勧めた上で、亘理は初榮にも知らして三百圓の手切れ金を遣つて向うから證文を受取ることにした。

そして亘理は早速その晩、小石川の高臺を下りた處に在る江戸川つぶちのお澄の親元に訪ねていつた。父親は一週間ほど前に亡くなつたので、そこにはお澄の兄が住んでゐた。亘理が格子戸の處から聲をかけると、すぐお澄が出て来て膝をついて、

「おや、入らつしやい。さあ、どうぞまあお上んなすつて下さい。こんなむさくるしい處ですけれど。」

互理は少しく遠慮したやうに、すぐ上らうともせず、

「えい、有難う。：：あんなお父さんが亡くなつて、まだ間がないんで、取込んでみるでせうから、此處で失禮する：：：」

それでも何か少し用ありさうな顔をしていつた。

「まア、そんな事を仰有らずに：：なにお父さん亡くなつても、もう片付いたんですから。どうぞ一寸お上んなすつて下さい。」

「さうですか、ぢや一寸御邪魔をして往きませう。」といつて座敷にとほつた。

やがて互理は煙草を一吹してから、

「お澄さん、今夜は僕、實に詰らんことで君に一寸お願ひに出たんだがねえ：：」といひさして、互理は苦笑を洩らした。

「あたしにおねがひつて、どんなことです。貴方のおねがひなら何でも承りませう。」

「いや、實に馬鹿げたことなんだが。」

と、いつて一と月ほど前彼女が始めて互理の家を訪ねて來た時分から内輪の事情を掻い摘んで話して聞かせた。

「おや／＼、そんなことは、あたし少しも知らなかつたもんですから、貴方には飛んだお迷惑でした。」

「いや迷惑といふほどのこともないんだけど……世間を知らない女にも困つたものだ。俺なんぞは若い時から道樂をしてゐた者だから、そんなこと位なんとも思つてやしない。以前から知つてゐる人に珍しく會つて話をするのは楽しみなくらゐに思つてゐるんだけど、女の野暮な奴と來たら、全く手が附けられない。」

亘理はさういつて爲方なく笑つて又敷島を吹かした。

「さうぢやありませんわ。奥さんはそんな方でないといけないんですよ。殊に亘理さんのやうな方は。」

「戲談ぢやない。」

「ぢやもうこれからは幾ら上りたくつても、御遠慮することになりますわ。」

亘理はそれで少しく取附き端を得たやうに、

「甚だ相濟まないが、お澄さん今後僕の家に来るのだけ一寸遠慮してもらひたいんだ。……それで、まるで子供騙し見たいなことだが、君から手切れ證文を取

ることにしてもらひたいんだ。手切れ金は金參百圓也といふことにしてね。」

「へえ、あたしが貴方から參百圓お金を受取つて、あなたと手を切ることにするんですか、それこそ只ちや濟まされせんわ。」

「いや全く馬鹿げた話なんだ。飛んだ女房を持つてこんな時に困るよ。その代り君に何でも奢るから、君ひとつ手切れ證文を書いてくれ給へ。」

「そりや何でも書きますけれど、あたしにはよく書けないわ。貴方文言をいゝやうに書いて下さい。したらあたし自分の名前だけ書きますから。」

それで亘理はお澄から半紙をもらつて、有り合せの鉛筆で貴殿から參百圓の金を確かに受取つた。今後貴殿との交際はこれを限り一切斷つことにした。依つて一札件の如しといふ文句を簡單に書いて、お澄はそれへ自分の名前を署して捺印をした。

「さあ、それで參百圓の代りに何かお奢りなさいよ。」

「うん、何でも奢るよ。」

といつてゐたが、お澄は、

「さあ、何を奢つていたゞからなあ。」

と思案をして、

「でも、もう夕飯は済んだし。：：何も欲しくない。」

「とにかくそれぢや神樂坂の方まで出てみよう。」

「えい、それがいゝでせう。」

と、二人はそれから、ぶら／＼歩いて、人の出盛る山吹町の通りから神樂坂の方まで散歩した。十一月の末で、しつとりした秋の夜は、白い靄がそこらの街や人を朧に立罩めてゐた。八百屋の店にはもういつの間にか林檎や蜜柑の色が美しく紅に輝いてゐたり黄色く熟してゐた。

亘理とお澄は山吹町の通りから坂を上りつめて、矢來町の交番の處から折れ曲り、牛込の郵便局の通りへと出て來た。通寺町から肴町の方は靜かな秋の夜をそゞろ歩きに樂しむ人でぞろ／＼賑うてゐた。亘理は、二人で一緒に歩いてゐるところを人に見られるのが氣が／＼りであつた。

「お澄さん何か奢らう。」

「あたし、もうお腹がくちいんですの。」

本當か。」

「えい、お夕飯を済ましたところへ、貴方がおいでになつたの。」

「さうか。ぢやこゝへでも入らう：：又君とかうして歩いてゐる處を、誰かに見られると困る。早く入らう。」

と、いつて亙理は、颯々と先に立つて田原屋のレストランに入つていつた。

そしてテーブルを中央に差向ひになつて、

「さア何か一つ位は食べられるだらう。：：何がいい？」

といつてゐるところへ、向うのテーブルから、

「やあ！」といつて聲を掛けた者があつた。

亙理は自分のことかと思つて、何の氣なしにそちらを向くと、そこには、もう大分上機嫌になつた、知合ひの書畫屋が二人で腰を掛けてゐた。そしてもう歸るところと思はれて、帽子を手にして傍を通りながら、

「お楽しみ！」といつて去つた。

「いやあ！」と、亙理がいつて苦笑してゐる間に、二人の書畫屋はもう出ていつてし

まつた。

亘理は、これはいけないと思つて、匆々にしてそこを外に出て、毘沙門前から向うの横町に切れて戻り道を急いだ。

そして家に戻つて件の一札を初榮の前に出して見せた。

「これでいゝだらう。」

「えゝ。」

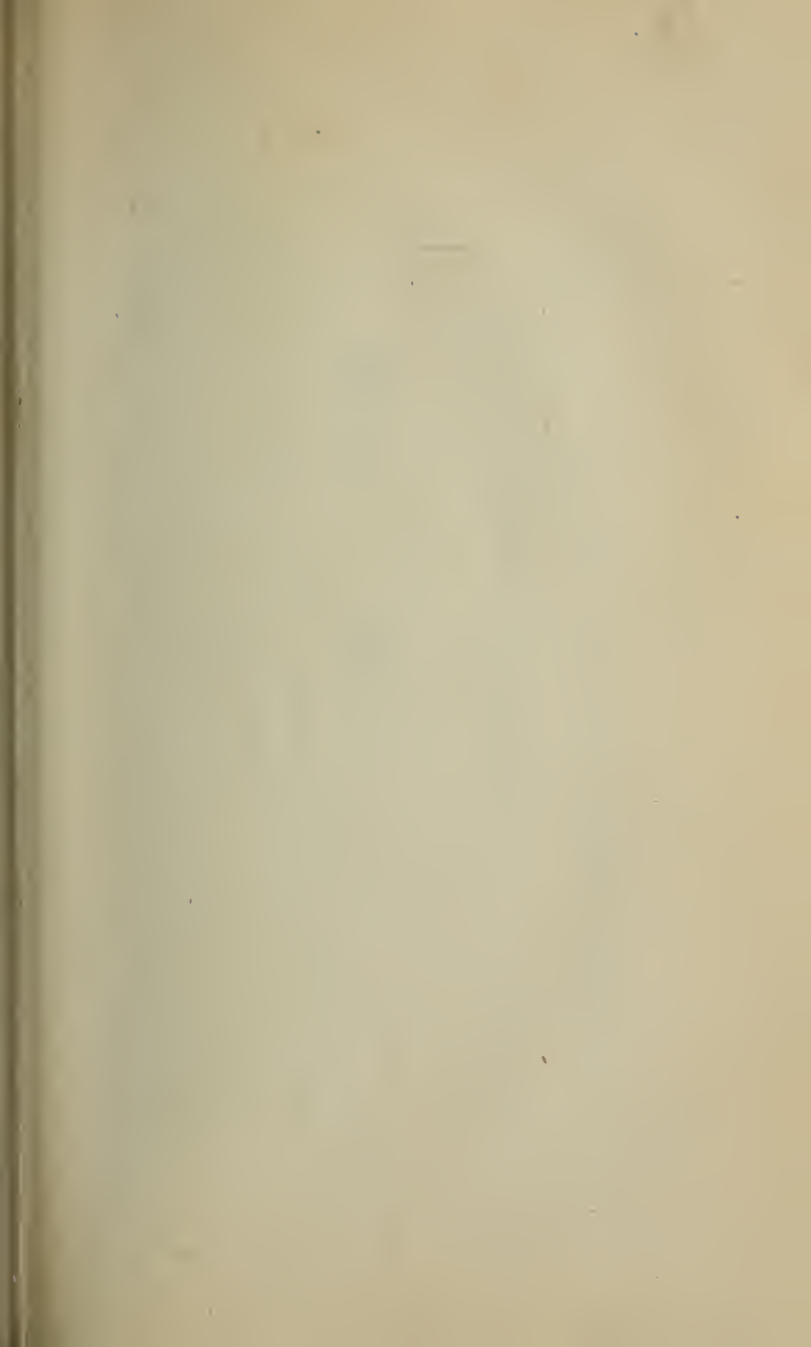
といつて、初榮は眼をしほく／＼させて微笑んだだけであつた。

それでももう可いと思つてゐると、二三日して初榮は又妙なことを云ひ出した。それは此間田原屋へ行つた歸途、亘理は氣が付かなかつたが、やつぱり近い處にゐる初榮の姉が亘理とお澄と歩いてゐるところを見て、それを初榮に告げたのであつた。

亘理は、もう、とても助からないと歎いた。(をはり)

夏

姿



—
昨日の晚日光の避暑地から歸つてきた染崎は、久し振りに自分の部屋に寝たせゐか
昨夜はいつにない熟睡をすることが出来た。さうして今朝は快い心持ちで眼を覺まし
ながら置時計に眼をやると、もう九時を指してゐるので、彼はいそいで起きあがりな
がら北向きの窓の戸を二枚明け放すと、櫛や櫛の青葉を漏れてくる涼しい風が颯と流
れて青い蚊帳を吹いた。

「九時までにはゆくといふ電報であつたから、いそがねばならぬ。」と思ひながら、手早
く寢具を押し入れにしまつてしまふと、彼は楊枝をつかひながら寢卷の浴衣ゆかたのまゝ手拭
と石鹼しよぼんとを持つて近所の風呂屋に出て行つた。

やがてそこから戻つてくると机の上に鏡を立てゝそれに映る自分の顔をじつと見入
りながら、彼はもう何年にも思ひ出せないほど長い間味はゝなかつた幸福の感に暫時しばらく
思ひ浸つてゐた。

それは、まだ見知らぬある婦人と今日これから東京驛の婦人待合室で會見しようといふのである。そのために彼は昨日わざ／＼日光から歸京したのである。彼は今更もう若々しい戀愛を楽しむやうな年齢でもないし、それに彼の過去は随分そんなことで傷ましい經驗に充ちてゐるので、また懲りずにこれまで幾度も出會つたやうな苦い味を嘗めさせられるのが寧ろ恐ろしかった。それゆゑなるべくなら今折角平靜に歸してゐる心に石を投げて、またしても仇浪を起さすやうなことは努めて避けたいたのであつた。いひかへれば、近頃の染崎には婦人といふものが恐ろしいものになつてゐるのである。その恐ろしい女に彼は今日どうして逢ふことになつたかといふに、それには彼の好奇心を喚起すだけのことを女の方から仕向けて來たのである。年齢はとつたといつても染崎はまだ全く女といふものを忘れてしまはねばならぬほどの老人でもないしそれに獨り者の氣樂な境涯であつてみれば、餘處の女に逢つたからとて何處から苦情を持ち込んで來られる心配もない。尤も妻の外には女といふものには一切見向きもせぬほどの行狀の堅い人間なら知らぬこと、染崎はそんな水氣の失せた人間でもないから、口説かれれば靡くくらゐな粹な沙汰は千も百も心得てゐるのである。そればかり

ではない、これまで女にかゝつては何時失敗つてばかりゐた彼はこちらから身を入れて女に慕れるほど馬鹿げたことはないと思悟りにこの頃漸く悟つて、近頃道心堅固に行ひ澄ましてゐるものゝ、幾度かの苦い經驗は、自分でも女に對する駈引に自信ができたやうに思はれて、いつか好い機會があつたなら自分の修養がどれほど進んでゐるかそれを試してみたいと思つてゐたのである。

すると、待てば海路の日和とやら、偶然今度さういふ機會が彼の前に開けて來たのである。

まだ半月ばかり前のこと、彼が避暑して讀書に餘念もない日光のさる僧坊なる宿處へあてゝ一通の手紙を送つた婦人があつた。東京とは一日に往復できるほどの處でありながら、流石に遠く離れてゐて都會懐かしく一日に三度づゝ配達する郵便の來るのが待ち遠しく、どこからか好い便りでも來ることもがなと夢のやうな空想を描いてゐたその日頃であつたから、彼は配達夫が投込んでいつた二三の書状を取りあげると、その中の一通はたゞ三枝と小さく記したばかり、消印こそ鎌倉となつてゐるがついぞ心に覺えぬ名前である。中には慎やかな女文字麗はしく、

未見の賤しつの女めより失禮をもかへりみず突然に御文おんぶんなど差上げ候て、さぞ端はしたなきも
のと思召され候はんことの羞づかしく、いくたびか思ひとゞまり候も、御尊名はも
う長きながき以前より記憶いたしまゐらせ候。かねてより一度は貴意を得まゐらせ
たくぞんじ居り候折柄、ついたした私の事情からわれにもなく抑へかねてかくは御文
まゐらせ候。この夏中は御地にてお過ごし遊ばされ候や、私も日光は幼き折の思ひ
出懐かしき處に候。御不自由なき御生活とは存じ候へども、御山住おんやまぢまひの、召しあが
り物など、さぞかし御意ごいにめさぬことども多かるべしとぞんじ候。何にても御用有
之候節は御遠慮なく仰せつけ下されたく、くれぐれ申しそへまゐらせ候。
御口にかなはぬ品にて御恥かしうぞんじ候へども御笑納たまはらば誠に嬉しくぞん
じ候。

と、いふやうな意味のことが小さく書いてある。

染崎はそれに眼を通してゆきながら初めは、また、よくある初心の讀者から定つた
やうな讚辭をいつてきたのかと思ひながら讀みをはつて、初めて越よこす文ぶんにしてはその
あまりに打ち解けて馴なれ々しいのに、思はず興味きんみの眼をとめて、凝じつ乎つと文の面おもてを諦あきら視みり

ながら、また繰返し初めからもう一遍讀みなほすのであつた。さうして二遍三遍はては五度も六度も讀み返して思ひ味はつた。

一體染崎は濟まぬことゝはおもひながら女の愛讀者からもらふ手紙はあんまり嬉しくは思はなかつた。小説を讀んでその作者に手紙を送るほどの婦人であるから、ちよつと考へると容貌風采も心とともに美しさうであるが、その實眞物に會つてみると、さういふのに限つて、不思議に縹緞が悪い。縹緞が良からうが悪からうがそんなことはどうでも可いやうなものゝ、美しい愛讀者があると知れば悪い心持ちのする道理はない。一人でも多く美しい人に自分の書いた物を讀んでもらひたいと思ふのは小説家の人情であるのに、偶々貰ふ婦人の手紙はどれを見ても手紙だけで想像すると、文のぬしはさも／＼美しさうであるが、手紙と人間とはまるで雪と炭ほどの相違である。染崎はこれまでに幾度もさういふ案外な經驗をしてゐるので婦人名前の美しい筆蹟の手紙をもらつてももう決して驚かぬのである。それで此の手紙を見て、初めは「また女の愛讀者か：：」と可い加減に讀みかけたが漸々讀んでゆくうちにたゞ普通の讀者ではないらしい。それのみならず仕舞に書き添へてある手紙の模様では何か物を贈つ

てくるらしい。そして尙ほその上に何にても御不自由の品あらば遠慮なく御用仰せつけ下されたしとは、まだ見も知らぬ人間のところへ越す手紙にしては随分初手から大膽な手紙である。

「どんな女であらうか。」と内々は尠からず好奇心を惹いたが、さういふ女に限つて美しいのではないものと夙に覺悟をしてゐる染崎は、また思ひ返して、

「まあ可いさ。何か送つたといつてゐるから送つてくれる物は遠慮に及ばぬ、何なりとも貰つて置かう。小包だから手紙よりは遅れて晩には着くだらう。」

はて何が來るだらう？

二

その晩の郵便配達は果して一包みの小包を置いていつた。何時ものやうに染崎は東照宮の山内をひと廻りして戻つてくると寺の妻君は、

「先生、お待ちかねの物がきました。」

「さうですか、何だらう。菓子だらうか。」

といひながら、住職や妻君のゐる前で早速小包の紙を取り除けて披いてみると果して中には風月堂の西洋菓子が入つてゐた。

「菓子だ〜。さあ皆で食べませう。どうぞ澤山召上つて下さい。」

妻君はお茶を煎れかへたりした。

その晩染崎はとにかく返事を認めて菓子の禮をいつた。が、それは極めて簡単な寧ろ冷たい文字で、

「今日は思ひもかけぬ未見の方より結構なる品御惠送にあづかり遠慮なく頂戴いたし候。尙ほそのうへに何にても入用の品あらば遠慮なくいふて越せよとの仰せなれども、未だ見も知らぬ御方より度々頂戴物いたすは心苦しく候へば何卒今後は御無用になされたく、いづれ九月にもなりて歸京の後自然御目にかゝれるやうな機も有之候節には御禮可申上候。」

少しは先方を窘める考へでさう書いたが、尙ほ後の方に、

「さるにても以前より私を御承知下され候といふは多分私の書いた物などにて御承

知のことゝ存じ候。いつも〳〵自分の身の恥辱ばかり書いて居り候へば、見も知らぬ方ながらそれが耻しくぞんじ候。」と書きそへた。

すると此方の返事を見たのか見ないのか、一日間をおいて翌々日の午過ぎに來た配達夫は寺のお勝手口から大きな小荷物をごとりと板の間に置いていつた。

「先生また來ましたよ。」妻君は大きな聲をかけながら釘づけにした箱を持つて染崎の座敷に入つてきた。

「また此間のところからですよ。いや、どうも大變ですね。」妻君は笑ひながらいつた。「へえ、またこんなもの送つて來たのですか。」横になつて新聞を見てゐた染崎は頭を上げて呆れたやうにそれを見守つた。さういひながらも、この間中から創作に思ひわびて堪へ難い無聊にとざされてゐる染崎は、それで眼の覺めたやうな新しい興味を喚起されて、その箱を手につけて見ると、やつぱり鎌倉三枝といふ差出人の名前を記したうへに別の箱の横側に東京銀座菊屋地方部と署してある。

「こいつは洒落てゐる。菊屋に註文して東京から送らしたものだ。何が入つてゐるだらう。」

さういひながら染崎は、妻君に釘抜きやら鐵鎚やら借りて大騒ぎをして箱を開けてみると、中には鮑屑にくるんだ種々の罐詰類が思ひの外數多く入つてゐる。

鎌倉ハムの罐詰が三個、熊本の名産鯛の八重巻一個、北海道名産蟹の罐詰が一つ、名古屋の名産胡瓜の味醂漬二罐。

染崎はまるで夢に銀貨でも掘りあてゝ手を遣つて探つて見れば、そこには幾許いくばくでも眞白い銀貨が埋つてゐるといつたやうな氣持がしてきた。

「奥さん、これはまあどうしたといふのでせうね。」

「さうですわねえ、全く大變ですわねえ。染崎さんあなた巧いことをいつて、知つてゐる處からでせう。」妻君は胡散臭さうにさういつて笑つた。

「いえ、ちつとも。少しも知らないんですよ。」染崎は正直な顔で妻君を見た。

「でもよく考へて御覽なさい。何處かに好い心當りがお有んなさるんでせう。どうして、先生は大變に好いことが澤山あるといふことを聞いてゐますから。」妻君はやつぱり揶つたさうに微笑してゐる。

「どこにそんな好い心當りなぞがあるもんですか、何より證據には此間初めて越よこした

手紙に向うから未見の御方に失禮をも省みずと書いてゐたのでも分つてゐますよ。」

「さうすりや、やつぱり知らぬ女ひとのところからに違ひありませんねえ。」

「全く此方も未見の御方だ。しかし斯く様な未見の御方なら失禮を省みてくれないでも結構です。」染崎はそこに積み重ねた七個の罐詰を見遣やりながらいふ。

「しかし随分大膽ですねえ。これまで一度も會つたことのない人のところへ手紙を越よこして、其の上うへにいろんな品物を送るなんて、普通あたりまへの女ではそんな思ひ切つたことは出来ませんねえ。」寺の妻君はつくづく感心したやうにも呆れたやうにも、驚いたやうにもいふ。

「なにこれまでも、會つたことがなくとも手紙を寄越すくらゐの女は偶たまにありますが、この女のやうに手紙を寄越したうへに最初はじめてからこんな物品しなものを贈つて来る女はありませんよ。これはよく／＼見込まれたな。」

「ほんとに。さう見込まれて、先生これからどうなさいます。」

「どうもしませんよ。折角せきやくかうして贈つてくれたのですから先方の志を無にするも心こころない業わざ、難有ありがたく頂戴して置いて、院主いんしゅが歸られたら晩には麥酒ビールの肴さかなに院主が好物好物のハ

ムの罐詰をあけて、どうぞ澤山召上つてください。……ですが斯ういふものを送るところを見ると、まづ差當り小遣錢などに不自由のない境遇と見えますねえ。」

「どうしてどうして。こんなものを取りつけてゐるところを見ても贅澤に生活してゐる女ひとですよ。」

染崎と寺の妻君とは先方さきの女の素姓から今の境遇、年配としごゑや縹緞よせぢの善惡などを色々に想像してみた。今は鎌倉にゐて、日光は幼い時の思ひ出懐かしいといふのであれば夏の避暑避暑など思ひのまゝなるはいふまでもなく、風月堂の菓子一折では何ともまだ見當がつきかねたが、かうして種々の珍味を葉書一枚でどこへ送れと註文すれば直ちに用を辨するところを見れば、鎌倉に住居をして東京から欲しいと思ふ山海の珍味を取り寄せて、日常の食膳に供へるといふ暮し向きの自由な身分であることは争はれぬ。それにしてもどういふ境涯の女であらう。良い家の娘などが肺病でもあつて鎌倉に出養生でもしながら、若くして希望のぞみの絶えた身を歎きわびてのつれづれに小説などを讀んで、たゞ一と筋に思ひつめた心になつてゐるといふのもあるか。それにしても手紙の様子がもつと年を取りすぎてゐる。さらば鎌倉にわび住居の未亡人か、そ

れともお妾か、はた主ある人の妻か。年配は幾歳であらう。菊屋に命じて送らせた物品の選擇に變化があつて氣の利いてゐる點から察しても世帯には馴れた代物に相違ない。年はどう見ても廿五六より下ではなく、上はどうかすると或は三十を一つ二つは出てゐるくらゐであらうといふのが寺の妻君の觀察である。年配はそのくらゐ、世帯にも經驗がある。として、さて縹緞はどうであらう。染崎にはそれが素姓や境遇や年配よりも一番肝心であつた。

「それは先生慾が深過ぎます。そんなに字がよく書いて、氣が利いてゐて、それでこんなにとん／＼物品を送つてよこす深切があるのですから、もう其の上に器量なんぞ贅澤ぢやありませんか。」

いや縹緞がよくなくつちやいくら深切があつたつてすこしも嬉しくありませんよ。」と、染崎はいつたが、字の巧拙も、言葉づかひも、年の二十六以上三十一二以下も罐詰の見つくるひも、それを送つてよこす深切も及第の資格はあるとして、彼の一番知りたいと思ふ縹緞の善悪美醜が一番見當がつきかねる。そればかりはどんなに想像をしてみても、年配や境遇とちがひ遂に想像のつけやうがない。つけやうがないどこ

ろぢやない、あんまり想像を逞しうすると、何時のやうにまた飛んでもない失望をすることになる。それで斯ういふのに限つて縹緞は醜いにきめて置く方が寧ろ安心である。染崎はさう諦めて、

「何しろこんなにとつさり物を送つてくれたと思へば満更悪い氣持はしませんな。」

といひ乍ら、そこに積み重ねた到來物を熟々と眺めながら肱枕をして横になつた。

「さうしてまあ暫時眺めて楽しんでいらつしやい。」妻君はさういつて立つた。

三

その日の晩の郵便は思つてゐたとほりに三枝とのみしるした一通の手紙を配達していつた。それには……先日は無様をかへりみず、あのやうなお手紙さしあげ、私あとにて、ひとり心ぐるしく恥しく後悔して居りましたるに早速御返事たまはり嬉しく嬉しくぞんじ候。またあのやうなつまらぬもの、失禮とぞんじたるに御納め下され難有くぞんじ候。菊屋に命じて二三の品御送り申あげ候。御口にかなひ候へば御遠慮な

く仰せつけ下されたく候。

と、いふやうなことを書いてゐる。染崎はそれに対して、

：：先日もあのやうな頂戴物したるうへに、また／＼各地の名産珍品御惠送にあづかり、重ね／＼の戴きものにて心苦しくぞんじ候へども折角の芳志を無にいたすもいかゞと存じ此度もまた厚かましく候へども遠慮なく頂戴することにいたし申候。

さるにてもあなたはいかなる御境遇の御方にて候や、御差支へないかぎり少許すこしばかり身元御明し下されたく候。初めから見も知らぬお方にいろ／＼な物品を頂戴してやゝ薄氣味わるくぞんじ候。鎌倉もよろしからんが、日光に遊びにいらしつてはいかゞに候や。夏の雲に隠かくれたる男體山とおなじく晴れる間を待ちてあなたの御容姿拜見いたしたくぞんじ候。

と書いた。彼は先方さきの女がどんな女かますます／＼それが知りたくなつた。染崎は自分でどう考へて見ても、一つは身體からだが衰弱してゐるせもあるだらうが、もう長い間女に飽いてゐた。戀愛を身に沁みて經驗するやうになつたのは年に比較してやゝおそく晩れてゐたが、省かへりみれば青年時代から今日に至るまでの十五六年間彼の貴重な歲月と貴重な心

血とは殆ど戀愛に傾け盡され、婦人の爲に心を奪はれてゐたといつても可いくらゐであつた。けれども彼は必ずしも自分でそれを後悔はしなかつた。

「コサツクス」のオレニンは二十四の青春の盛りに讎然として自分を顧み、科學にか、藝術にか、戀愛にか、滿身の精力を傾倒して眞逆さまに飛び込んでゆくやうな興味ある出來事に出會つて見たいと思つてゐたが、其等はいづれも物足りないので、彼は終に自然の美を憧憬してコーカサスの山に向つて入つていつた。——染崎が生活の興味を戀愛に集中してゐたことは、今から考へて見て強ちあながそれがために貴重の歳月を徒費したとも思はれない。何となればオレニンと同じやうに、自己のために生活をしようとする彼に取つては戀愛を生活の標的まにして生きてきたことを敢て悔いはしないのであるが、今はもうたゞ何といふ理由もなくその婦人といふものに飽き、さうして戀愛にも疲れてゐるのである。避暑をかねて自然の嘆美に耽ふけつてゐるのであるとはいひながら、斯うして長い間何等の情愛の潤うるほのない僧坊に寄寓して、傍眼はたには寂しい孤獨の生活をしてゐるのは彼がよく、女に飽いてゐるからである。彼はある時は女の肉體に執着して、それがために自分の身を傷やぶるほどに悩まされたこともあつた。或る時はま

た女の愛情を求めて、その得られざるに、失望したこともあつた。ハウプトマンの「僧房夢」の騎士の傷つけられた感情の悩みは、彼の最も同感するところであつた。勇敢な行爲と美しい感情の持主であるべき騎士は、其の愛妻が、彼女の若き従弟と祕に通じてゐたことを初めて知つて、非常に驚き傷み、遂にわが愛を奪うたる従弟を殺害し、その死體を妻に示しながら、

「お前はこれでもまだ彼を愛するか、お前の眞實の心をきかしてくれ。」

といつた時、彼の妻は氣が狂つたやうに猛りつゝ彼を突き退けて、その死體に倒れかゝつて薙と抱きついた。彼の妻の心はそんなにされゝばされるほど、いよいよ夫から離れて絆切れた従弟に執着していつたのである。染崎にはさうまでしてもどうかして女の心を己に引き着けようとして無駄に苦しんだ騎士の弱き心を哀れますにはゐられない。彼の騎士の傷つけられた胸の痛みを思ふ時、染崎はどんなことがあつても女は終に信ずべからざるものと思つてゐるのである。信ずべからざるものよ汝の名は女性である。彼はいろんな話題からさういふ問題に觸れていつた時最後にいつも「女といふものは地獄に行くものである。」といふ斷定を下すのであつた。

それほどまでに彼は女に對して、寧ろ意地の悪いくらゐ深い不信を抱いてゐるうへに、女の肉體を欲しない以上は彼自身にとつてそれほど氣のさつぱりしたことはなかつた。またそれまでは女にばかり心を奪られてゐた彼も、さうなつて見ると、これくらゐ強いことはないのである。空氣の無い處に物の輕重がない如く、女に興味の無い處には女の無いのも同じである。併しそれまでに深く悟つてゐるやうでも彼はどうかすると矢張り女によつて心を動かされさうになることがある。けれども最早容易なことでは動かされないつもりである。女が好くつて、黄金があつて、それでも先方にも氣がある。さういふ女でもないかぎりもうこの上に女にかゝつて苦勞をする、これほど馬鹿げたことはない。けれども今の時節に美人で、その上に黄金があつて、あなたの處にゆきたいといふやうな物好きな女は結婚媒介所の廣告よりはほかにあらう筈はないのであるから、つまり彼の望む女は無いのである。然るに今度突然鎌倉から手紙をよこす女は何だかそれに近いやうに思はれる。

すると一日置いて翌々日になつてまた手紙がきた。手紙の文句は前より段々長く、「お手紙を拜見いたすたびに私はぢ耻ぢ入りますけれど、もう何とおもひましても取り返し

がつきませぬ。日光を懐かしいとこと申しましたのは、幼少の頃よく兄につれられてまゐりましたので、記憶いたしてをります。折角の仰せゆゑそちらにまゐりたいと思ひますけれども、こゝ三年ばかり事情があつて何處へも旅行いたさぬことにしてをりますゆゑ、いづれ秋にもなつて御歸京遊ばした節御都合にて御目おんめにかゝれるやうなことがございましたらお目にかゝりたいとはぞんじます、相成べくはこのまゝ御目にかゝらないで御文通のみさせて頂きたくございます。氣味悪く思召すとは餘りお考へ遊ばしすぎて、かへつてお恨みにぞんじます。でも御尤もの仰せとぞんじまして、かいつまんで差支へないかぎり申し上げますれば、私生れは東京でございしますが、三年ばかり前からこの鎌倉へまゐつてをります。當地もまゐつた當座はめづらしくてようございしましたが、長く住んでをりますと狭い土地のことゆゑ、もう飽きてしまひまして東京が懐かしくなつてなつかしくなつてたまりません。おたづねの身寄りの者と申しましては父は私の極々幼い時をんなに亡くなりまして、只今は養父母がございしますが、それは東京の方に住んでをります。もつとも他ほかに後見者がございまして、私は何といふことなぐたゝ鎌倉で家うちにばかり閉籠つてわびしい日をつまらなく消して居ります。もうこ

んなことを申しますほどなら何もかもすつかりお話し申上げてよいのでございますが御覽のとほりのまはらぬ筆ゆゑおゆるし遊ばして。それに私只今くはしく申し上げられないことがございますのよ。いづれ長い間にまたよく申上げます。たゞ私を薄氣味わるく思召されるのが本意なく、御不審に思召すことだけはどうかしてよく申上げたいとぞんじます、それも如何いかゞやら。先日もちよつと申上げましたやうに私お耻かしいのですが申上げます、今初めてお懐かしいとおもつたわけではございませんのよ、もう／＼長い間たゞ何となく懐かしい方とのみ思つて居りました。どうかこんなことはおきゝ遊ばさないで。でも私はこれまであまりに違つた生活をしてをりましたのですから、もう少しもすこしもお考へ遊ばすやうなことはござりませんの。氣味が悪いとはあんまりな御言葉と思ひます。私何にもぞんじて居りませんの。それはもう神かけて申しておきます。たゞ兄が亡なくなりましてから私の境遇が違つてまゐりましたので、幾年かつまらぬ、私にわかるやうなものを讀んでをりました時に、いつも、前申上げましたやうなことをよく思つてをりました。でも自分でおさへてをりましたの。私こゝ三ヶ月ほど殆ど不眠症にかゝりまして少し感情のゆき違ひからなほ種々びんびんと考へ

られました、つい自分をおさへることが出来なくなりました、あのやうな失禮なお手紙を差上げましたやうなわけでございますの。こんなことを申上げて何だか謎のやうですわね。ほんとに日光にも二夕晩泊りくらゐでまゐつて見たいともぞんじますが、東京へさへも歌舞伎か新富座によいのが開あいてゐれば偶たまに出かけますくらゐのもの、滅多にまゐりません。三年ばかりの間に鎌倉の田舎者になつてしまつたやうな気がいたします。

あのもし御都合で御歸京遊ばすこと御有おんありの時は、一寸半日くらゐの時間を都合いたしましたして、誠にまことに失禮ですが人目にたゞぬやう何處かでお逢ひ申上げたいともぞんじますの。でも、私、兄にいさま——どうぞおゆるし遊ばして、兄さまと呼ばしてくださいまし——あの兄さまさへ私をお氣味わるくさへ思召さぬなら萬望どうぞこのまゝいつまでもお逢ひ申上げず、私を自分だけでおいてくださいまし、私世間の人には何方どなたにもお會ひ申さずいつまでもこのまゝ一人でゐたらば常に心が安らかでよからうとぞんじます。

長谷はせの山つゞき、小高い松林の中に宅がございますせぬか、この頃は毎日涼しい風

のみ立ちまして、御地のやうな涼さを覺える時もございます。老婢はあやと二人きり、寂しいときもございますのよ。あまり幾度も手紙なぞ差上げて如何かとぞんじます、どうぞお隔へだてなく御都合を仰せ遊ばして。御迷惑をも顧みずあんな物差上げてまして。菊屋おきつへ興津鯛たいをと申しましたら、夏季はないさうで、つまらぬものばかり。お口に適かなひますかどうかとぞんじます。」

と、こんなことを書いてゐる。染崎はその手紙をつくく讀み返しながら少しも知らない女だけに知つた女から貰つた手紙よりも餘計に興味を刺戟されて、どんな女かと種々に想像してみるのであつた。

三年も鎌倉にわび住居をしてゐるといふのが何だか小説かたづじみてゐる。手紙の中に兄が亡くなつてからと書いてゐるのは、それが一度嫁かたづいた夫であつたに違ひない、しかし生みの父は自分が幼少の時分に亡くなつて、今は養父があるきりだといふところをみると、幼い時養女に貰はれて大きくなつて、それに養子でも迎へたのが死んだとでもいふのか、或はまた一人しか息子のないところへ嫁いできて、その一人息子が死んだのでそのまゝ離縁にもならず、さうかといつてそれに養子を迎へては夫婦養子とい

ふことになるし、今は何といふことなくなつたゞ亡き人の冥福を祈りつゝまだ黒髪の若い身で浮世に望みを絶つたといふやうな當節に珍しい殊勝なのか。それにしてはこんな大膽な手紙をよこす筈がない。いや併し夫に死に別れて三年も経つたとすれば平常好き（いじせい）な小説などを讀んでゐてかういふ氣にならぬとも限らない。どうしても未亡人といふところは動かない。未亡人であつて鎌倉に住んでゐるのだから此の間からの推量に違はず金はあるにちがひない。それで縹緞さへよかつたら申分はないのだが、それだけは此度（こんど）の手紙を見てもやつぱり分らない。

染崎は自分の都合のいゝやうにそんなこと考へても見たが、養父母があつて別に後見人が附いてゐるといふのは何だらう。財産がうんとあつて養父母が老人（おとしやう）だからそれで別に確乎（しつかり）した後見人を附けて置くといふのか。後見人があるかないか、そんなことまで聞かうとは思はなかつたのだが、その後見人のあることをわざ／＼明してきてゐるところを思ふと、自分の財産があるといふことを徴示（ほのめか）するためにさう書いてゐるらしくも取れる。それとも後見人といふのは、その實土曜日（じつど）の晩から日曜日にかけて東京から泊りにくるといふ筋の後見人ぢやなからうか、この女もしや妾ぢやあるまいか、

とも思つて見る。が、妾にしては、この手紙に果して嘘がないとすれば、あんまり生活が窮屈である。妾などゝいふものは氣儘に好きな處へ出掛ける筈である。然るにこの女は東京へさへもあまり來ないといふ。鎌倉あたりの別荘に住んでゐる贅澤な妾にそんな不自由をしてゐる奴はない。それに手紙の文字が當世風で、使つてゐる言葉がいかに鄭重で上品である。藝者上りなどにこんなのはあんまりない。尤も妾だからといつて藝者上りに限つたことはないのだから、多少教育のある高等な好みの妾か。併しそんな女なら尙更籠の鳥のやうに鎌倉に押籠められてゐるわけはない。さうすればどうあつてもこれは未亡人だ。未亡人だ。未亡人に違ひない。未亡人といふのは興味がある。三年前に夫に死なれて、それから此の方長谷の觀音に近い鎌倉の松林の中の別荘に閉ぢ籠つて、一人の老婢らうひを對手あひてにまだ三十にもとゞかぬ若い身空で閑靜な寡婦めづららしの徒然つれづれに小説などを讀んでゐるといふのは生中なまの藝者や未通女よりも寂しいうちに遙かに色氣がある。それがこの俺の小説を愛讀してくれて、おれを兄さんと呼ばしてくれといふ。不思議でならない。自分の小説のどこが氣に入つたのであらう。自分ではつひぞこれまで婦人むんなに愛讀されるやうな小説を書いたことはないつもりだ。

自分の書くものは毎時女に慕^ほれては、あとでひどく振り棄てられる人間ばかり書いてゐる厭な心持ちのする筈の小説だ。何處に見處があつて俺の物などを愛讀してくれるのであらう。併しそれを思へば今更に己の職業は疎^{おろそか}にならぬ。自分は知らずにゐても何處でどんな人間が讀んでゐるか分らない。この女などどこまで俺の心持ちを解してゐるか、そんなことは分らないが兎に角かういふ愛讀者を持つてゐることを知つたのは自分にとつて好い奨勵になる。こんな愛讀者に報いるためにも自分は勉強して倍々好い物を書かねばならぬ。

けれども染崎は僅に一人の愛讀者を婦人に得たからといつて、それで忽ち嬉しくなつてしまふにはもうあまりに初心でなかつたし、それにもとゞ此方は受身になつてゐるのだから、この受身はどこまでも受身でゐたい。先方はこんな正直な態度に出てきてゐるが、會つてみなければどんな女か美醜が分らない。美醜の分らない女に今から此方の歩武を進めるには早過ぎる。それでいつも此處は控へ目に出ながら、手紙の書き方を加減して少しづつ探りを入れてゐたのであるが、かうして先方から都合をして人目に立たぬやうに逢つてくれといふのは鮮からず興を惹く。金を使つて公然に逢へ

るやうな女は面白くない、人目を忍びながら秘密に逢ふやうなのこそ逢ふ瀬の楽しみも一段深いのである。

と、染崎は女の手紙を傍に置いてそんなことを繰返し考へたが、ふとまた思ひ直してみると、何だ、自分はまだこの女をどうしようとしてゐるのではないぢやないか、此方がどうしようと思つたからとて、先方がその氣でなかつたら此方は恥を搔かねばならぬ。人目に立たぬやうに秘密に逢つてくれといつたつて、小説を愛讀してゐる餘りに唯堅い考へで會つて話して見たいといふに過ぎないのかも知れぬ。もしそんな考へでゐる者に迂濶に端ないことを書いて、折角敬意を以て、愛讀してゐてくれるものを、自分から此方の品位を傷つけるやうなことをしてはならぬ。

それで今度は、

「：：委しいお手紙を拜見して、あなたの御境遇などほゞわかりました。それでは月の中頃一寸東京にかへりますから、あなたの方でも都合して東京まで出てきてください、お目にかゝりませう。鎌倉だと私にはいゝのですが、そちらは人目が多からうとぞんじます。も少し早く歸りたいのですが、私はやゝ暑中あたりのやうで不快でゐま

すから、この上炎暑の東京へかへつてゆくのは恐ろしいやうです。どうぞお大事に。
それから要らぬことを聞くやうですが兄が亡くなつたと仰有るのは、それはお連合つれあひであつて、そのお方に亡くなられて今は一人でおいでになるといふやうなわけなので
すか。」と簡単に書いた。

それについて女からはいつものとほり一日置いて定つたやうに返辭が來た。

「七日の午前十時四十分頃にお懐かしい〱御玉章おんたまづさを拜見することが出來ました。先
夜は私あまりに勝手なことや失禮なことを申上げたとおもつて、後で大變心配いたし
て居りました。御身體からだがお悪いと同ひまして、私もきつとさうだらうと存じて居りま
したの。私、もう心配で、どうぞお大切に遊ばして、お快くお成りのやうに私祈つて
をります。

當月中旬頃にちよつとお歸京遊ばすとの御事。嬉しく〱ぞんじますけれど私お逢
ひ申上げぬ方がいとぞんじます。お逢ひするのは辛つらくつて。今の内に何處か遠い處
へでも入はいつてしまひたいとおもひますの。私お逢ひ申上げれば何にも申上げられませ
んもの。此のまゝの方がどんなによいかと思はれますの。仰せのとほり鎌倉は人目が多

く、ていけません。何とか都合をいたして當日は少し早目に私東京まで出てまゐります

お歸り遊ばす時分は丁度此方は暑くなることゝ、又お身體は如何かと今からもう心配いたしてをります。當方では丁度その頃に東京から母がまゐつて居りはせぬかと存じられますが、餘り心配いたしませんで居りますの。楽しみにして。やつぱりいやですの。あの、今度いつといふ御玉章を頂戴して、私の方の返事もし都合わるいやうな場合はいかゞいたしませうか。御地へは電話はいかゞ、速達はまゐりませんし、電報にいたしませうか。御返事の時御示したまはれ。」

それからまた東京で會ふには何處でどうして會つたらいゝだらうとか、炎暑の時分日光と鎌倉から出てゆくのだから風通しの悪いところはお身體に障るとか、細かい取越し苦勞をした上に、

「此方へお歸り遊ばすまでに何を買つて置きませう。お心に召したものはいかゞ、なんなりとも仰有つて。」といふやうなことを書き添へてゐる。

四

さういふやうにして、一日おき一日おきに兩方で先方の手紙が來るのを待つてゐては返事を出し、待つてゐては返事を出してゐる間に女の方からよこす手紙は段々熱度が増はつてきた。そして女の身でゐながら自分から見知らぬ男子の處へ手紙を出したのをさぞ端ない女と思つて卑んでいらつしやるであらうと、嫌はれまいとの心から繰返し辯解をして、仰せのとほり亡くなつた兄と申しましたのは、もし今日まで存命へてゐたなら、さうなつたかも知れませんが、それはもう十年も前のことで、それからずつと一人で居ります。また居りたいと思つて、それゆゑ女の足らぬ考へからこれまで随分苦勞いたしました、養父母をはじめ傍の者は私を信じてゐてくれますので今更後暗いことは出來かねますけれど、只今ではいくらか自分の考へが變つてまゐりましたので、それであのやうな手紙を差上げましたのですが、自分には毛頭浮薄な考へはないと信じてをります。こんなことを申しましたが、併しそれは自分でいふことでやつぱり變に思召すでせうが、御迷惑をかけるやうなことは、もう神かけていたさぬつもり。どうぞ憐れな妹と思召して私のお兄さまになつて下さいまし、兄さまになつて戴くのが悪いかしら。

そんなことを書いたあとへ、

「お筆が進まぬ御様子、随分御心地もじれておいで遊ばす御事と、私何ですかもう自分ではどうなつてもかまはぬやうに思はれまして。あの御酒召上りますか、もしお宜しければ、銀座の龜屋へ申して送らせませすゆゑ、一寸その趣お知らせ遊ばして。ぜひ仰せつけ下さいまし。夜分およれますか。夜お書き遊ばすのでせう。私いつもさう思つてお懐かしい〳〵御玉章たまつさと御いつしよにをりますのよ。その他ほか何か御用事はございせんか。私の智慧では一寸分りませんことで。子供のやうに、御歸京遊ばす日を待つてをります。」

染崎はそれに對して又一步を進めて先方さきの氣を引いてみるやうなことをいつたり、嬉しがるやうな面白いことを書いたりした。

「……あなたは、私に兄さんになつてくれと仰有るけれど、それはなつてくれと仰有れば、私のやうなヤクザなものでもあなたに御不足さへなければ、私の方では美しい人を妹に持つのですから、願つたり叶つたりですけれど、もしこれが戀にでもなつたら、どうします。併しまだお目にもかゝらぬ先から戀になる氣づかひはありませんか

ら、この問題はこれきりにして置きます。

併しあなたはさぞお美しいんでせうねえ。年はお幾歳いくつでせう。お手紙では時によると二十三四くらゐとも思はれることもありませんが、よくお氣のつくところや、また色色な事情を思ひ合はして廿七八。三十には少し間がありません。

それから會見する場處を色々考へてみました、とにかく鎌倉から東京驛まで出て来て下さい。そして婦人待合室で待ち合はすことにいたしませう。それから先は御相談の上として。併しお互にまだお眼にかゝつたことがないので、大抵見當は付くだらうと思ひますが、あなたはどんな御風俗です。私は一向はえない身装みづまうをしてをります。縦縞の紺上布に、鐵無地の紹の羽織、やつぱり鐵色の單衣博多の帯に、白足袋に雪駄を穿き、麥藁帽子を冠かぶてゐます。」

かう書いたのは、先方さきがどんな着物を着るかそれが知りたかつたのである。

「それから度々の御思召し難有うぞんじます、酒はあまり飲みません。たゞ東京に居ります時先達て中よくベルモットを藥用に用ゐてゐました。」

すると又一日置いて來たその返辭に先方はもう夢中になつてゐるらしく、

「お懐かしい〜御ふみ只今十一日午後六時半着、拜見いたしました。私どういたしましたのか今日は朝から待つて〜待つて〜、癖が付きましたのね。お笑ひ遊ばすな。で、いつもするとほりに、かう胸のところへ御玉章たまづさをちつとあて〜をりましたの。新聞を見ますと、御地方も大變な雨とありますので、では折角お認め遊ばしても雨のために御投函遊ばすことも出来ないものであらうか、それにお書物かきものも如何かとおもへば、ほんとに私は我儘者。今からこんなでは仕方がないと自分で呆れて、今日はもう戴けぬことゝ諦めて、午後からまた少し身體の加減も悪しく、つとめて氣を晴らしながら欲しくもない夕御飯を流しこむやうによう〜濟まして、一寸外を見ますと入つてをりましたので、その時の嬉しいこと。私もう何にも申上げられません。今私の身體は燃えてをりまして、手が慄へて手紙も思ふやうに書けませんの。さぞ端はしたない女と思召してお厭でせう。

御たづねのことは餘りにあまりにお恨みにぞんじます。なぜ。私は長い間病氣するほど身を苦しめるか、それはこれから先の事でおわかりになることゝ、私の方でも今はこれきり申上げられません。

それからお兄さまをちつとも御深切な方とは思ひませんわ。これから先も、もつともつと大變な苦しいことがあるだらうと、私もう覺悟をして居りますのよ。でも此のまゝ死んでしまふよりはよいかも知れません。

それでは定りました當日朝の十時まで東京驛の婦人待合室にまゐつてゐますことにいたします。そしてお兄さまが上布じやうふを召していらつしやるなら、私もその眞似をして當日もし非常に暑ければ紺紵こんぢりの薩摩上布さつまじやうふにいたしますが、なるべくは紺の錦紗縮緬の裾の方にちよつとした白い薄すゝきに萩の縫模様のある單衣に、帯はとどころ茶絲で桃山式の刺繡模様ぬひもぎらうのある淺黄の絹麻、コートは厭なんですけれど、帯が目立つといけませんゆゑ、金茶色の紗お召のを着てまゐります。髪は兄さまはきつとおいやと存じますが、長年これで居りますゆゑ今急に髷にするのも内の手前いかゞとおもひ、油氣なき束髪で、亂れてゐることゝぞんじます。

何もお隠しいたしません、年はもうお婆さんで、兄さまの仰有つたとほりの廿八。あ、それから私大變なく、まさか不具かたわではありませんが不別嬪ふべっぴん。もうお聞きになることはございませんか。」

五

染崎は自分から求めたといふでもなく、また強ち女が欲しいといふわけでもないのに、日光にゐる間にふとこれだけの、いはゞ樂しみが降つて湧いてくるやうに持ち上つてきたので、そのため昨日の晩山から戻つてきたのであつた。

彼は鏡の中を覗いて香油を塗つた兩掌で湯上りの頭髮をさつと揉んで、そのあとを綺麗に櫛で搔きわけ、濡れた手拭で額から襟頸のまはりの汗をそつと拭いて、昨夜ちやんと始末をしておいた雪のやうな白麻の縮の長襦袢をとつて肌につけ、そのうへに紺薩摩棒縞の上布を着て、絞り模様のある細い羽二重の縮け紐で下じめをしたうへを、きゆつと博多の帯を締めて、その上に彼の好みで着てゐる古風な横縮の鐵無地の羽織を被て白キヤラコの單足袋をはいた。昨夜は寝る時、女から、

「あまりお眠れなければ、これを召上れ、私も用ゐてゐるのですからどうぞ安心して召上れ」といつて、日光へ送つてきてくれた睡眠薬を頓服して寝たので、今朝は頭の

中がいつにない爽かで、今自分を待つてゐるのはどんな女かと思ふと、彼はもう何年にも覺えないやうな、若々しく花の咲いたやうな歡びと期待とに身體中がわけもなくそゝられるやうな歡しきで一杯になつてきた。

やがて家を出るとすぐ近くに客待ちをしてゐる馴染の俥に飛乗つて、東京驛へと急がした。飯田町の通りを九段下に出て、丸の内の廣い街路を駛せてゆくと、濠端に沿うた柳の並樹は涼しい緑の木蔭を一面に地に描いて、しつとりとまだ朝濕りのした大道を、魚河岸から歸る荷車が先挽き後押しで景氣の好い掛け聲とともに、何臺となく走せ違うていつた。やがて諸官省の建ち並んだ廣い通りを幾曲りかして和田倉門の前から左に折れて、停車場前の廣場を斜に突つ切つてゆくと、宏壯な東京驛の大建築は高く雲に聳えて、出口と入口に集ふ旅客の群は明るく照り輝く夏の日を浴びながら思ひ思ひの歩を急がしてゐる。

染崎の乗つた俥はやがて入口の前について轆棒をおろした。彼は俥からおりるとそのまゝ踏み心地の好い護謨裏の雪駄で、したゝか撒水した三和土の上を靜かに踏み渡りながら斜に待合室の方に歩いていつた。その間も彼の頭の中に絶えず盛裝を凝らし

た婦人の容姿が様々に想像に浮んでくるのであつた。彼はやがて一二等婦人待合室と書いたその室の入口まで進んでいつた。その瞬間の彼の頭にふつと妙な思想が浮んだ。今この室の中に婦人が来て自分を待つてゐるのは嘘ぢやあるまいか、先達で中から手紙やいろんな物品を送つてよこしたのは誰か人の悪い悪戯者があつて自分を戲弄つてゐるのではあるまいか。けれども、さういふ軽い疑念はすぐまた煙のやうに消えてしまつた。年とともに物に慣れたといはうか、或は人を食つたといはうか、女を女とも思はない、いはゞ色魔のやうな落着いた心持で、つつと入口を二歩三歩入つてゆきなから廣い待合室の中を見まはした。室の眞中に据ゑられた大きな卓には、その日の各種の新聞が行儀よく置き並べてあつて、發車の時間を待つ間とおぼしき五六人の男女の一群がそれを圍んで談話をしてゐる。つゞいて彼は壁に近い左右の長椅子に眼をやつたが、それには、人の影もない。彼はずつと奥に入つてゆきながら、人集りのしてゐる卓の向うに廻つて進んでゆくと、入口からは丁度卓の蔭になつてゐる正面の長椅子に果して身體から脂粉の氣の薰り立つやうな一人の婦人が、膝の上に開いた新聞を見てゐる風を装うて、顔を俯けて行儀よく腰を掛けてゐるのに眼がついた。よく見る

と、かねて約束のとほりに裾に白く萩はぎと薄すきの刺繡ぬいも模様のある黒無地錦紗縮緬の單衣に金茶色の紗お召のコートを着てゐる。染崎は、

「これだな。」と思ひながら、其の方に進んでいつて、

「あなたですか。」と面おもてを和げて聲をかけた。

と、女は新聞を讀んでゐた顔をふつと舉げて、ちよつと染崎と面おもてを見合はせながら「はあ」といつて、眼と口元にやゝ羞はぢを含む表情を浮べた。細面の鼻筋のよく通つたその顔は、肌こまかの細い白い生地きぢのうへに、この暑さをも厭はず尙ほ白粉を厚く化粧けいつて、小間物屋ショウ・ウインドウの飾窓に飾つてある鬢のやうな多い毛をハイカラの束髪にしてゐる。

「どうもお待たせいたしました。長らくお待ちになりましたか。」

「いゝえ、そんなにも。」と低聲こごゑにいつて二度目に見交したその眼は切れの長い飽くまで黒瞳くろめがちである。

「も少し早く來ようと思つたんですが、大抵お祭しのとほりいつもの朝寢をしましたものですから、併しあのお蔭で昨夜は近來にないよく睡りました。」

染崎は會つた時に失望しないための用心に、なるべく醜く想像してゐたとは相違し

て案外に美人であるのに、内々雀躍するやうな喜悅の情が湧き上つてくるのを凝乎と抑へて、吾にもなく初心らしく硬ばるやうになる調子を自分から強ひて和らげるやうにした。

三枝は此の挨拶に此間中の吾が手紙に書いたことなどを思ひ起したらしく、いとど羞かしさうに靜つと面を伏せながら小首を曲げるやうにして、

「失禮なことばかり：：」と言葉じりは口の中に消えて、後は無言のまゝ白絹の手巾で口をおさへてゐる。

「此處ではいけませんから、何處か、まゐりませうか、まあ一寸其處で珈琲でも飲みませう。」

「はあ」美人は腰を掛けたまゝ顔を擧げていふ。

「食堂に入るのはいけませんか。」

「いえ。」と、もぢ／＼してゐる。

染崎は先方の心を測りかねた。最初の約束が半日ほどの時間を都合して人目に立たぬやうに祕密に逢つてくれといふのであるから、こんな處にぐづ／＼してゐて殊に夏

季は人の出盛る鎌倉に住んでゐる人間が、どうかして若しも知つた顔にでも出會はずやうなことがあつては、自分はとにかく、先がどんなに迷惑するであらうと思へば氣が氣でない。それも美人の素姓が解つてゐればだが、此間中の手紙はまるで謎のやうなことばかりで、肝心の身分は抑々、未亡人か、娘か、かこはれもの外妾か、但しは人の妻か、それはまだ解らないのである。

「彼方あちらの食堂の方に兎も角もまゐりませう。此處よりか却つて眼に付きませんから。」
「はあ、兄さんはまだ御食事前でいらつしやるんでせう。」

彼女は顔を擧げながら、始めて馴々なれなれしい口をきく。

「えゝまだ朝御飯はやりませんが、いつも食べないんです。」

「どうぞ召上つて。私待つてをりますから。」

とさういふ染崎の腹では、これからどこかへいつて一緒に御飯を食べようといふのであるが、どうぞ召上つて、私待つて居りますからといはれたので、またしても美人の都合を測りかねて、

「私も御飯はまだちよつと早過ぎますが、さぞお待たせしてゐるであらうと思つて、

まだ茶も飲まないで起きるとすぐ出てきたものですから、ちよつと珈琲コーヒーでも。併しあなた此處でお待ち下さる方が御都合が宜しいんですか。」

「いえ、私も御一緒にあちらにまゐります。」美人は氣輕にいふ。

「ぢや、まゐりませう。」

「え。」と女は軽く會釋をしながら、羽二重の千代田袋と柄の長い白麻の蝙蝠傘をとつてすうつと起ち上つた。背は思つたよりも高くはないが、容姿態度もてとりなしが優れて華車きやしゃに出來てゐるので、打ち見はそんなに小柄とは思はれない。染崎は晴れがましい装まはほひを凝らしたその女と竝んで歩いてゐると、得意な嬉しさとともに何だか狐にでも化ばられてゐるのであるまいかといふ不思議な不安が先立つて、今かうしてゐるのは本當であらうかといふやうな淡い疑念さへ起つて來る。何處か箱根か湘南あたりの避暑にでも行くらしい盛装した男女の旅客が、高い建物の中をから〜と大廊下に下駄の足音を響かせて小走りに往交ゆきかうてゐる間を縫うて、彼等は精養軒の食堂に入つていつた。そしてすつと奥の、窓の下の大きな棕櫚しょうろく竹の鉢植テンプルの小蔭の卓テーブルにいつて腰をおろした。

「大丈夫ですか、もし知つた人にでも會つてはいけなかないんですか。」染崎はまたし

でも美人の思惑おもわくを測りかねて訊ねた。

「まだちよつとくらゐ構ひません」三枝女さんげにょはさういひながら、帯の間から小さな金時計を取り出してばちんと明けて見た。

「お急ぎなんぞせう。」

「いえ、まだ構ひません。」と何だか時間でも急せくらしい様子である。

染崎はそれを見て、腹の中で思ふやう、折角此處まで漕ぎつけておいて、此のまゝ別れてしまつたのでは狐に化けられたのも同然である。先方もまさか此のまゝで歸つてしまふつもりではあるまいが、何だか時計を氣にしてゐるのを見て、美人の身元が分らぬだけに彼は餘計に氣になる。

「別にお差支がありませんでしたら、何處かで御飯でも食べながらゆつくりお話でもすることにしたしませう。先日中は度々結構な物品ものを戴きまして、お禮の中様もありません。」

「いゝえ、いつも失禮なことばかり申上げて、兄さんさぞお腹立ちになつてゐるだらうと思つて居ります。」

「なにも腹が立つわけがないぢやありませんか、結構な物品ばかり戴いて腹の立つといふ、そんな不届な奴はありません。」

「でも兄さん。」と消えるやうにいつて、三枝は眞白に塗つた顔に初心らしい物思はしげな色を浮べて、俯向き加減に眼をあらぬ方に外らしてゐる。

そこへ給仕が珈琲と西洋菓子とを運んできたので、染崎はそれを美人に薦め、自分も匙を動かしながら、

「どこかお氣分でもお悪いのですか。」と染崎はわざと心配さうな顔をして訊ねた。すると三枝はついと面を擧げて、

「いゝえ。」と打ち消すやうにいふ。

「ぢあ、安心ですが、何だか御不快さうに見受けましたから私心配しました。」

「別にどこも悪かございませんけれど、私いつも斯うなんですの。どうぞ御心配遊ばさないで。兄さんさぞお厭でせう。」

「何があなた厭ですか、厭も厭でないも、まだ今お目にかゝつたばかりぢやありませんか。」染崎は笑ひながらいふ。

「でも、私いつも斯様こに沈んでばかり居りますから。」

「女の沈んでゐるのは好いぢやありませんか、併しあなたはその不眠の所爲せゐでせう。

その不眠の原因については色々深い事情もおありのことゝ察しますが、此處ぢや仕方がありませんから、これから何處かへまゐりませう。」

「はあ、」と美人は軽くうなづく眞似をして「兄さんお差支さしつかへは。」

「私は差支はありません、あなたにお目にかゝるためにわざ／＼日光から歸つてきたのですから。」

「ほんとに濟みませんわ。私どうかして日光にまゐらうと思へばまゐられないこともないのでございますけれど、つい少し事情わけがございまして。」

「なに、どうせ私も一寸歸るつもりで行つてゐたのですから。」

そんなことを話しながらも、染崎は始終食堂の入口の方に眼を配つて、新たに入つて来る客をじろ／＼見遣りながら、

「あなたの御都合がお有りだらうと思ひまして、ぢや成るべく早く此處を出掛けることにいたしましたせう。何處にしませう。」

「どうぞ兄さんのお宜しいところに。」

それから何處にしようかと、いろ／＼考へてみたが、何處といつて格別好きさうなところも差當り思ひ當らないので、

「ぢや、鮫洲の××屋へでもまゐりませうか、鎌倉とちがひ日光の山の中にいつてゐましたので、新鮮な魚が食べて見たくなりました。あそこなら風もよく通すでせうから。」

染崎はさういつてちよつと對手の顔を見た。先達で中寄越した手紙には随分打ち解けた。といふよりは寧ろ熱情に驅られたやうなことを書いてゐたけれど、まだ先方がどんな身分の者であるかそれさへ定かならぬのに、滅多なところへ誘うても先方がはいといつて直ぐ承諾すればいゝが、もしさうでなかつた時には、初手からいかにも此方の卑しい心の奥底を見透かされるだけで、飛んだ耻辱を搔かねばならぬ。

「どこでも結構で。」

やがて二人は食卓の間を通り抜けて、衝立がはりに置いた入口の大きな姿鏡に派手な背姿を映しながら、また長い廊下を停車場の入口の方に出てきた。そして赤帽を呼んで廣場に客待ちをしてゐる自動車を呼ばした。

六

自動車に乗つて二人ばかりの世界になると、女は始めて氣心も安くなつたやうに吹く風に束髮の鬢を涼しさうに弄られながら、

「眞實ほんとに妙な御縁ですわねえ。」とさも思入つたやうにいふ。

「えゝ。」と染崎はいつたが、その言葉が何處まで深い意味を有つてゐるのか解らぬままに、たゞそれだけ答へながら袂から「三笠」を取り出してそれにマツチの火を移さうとする。自動車は驀然まつしとらに南に向つて駛せてゆくので幾度マツチを擦つてもすつても直ぐ消えてしまふ。三枝さんぐさはやゝ身を起し加減にしてコートの袖で染崎の鼻先にそうつと袖屏風をして、

「さあ、今度。」

それでも火はなかく、煙草につかない。その内自動車は何處かの曲角まがりかどに來たので廣い道を車體が大きく曲らうとする機會はつみに、やゝ浮き腰になつてゐた三枝さんぐさの體いまだりが急遽、

染崎の膝の上に倒れかゝつた。染崎は、

「おつと危ない。」と、それを抱き留めた。それとともに艶かしい化粧の香が媚びるやうに強く鼻を打つて、柔らかに髪が婆娑と彼の頬を撫でた。

「御免遊ばせ。お御足が痛かつたでせう。あらあんなにお足袋を汚して。」

といひながら、三枝は身を屈めて白絹の手巾でそれを拂はうとする。

「ようござんす、どうぞそのまゝに。」染崎は足を引込めながら「そんなことをして、また、轉びますよ。」

やがて漸と煙草に火を移して靜かに煙を吐きながら、

「いづれ色々伺ひますが、私の書いた物をそんなに早くから御覽下すつてゐたのですか。つまらぬものを。」

染崎が何より早く訊いて見たいのは、女の今の身分であるが、手紙でこそ戲談まじりにいろんなことをいつたものゝ、そんなことを面と向つて自分から先に訊くのも何だか此方の心の底を見透かされるやうで、わざとそんな問題には觸れないやうに、遠廻しに水を向けようといふ腹である。

「え、随分早くから拜見いたして居りますの。」

「難有ありがたうござんす。あなたにはどこか見處があると思はれますか。」

「え、もう何となくお懐かしく思はれました。」

「いけませんねえ、あんな物が懐かしくつては。それであなた一人で鎌倉にゐてそんな物を始終讀んでいらつしやるですか。羨ましい御身分ですわえ。」

染崎は軽い戯談をいひながら、それとなく遠廻しに女の素姓を聞き出さうとする。

すると三枝はそれには答へず、暫時しばらく深い思ひに沈んでゐるらしかつたが、稍あつて染崎の方に面おもてを向けながら、

「兄さん、あなたは私を何とお思ひになつて。」

さてはいよ／＼先方むかうから口を切つたなど、染崎は腹の中で思ひながら既に自身で對手の思惑を聞いてかゝる以上は、最早もとういつ此方からそれを問題にして切出しても差支ないと考へたので、

「まあ、そんなお話しは鮫洲あぢらにいつてからにませう。」さういつて、彼は他にも盗み聞く人があるぞといはぬばかりに、ちよいと運轉手の背姿うしろを指示ゆびさした。そして彼はも

う一遍考へて見た。此の女は未亡人か、婚期の遅れた娘か、但しは人の妾かと。そして「鎌倉へは、私はもう何年にも行きませんが此の頃は東京の人が多勢住んでゐるさうですが、以前とは又ずつと開けて來ましたでせうねえ。」と話題を他へそらすやうにさう。

「え、随分繁華になつてまゐりました。でも矢張り田舎ですから詰りませんわ。私ほんとに寂しく暮して居りますんですから、兄さんどうぞちとお出掛けなすつて下さいまし。」

「難有うぞんじます。でも女お一人のところへ私などが迂濶上つてはさぞ御迷惑なことがお有りですらうから。」

「あらまあ、ちつともそんな御心配なぞございせんわ。」

「いづれその内一度伺はして戴きます。」

「ほんとに何卒どうぞ。でも不思議な御縁でしたわねえ。よくお手紙を下すつたわ。私それは随分長い間考へてをりましたのよ。お手紙を差上げてどうかと思ひまして。屹度御返辭を下さらないかと思つてゐました。」

三枝は漸あとこれで長いながい間の思ひが徹とほつたやうに思入れ深い調子でいふ。染崎は先方のそんな感情こころもちにわざと氣の着かぬ風を装ひ乍ら飽くまで禮儀を崩さぬやうに、「御返辭をしないなんて、そんな失禮なことが出来るものですか。」

そんな會話を交してゐるうちに自動車はいつの間にか市街を出外れて、左側の車窓まどから遠く品川の海を見晴らしながら高輪の通りを驀然まっしぐらに駛せ過ぎて、品川の町つゞきを向うへ通り越すと、やがて太い店格子みせがうしのはまつた古風な構への家の前にきて自動車はすうつと止つた。

「いらつしやい。」といふ聲々に迎へられて、二人は二十四五の女中に「どうぞこちらへ。」と案内されながら、長い渡り廊下を通り越して、一眸ひとみの中に東京灣の眺望を集められる奥まつた座敷に通つていつた。姐さんは座蒲團をすゝめて、それから茶と煙草盆とを運んできて、

「あの、すぐお湯にお入りになりますか、丁度今出来ましたばかりのところでございます。」

「お湯。さあ入りたいなあ。」と染崎は一寸考へるやうにしてゐたが、今からお湯にし

てしまつては何だかこれから後の段取が巧く運ばないやうに思はれたので、

「まあお湯は後にしませう。」

「では召上る物を。何にいたしませう。」

染崎は三枝の意向をきゝながら自分で好ましいものを三品ばかり、あとは見つくるひにして、女中は退つていつた。

三枝はコートを脱いで小さく疊んで隅の方に置き、染崎と向ひ合つて蒲團の上に行儀よく坐りながら時間を氣にするやうにまたちよいと帯の間から時計を出して見た。

「あなたはお急ぎなんでせう。何時までいゝんです。」染崎はまたそれを氣にしてきく。「四時まではようございますの。四時が來ると私失禮ですが、兄さんお先へ歸らして下さいな。」とさも差支へありさうにいふ。

染崎はそれを聞いて、やゝ失望を感じながら、さあらぬ顔で、

「えゝ、どうぞ御自由に。」

と如才なく口の前ではいつたが、はて可怪なことをいふ。此の女は今日の此の會見をそも／＼何と心得てゐるのであらう。僅か半月ばかりの間に何十本といふ手紙であ

んなにやい／＼いつて来て、この炎天をわざ／＼日光の奥から人を呼び戻して置いて
自分もそれはどんな無理な都合をしたか知らぬが、折角會見する爲に鎌倉からかうし
て朝早く出て来て、先刻さつきから知らぬ顔で見ると、頻りに時間を氣にしてゐる様子
である。尤も初めの約束がちよいと半日ぐらゐの時間を都合して人目に立たぬやうに
祕密にお目にかゝりたいといふことであつたが、そこは又止むを得ぬ差支もあるので
あらうが、それにしても斯うして美人の活物を折角前に据ゑて置いて、最早かれこれ彼此一時
であらうが、これから飯を食つて、それではい左様ならで別れてしまふのは餘りに飽
氣ないわけである。可矣よし々々、ぢあ、此方にもかねてかういふ時に一度試して見たい
と思つてゐた祕術がある。さうと決心したので、

「ぢや、あんまり悠然ゆうぜんもしてゐられませんかねえ、急がしませう。」と染崎は仰山ぎやうざんさうに
いつて、手を拍たうとするを三枝は制するやうに、

「でも、兄さん、まだいゝのよ。」と、急に馴々しい言葉になつて、低聲こごゑになりながら、
「兄さん、あなたは私を何と思つていらしつて？」

彼女は先刻さつきの自動車の中の問題を再びいひ出して、靜じつと染崎の顔色を見守つた。

「さあ、それは疾から私も知りたいと思つてみたのです。何でせうか。」

彼は先刻東京驛の待合室でまのあたり初めて會つた時の女の姿態といひ衣物の好み
が、さも物堅さうに取り繕らうてはゐても何處か仇めいてゐるのを見て、日光にゐて
たゞ手紙ばかりを見て想像してゐたのとはやゝ違つてゐるので何といはうかと云ひ惑
ひながら、

「未亡人でせう。」といつてみた。

「兄さん、私お妾よ。」と低聲にいつて、また凝乎と染崎の顔を見ながら、段々俯向い
てわが身を羞ぢるのか、初心らしく膝のうへで窮屈さうに手巾を拵つてゐる。

染崎は、あ、さうか。或はさうであるまいかと思つたけれども何だかさうでもない
らしいところも見えるので色々に想像してゐたのだが、それで長い間の謎がよく分つ
た、と腹の中で思ひながら、故意と、

「あ、さうですか。」と、驚かぬ風を装つて見せる。

「さぞ愛想がお盡きになるでせう。」といつて、女は一寸顔を擧げて染崎の顔を見てゐ
たが、その眼を避けるやうに直ぐまた俛首れて、そうつと手巾で眼を抑へてゐる。

「いえ、そんなことを思ふもんですか。」

と、染崎は尙ほも平氣な調子を裝ふ。

「兄さん、お妾といふものは、それは厭なものよ。」

太息まじりにさういつて、ついと此方を見上げるその眼にはもう一杯涙を湛へてゐる。

それを見て、さすがに染崎も何といつて挨拶をしていゝのか、いひ出すべき言葉に窮して、

「あゝ、成程。」

「私もこんな境遇に身を置かうとは思つてゐなかつたのですけれど、つい色々な事情があるもんですから、もう厭々ながらその日を送つてをりますのです。」

「はあ。」

「兄さんどうぞ御相談にのつて下さいな。どうしたらいゝでせう。」

「どうしたらいゝでせうと仰有つて、どうも初めてお眼にかゝつたばかりですから、何と申上げていゝか、併しどんな方ですか、そのお世話になつてお出いでの方は。」

「それは、まあ人に聞かれましたも私のやうな者が世話になるにしてはそんなに恥ぢるほどの身分の者でもございませぬけれど。」

「どんな人です。」

「東京に住んで居りますが。」といつて、女は帯に挿んだ紙入れの中から一枚の名刺を取出して染崎の前に差出した。染崎はそれを手に取つて見て、

「はあ、此の人の。」

彼はこれはいはぬばかりに、名刺の表と美人の顔とを交る／＼見守つた。

七

「こんな立派な人に、お世話になつていらしやるなら、結構な御身分ぢやありませんか。それは色々事情をうかゞへばまた不足もあるでせうけれど。」

染崎はその名刺を手にしたまゝ三枝の方を見て慰めるやうにいふ。

「えゝ。」と三枝は、ためらふやうに手巾を揉みながら「ですけど兄さん、物質的に

不自由をしないでも……私それは不幸な境遇なのよ。」

「それは、そんな境遇になるのは、いづれ深い事情のあることはお察しして頂けますけれど。」

といつて、染崎は心の中で、強ひて同情を求めようとするらしい女の心持をいろいろに解釋しながらその服装や容貌をまた見直した。

「兄さんは私の境遇をよく御存じないから同情して下さらないのですわ。」

甘えるやうにいつて、三枝はそのまゝまた俛首うたれて紺色錦紗縮緬の膝の上で蒼白い静脈の浮いた纖細かまそい指をもぢく／＼させてゐる。

「いえ、そんなわけぢやないんですよ。同情しないといふわけぢやないんですが、まだ十分あなたの境遇が飲込めないから。」

「え、それは御無理ありませんけれど。……兄さん、お妾といふものはつく／＼厭なものよ。」彼女は重ねて思入つたやうにしみ／＼いふ。

「それは、厭かも知れません。けれどもお妾だつていゝぢやありませんか。あなたは不幸の境遇と仰有るけれど、私にいはせれば物質的に不自由のないのが何より幸福と

思ひます。それはお金も思ふほどあつて、正式に人の妻であつたら、婦人としてまあ幸福かも知れませんが、上を見れば際限かぎりがない。世の中には金銭上の不如意から、とても貴女などゝは比較にならぬ悲惨な境遇に身を沈めてゐるのが澤山にある。そんなことを考へたらあなたなどは幸福な人といはなければなりません。尤もお手紙の趣きでは、その旦那といふ方が随分あなたを束縛しておいでなのやうですねえ。」

「兄さん、私それが厭なの。それはねえ、まあ地位だつてそんなことをしてゐるのですから、私のやうな者が普通あたりまへに結婚するとしたら、一生望めないことかも知れませんが、私何だかその人厭なの。」

「はゝゝ。」と染崎は高笑ひしながら「それは貴女の我儘だ。どちらにしてもまだ之れだけ承はつただけではよく解りませんが、たゞ厭だなんて、まるで小娘かなんぞのいふことぢありませんか。かうお見受けしたところ貴女ももとはたゞの素人しょうとぢやないんでせう。」

といつて、染崎はまた女の方を見た。

「えゝ、：：。」と、いつたまゝ女は暫くいひ澁んでゐたが「兄さん私、そんなに見え

て？」

「ずぶ素人とは思へませんよ。」

「まあいや。私こんな野暮な田舎者になつてしまつて。兄さん、私藝者をしてゐた者のやうに見えて？」

「藝者をしてゐたにしては餘り素人じみてゐるけれどしかしさうであつたのでせう。」

「さうなのですよ。よく解るわねえ。兄さんのやうなことをなさる方ほんとに怖い。」
彼女は抑へるやうな聲でいふ。

その話によると、彼女の父は日本橋で古くある問屋とんやを営んでゐたが、自分がまだ母の胎内にゐる時に彼女の上にまだ四人の子供を残して置いて死んだ。丁度その頃から家運が段々衰へてゐたので、彼女は生れて漸く七月ばかりの時に出入でいりの者のところへ懇望されて養女に貰はれた。そして十七の時に新橋から出ると、間もなく東京の學校に来てゐた地方みちの富豪ものもちの子息わすこに落籍ひかされて、一年ばかり一緒になつてゐる内にその旦那に死に別れた。でもその父親はよくわけが解つてゐて、田舎の方の本葬が濟んで最後に東京に引上げる時には何處までも忤この正妻のあつかひにして、當座の小遣にとい

つて、少からぬ金を恵んでくれた。すると自分ではまだそんなことに気がつかなくつたが、東京へ歸つたあとでその時はもう身重になつてゐたことが解つた。それから八月ばかりして、難産で生れた男の兒は二ヶ月ばかりで死ぬる、自分は産後のわづらひで其の金も無くしてしまひ、乳の張るのを堪へて、二度目にまたもとの新橋から出ると、ひろめをしたその晩についた旦那に一ト月ばかりしてまた落籍された。會社などに關係してゐたその旦那にはそれから五六年も世話になつて彼女は日本橋の方で藝者家を營んでゐたが、旦那が事業に失敗するやうになつてから妙に二人の仲がこじれ出して、仕舞にはその藝者家をも疊んで自分の持つてゐた衣類諸道具をそつくり金に換へて、それで今まで注いでもらつた幾分を旦那に償つて義理を片づけ、自分の方から綺麗に手を切つて別々になつてしまつた。その頃から今の旦那の世話になるやうになつたのである。

「妾は女の棄て場とは、兄さんよくいつたものねえ。かうしてゐると、どうかなるからいけないのよ。私初めの内はこれで果てるかと思ふと、兄さん私、時々死にたくなつてよ。」

女はしみじみした調子でいふ。

染崎は黙つて女の身の上ばなしをきいてゐたが、併しこれまで随分いろ／＼なことを觀てきた彼は、妾といふものを、今女の思つてゐるほどそんなに悪いことゝも思つてゐないのである。まして此の女のやうに思ふまゝなる身装みなりをして、多くの人が望んでも容易に行ふことの出來ぬ鎌倉などへ住居を構へて、榮華なその日その日を消してゐることを思つたら、生半人なまなかの正妻などになつて、責任ある家庭の内助や煩雜な子女の教育に心を煩はされて、可惜あたら女の盛りを瞬く間に醜くゝ老い朽ちてしまふよりは假令たとひ日蔭者であらうとも、責任のない安樂な日を送つてゐる方がどんなに好いか知れない。「とんでもない。何でそんなに死にたくなるのです。お妾はいゝぢやありませんか。私が女に生れてゐたら、あなたのやうに初めは藝者になつて、そのうち好い旦那を見つけてお妾になります。」

「兄さんはやつぱり捌けたことを仰有るわねえ。」

女は一つひとつ染崎のいふことを眞面目にきゝながら、沈んだ調子でいつた。

「捌けるも捌けないもない、さうぢやありませんか。それはあなただつてそんな人の

正妻になれ、ば申分はないでせうけれど、まあ、いへばあなたの本來の境遇ではそんな人のところへは嫁にゆけない。それはあなただつて元から藝者などにならなかつたら、或は相當の縁があつて、ちやんと定つた夫を持つてゐたかも知れないが、もうこんなになつてしまつてからでは仕方がない。今更碌でもない夫を持つよりも、そんな立派な人の世話になつてゐる方がいゝぢやありませんか。どんな不平があるかも知りませんが、不心得な考へなど起さないで旦那を大切にしてお上げなさい。」

すると染崎のいふことを、頭を垂れて靜ときいてゐた女はふいと顔を上げて、「兄さんはやつぱり理性的な考へねえ。」

と、思案するやうにいふ。

そこへ女中があつらへて置いた鱧すいきの洗ひだの海老の具足ぐそくに煮などを運んできた。

八

「理性的といふわけでもありませんが、とにかくその方は大事にしないといけません

よ。」

「ですけど兄さんよりはずつと後なのよ。」

「私より後とは。」

「だつて私がお兄さんのお書きになる物をよく読んでゐたのはその藝者家をしてゐる時分ですもの。」

「あゝそのことですか。どうも難有う。」

染崎は照れたやうにいつた。

「氣のきいたことをいふのねえ、兄さんは。」

「さうですか、私のいふことがそんなに氣がきいてゐますか。何だか賞められて恥かしくなるやうですね。私の書くことなんか氣がきいてゐるなどいふものぢやないでせう。」

「ですけど私何となく兄さんのお書きになる物は好き。よく先の頃新聞で短い物をお書きになつたでせう。私あれを読んで、まあ氣のきいたことをいふ人だ。どんな人だらうと思つてゐましたの。私のお友達がそれをよく知つてゐて、また貴女の好きな

人が書いてゐますよなど、いつて、私によく戯談からかつてゐました。」

「以前よく新聞につまらぬことを書いてゐましたが、あんな物があなたに面白かつたのですか。」

「えゝ。もうその頃からどんな人か一度會つて見たいと思つてゐたのですけれど、……役者なんかなら會はうと思へば、それはどうか出来ないことはないでせうけれど、兄さんのやうなことをなさる人、どうしたらいいのか、誰かに紹介してもらふにも知つた人はないし、あんまり私など、御境遇が懸絶かけはなれてゐるものですから、少しも勝手が解らなかつたのですよ。それは随分長い間なのよ、兄さん。」

「あゝ、さうですか。あなた役者はよく知つてゐるでせう。」染崎は戯れるやうにいつた。

「あら、まあ酷ひどい兄さん。」と、三枝はわざとらしく顔を顰めて呆れたやうに染崎の顔を見て、「私役者なんか大嫌ひ。あんなもの藝人ぢやありませんか。」

「私だつてそんなものです。役者よりかいけないのです。第一役者の方が金が多く入つて、吾々よりか女に好かれて、私も役者になりたかつた。」

「そんなことありませんわ。兄さんなどの方が精神的の職業ぢやありませんか。」女はどこまでも眞面目である。

「さういへば、いはれないことはありませんが、役者だつてやつぱり、藝術家ですもの。あなたは芝居が好きといふぢやありませんか。」

「ですけれど、それとこれとは何だか違ひますわ。私いくら芝居が好きでも役者なんか厭。よくそんなことをいふ人がありますけれど、私どうしても役者なんかとそんなことになる人の氣が知れないと思ひます。」

「あゝ、さうですか。とにかくあなたのやうにさうしてつまらぬ物まで眞實ほんたうに愛讀して下さる方があつたと思ふと、難有いやうな、赤面するやうな氣がします。」

「ですけれど兄さんは近松の物がお好きだといふのに、お書きになる小説の中の女は、みなその反對ねえ。あつ、御免なさい、怒らないで頂戴。初めてお眼にかゝつてこんなことをいつて失禮ねえ。」

女は甘えるやうに早口でいつた。

「何を怒るものですか。さうですよ、近松の女とは違ひます。」

「ねえ、さうですわ。近松の物は兄さんのお好きな梅川だつて小春だつて、みんな男に對して献身的なのに、兄さんの女はみんな男に對して薄情なのねえ、あれぢや頼りないわ。ほゝゝ。」

女は靜脈の浮いた白い顔に慎しい微笑を湛へながらいふ。

「さうです。みんな薄情です。：：もう私の小説のことをいふのは止めませう。貴女は何も召上らないのですか。少し食つたらいゝでせう。」

といつて、染崎は女の顔と膳の上を見くらべた。

「えゝ。」と女は軽く會釋しながら仕舞まで行儀よく箸をつけなかつた。

海の上から涼しい風が絶えず吹いてきた。一と間置いた隣りの部屋では藝者が來て三味線が鳴りはじめた。

「御免下さいよ。私ひどく疲れてゐますから。」

といつて、染崎は疊の上に長く伸びて仰向けになつた。彼の頭には昨日まで日光にゐて始終睡眠不足に惱まされたり、書く物に壓迫されたりしてゐた苦しい感覚がさうしてゐても絶えず膠着くわくちやくいてゐた。

「私、眞實ほんたうに疲勞してゐます。貴女も始終睡眠不足に悩まされておいでになるといふのは、その苦痛はよく解りますよ……あなたも少しお休みなさい。」

彼はさういつて、傍に女のあるのも構はず、じつと眼を瞑つて疲れた心を靜めた。事實彼は女に對して何等の興味も刺戟も感じないほどに疲勞を覺えてきたのである。女は歸るなら、かへれ。自分は、此處にかうしていつまでも涼しい風に吹かれてゐたい。彼は懷中ふところからそつと手拭を取出して闌しきわの上に置いて、それに頭を載せた。

するとそれを見た女は、

「あゝお頭つむが、」といひつゝ起つて、自分の敷いてゐた麻の座蒲團をとつて二つに折りながら、それを靜そつと染崎の頭の下に持つていつて入れた。

「あゝ、どうも難有う。あなた敷かないといけないでせう。」彼は太息ためいきを吐くやうにいつた。

女はそのまゝ染崎の枕頭まくらの縁側に坐つて彼の顔を覗きかゝるやうにして、

「兄さんどこかお悪くつて。」と靜かに訊く。

「いゝえ、どこも悪ありませんけれども、かうしてゐると好い心持ですから。」

「さう。そんなら好いけれど、私心配してよ。」

女はさうして板の上に坐つて兩手を突いたまゝいつまでもそこを離れなかつた。

「兄さんそれはすつと前からなのよ。」

しばらく沈黙してゐた女はふつと思ひ出したやうに染崎の頭の上でいつた。

「何がです？」

「私が見さんのことを思つてゐたの。」三枝は甘えるやうな調子でいつた。

染崎は瞑つてゐた眼を大儀さうに一寸見開いて、

「さうですか、どうも難有う。」といつたまゝ、すぐ眼を閉ぢてしまつた。

染崎は今此の女がどんな心持でゐるかは大抵見當はついてゐるのだけれど、自分から進んで男の要求を持ち出すほどの慾望を持たない。かうして涼しい夏座敷に寝轉んで何物にも妨げられず氣樂に精神を休息させてゐれば、もうその上に望むところはないのである。この眞夏の日盛りに此方から戀を仕掛ける心はほと／＼盡きてゐるのである。

「もつとよくお話ししたら兄さんに私の心がよくお解りになるんだけれど。」女はやつぱ

り頭の上で獨語ひとりごとのやうにいつた。

彼はそれに返事を與へず、黙つて居ようかと思つたが、彼の性質として對手あひてのいふことを黙つて聞き流してしまふことも何だか無情つれないやうで、さうもならぬので、仰向あやういたまゝ眼を開いた。

「あなたの仰有ることは、今承つただけのところでは私には解つてゐるつもりです。どんな御事情があるか知りませんが、博士に不實なことをしてはいけませんよ。」

といひつゝ、彼は半ば起き直つて、横を向きながら頸をねぢまげて女を見上げた。きちんと行儀よく搔合せた紺色錦紗縮緬の胸に薄淺黄に白く撫子模様を刺繡ぬいとつた襦袢の半襟から、海の上を吹いてくる涼風と共に柔かな脂粉の匂ひが弄るやうに薫つた。と見ると女は厚い化粧に隠してゐるけれど何を思ひ煩うてか、面窶おもやつれの眼立つ眞白い顔を斜に俯向けて、何事か考へ沈んだやうに縁の上に凝じどと視線を落してゐた。

「なるほどあなたも神経衰弱だ。いけませんよ。そんなことでは。初めてお眼にかゝつた私にはよく解らぬこともあるでせうが、吾々が此の世に生きてゐるといふ上には不幸といふことが必ず附隨してゐます。けれども私は貴女よりも、もつと不幸な境遇の

女も知つてゐる。少くとも見た處ではあなたはそんなに不幸な方とは思はれない。」

「兄さんにはさう見えて？」

「さう見えますねえ。」

そんな取止めのない會話はなしをつゞけてゐる間に、海の上には次第に暗い日影が落ちて、寒いやうな夕風が起つてきた。

「あなたはもうお歸りにならねばならん時分でせう。」

「えゝ。」と曖昧な返事をしながら女は時計を出して見た。

「兄さんは。」

「さあ、この暑さに東京へ歸つて寝るのもつらいなあ。」

それから、ぢや、ともかくも電車のあるところまで一緒にといつて、二人がそこを立ち出たのは、それから間もなくであつた。

九

二人はそこからまた電車で二た丁場ばかりいつたところの、とある料理屋めいた旅館に入つて、日の暮れるまで目的もなく時を過した。女は時々氣にしたやうに時計を取出して見てゐた。男は女のするに任せて敢て引留めるやうな素振りは見せなかつた。そして暑い日向を歩いてきた所爲か、ひどく頭が病めるといつて仰向きに寝轉んだ。ま先刻のやうにまた黙り込んでゐた。

來る客も少いと見えて、そこはわびしい雑普請であつたが、茶室めかして建てた座敷の庭先には萩の叢などがあつて、西向きの廊下の窓にいつまでも明々と照りつけてゐた西陽の影がいつしかすつかりかげつてしまふと、涼しい風がさら／＼と萩の葉を動かした。先刻から染崎の枕頭に坐つて、團扇で彼を煽いでゐた女は、

「兄さん。」

と、甘えるやうに言つて、顔と顔をすり付けるやうに覗き込みながら、

「兄さん私、ほんとに兄さんのことを思つてゐたのよ。」

「え、それはよく解つてゐます。ですから先刻からもう何度もお禮をいつてゐます、女は暫くさうしたまゝ黙つてゐたが、やがてさも氣まぐれのやうに、

「兄さん私も帰ります。」と獨語をいふやうにいつた。

「え、お歸んなさい。早く歸らないと、もう遅くなりますよ。」

「遅くなるどころぢやない、もうおそくなつてゐる。」

「ですから早くおかへんなさい。」

「え、」といつて、女はいきなり染崎の胸の上に這ひかゝるやうにして両手で男の兩手をとつて掌てのひらと掌とをびたりと着けて、指を組み合はせながら、子供がするやうにそれを搖ゆぶつた。

「兄さん。」

「何です。」

「兄さん。」

「何です。」

「しどいわ。」

「は、何がひどいんです。」

女はわざとらしい萎れたやうな嬌態しなをして見せて、そのまゝまた暫く黙つてゐた。

「さあ、お歸んなさい。早くかへらないと博士がお出でになりますよ。」

「ええ、かへります。」顔を壓おさ付けたまゝいつた。

「眞實ほんとにおかへんなさいよ。博士の許可を得ないで勝手に外出歩きなんかしてはいけませんよ。」

多分未亡人であらうと豫想してゐたのが人の妻でないまでも、さういふ男のある女と分つてみれば、それとからしてゐるのを染崎は心に咎めぬでもなかつた。

「ええ、かへります。」

女はついと顔を上げていひながら、ほうつと太い息を吐いた。漆うるしのやうな黒い束髪ひさしの額髪ひさしがゆるんだのを蒼白い掌の先で氣にしてなほした。

「さあ、おかへんなさい。」

「ええ、かへります。」さういつて三枝は起つていつて、座敷の隅に取り散らした夏外サマ套コートだの、絹麻の帯だの、紙入れなどを傍そばによせながら、またそこにべつたり坐つてしまつて、

「でもよくこんなに暑い時分に日光からわざく、歸つて下すつて。お氣の毒ねえ。兄

さん、もうこれ切り逢つて下さらないでせう。」

「何故？ 妙なことを。」

「でも、私にお逢ひになつて見たら、想像と大變に違つてゐたでせうと思つて。」

「さう：：あんまり違つてゐませんねえ。併し女中と二人きりの寂しい生活といふのは違つてゐました。そんな立派な御相談對手があるのに、何故私のやうな者に大事な身の上相談などを持ちかけるのです。それが解りませんなあ。」

女はそれをきゝながら暫く黙つてゐたが、また時計をひらいて見て、

「あゝ、もうほんとに遅い。私歸ります。自分の神經に脅やかされたやうにいつた。」

「おかへんなさい、お歸んなさい。早くかへつて博士を大切にしてお上げなさい。」

彼はもう先刻さつきから心の中ではこのまゝむざ／＼歸してしまふのは馬鹿らしいとは思ひながら、此度のこととは前から腹を決めてゐて、自分の方からは飽くまでも受身で居らうと思つてゐるので、女の方が弱味を見せるまで、此方からそんなことは戲談にも口に出さなかつた。そして先方さきが眞實ほんとうに歸りさうにすれば、尙ほのこと故意に冷淡を装うてそれを勧めた。女は、

「ええ。」といつたまゝ、氣のなさうにいつまでもそこに坐つてゐた。さうして暫く考へてゐたが、

「……でも兄さんの方ぢや消極的でせう。私それが詰まらないわ。兄さんがこれまでにお書きになつた物はどれもみんな、まあ、言つたら、兄さんの方から積極的に出た戀でせう。私にはさうぢやないんですもの。」さういつて、彼女は仕舞の方を笑ひひくいつた。

染崎もそれをきいて笑つた。そして腹の中で次のやうなことを思つた。

「そら、矢張りそんなことを思つてゐるんだ。あんなに歸りさうな風を見せても、なかなか歸りやしない。そして此方で思つてゐるとほりのことを先方でも思つてゐるのだ。しかしそんなことを思つてゐるのは、先方が蟲が好過ぎる。」

そして「だつて、それは貴女の無理でせう。私が今まであなたといふ女の存在を知らなかつたのですもの。此方から積極的に出ようたつて、出られるわけがないぢやありませんか。」

さういつて染崎はまた笑つた。女も笑つた。それが爲に晝間から随分長い間二人の

心と心との間に用心深く置かれてゐた隔意へだたりが、はたと取れて、互の心の奥を見透したやうな心地こころもちになつた。

そこへ女中が廊下の方から顔を出して、

「あのお夕飯のお支度はいかゞいたしませう。」

「さあ、私はまだあんまりお腹がすかないが。」

といつて、三枝の方を見ながら「あなたはいかゞです。」

「えゝ。」

「食べますか。」

「えゝ、少し戴きます。」

女は今にも歸りさうにもぢくししながら、段々腰を落着けた。染崎はそれには氣のつかぬ風を装ひながら、

「ぢや何か淡泊あつさりした物を見繕みつくりつて。」

と女中にいひつけた。さういつて置いて、また仰向きに寝轉びながら萩の葉を渡つてくる風に吹かれてゐた。女は暫く帯やコートを重ねたそばに坐つてゐたが、何時ま

で經つても染崎が黙つたまゝ何とも言葉をかけてくれないので、また彼の枕頭に來て坐り込んだ。そしてばた／＼頭や足の方の蚊を追うてやりながら、頻りに優しい言葉をかけてゐた。染崎はそれに對して、たゞ、

「えゝ、えゝ。」と、いつまでも同じことを繰返してゐた。

その内に女の顔はまた漸次と下を向いて消え入るやうに思ひ沈んだ。それでも染崎は女に向つて熱情の籠つた言葉を掛ける氣にはならなかつた。そんな素振りを見せられても、彼にはもう心元ないとか嬉しいとかいふ戀するものゝ杞憂や感興は湧いて來なかつた。

女は到頭堪へかねたやうに白い手巾でさつと顔を被うた。そしてしく／＼泣きながら、すつと起ち上つて、そのまゝばた／＼と廊下の方へ驅け出した。染崎は心の中で「芝居をして居る。」と思つたが、自分でも芝居をして見る氣になつて、その爲めに昂奮させられた風を装うて、すぐ後を追うた。女は薄暗い廊下の行きづまりの隅にいつて手巾を顔に當てたまゝ突立つてゐる。彼は、こゝで笑つて戲談で仕掛けようか、もう女の心は解り過ぎるほど解つてゐるのだから、何にもいふ必要は無いのだがと思つ

て見たが、やつぱりどうかして見たくなつて、

「どうしたのです？」

と優しくいひながら、傍に寄つていつた。

「えッ、どうかしましたか。」

女は手巾で被うた顔をたゞ振るばかりで何にもいはない。

染崎は女の爲ることがあんまりわざとらしい技巧なので、皮肉な心持になつて、傍に立つたまゝ暫く黙つて眺めてゐたが、なんか言葉を掛けてやらなければ、向うが困るであらうと思つて、また、

「どうしたのです。」

と心配さうにいひながら、肩に手をかけた。

「うむ!!」といつて、やつぱり頭振かぶりを振つてゐる。

「えッ、三枝さん、どうしました？」といひながら、染崎は女の頭の上から覗いた。

そして背せなを撫でた。

「うむ！ 何でもありませんの。」忍んだ聲でいつた。

「何でもないのに何故そんなに泣くんです。」

「兄さん、私。私いや。私……」女は苦しげな調子でいつた。

染崎はそつと傍によつてゆきながら、丁度頭の上から見下すと、恐ろしいほど眞黒い束髪の結び目が烏蛇が絡み合つてでもゐるやうに見える。彼にはそれが永久に解けない男女の執着を表象してゐるものゝやうにも思はれた。そこからむせるやうな濃い頭髮の臭ひと香油の薫が鼻を衝いた。染崎は段々軽い電力を身内に感ずるやうな心地となつて、次第に顔を近づけながら、

「え？ どうしました。」

「うゝむ。」

と女は甘えるやうにいつて、それでも頭をかくふりながら、半ばすゝり上げるやうなしぐさでいやいやをして見せた。男はそつと女の耳に口を寄せて、

「あなたはもう今晚かへりませんか。」

それをきくと女は忽ち何物かに驚かされたやうに、はたと男を突き退けて、身を離しながら、

「いや、歸ります。私今日は堅い決心を以て出て來たのですから。」と強い調子で慨歎するやうにいつた。

「さうですか。そんならお歸んなさい。」

「えゝ歸ります。」

「お歸んなさい、おかへんなさい。早くかへらないと、鎌倉まで遅くなりますよ。」

染崎は冷やかにいひつゝ廊下を歩いて座敷の方へ戻つた。女もあとから手巾を持つた手で襟頸のまはりを繕ひながら入つてきた。

「私もう、ほんとにかへります。」

「おかへんなさいとも。」男は靜かにいつた。

丁度そこへ女中が、

「どうも遅くなりまして。」といつて、膳を運んできた。

此處でも晝飯の時と同じやうに鱈の甘煮だの、海老の鬼殻焼きだの、鯔の洗ひなど女中の手で一つひとつ餉臺の上に並べられた。涼しくなつたので二人ともいくらか快い空腹を感じてきた。

「あの、ビールか御酒かお上りになりますか。」

「さあ？」染崎は三枝の顔を見て「あなたは。」

「否」と顔を振つた。

「ぢや、いらぬ。」

女中はそれをきいて退つていつた。

「さあ、これを食べて早くおかへんなさい。」

「えい。」と、女は不味さうに箸をつける眞似をしてゐたが「私お酒を飲まうか。」と獨語のやうにいつた。

「お酒を。ぢやおあがんなさい。」さういつて染崎はまた女中を呼んで酒を命じた。

長い間かゝつて三四杯酒盃を乾すうちに、女の頬のまはりがほんのりと薄紅に染まつてきた。

酒を飲みながら女はまたしても時計を取出して時間を氣にしてゐた。

「もう随分遅いでせう。」女はつひに歸るものと思つてゐる染崎は促すやうにいつて先の心を測つてみた。

「えゝ、もう九時半。十時になつたら電報打ちます。」

「電報を。何といつて?」

「もう遅くなつたから泊つてゆきませう。まつがさぞ驚くでせう。四時までには必ずかへるといつて出たのに、何處へいつたらうと思つてゐるでせう。」仕舞の方は獨語のやうにいひながら女は酒盃さかづきに手酌をした。

「もう歸らないんですか。」

男は心の中で、随分長い間氣を揉ませたと思ひながら、漸と安心していつた。

「えゝ、もう遅くなつたから。」と思案するやうにいつて「私三年間といふもの一度だつて、黙つて外へ泊るなんてことは、それはなかつたんですもの。」

彼女は自分の行爲を自分で誠めるやうな口調でいつた。

「それは不可いけませんなあ。留守へ博士がやつて來たら、どうします。」

「ですから先刻から時計を見てゐるの。向うへ十一時半くらゐにつくやうに電報を打ちます。さうすると、もし來ても私がまだ歸つて來ないと思つて、遅くも十一時までには、かへつてしまひますから、その後へ丁度電報がつくやうに。」

それから三十分ばかりして、彼女は染崎に書いてもらつて、鎌倉の留守宅へ女中にあてゝ電報をうつた。

夜の更けるとともにさしみに酷しかつた晝間の暑さも次第に忘られて、膳の上の物がおほかた食べ荒らされた頃には、體にめぐつた淡い酒の酔ひとともに今までよりかまた一層互に融解したやうに落着いた感興に浸されてきた。

三枝は餉臺ちやぶだいの物を片付けてゐる女中に、

「姐さんまだお湯があつて。」などと訊いてゐた。

「えゝ、あるのはまだありますが、もうひどく汚よごれて居ります。」

「なに汚れてゐたつて。私ちよつと體を拭けばいゝのだから。」

「ぢや、あとでちよつと見てまゐります。」

晝間の疲れもいつかすつかり回復して神經の澄んできた染崎は、肱枕ねそべで横に偃臥り

ながら三枝が女中に話しかけてゐる言葉つきなどをそれとなく思ひ味はつて見た。長い間多勢の抱妓かへなど置いて采配を揮つてゐた頃の女將おかみらしい權威が、染崎に對つてきく口とはまるで違つて響いた。そんなことにも、今現に侍かしづいてゐる博士に對して彼女がどんなにして伶俐ささきに先方の氣を取つてゐるか、視みはれた。姿態やうすや口のきゝやうからいつても藝者上りといふところは見えないうでやつぱり奥さんといふに相應しかつた。

下げる物を運んでいつた女中はまた入つてきて、

「今ちよつとお湯の加減を見て置きましたから、およろしければいつでも。」

「あゝさう。」と女中に返辭をして、三枝は染崎の方に向いて「ぢや、私ちよつといつてきます。」

といつて、紺色錦紗縮緬の單衣ひとえに淡紅色とせいろの扱帶しほき一つで、踵かかとに絡まはる友禪の長襦袢ちゆうばんの裾すそを蹴りながら廊下の方に出ていつた。

「早くいつていらつしやい。……姐さん僕はもう寢たくなつた。お床をたのむ。」

「え？　もうあちらにこしらへて置きましたから。」

さういつて女中は染崎を別室に案内した。

「お持ち物はみんな此室こちらへ持つてきて置きましたから。」女中は色々な物を薄暗い部屋の隅に運んでおいて退つていつた。

染崎は横になると、もうとろ／＼と眼瞼まぶたが重くなつてきた。

「兄さんもう寝て。」

からだ身體を拭いてきた三枝はさういひながら、

「暑いのねえ。みな締つてゐるの？ こゝを少し明けませう。大丈夫でせう。」と雨戸を一枚繰つた。そこから露に濡れた涼しい夜風がさつと流れ込んだ。

「あゝいゝ氣持ち」といひながら女は暫らく涼を入れてゐた。

昨夜はいろ／＼な雑念に悩まされて、微睡まんじりともしなかつた三枝は、まだ夜の明けきらぬうちからもうぱつちりと眼を覺まして頻からだに身體を持ちあつかひながら歸ることを氣にしてゐた。視線の据つたやうな大きな眼の色が間近で見えてゐる染崎には氣味が悪かつた。

「あなたは随分激しいヒステリーですわねえ。」

それに懼おびえた彼は、先達せんたつてから日光にゐて彼女から受取つた手紙の文句や昨日からの發作的はつまつの舉動や眼色などから、女が初めて思ひ切つて自分の方へ音信いんしんをするやうになつた心理などを考へて見た。

「私ヒステリーでせうか。」

「ヒステリーですとも。」

「いやねえ……」

一旦眼の冴えた彼等はそんなとりとめもない事を話し合ひながら、またいつの間にかうと／＼とした。女中が風呂が出来たのを知らせてきたので、二度めにはつと眼をさました時には閉め切つた雨戸の隙間から、また今日の暑さを思はずやうな明るい日光がかん／＼射込んでゐた。

それから漸く起き出て湯に入つたり朝とも晝ともつかぬ御飯をすまして、そこを出たのは、あんなに歸るかへるといつてゐながら既う十二時に近かつた。近くの停車場まで呼びにゆかねば俵がないので、二人は暑い日盛りをぶら／＼歩いた。道に遊んでゐる子供が、

「いゝ奥さん。」

などといつて呼んだ。彼等はそれを振り返りながら顔を見合せて笑つた。

「どこか家をきめて置いてお逢ひするといゝんですが。」

「昨夜の家は汚い家でしたねえ。」

「厭な家」

燃えるやうに乾き切つた道からぼこ／＼砂塵すなぼこりが立ち上つた。街道まちつゞきの人家も停車場の彼方むかひの森も、眼に入る物が何もかも此の間中の炎暑えんじゆにくつたり疲れてゐるやうに見えた。

女は頬に玉のやうな汗を流しながら歩いた。

プラットホームで電車を待つ間に、染崎は半巾せんちんで静しづとそれを拭いてやつた。

「こんなに汗が出てゐる。」

「兄さんの顔色ひどく悪い。私氣になつてよ。」三枝は傷いたはしい顔をして染崎を見上げた。

「悪いでせう。私にも分つてゐるんです。なに、これから歸つてよく寝ればよくなり

ます」

そこへ院電の上りと下りとが同時に入つてきた。

「ぢや、留守の首尾はどうだつたか、かへつたら早速それを知らして下さいよ。あなたのためにそれが心配だ。」

「えゝ、ではお大事に。」

染崎は軽快な院電の二等車に入ると、風通しのよさうな入口の隅のところについて腰を掛けた。昨夜一と夜は刺激の強い夏の夜の蒸れるやうな暑さに惱み疲らされて軽い痛みを感じる頭を、涼しい風が窓から煽つた。さうして一人になつてしまふと昨日からのことがはつきりと頭の中に思ひ浮べられた。長い間空洞うつろのやうな生活をして來たのが、昨日からの出來事のために新しく生活の内容を領得したやうな優勝が感じられた。

いくら悒鬱いびげくても長い間孤獨の生活をつゞけてゐる下宿の書窓の方が染崎にはやつぱり居心地が好かつた。一と晩泊りですぐ日光の方へかへつて行くつもりであつたのが書く物の都合などで一日延ばしに段々延びた。焼き付けるやうな暑い日が照るか

思ふと、その翌日はまた涼しい雨になつたりした。その雨の音にはもう初秋が間近に迫つてゐることを思はしめるやうな響きがあつた。北に向いた高い窓から、檜や樺の葉越しに崖下の低地につゞく人家が一眸の下に見渡された。その窪地の開展した果にはまた、こんもり濃緑に埋つた礫川の高臺が遠く眼界を劃つてゐた。白い夏の雨脚が颯と通り過ぎてゆく時にそれ等の物が凡て濛々とした煙雨の中に鎖されてしまつた。山の形をした崖地の矮林に音を立て、雨滴の濺ぐのを見てゐると自然に氣分が爽かになつてゆくのを覺えた。雨に濕つた土の匂ひが冷い水沫と共に窓から流れ込んだ。

彼はその闕に脈を凭せて、この頃新しく湧いてきた興味に心を委ねてゐた。女からは毎日のやうに手紙を送つてきた。最初はそれほど思はなかつた興味がやつぱり女の手によつて喚び起されてゆくやうな氣もした。一週間ばかり過ぎてから、日光に歸る前にもう一度逢ふ約束が手紙で交換された。

「ちよつとそこらまでのやうにして透綾の不斷着のまゝ、東京驛までまゐりますゆゑ兄さまにもそこまで御足勞ねがひます。」

といふ手紙に對して、承諾の旨を返事した日の翌日、染崎はまた十時頃から出掛け

て此の間のやうに東京驛で待ち合はした。

その日は賑やかな市街をいくつも通り越して大川に架した橋を向岸に渡ると、自動車はその川ぞひの道を一と筋に駛せていつた。やがて長い堤の上の街道を中途からだらだと右に降りていつて、とある家の入口の前にいつて止つた。その物音をきゝつて、からころと敷石に下駄の足音をさせながらその家の女中が奥から出てきた。「いらつしやいまし、どうぞこちらへ。ずつと奥へ。」

といふ聲に導かれて、二人は踏み石傳ひに意氣な垣根に沿うた小徑を幾曲りかしてずつと奥まつた茶室めいた小間に案内された。小さく建仁寺垣を取廻した前栽にはもう鶏頭や萩が秋の色を飾つてゐる。隣の建物の廂合ひから涼しい風が通うてきて垣根の芙蓉の葉を吹いた。

「どうぞこれにお着更へ遊ばして。お風呂も丁度出来て居りますから。」と、女中は浴衣を持つてきた。染崎は早速それに着更へて一と風呂ざつと汗を洗ひ流してくると、女中はやがてあつらへた物を持ち運んできた。

すぐ隣の百花園に蟲放ち會などがあるといふので、二人はついでにそれも見てゆく

ことにした。

「どうぞ御ゆつくり遊ばして、まだ晩までは大分間がありますから。」

氣の利いた年増の女中を話し對手に芝居や役者の評判から土地の藝者の噂などで長くかゝつた飯を濟ますと、女中は膳の物など片付けて置いて、

「暫くお休みになつたらいかゞでございます。さうなさいまし。」

といつて、去つてしまつた。

「厭ねえ、」三枝は振返つて次の間を見ながら「晝間から。戸まで閉めて、これでは暑くてたまらないわ。」

日暮になつてから寒いやうな涼風がどこからともなく吹き込んできた。すつかり暗くなつてから二人は女中に案内されて裏木戸から百花園に入つて見た。夕立でもあつたかと思はれるやうにしとゞ夜露に濡れた萩の叢には鈴蟲や轡蟲が銀鈴を振るやうな聲で、水のやうな秋の夜を聲を限りに鳴き交はしてゐる。しつとりと撒き水をした園地のところ／＼には昔懐かしい繪行燈ゑおんどんの灯影が露を浴びた草花の小蔭こかげを微ほのかに照らしてゐる。二人は手に手をじつと握り合はして小暗い草花の中に通うた細徑こみちを歩いた。

奥まつた樹立こだちの中に架した土橋を渡つてゆくと、夜目には底の知れない眞暗な池の水に銀色の月影が白い光りを投げてゐる。

「あゝ、こはい。何だか恐ろしいやうなところですねえ。あつちいゆきませう。」

そこに立ち停つて暫く池の面を眺めてゐた女はさういつて男の手を引いた。

「あゝ、なるほどこゝが萩のトンネルねえ、鎌倉の田舎者になつてしまつて、もう何年にも來たことがありませんから。」

満庭の月の色は夜とともにますます、冴えて、無数の花卉くわいを影繪のやうに照らした。

木立の奥の大廣間では今しも丁度餘興の演藝會が始まるところで、二人は暫く萩叢を分けて人込みの中に立ちまじりながら、落合康惠一門の三曲の合奏と芝金しばきんの「秋の夜」とを聽いてからそこを出て戻つた。

それから時刻を見計らつて留守居の女中にあて、電報を打つておいてから、女は湯に入つた。酒をいひつけて、あとは軽い夕飯にした。

「こんなことを度々してゐると、いつかは知れる。」ほんのり眼瞼まぶたのまはりの紅くなつた彼女は獨語のやうにいつた。

月々の給與などはかなり豊富であるらしかつたが、養父母の小遣などにその幾分を割かねばならなかつた。ちよつとした鐵工場で職工の取締りなどして、自宅うちへも始終多勢の職工を寝泊りさしたりしてゐる養父の生活は、初めて彼女を新橋から出した時分に比べると、今では不自由がなかつた。それにも係らず黙つて彼女をいつまでもそんな境遇に置いておくのが彼女の不平の一つであつた。

「だつてお父さんやお母さんが勧めてそんなことにならしたのですか。」

「それは私だけの考へでしたことですけれど。」

「ぢや何もお父さんやお母さんに責任はないぢやありませんか。一體あなたは男に慕ほれつぽいんだ。博士にだつて初めはあなたが慕れたんでせう。」

染崎にはどうもさうらしく觀察された。

「いや。そんなことをいられると顔が赤くなる。」といつて、彼女は少し酒のめぐつた顔をまたぽつと染めて両手で頬を抑へる眞似をした。

「でも初めの内はそんなに思はなかつたの。私の眼が狂つたのです。」

「ですから、やつぱり初めはあなたの方でも慕かられたのでせう。」染崎は戯から弄かふやうにい

つた。

「初めは先方でもそんなでもなかつたのです。」

「だからその頃は両方で好かつたのでせう。あなたは一體我儘なんです。どうせ誰しも初めのうちは好いもんですよ。その時分のとほりでいつまでも居らうと思ふのは間違ひだ。」

「あら、ひどいわ、兄さん。そんなことを仰有らないでまあ聞いて下さい。私が始終厭だいやだといふもんですから、先日も母がお前そんなに厭なら自分の好きなやうにしたら好いぢやないか、家だつてお前一人遊んでゐられないことはない。さういつてくれるんですけれど。」

「あゝさうですか。ぢやあさうなさいな。」染崎は肱枕をしながらいつた。

「先に一度失敗した経験があるから此度は屹度大丈夫といふ自信が私あるの。兄さん私、藝者屋がしたいの。兄さんあなた見てくれて。」

「私のやうな金力のない者は仕方がないぢやありませんか。」

「うむ、その事ぢやないの、たゞ附いてゐて貰へばいいの。いくら女のする稼業とい

つてもやつぱり背後うしろに男がゐないと駄目なものですよ。背後に誰か男がゐるといふことが心丈夫ですもの。」

「そんなことなら私だつて勤つとまりさうですな。あなたが置いて下さるなら、甘んじて長火鉢の向うに坐ります。」

「眞實ほんたう、兄さん。」

「ほんとですとも、あなたさへ眞實ほんたうなら。」

けれども染崎は心の中ではいゝ加減に返事をして置いた。

「私、きつとしますから。」

「おやんなさい。それはいゝでも随分要るでせう。」

「やつぱりどうしても五千圓くらゐは持たねは……それに、するほどならこれからはどうしても新橋でないと。新橋でなくならしない方がいゝ。」

「それはさうでせうねえ。あなたはそんなお金を持つてゐるんですか。」

「それはまたさうなれば、どうかなるものよ。でも半分くらゐは持つてゐなければ。」

女の口振りでは半分くらゐは自分で蓄へてゐるらしかつた。

「博士は出さないのですか。」

「そんなことは大嫌ひ。私が以前自分でもそんなことをしてゐたのさへ、今でも時々いひ出して厭がるくらゐですもの。」

「女を圍ふ人にも、ですから、いろ／＼あるものだなあ、あなた方の旦那になるやうな人は皆意氣なことを好むものかと思つてゐた。」

「兄さん私きつと獨立します。その時はどうぞ見て下さい。」

「私のやうな無能力な者でも間に合へば……併し私は、心を迷はないで、いつまでもその人の世話になつてゐた方があなたの生涯の安全と思ふがなあ。まあ、とにかくこもろ一二年辛抱してその間にお金を残すのが肝心ですよ。」

そこへ母家おもやの方から、からころと庭下駄の近づく足音がして女中が顔を出し乍ら、

「あゝ、まだお寢みになりませんか……もう何にも御用はございませんでせうか。」

「えゝ、もう何にも。ぢや明日の自動車を頼みます。」

「畏まりました。」

そこらあたりを片附けてから、女中は戸締りをして「お休みあそばせ」といつて去

つた。

この間から僅か一週間ばかりの日數しか経たぬのに、もう八月末の夜更けはそんなにも熱さを感じなかつた。

十一

翌日東京驛まで女を送つて一旦自分のうちに戻つてくると、染崎はすぐまた日光へ立つていつた。此の間中の避暑があまり好い結果を持ち來さなかつたので、そのまゝにしてゐる荷物などを取りかたぐ、それでも若し好かつたら暫くゐるつもりで歸つていつたのであつたが、中一日置いて翌々日になつてすつかり引揚げて戻つてきた。それから四五日ばかり東京にゐると、腸などを悪くしてゐたので温泉に漬るつか氣で此度は箱根の方に轉地した。そこへは鎌倉からも一日に往復出来るほどの距離であつたが、あれ以來三枝は、もう五月時分から段々いけなくなつてゐた食慾などが此の頃になつてまたどつと進まなくなつて、どうかすると僅かばかり入れた物でも戻すやうなこと

があつて、當分外出の望みも絶えたやうなことを口説いてよこしたりした。

山の上にはもう空氣の感觸にも、高く澄み渡つた大空の色にも、くつきりと浮き出
て見える山の肌にも秋は眼に見えてゐた。早雲山さわうんざんの頂きから吹き湧いてくる白い雲の
千切れが毎日間斷なく明神ヶ岳や明星ヶ岳を越して相模灘の方へ走つていつた。

染崎はいろ／＼心に急がれることのみが多かつた、掃除などの手の行きとゞいた清
らかな窓のところを机を置いて、紙を展べたまゝ彼は湯づかれのした體を凭せかけて
毎日構想に頭を病めさせてゐた。

九月の半頃なかごろにでもなつたら一度そちらまで行きたいなどといつてきてゐたのが、半
すぎて二十日が來ても、鎌倉からはたゞ同じやうなことを繰返してきた。

染崎は戲談じやうだんをいふつもりで、手紙の端にそれはきつとお目出度いことでもあるので
せうなどと書いてやつた。九月の末に彼は東京に歸つてきた。十月に入つてから三枝
から一度鎌倉まで來て戴きたいといふ手紙を寄越した。約束の日に彼は鎌倉にいつて
見た。

秋海棠などの咲いた靜かな門を入つていつて訪たずなふと、丁寧な老婢が玄關に出て來て

「奥さんはお宅ですか。」と訊くと、

「はい。」といつたまゝ、ちよつと襖の蔭に入つていつて此度出て来て、

「どうぞお上りあそばして」といつて、八疊の客座敷に通された。

そこからは一と目に秋寂びた相模灘の風光が見渡された。染崎は煙草を吹かしながら暫く待つてゐると、三枝は苦しさらな片息で座敷へ入つてきた。一と月あまり見なかつた間に眼のまはりが落ち窪んで、血色などもすぐれなかつた。

「よくいらしつて。兄さん私こんなになつてしまつて。」といつて息をつきながら話をつゞけた。

「兄さんが此間手紙にお書きになつたとほり……」と低聲こごゑにいつて、三枝は凝乎じつと疑惑の眼をすゑて染崎の顔を見た。

けれども染崎は心の中で眞實それがどちらであるにしても、結果は彼女の境遇を今よりもつと鞏固に博士の方に惹着けてゆくものだと思ふと、何となく淡い嫉妬とともに、また皮肉な微笑を感じずにはゐられなかつた。

「それはお目出度いです。それであなたの境遇が安定して來ますよ。やつぱり心を迷

「はさないで此のまゝ生涯の覺悟をした方がいゝです。」

「随分のんきねえ。兄さんは獨り何の責任もなくつていゝ。女は怨むやうにいつて、淋しい微笑を洩らした。(をはり)」

小

猫

私は、まだ子供を持つたことがありませんから子供を亡くした時の心持も経験しませんでした、もし子供があつて、死なれでもしたら、あゝもあらうかと思ふやうな悲しい心持になつたことが一度ございます。

私は神経質的に非常に情深い性質だと言ふことは何うしても争はれません。それは自分を賞めていふのでも貶していふのでもない、ありのまゝがさうなのです。

私は一度可愛い小猫がフトゐなくなつたので、それから急に氣病みがしたやうになつて、七日ばかりといふもの、猫のことを思ひ續けて泣いてばかりゐたことがございました。さうしてその時私は自分には子供がないけれど、成程子供に死なれた親の心持は斯ういふものであらうかと思つたのでした。

私の友人が猫を飼つてゐました。それが四匹か五匹子を生んだのでした。友人も猫煩惱の男でしたから、親と一緒にそれを可愛がつて育てゝゐました。障子を破らうが、疊を引搔かうが、そんなことは一向構はないで何時も家の中を五六匹の猫がぞろぞろ歩いてゐました。

私はその中で一番毛並の好い、尾しっぽの餘り長くない、まだ眼の見えぬ時分からムク

ムクと肥つた雄兒を貰ふことに約束して、なるたけ乳は長く吞ましたがよからうと言つて、大きくなるまで矢張り親の傍に置いて置いときました。

けれども四匹も五匹もの小猫が段々大きくなるにつけ、餘りに悪戯が烈しくなるものですから流石の友人も、

「早く連れて行つてくれ。遣りきれない。」

と言つて、その家の書生が猫を扱ひつけてゐるものですから、元氣で引搔いて仕方のないその雄兒を懐中に入れて私と一緒に、其家からは可成の道程のある私の家まで連れて來てくれました。

そりや活潑な好い猫でした。あばれること／＼、黒い處の多い、丁度頸輪を入れたやうに、頸部の邊りに圓く眞白い斑があつてそれから尾と後足が白くつて、丸く肥つてゐるから丁度熊のやうでした——私は熊が好きです。私は三十幾歳にもなつて、時獨りで愈屈な折などに屢く動物園を見にゆくことがあります、そんな時には何時も熊の前に一番長く立つてゐます。何だか熊とは私遊んでみたいやうな氣がします——私は猫とも遊ぶのです。全く猫を飼つてゐると、私は猫が何人よりも一等好きな

友人なのです。

で、その小猫を妻が「小僧々々」と呼んだのが元で、私も「小僧々々」と呼びますし、さういふと間もなく小僧自身にも分るやうになつて來ました。

よくはしやぐのはしやがないのつて、それはよく暴れました。私達が立つて歩いてゐると、裾に纏れて飛び付いて來るそれを「叱つ！」といふと、サツと飛び退いて、急遽いさむじか向うの方の柱に行つて搔き上る。私がそれを面白がつて追掛けると、直ぐまた逃げ出して、今度は床に私の親父の肖像畫を置いてある、それに行つてその額縁に飛び付く、それから其の壁に凭せ掛けた隙間にソツと隠れる。隠れた奴を片方から追ひ出す、遁げる。遁げるを追ふと、今度は庭の松の樹に行つて搔き上るのぼ、それを下から追ふと、上へくと逃げてゆく。その時此方で忘れたやうに知らん顔をしてゐると、また高い處から段々下りて來て、私の立つてゐる鼻の先の枝を傳うて傍へ挑みに遣つて來ます。あまり枝の先の方へ來ると、落ちさうになるので、小猫は自分の體を持扱ひかねてゐます。その困つてゐるのを見るのが好きでした。

最初の内は、妻が氣を付けて糞をする處を拵へて教へてやりましたが、それでも夜

蒲團の上に小便おしっこをするには困りました。さうすると妻は「よく言つて聞かせねばならぬ」と言つて、その小便の濡れてゐる處へ連れてきて、

「こら！ お前此こ様な行儀けんぎの悪いことをしてはいけないぢやないか。此處へ小便するんぢやないよ。」

と言ひながら、小便に鼻を押付けて置いて、拳固で猫の頭をコツ／＼と叩きました。餘り非道く叩くやうですから、

「そんなに非道くするな。」と私は言ひました。

さういふやうな調子で、一寸でも猫の姿が見えなくなると私は何を置いても大騒ぎして探し廻るのでした。

そんな時には、妻も「直ぐ先刻其處にゐたやうであつたが、どうしたらう。」と言つて、起つて私と一緒に探します。散々尋ねあぐんだ揚句あげく、知らずに閉めて置いた押入れの行李の中の襪くつを入れた上に温々ぬくと丸くなつて、さも好い氣持に寝入り込んでゐる處を發見することがある。さうすると妻が、

「あつ！ 貴下あなた此處にゐましたよ。」と他を探してゐる私を呼んで置いて「これ！ 何

うした？ お前がゐないので心配したぢやないか。ウン？ 温々と寢入つて、良く寢られたか。」と言ひながら、抱へて連れて來ます。さうして疊の上に置くと、小さい身體を長く不恰好に伸して大きな欠伸をします。でもそんな時はその不様なのが厭でした。

そんなに可愛がつてゐる猫の爲に、一遍私も妻も壽命を縮めるやうな思ひをしたことがございました。猫が井戸に陥つたのです。その時くらゐ心配したことはありません。

私達その頃は小石川のある高臺に住んでゐましたが、恐ろしいやうな深い井戸で、お勝手をするのにもそれが第一の難澁でした。

處がその小猫が——親猫ならば幾許動物でも譯が分つてゐますから、そんなことはしますまいが——時々その井戸の井筒の上に這ひ上つて歩いてゐるのです。それを見ると、妻はハラ／＼して先方を吃驚させぬやうに、そつと「小僧々々」と呼びます。さうすると、何でもなく降りてまゐります。

さうしてゐると、何日か私達晝飯を食べてゐると、突然に何とも言へない汚い聲を

蒲團の上に小便おしっこをするには困りました。さうすると妻は「よく言つて聞かせねばならぬ」と言つて、その小便の濡れてゐる處へ連れてきて、

「こら！ お前此こゝ様な行儀ぐんの悪いことをしてはいけないぢやないか。此處へ小便するんぢやないよ。」

と言ひながら、小便に鼻を押付けて置いて、拳固で猫の頭をコツ／＼と叩きました。餘り非道く叩くやうですから、

「そんなに非道くするな。」と私は言ひました。

さういふやうな調子で、一寸でも猫の姿が見えなくなると私は何を置いても大騒ぎして探し廻るのでした。

そんな時には、妻も「直ぐ先刻其處にゐたやうであつたが、どうしたらう。」と言つて、起つて私と一緒に探します。散々尋ねあぐんだ揚句あげく、知らずに閉めて置いた押入れの行李の中の襪わくを入れた上に温ぬく々と丸くなつて、さも好い氣持に寝入り込んでゐる處を發見することがある。さうすると妻が、

「あつ！ 貴下あなた此處にゐましたよ。」と他を探してゐる私を呼んで置いて「これ！ 何

うした？ お前がゐないので心配したぢやないか。ウン？ 温々と寝入つて、良く寝られたか。」と言ひながら、抱へて連れて來ます。さうして疊の上に置くと、小さい身體を長く不恰好に伸して大きな欠伸をします。でもそんな時はその不様なのが厭でした。

そんなに可愛がつてゐる猫の爲に、一遍私も妻も壽命を縮めるやうな思ひをしたことがございました。猫が井戸に陥つたのです。その時くらゐ心配したことはありません。

私達その頃は小石川のある高臺に住んでゐましたが、恐ろしいやうな深い井戸で、お勝手をするのにもそれが第一の難澁でした。

處がその小猫が——親猫ならば幾許動物でも譯が分つてゐますから、そんなことはしますまいが——時々その井戸の井筒の上に這ひ上つて歩いてゐるのです。それを見ると、妻はハラ／＼して先方を吃驚させぬやうに、そつと「小僧々々」と呼びます。さうすると、何でもなく降りてまゐります。

さうしてゐると、何日か私達晝飯を食べてゐると、突然に何とも言へない汚い聲を

出して猫の泣くのが耳に入りました。

妻は早くもそれを聞付けて、御飯を口にしながら、

「アツ？ 猫が井戸に陥つたんだ。」と、ヒステリカルに言つて、ガタリと茶碗と箸とを食卓の上に置いて「私一度は此様ことがあるに違ひないと思つてゐた……」と言ひ言ひ板の間から飛び出して井戸の方に駆けました。私も續いて出ました。

底の方を透して見ると、案の定、猫が陥つてゐる、併し不思議に水の中には落ちてゐません。御承知の通り大抵の井戸は上の方に桶側を一つ入れて、その下は赤土で固めて、それからまだずうつと底の方の水のある邊に行つて桶側を入れてある。それ故水と殆んど一緒になつた桶側の縁の處と、その外側の赤土の處とに狭い段が一周り出來てゐます。でも丁度其處の處へ上手く落ちてゐたのです。可哀さうに、其處へ這ひつくばつて、呼吸が切れさうな聲で泣いてゐるのです。水際まで二丈はたつぷりあるのですから何うすることも出來ません。

私達は井筒に取付いて、遠くの底を覗き込んだなり思案に暮れました。

猫は火の付いたやうな聲を揚げて泣き頻つてゐる。

「貴方、何うしたら好いでせう」

「……私は何とも返事が出来ません。」

「井戸屋を呼んで來なければなりませんまいか。」

「井戸屋を呼んで來たつて仕方があるまい。何うしたらよからう、本當に困つたなア。」

「貴方、このまゝにしてゐたら、死んで了ひますよ。」

「ウム！ 早く何うかしなければならん。困つたなア。何うしよう。」

二人は泣くやうな聲を出して氣を揉みました。

「あれ御覽なさい。貴方、あんなにして泣いてゐる。……ぢつとしてお出で、今直ぐ上げてあげるから……お前がこんな處を歩くから悪いんぢやないか！」妻は悲しい聲を出して猫に理解わかるやうに叫びました。

「井戸屋に行つたら好い分別があるだらうけれど、そんなにしなくつても何うかならないかなア。」

と、言ひながら、試みに釣瓶を動かして猫の方に寄せて見たが、泣いてゐるばかりで、一向、その方は氣を付けようとしません。それから、ぢや待て待て斯うして見

ようと言つて、今度は長い物干し竿を二本繼いでその尖に容易に猫が取り着くことが出来るやうにと思つて、座蒲團を巻付けて、猫の傍に遣つて見ました。けれどもそれにも何うもしないで矢張り知らん顔で泣き續けて居ます。

「困つたなア！ 何うしよう。」

「何うしたら可いでせう。」

唯、空しく凝乎ちつと見てみると、猫の生命は刻一刻に迫つて来るやうで、私達もちつとしておられませんか。貴方は、其そん様な時に何うしたら無難に猫を救ひ上げることが出来ると思はれます？

「アツ！ 好い分別がある！」と、私は覺えず膝を叩きました。私は急遽いそなり座敷に駆け戻つて、押入れを開け、古雑誌を入れてある行李を取出して、そのまゝ倒さまに座敷に引きあげ、其處にある細引を取つて行李を十文字に吊りました。

「おい！ 斯うしたら何うだらう？」と言ひく、私はそれを提げて、井戸邊に來ました。

それから、それをスル／＼と、細引を手繰つて井戸の底に下ろして、ぢつと猫の方に寄せました。——井戸は圓い、行李は長方形ですから、私は行李の幅の短い方を井戸側に當てました。でないと、猫と行李との間に間隔が多く出来ますから——

よく猫は犬に比べて馬鹿な物だと言ひますけれど、猫——寧ろ動物の本能性と申すものも、さう馬鹿なものぢやありませんねえ。さうして行李を側に近寄せますと、今までどんなことをして見せても、素知らん顔で泣き叫んでゐました小猫が、行李を井戸側にピタリと着けるや否やバタと泣き静まつて、直に行李の中に這入つて、さも恐れ怯えたものゝやうに小さい四つの足を心持ち踏ん張つて、眞中に丁度平蜘蛛のやうにペツタリ匍伏しました。

それを上から覗いて見てゐる私達は、急に氣が軽くなつたやうで、

「あッ！ 這入る／＼！」

「巧く這入つた。いくら畜生でも、これならば這入つても大丈夫だといふ見分けがつかから感心だ。」

さう言ひながら引き上げました。

らつ、い、寢入つて了ひます。それから一ト寢入りぐつすり熟睡して今度目を覺ますと、猫は屹度袖から出て来て、私の褥の上に寢てゐます。それが何だか寢返りをする時に壓潰しさうで氣になるものですから、私も半寢入りながらに、靜つと足で裾の方へ押し遣るやうにすると、軟い毛が暖々ぬくぬくとしてゐて、丸く團子のやうになつて前後も知らず寢入つてゐるのが、生きた物ではないやうに、順直すなはに足に押されながら裾の方へ事もなくすつと行くのです。

それから私が、も一と寢入りして今度心地好く目を覺ますと、最早夜が夙に明けてゐて、小猫は定つて私の夜着の天鷲の襟の上に来て、直ぐ鼻の眞上の處にまた丸くなつてゐる。此方が眼を覺したのに氣が付くと、ニヤアと言ひながら、上から軟かな手で私の顔を撫でるのです。猫の嫌ひな人はこんな事をされては到底耐忍がまんしてゐられませんが、私は嫌ひでないから、好い心地がするのです。私より早く起きてゐる妻の言ふのでは、猫はいつも私を起さうと思つて襟の上で暫く泣いてゐるが、それでも私が目を覺さないと自分も其處にそのまゝまた丸くなつて寢入るのださうです。

私の出てゆく時分にも後を追ひましたが、外から歸つて來た時にも私の足音を聞き

つけてどんな奥の方や物蔭で遊んでゐても、屹度駈出して玄關に来てニヤアと言ひます。それが丁度「貴方がゐないので私遊ぶのに困つてゐた。」と言ひさうなのです。妻は言つてゐました。「大抵貴方の足音は知つてゐるやうですが、それでも何うかして知らない人が來たのだと、玄關でフウー！と言つて背を高くしてゐますよ。」

そんなにしてゐる猫が、——その歳の十二月の確かに十日でした。ヒュー／＼木枯の吹きすさむ雨氣を帯びた厭な日でした。がその時も私は外に用事があつて、午後には家を出ました。猫は例の通り後を追うて門の外に駈けて來ました。處がその時分の私の住居の直ぐ崖下が大きな池のあつた跡の窪地の原つぱになつてゐて、水草などが蓬と繁茂つてゐました。其處を涉つて往來に出るのです。私が向うの道に上つて後を振り向きますと、小猫は崖の草つ原の中にて、遠く私の方を見ながら頻りに戀しがつて泣いてゐました。けれども門の外からその邊までは毎時も駈け出るのでから獨りで家に戻るであらうと思つて私は氣にもせず行きましたが、その時、妻も家で何かしてゐたのでせう。

それから夕暮方に私は戻つて來ましたが、つい猫のことを忘れてゐました。すると

全く暮れ果てゝも何時もその時分には見える猫の姿が見えませんが。

「おい、猫はどうした。」

「さうですね、何うしたでせう。」

それから、また押入れにでも這入つて寝込でゐるのであらうと思つて、いろ／＼探して見ましたが見付かりません。加之、時刻が何うしても家に居さへすれば、出て来なければならぬ時刻なのです。

私は急に何とも言へない可哀さうな、淋しい氣持がして来て、それでも今にニヤア！と言つて何處からか出て來はしないかと思はれて、何度も空耳を立てました。さうして何卒出て來て呉れるやうに祈りました。で、その夜寢るまで、

「何うしたらうなあ？ あの時、外に出た切り家に歸らなかつたかも知れぬ。さうして他を歩き廻つてゐる内に、道に迷うて、遂々迷ひ猫になつたのかも知れぬ。この邊にはよく猫捕りが來るといふから、猫捕りに捕られたのかも知れぬ。それとも、知らぬ處をウロ／＼してゐる内に、可愛い猫だと言つて猫の好きな者が連れて行つたのかも分らない、それならば好い。」

妻と二人で此様なことを言つて、私が晝過ぎ出て行つた時分のことから、その時妻は家にゐて何うしてゐた、あの時はあゝであつた、斯うであつたと繰返して猫の見えなくなつた時分のことを空しく想ひ出して見ました。

さうして、よもやに引かされて歸るのを待ち心地に十二時過るまで起きてゐましたが、遂に戻つて來ませんでした。寢てからも例の通り夜着の袖に入れるものがございませぬから、私は寂しくなつて遣る瀬がありません。

「可哀さうに、皮剥ぎに捕まつて剝がれたかも知れぬ。あんなにピン／＼跳ね廻つてゐたものが、剝がれて仕舞へば、最早幾許いくら経つたつて歸りつこはない。」

かう思ふと、晝間われ／＼が氣を許して、一寸油断をしたのが悪かつたのだ。可哀さうなことをした。

こんなことが、止め度もなく思はれて、私は、

「猫がゐない！ 猫がゐない。」と、夜着の中に頭を隠して泣きました。

妻は、「居なくなつたものは仕方がない。それが畜生の本性だから。」と言つて、サラサラと諦めてゐました。が餘りに私が本氣になつて猫を悲しみますので、寢ながら、

「それでも夜が明けたらヒョッコリ戻つて来るかも知れない。」と氣安めを言ひました。私は晩に暮れてからゐなくなつたのなら兎に角、晝間から見えなくなつたものが、夜が明けたからつて、何うして歸つて來るといはれよう？　と思ひましたが、それでも、また慾目で、朝になつたら出てくるかも知れぬと空頼みをしました。

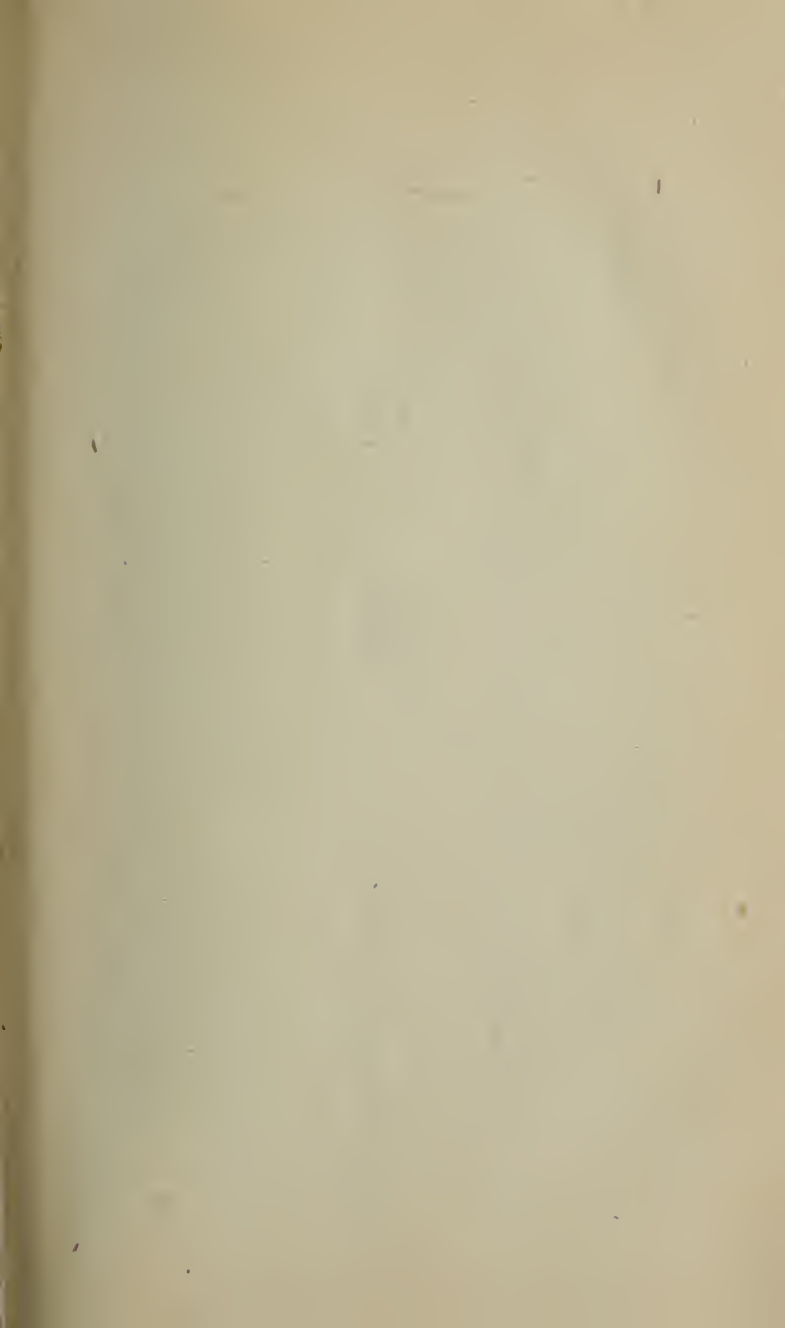
けれども、翌朝になつても遂に歸りませんでした。永久にあの時、私の後を追つて泣いてゐたきり姿は見えませんでした。

私はその後十日ばかり、寂しくつて、可哀さうで、何も面白くなかつて、夜寢ては夜着を被つて泣きました。妻は何とも思つてゐないばかりか、私が泣くのを冷やかしましたから、私は掌で以てなぐつてやりました。

それから後、神樂坂を通ることがあつて、寒い時分のことですから、毘沙門の前に夜店で、猫の皮を晒した襟巻を澤山賣つてゐるのを見まして、私は、「あゝ家の猫も此様なにされたのだらう。」と、立ち止まつて、よく見るとその中に何だか其の猫に酷く似た毛色があるやうな氣がしました。

苦

海



田原老人は、その晩は晝間の疲れに、夕刊をも碌に讀まず、毎時いっしょより早く寢に就いた。そして三時間ばかりも眠つたと思ふ頃ふと眼が覺めた。夜半に眼が覺めて小用に起つのは、この一二年來ことに目立つてきた毎夜の習慣で、田原は、それを意識して、それが老境に入つて來た生理的の自然の經過であらうか、さうすれば、自分が若い時、屢々老人から、年寄りには便所に近いとこぼすのを聞いてゐた、その老境に入つて來た、退引のつびきならぬ運命であると觀念するのほかはないのである。

大分びろろの話になるが、田原老人は、小便に眼が覺めるばかりではない。もう二十歳ばかりの若い頃から消化器の慢性病で、ことに便通が不規則であつた。それが、この一二年、ことに腸の機能が一層衰弱してゐると思はれて、四六時中常に頻繁に便意を催してゐるのである。

それで田原老人は、時々思つてみるのである。便通は習慣でもあるから、自分のヤ

うな、若い時から、一定した通勤の業務をもつてゐなかつた者が、得てこんな不規則な習慣になり易いのはあるまいか。しかし、それはどちらにしても、田原老人は、夜半になるときまつて便意を催すのである。

それで彼は、夜は便器をいつも自分の寢室に用意して置いた。

眼が覺めてみると、今夜は、たゞ便意を催してゐるばかりでない、腰から脚の方が、まるで足搔きもならぬほどにだるくて重いことに氣がついた。そのために眼が覺めたのである。

昨日の晝間めづらしく五月の天氣が好いのに浮かれて、よせばいゝのに、老人の癖に、まだ血氣な者同様のつもりで立川で天覽に供する飛行機演習が催されるときいて、それを觀に行つて、一日、照る日の下で、桑圃を涉り歩いたり、人込みに採まれたりして、晩方がつかり疲れて戻つて來た。その過度の疲勞が今だん／＼身に徹へて來たのである。

田原老人は、又しても、その輕はずみであつたことを悔いた。それといひ、これといひ、肉體の衰へを痛切に意識するとともに、何とも名狀することの出來ぬ、寢ざめ

の悲哀の感情が、眞暗闇から襲ひかゝつて來る惡魔のやうに、ひた／＼と胸に迫つて來た。

田原老人は、以前から、寢起きの悲哀に襲はれることが、度々あつた。それは、夜半眠の覺めた時に限らず、晝寢から覺めた時でも、どうかすると、そんなことがあつたが、ことにこの頃の夜半にそれが頻繁になつた。

どういふわけで、近ごろ又かう厭な哀愁に襲はれるのであらうかと、その度考へてみるのである。それは實質的に悲哀に身を苛まれるほどの事が、現在降りかゝつてゐるのか。有るといへば、ないこともない。老境に入つて生活の安定をえてゐない。これほど悲惨なことはない。これから先どうして生きて行くか。勿論自分一人だけでは、ない。たつた四人きりの少家族であるが孫といひたい子供がある。それ等を育てながら、自分の老後を養はなければならぬ。まだ／＼今から十年ばかり前までは、やつぱり、そんな寢ざめの悲しみに襲はれることがあつても、それは、單に生活の不如意とか、仕事の上の不満とかいつたことばかりでなく、思つてゐる女が自分の物にならぬとかいつたやうなことにも原因してゐたし、まだ精神的にも肉體的にも生活力が盛で

あつたために、いつとはなしに癒えてしまつた。だが、今日となつては、自然的に癒やす力が、身體の何處にも残つてゐないやうな氣がする。

(どうも厭な心地だ。それとも神経衰弱のためにヒポコンデリイに罹つてゐるのであらうか。それにしても、神経衰弱になるには、なるだけの原因がなくてはならぬ。それは、やつぱり生活の脅威である。)

田原は枕の上で頭振りをふつて、心地の悪い、悲しい氣持を拂ひ退けようとした。さうすると、段々意識が冴えて來て、はかない佗しさは、いくらか消散したが、眼はすつかり覺めてしまつた。模糊とした感情は明かな理性に場を譲つてしまつた。

(なに、今の魔性の物のやうに襲ひかゝつて來る悲しみに負けてゐてはならぬツ。)

田原は、つとめて氣に張りを持たうとした。しかし、まだく夜が深い。もつと寝なければ又明日困る。そして、眠らうとすればするほど眠られない。種々な事が、それからそれへと聯想は聯想を生じて、苦になつて來る。

(又、子供が夜具を踏み脱いで居りはせぬか。)

腦の悪い母親が、自分の方でもいぎたなく寝入りこんで、子供が疊の上に轉げ出て

ゐることが、よくあるので、田原は眠られぬまゝに、つと起上つて、廊下を、そつちの寢室に入つてみた。

いゝあんばいに、子供も母親も夜具を着て寝てゐる。子供は二人とも枕は遠くに放り出して、敷ぶとんのふちに、頭をぶら下げるやうな恰好をして、前後も知らず眠つてゐる。

田原老人は、その枕邊にしやがんで、二人の寢顔をじつと見守り、皮膚の血色までがよく似てゐると思つて、そうつと頬べたの皮を摘んでみたり、靜かな音立てゝゐる寢息に聞入つたりしてゐた。頭が垂れて、頸部が長く伸びてゐるので、何か、そこに不安な氣分が、たゞようてゐるやうな心地がする。腦の悪い母親が、不意に夢魔に襲はれて、がばと跳ね起きて、この細い頸部に斬り付けるか。そこらに、だらしなく散つてゐる細紐で絞めはせぬか。……そんなことを思つてゐると、さういふ自分が、それを遂行しさうな氣がする。絶えず新聞に書かれてゐる生活苦の親子心中が、やがて自分達の上にも襲うて來る運命であるやうに思へてならぬ。

田原は、何時までも、子供の寢顔のところを見てゐるのが恐ろしいやうな心地がし

て、そうつと、もう一遍母親の寝てゐる顔を眺めて、(まさかそんなことはあるまい)とつとめて安心しながら、又自分の寢室に戻つて來た。

田原老人は、近年殊に件數の多くなつたやうに思はれる親子心中といふことに、少からぬ關心をもつて、それを環境の因縁と、個人的の心理の狀況とから科學的に研究して、もし、さういふ悲惨な運命を防止し救治する參考の一端にもと、新聞を切抜いたりしてゐるのであるが、その悲惨なる出來事の個々の現實に深く立入つて研究するには、とても片手間仕事には出來ないことだと、今はそのまゝ差置いてゐた。

親が生活能力なきため、世をはかなんで、子供を殺して置いて自分も死ぬといふ、これくらゐ悲惨なことが世にあらうか。親が子を愛する情が切なれば切なるほど、自分が嘗めて來た現世の苦味を、可愛い子供等には嘗めさせたくない。自分だけ死んで無情冷酷なる人の世に、生ひ先永い子供を残して置くことは心もとない限りである。親子もろ共生命を斷つのが眞の愛か。或は自分は死んでも若い生命はそのまゝ残しておくのが眞の愛情か、いづれを偽りの愛情とはいひ切れないが、若い生命を斷つ親の心はいくら悲しんでも悲しみ足りない。

田原は、迂濶にしてゐると、自分達の運命が、今にもそれと同じ運命になりはせぬかといふやうに思はれて爲方がなかつた。

數年前死んだ、田原もよく知つてゐた某氏の子息が發作的狂躁症とかで松澤病院に入院して居り、それが生涯不治の病氣であつて、しかも肉體は人並すぐれて強壯である。月々の入院費も相當の額である。父君は亡くなり、母なる人がそんな痴呆な子を抱へて心勞をつゞけてゐるのだといふことを噂に聞いて、田原は慄然として恐れた。それだけの經費を、これから先永い一生涯つゞけて仕拂つてゆかねばならぬことも家族にとつては非常な犠牲であるが、順序からいへば母なる人もいづれは、自分がその子よりも先に死んでゆかねばならぬのである。國家的見地から優生學の理法をつきつめて行くなら、こんな子こそ國家の手で英斷を下すべきだらうが、母なる人の心になつてみれば、なか／＼そんな思ひ切つたことは出来ないであらう。

田原は、父なる人をよく知つてゐたので、その話を聞いた時ひどく身につまされて感じた。その人は、彼自身立志傳中の人であつたが、自分の幼年の頃の没落した貧乏士族の慘めな家庭の事を折々話してゐた。そして、その人の死んだ後が又そのとほ

りの不幸である。してみれば、人の世には、冬のみが多くつゞいて、春は少いと思はれる。

そんなことが、その夜も、後からあとから考へられた。それを轉換するために、田原は、枕頭に重ねて置く書籍を抜き取つて、讀みはじめた。そして三十分ばかりも讀んでゐるうちに、先刻からの頭の疲れが出て、いつしか、とろ／＼と眠くなつた。

二

翌朝田原老人は、いつもより遅くまで眠つてゐて、眼の覺めたのは七時を三十分も過ぎてゐた。夜半に二三時間も眼が冴えてしまつたが、曉方になつて、ぐつすり眠つてしまつたのだ。それでも、まだ睡眠が足りないのか、頭に耐力がないやうな心地がしてゐる。

家の中が、ひっそりしてゐるところを見ると、子供達は、もう學校に行つたと思はれる。毎朝定つて、子供が學校に出てゆく前の一と騒ぎに安眠を妨げられるのである。

が、今朝はそれも知らずにゐた。

そして段々眼が醒めて來ると、その次に念頭に浮かんで來たのは、生命保險の保險料のことであつた。まだ五分の一ほどの金がどうしても足りない。最後のぎり／＼の期日は、明後日——七日までといふことになつてゐるのだが、その七日は丁度日曜である。日曜は、會社の方でその日だけ一日延期にしてくれるから、どうあつても八日までには調達しなければならぬ。今日は五日で金曜、明日は土曜である。今日と明日との二日中に、何とか用意しなければならぬ。だがもう何度考へ直してみても融通の付きさうな心當りはない。

田原老人は、その日午前中家にゐて、思案してみたが、さりとしてそのまゝ家にじつとしてゐたのでは、何處からも金を貸さうとも遣らうともいつて來るものはない。犬も歩けば棒に中る。外に出掛けて何とかしなければならぬ。衣類があれば、質に置いて、それだけの金をこしらへるのだが、それはもう一昨年（一）の十月に、やつぱり同じ必要から、不足の分だけ、まとめて質に入れて調（二）へた。

質屋は、田原老人がまだ、青年であつた時代だから、今から三十五六年も昔からの

金融機關で、ずつと二十何年といふ長い間質屋との縁は、何かしら絶えず出入りして續いてゐたが、十年ばかり前から、ずつかり縁が切れて、利子がどのくらゐに付くものであつたといふことも忘れてゐた。それが、一般に世間の不況と田原老人の職業上の情況とで、じり／＼と生活を襲ひ、もう／＼石に嚙りついても質屋の暖簾はくゞらないと堅く心に誓つてゐたのが、どうしても爲方なくなつて、十年以來絶縁した質屋とまた關係が出来てしまつた。

田原も青年から壯年の頃までは、一向そんなことは平氣で、ことに獨り者の風來坊であつた彼は、少し高い倉敷料を拂ふくらゐに考へて、生なか下宿屋に置いとくよりも氣樂なつもりでゐたが、今の田原老人の身になつて風呂敷を抱へて質屋通ひは、自分の姿を他人の姿に思ひ替へて見る時一入ひとしほの慘めであつた。今は箆笥ひしほの中が空になつてゐる。

そのうち、ふつと氣がついてみると、今日は、五月の五日である。お節句だ。自分は、今から五十八年前の、宵節句に生れたのだといふことを、死んだ母から時々聽かされてゐた。本當なら誕生を祝ふ日であるがと思ひながら、田原老人は、午前中机の

前に坐つて考へてゐたが、段々時刻は移るばかりだ。今日明日の中に何とかしなければ間に合はない。

(いつそ保険の蓄積を放棄してしまふか？……)と、思つてみるのだが、この頃時々ある。

と、一方、そんな觀念が、ふと崩したのに怯えるやうな、暗い不安を彼は感じた。

自分が生きてゐてさへ、かうして東京に出る電車代にも困ることがあるのに、今死んでしまつたら、明日から遺族は早速途方に迷ふだらう。第一自分のお葬式も出せない、お葬式はどうでもいゝにしても、出せない。

田原老人は、柳に雪折れなしで、その年になつても、まだ今日明日病で死ぬやうな氣もしなかつたが、この交通の危険な東京に住んでゐて、何時、うつかり奇禍に遭はないとも限らない。この間も新聞を見てゐると、日比谷公園脇の道路で、區裁判所の門から出て來た四十恰好の紳士風の男が、朝の十時頃自動車に跳ね飛ばされて、道の脇の下水溝に落ちて即死した。と夕刊に出てゐたが、翌日の朝刊には、その氣の毒な人は、駒込邊の齒科醫で、借金のために、家財を競賣に附せられることになり、その

執行猶豫を請求にその朝區裁判所に出頭して、猶豫は受附けられたが、出て戻るところを自動車にやられたものであつた。

田原老人は、その記事を眼に留めて、知らぬ人のことゝはいひながら、黯然として胸が潰れる思ひがした。そして、それが自分の姿のやうに思はれた。貧に追はれて、頭が大分ぼやけてしまひ、自動車や電車の右往左往する市中の危険路を、うろろ歩ひろひあるいてゐるとき、きつとそんな運命に遭遇する。

こんな時市中を出歩いてゐると、きつとやられる。田原老人は、さて出て行くのも恐くなつた。

しかし保険の事もやつぱし放つてはおけない。

四十を大分過ぎるまで、もう一生獨身と決めてゐた田原が、五十近くにもなつて、運命の神の惡戯いたづらから孫のやうな子供を一年おいて二人も持ち、それまでは考へもしなかつた生命保険といふことを考へ出したのは、まるで泥坊を捕へて繩をなふ嘲りを免かれない沙汰であるが、田原が今の自分の収入に比較して不相應な生命保険を契約したのは、すこしインチキともいへないが、實のところ今日まで自分は生きてゐない

と思つたのであつた。

初め、契約の時に保險會社の物馴れた外交員が來た時、田原は笑つて、

「どうせ會社の方が損害ですよ。私は、五年とも生きませんから。」

といつてゐた。これから先五年くらゐは、まだ、どうかかうかして保險料を調達することが出来るかも知れん。しかし、十年も二十年も續いたら、とても拂ひ切れない。多分その間には死ぬだらうくらゐに考へてゐた。ところが、それから七年になつたが、まだ死にもしないで、保險料は愚か、その日の生計にも追はれてゐる始末である。

保險の中でも、田原老人の契約してゐるのは、養老といふのではなく、終身といふやつである。料金の拂込は二十年満期であるが、そして利益の配當が附くので、拂込率は五年目毎に遞減して來るのであるが、満期が來ても、被保險者の自身が死ななにかぎり金は受取れなかつた。田原老人は自分の生きてゐる間は、たとひ百歳まで生きてもそんなに苦しい思ひをして蓄積した金の顔は見られないのである。これこそ偽りもなく、純眞に、遺族の爲に犠牲になつてゐる次第である。これでは保險魔にもなり

やうがない。

しかし、そんなことに知識のない田原老人は、初めのうちは少しも知らなかつたが、保険金は、借金の形式で何時でも借り出せるものであることを覺えた。それといふのも、初め三四年の間は、半期々々の料金を、どうかかうかして拂込むことが出来たが、四年ほど前から、金の調達が困難になつたところから、會社の係りに相談したところ、借金の形式にて拂込みにすることが出来ることを教へられた。尙ほそればかりか、保険料の拂込みでなく、年利七分餘の利子を前拂ひにして借り出して、使ふことも出来ることを知つた。流石に、田原も、初めのうちは、それだけは敢てしなかつたが後には背に腹は換へられず、段々困つてくるとそんなことまでするやうになり、今日では、七年めか八年め拂つて來てゐるとはいへ、保險會社に借金になつてゐる金高がかなりの額に及んでゐた。だから、もし、この分でいつたら、田原老人自身がいゝ加減の處で死なないかぎり、これからまだ十年も生きてゐたら、折角死後の遺族のために蓄積してゐる金は、老人の息のあるうちに、大半借り出してしまひ、保険料の上に尙ほその利子に追ひ倒される勘定である。

さういふ次第で、今はもう、借りられる最高限度まで借りてゐるので、この上拂込みの形式で借金する餘地はなかつた。やつぱり現金を積まねばならなかつた。

三

とにかく田原は、家にも落着いてゐられないので、その日の午少し前から家を出た。そして近所の停車場まで歩きながら、

(さて、何處へいつてみようかなあ)
と思索した。

(まるで、當てもないが、うむ、まあ、彼處へ一寸寄つてみよう)
それから市ヶ谷までの切符を買つた。市ヶ谷で下車して、驛の前から、近頃出來た日比谷乗合自動車に乗つた。そして麴町の紀尾井町で下車した。その近所に田原老人の縁者の別邸があつた。主人は京都の方に本宅があるのだが、東京にも別宅があつて、時々こちらに出來て來た。

(どうだらう、もう来てゐる時分ではないか。今度は随分来ないやうだ。)

ポーチの處に立つて、ベルを押すと、中から重いドアが開かれて、女中が顔を出して、丁寧な辭儀をした。

「まだ京都からは来ませんか。」

「は、まだお見えになりません。」

「留守の吉井さんは。」

「今朝ほどお出かけになりました。」

「吉井さんの奥さんは？」

「奥さまも、只今一寸お出掛けになりました。」

田原は、そのまゝ玄關から引返して、又表の通からバスに乗つた。

そのバスの往復してゐる沿線は、田原老人にとつて、とても便利であつた。早稲田を起點として、新橋までいつてゐる。田原は、出版などの事で、早稲田にも折々出掛けた。そして榎町のある停留場の近所には、例の小金を融通する處があつた。もすこし此方に來ると、矢來町にエス出版社があつた。そして麴町には今立寄つた京都の縁

者の別邸があつた。その主人に少しまとまつた金の融通を申込んでゐるのだが、容易にうんといはなかつた。

田原はバスに腰を掛けながら、

(さあ、今度は何處にいかうか。)

と思つた。だが、それに乗つてゐると、黙つてゐても内幸町の勸業銀行の前で停車する。そこにビイ雜誌社がある。田原は、前から勸業銀行の貸附課に時々入つて、田舎の方に少し許り持つてゐる不動産を抵當にして金を借りたいと思つてゐるのであるが、その堅實な營業振りでは、思ふほどに貸してくれさうにないので、決行せずにあつた。しかし例の非常時匡救で、少しは貸方が寛裕になりはせぬか、一つ入つて訊いてみようかと思つた。だが、それは明日の急には間に合はぬ。ビイ社では、やつぱり去年の十一月同じ使途で融通してもらつて、やつとこの頃その文債を果したところである。

田原老人は、このバスの交通線が、あまりに自分に便利なのが可笑しいやうでもあり、悲哀でもあつた。彼は、心の中で泣くやうな氣持で、ひとりであつてゐた。

彼は、ともかく習慣的に、その勸業銀行の横で下車したが、向側のビイ社には、さすがに入つてみる勇氣がなかつた。そこを素通りして、自動車の交通を恐れながら、橋を向うに銀座の方に歩いていつた。

そこらに一、二ヶ處、寄つてみようかと思ふ所がないでもなかつたが、どこも二三日で間に合ひさうな處はなかつた。考へかんがへ表通りに出て來た。あてもなく歩いてゐると、ふつとそこの菓子舗に柏餅の竝んでゐるのを見て、

(あ、今日は自分の誕生日のお節句だつた。)

忘れてゐたことを、又思ひ出して、そこに入つて、子供の土産に柏餅を買つた。

四

それから二日間をおいて八日の朝、田原老人は寢床の中で眼を覺すと、

(今日こそ、足りない分の金をこしらへて、おそくも午過ぎには保險會社へゆかねばならぬ。)

と思つた。でも、もうその目處めどが立つてゐるので、昨夜は、ぐつすり熟睡した。寢ざめの心地よさを暫く寢床の上で味はひながら、身體を、あつちこつち寢返して伸びをしてゐた。

子供が騒ぐのを夢うつゝに聞いてゐたが、もう、玄關の方がひつそりしてゐるところをみると、出て行つたらしい。中央線を新宿で山の手線に乗換へて、エビス驛から又乗合自動車に乗つて暫く行かねばならぬので、學校まで自宅から四十分かゝる。そんな遠方の學校へ、しかも經費が餘計かゝる特殊學校へ小學校のうちから通學させるのは、親の要らざる道樂のやうに考へられるので、田原は今でもまだ考へて、いつそ近い處の普通の學校に轉校させようかと思つてみることもあるが、先になつての、いろいろな都合から、やつぱり行きかけた學校へ繼續してやつておく方がいゝとも考へられた。

電車や、バスに、何時、どんな機みで、忌まはしい事故が突發しないものでもないし、ことにラッシュアリアのことゝて、中央線の近所の驛から新宿まで、わづかの距離であるが、いつの電車も、ぎつしり人が詰つてゐた。學級の進むにつれて持ち物の

重くなる背囊を背負つて、大勢の大人の突立つてゐる中に押分けて入るのは、繊弱い女兒には、ひととほりならぬ難儀であつた。新宿まで立通しは毎日のことであつたが、運が悪いと山手線に乗つてからも立つてゐなければならなかつた。

誰も、九歳で、この新學期から三年生になつたとは見てくれない、やつと七八つで初學年としか思はれない次の子など、

「わたし、いつも立つてゐるとランドセルが重くつて、脚が疲れて電車の中でお尻を地べたに置きたくなるのよ。」

と、通學の苦痛を訴へることがある。

「うむ、遠くつていけないな。もつと近い處に變るか。」

田原は、絶えずその事が氣にかゝつてゐた。

顔を洗つて茶の室※の食卓の前に坐ると、そこにはまだ、子供が食事した後の食器がそのまゝになつてゐた。細かいことに氣のつく田原は、小さい飯茶碗に、御飯が殆どそのまゝ食べ残してあるのに眼を留めて、そこに入つて來た女中に、

「これは小さい方の子供が食べ残したのか。」

「え、さうでございます。」

「うむ、：：これで幾つめだ。」

「さあ、二つめでしたか。」

「初めの一ぜんは食べたの？」

「召上つたやうに思ひます。」

「召上つたやうでは心細いな。：：おい、一寸！」

田原は座敷の方で片づけてゐるらしい母親を呼んだ。厠にでも入つてゐるか、返事がない。

暫くしてから又呼んだ。

「おい、一寸！」

「何ですか！」

「何ですかぢやない、用事だ。」

「何です？」

腦の鈍い母親は、言葉だけは、いつも荒々しく、のつそりそこに入つて來た。

「この茶碗の御飯は小さい方のだらう。これは幾つめだ。」

「さあ、三つめが、それでせう。」随分のんきなものだ。

「いや、三つめぢやなからう。今、ねえやは二つめだといつてゐる。お前よく氣を付けてゐなかつたのか。あの子はどうも食欲が少い。ことにこの頃細い。食事の仕つ振りで、大抵身體の調子が良いか悪いかわかるんだ。朝學校へ行く前の食事くらゐ、もつとよくお前が注意してゐなければ、いけないぢやないか。それに顔色も甚だ好くない。この頃通じはどうだ？」

田原は五六日前、まるで血の氣を失つてゐた子供の顔色のことを、又言ひ出した。

「さあ、あるんでせう。」

「あるんでせうぢや、心細い。何を訊いたつて、さうだ。随分長く通じを見ない。もうこの間から通じを見なさいといつてゐるぢやないか。」

「あるといふから、あるんだらうと思つて。」

「あの子が自分にいふことなど當てになるものか。そして、此處にあるヒマシ油を服ましなさいといつてゐるぢやないか。」

田原老人は、顔をしゃくつて、傍の鼠入らずの棚の中のことをいつた。

「ヒマシ油は飾り物ぢやない。一遍通じを見て、いけなかつたら必ず服ましなさいツ。」

田原が一人で喋つてゐる間に、母親は、又、いつもの癖だ、あゝうるさいと、いはぬばかりの顔をして座敷の方に立去つた。

その後で、田原は重ねて女中に向つてくどく訊きなほした。

「二つめかね。：：これが初めのぢやないかね？」

「わたくしが、初めの一つは盛つて上げましたから、これは、その次のだらうと思ひます。召上りかけてぼん／＼が痛いとかいつて、お止めになつたやうでした。」

「なに、ぼん／＼が痛いといつてゐた。そいつは、いけないなあ。やつぱり便通をよく見ないといけない。それで大儀さうにして出ていつたか。」

「いゝえ、學校には、元氣さうにして、上のお嬢さんより先に門を出ていらつしやいました。」

「さうか。まあ、よし。よく御飯の食べつぷりに、お前も氣を付けてくれ。」

やがて田原は軽く朝食を済ますと、すぐ洋服に改めて、九時過ぎに外出した。玄関で靴を履きながら、

「今日は、これからこの間金を借りる約束をしてあるところへ行つて、それからエス社へ廻つて、最後に保險會社について、大抵夕方には歸つて来る。それで先づ一と安心出来るんだ。」

田原老人は溜息を吐くやうな調子でいつて、それでも勢よく玄関を出ていつた。

五

田原が出ていつたあと、妻のおえつは、女中のしづを相手に、冬着の解き物をしてゐた。そして天氣が好いので、解く傍から、それを盥につけて洗濯をしてゐた。

お午餐は有合せで、ざつと済まし、これから又一と仕事と思つてゐるところへ、一時ころ、臺所口の方から、頼み付けの仲屋の若い衆が心配さうな顔を覗けて、
「あの、只今、此方さまのお嬢さんがおいでになつてゐる學校から、お電話が掛つて

まゐりましたんですが、小さいお嬢さんが御加減が悪いさうでして、迎へに来てもらひたいといふ電話ですから、一寸お知らせにまゐりました。」

息急きいつた。

田原の家では、一時取付けた電話が又なくなつたので、子供を頼んで置く學校へ、急用の生じた時には、これ／＼の所へ電話をしてもらふやうにと、長年頼み付けの俵屋の電話番号を書留めて置いてもらつた。

おえつは、先づ胸を打たれながら、そちらに立つていつて、

「あゝさうでしたか。それはどうもお世話さまでした。」

「いつたが、主人は生憎留守である。自分が迎へにいつては、連れて戻るまでの用意をして置くことが出来ない。女中は一週間ばかり前に來たばかりの田舎者で、どちらにしても勝手がわからない。咄嗟の思案で、

「濟みませんが、御苦勞ついでにあんた迎へにいつてもらへませんか。そして自動車に載せて連れて歸つて下さい。」

「あゝさうですか。へい、畏りました。ぢやこれからすぐまゐります。」

「どうぞ頼みます。ほんとに御苦勞さまですねえ。こゝに電車代を。」

「いえ、ようございます。一緒に頂きますから。」

若い衆はもう行きかけた。

「あの、自動車の代はこちらに来てから拂ひますから。」

「へい〜。」

若い衆が急ぎ足に出ていつてから、後あとでおえつは、全く途方に暮れてしまった。

不斷から内では臺所の小遣錢にも不自由をしてゐるのであるが、ことに今日は、保険料を拂ふために、皆みな浚さらひ持つていつてしまった。出先は分つてゐるやうな、ゐないやうな、何處にゐるか分らない。でも、牛込の 에스社に電話で訊いてみたら、もしか居りはせぬかといふことに、おえつの顛倒した頭では氣が付かなかつた。

病氣の程度も分らない。この前、去年の冬の初めであつたか、上の方の子が病氣になつたといつて、學校の先生がわざ／＼自動車で連れて來てくれたことがあつたが、その時は、唯腦貧血でも起したのであつたか、翌日は、もうよくなつて學校にいつた。そのくらゐであつてくれれば、いふことはないが。

(どちらにしても、内に今五拾錢の錢もない。どうしよう。)

彼女は、若い頃まで親の家に居る時から貧しい暮しをして來たが、まだ風呂敷包みを抱へて暖簾をくぐることを知らなかつた。氣の弱い彼女は、非常時の勇氣を出した。何處かそこらの電柱にペンキで廣告してあつた、そんな店のことを思ひ起した。早速箆笥の中から當座不用の冬物を二三枚取り出して風呂敷に包み、それを抱へて下の新開地の方に出ていつた。そして泥溝端に沿うて向うにゆくと、ところ／＼に、そつちへ導いて行くやうに廣告がしてあつた。五六町もいつて、近い處に來ると、指さしをしてゐる形が書いてあつた。

其處で間に合ふだけの金を借りて戻り、女中に寢床を敷かして、今に歸つて來るかと待つてゐたが、一時間はどうに過ぎ、二時間たつても戻つて來ない。

彼女は時計ばかり見て氣を揉んでゐた。これから迎へに出ていつても、行きちがひになるし、

「どうしたんだらう。」

獨言のやうに、つぶやいた。

「わたしお迎へに行つてまゐりませうか。」

「さうねえ……でも、もう歸るでせうから。もう、とつくに二時間を過ぎたのに。」

「今朝出ておいでになる時は、飛ぶやうにしてお出掛けになつたのですが。どうなすつたのでせう？」

「學校が遠いからねえ、こんな時に餘計に心配しなければならぬ……まだ見えないかなあ。」

おえつは、心が落着かぬやうに、又しても玄關の處に立ち出て、そこの横町から眞直ぐに見通しになつてゐる向うの通りの方を見た。自動車は、その表の通までしか入つて來ないのである。

それから尙ほ二十分も經つて、又玄關のところから見てみると、やつと自動車が止り、先刻さつきの若い衆が子供を横抱きにして連れて來るのが見えた。大きい方も附いて一緒に戻つて來たところを見ると、どうも一通り悪いのでないらしい。

おえつも、女中のしづも門の外まで出ていつた。

「只今、……どうも遅くなりました。」

俵屋は向うの方から聲を掛けながら、段々近づいて来て、

「何ですか大分お悪いやうです。ひどくお吐きになつたさうですから。」

「どうも御苦勞さまでございました。……さうですか。……これ、みつちゃん、どうしたの？」

いひながら、つと傍に寄つて見ると、顔はまるで土の様になつて、血の色とてはない。聲を掛けても眼を瞑つてしまつて、うんともすんともいはない。

「私も、なるたけ速くお連れして來ようと思ひましたんですが、自動車のなるたけ好いのをと思ひまして、ハイアのある處は分りませす、流して來るのを待つて居りましたが、それが、又なか／＼やつて來なかつたもんですから。……そして、お身體に障るといけないと思つて、運轉手にさういつて、あまり急いで走らせませんでしたから、どうも遅くなりました。」

おえつは、玄關で子供を抱き取りながら、

「あゝ、さうでしたか、どうも御苦勞さまでした。……これ、みつちゃん、どうしたの？」

見ると、身體はぐたりとなつて、時々見開く眼は、黒瞳は上瞼の奥に隠れてしまつて、あんぐり中開きにした口から引く息ばかりが聞えてゐる。(これは、ちつとの病氣ではない。)急いで寢床の上に抱いて來て、そうつと寢かせ脈、額や手頸に觸つてみると、燃えるやうである。脈もひどく速い。

「これは大分悪い。どうして、急にこんなに悪くなつたのだらう。朝は何ともなかつたねえ。」

女中のしづも傍に附いてゐて、

「えゝ、とてもお元氣でした。：：でも、ぼん／＼が痛いとか仰有つて、二せんめは、ちよつと箸をおつけになつただけでした。」

「とにかく、すぐお醫者さんにいつて頂戴。しづは、よく知らないから、ゆり子ちゃんも一緒にいつて。先生おいでしたら、すぐおいでをねがひますといつて、大急ぎで行つて來て下さい。」

女中と上の子供とを醫者に急がした。

その後でおえつは、水枕をあてたり、檢温器を挿んでみたりした。ある／＼熱は三

十九度五分まで昇つてゐる。彼女は上の子も憎い筈はなかつたが、下の子の方が、餘計に可愛かつた。上の子が、もつと小さい時から、父親の方に餘計馴なつ附いて、動もすれば、母親を批評的に見ようとするのに、小さい方は、そんなことは微塵もなく、母親が、どんな醜い容姿であらうとも、動作が粗野で言葉づかひが、ぞんざいであらうとも、そんなことは超越して母親といふものを絶對、無條件に慕うてゐた。その子は母親とならば、どんないぶせき九尺二間の裏屋住ひにでも一緒にゐるであらうと思はれた。

病兒は、もう死んだやうになつて、たゞ時々、物憂さうに生欠伸をするだけである。「これ、みづちゃん、しつかりしてゐるんですよ。」おえつは、死んで行く者を呼び留めるやうな氣で、時々聲を掛けて氣を附けると、子供は大儀さうに、黒瞳の隠れた白い眼を一寸見開くが、あとは、すぐ又昏々と眠つてしまふ。

そこへ、醫者にいつた女中が歸つて來た。

「あの、お醫者さん只今外にお出掛けでお留守でございました。」

「はあ、：：ぢや往診にでも出ていつてゐるんでせう。何時頃お歸りになるともいは

なかつたかねえ。」

「えゝ、何とも、それは聞きませんでした。」

「困つたなあ！」

おえつは、ひとりで溜息を吐いた。このまゝ、ぐづくしてゐる内にも病兒は^{ことごと}穢切れさうである。今年の一月にも、上の子供が夕方、遅くなつて學校から病氣だといつて戻つて來て、醫者を迎へにいつたら、夜の十一時になつて、やつと來てくれた。そして、ヂフテリヤであることが分つた。も少しで手遅れになるところであつた。又、そんなことがあつては困る。

「こんなに悪いんだからねえ。」

「何處か他のお醫者へいつてみませうか。」

「さうだねえ。」

醫者はそこらに幾らでもあつた。

すると傍にゐた、上の子供が、口を出して、

「その江口さんの榮子さん、もう先に^{せん}疫痢になつて、交番の前の秋田さんに診ても

らつて、良くなつたんだ。あの秋田さんはどう、江口さんでは、いつも秋田さんよ。」
なるほど、さういへば去年の秋時分、筋向うの江口さんの小さい女の兒が、そんな
ことがあつて、避病院に入つて全快して戻つたといふことを、やつぱり子供達から聞
いたことがあつた。

「わたし一寸秋田さんへ行つて来るからね、よく氣を付けてゐておくれ。ゆり子ちや
んも、そこにゐて、よく見てゐておやり。」

おえつは、後が氣にかゝりながら、あたふた出ていつた。そこから、すぐ三町ばか
り下の方にいつた處にある秋田といふ醫者にいつて、來診を求めた。

「往つて診て上げてみようございますが、お宅では、いつも狩野さんでせう。」

「えゝさうなのです。狩野さんにいつも診ていたゞいてゐるんですけれど、今さうい
つて迎へにやりましたら、何處がお出掛でお留守なんです。」

秋田醫師は、上り口の處に突立つて、考へながら、

「どんな容態です？」

「熱も九度五分からありますし、ぐたりとして、どうも様子が變なのでございます。」

もし手遅れにでもなりますといけませんから、どうぞお願いいたします。」

おえつは、もう聲を上ずらして頼んだ。

「あゝ、さうですか。：：しかし、狩野さんに悪くはないですか。」

職業上のデリカシイからであらう。なほ來診をためらつてゐる。

おえつは、もう、焦れくくして來た。

「先生の方で御都合がお悪ければ爲方ありませんが、わたしの方では構はないんです。もし狩野さんを待つてゐて、手おくれにでもなりましたら、取返しがつきませんか。」

「ぢや、往きませう。一寸待つて下さい、一緒にゆきますから。」

秋田さんは一旦奥に入つて、折靴を抱へて出て來た。

おえつは、その折靴を自分で受取つて、提げた。途々、學校で發病して、今連れて歸つたばかりの經過などを話しながら戻つて來た。

「なるほど、脈もひどく悪い。：：お幾つです？」

「二月生まれの九つですけど、小さいんです。」

「さう：：九つにしては、少し小さい方ですね。」

秋田さんは、一ととほり念入りに方々を診察して、

「灌腸をしますから。どうぞ御用意を。」

灌腸をした結果、排泄物には多量の血便を認めた。

「疫痢です。」

秋田さんは確定的にいつた。

おえつは吃驚した顔をして、

「はあ！」といつたきり、暫く後がちとづかなかつた。

「この歳になつても、やつぱり有るんでございますねえ。」

「えゝまあ、少い方ですけれど有ります。：：とにかく疫痢として、臨機にその方の應急手當はして置きますから。」

といつて、大小數本の注射を施した。

「いづれ狩野さんも、そのうち見えるでせうから、狩野君によく診ておもらひになつて、その上で御相談なすつたらいでせうと思ひます。疫痢といふことになると、警

察へ届け出なければなりませんから。」

氣の小さいおえつは、警察と聞いて、もう度胸を衝かれた。

「御主人は？」

「主人が丁度留守なので、それで困つて居ります。」

「どこか遠くへ？」

「いえ、さうぢやないんです。もう歸つてまゐる時分ですけれど。」

「それでは、狩野さんも、いづれ見えるでせうから、御主人がお歸りになつた上で、よく御相談なすつたら、よろしいでせう。とにかく私の方から警察へは届けずに置きますから。……狩野さんが来て診られた上で、又、御都合によつて私も立合つてもよろしいございます。こんな、一刻を争ふ病氣ですから、應急の手當だけはして置きましたから、急にどうといふことはないと思ひます。」

「はあ、左様でございますか。どうも有難うございました。お蔭さまでした。」

おえつは頭を下げて禮をいつた。

秋田先生を玄關に送り出したついでに、彼女は又向うの方を見た。もう主人が歸つ

て來さうなものである。

一緒にそこに立つて來た上の子供が、

「まだお父さん歸つて來ないのねえ。どうしたんでせう。」泣き出しさうな聲である。

六

田原老人は、その朝、今日は急ぐ用事なので、近所の車に乗つて、この間金融を頼んで承諾を得ておいた、西銀座の方のある社に行き、早速約束の金を受取り、それからすぐ又、待たして置いた車を飛ばして牛込のエス社に廻つた。その一室を借りて、昨日から仕掛けてゐた仕事の筆を進めた。固より書いてゐる意見としては、自から信じて疑はないことであつたが、そんな片々たる雑録を書いて急場の金に換へなければならぬ自分に彼は悲哀を感じた。これも、やつぱり子供の爲の犠牲だと諦めながら、どん／＼筆を速めて、三時頃になつてやつと豫定のとほりにまとめ、編輯を通じて早速金に換へてもらつた。

丁度編輯室には、社のエヌ氏やエム氏のほかに、オー氏なども居合はしたので、田原は、

「おかげで、やつとこれで、どうかかうか間に合いました。」

と一言禮をいつた。

「いゝえゝ。それでも、まあ、調つてよかつたですねえ。」

エヌ氏は溫和な物馴れた調子でいつた。そして笑ひながら、

「田原さん、丁度貴方の好きな忠兵衛のやうですねえ。それを途中で封を切らないやうにしないといけませんよ。」

軽い戲談をいふ。

田原も軽い氣持で笑ひながら、

「全くです。……いや、本當は封を切りたいところだ。こんなにして、方々様へ御無心を願ひ、やうやくの思ひで苦しい金を調べ、拂ひ込んで置いても、自分の生きてゐる内はその金のお顔は拜まれないのですからな。考へてみれば馬鹿らしくもある。私も、もつと賢い人間であつたら、もう、これこの歳です。足許の明るい間に子供を一

人前に仕立ててそろ／＼左團扇で樂隠居を極込む時分です。これから先、まだ何時まで苦勞をしなければならぬですか。」

「子は三界の足枷といふことがあるとほり、つまり田原さんは子が足枷になつてゐるんですね。」

「眞個にさうです。」

「でも田原さん、まだ好い女は見たいでせう。」

オー君が笑つていふ。

「勿論です。：時々自分で考へてみるに、私も女は好きですねえ。」田原は興に乗つて、さも耐らないやうにいふ。

「好きだといつて、今申すとほり、手も足も出ませんがね。しかし女といふものは、醜いのもあるが、好いものになると全く美しい女がゐるからねえ。吾々はその點に於て随分審美眼が優れてゐるつもりなんだが、結局一生涯その、溢れるほどの審美欲を満足させないで、空しく終らなければならぬことを思ふと、死んでも、死に切れないと思ふ。」

「はッはゝゝゝ」

四人聲を揃へて、どつと笑つた。

「そりや貴方が、これまで大勢女を泣かしたことがあるからですよ。」

エヌ君が又いつた。

「どうして〜。僕は女に泣かされてばかり來ました。」

「はゝゝゝゝ」皆で又どつと笑つた。

エヌ君が又、

「そりや泣かされたこともあるかも知れんが、泣かしたこともあるでせう。貴方は随分つれなく振り棄てたけれど、あの少し年増のあれだつて、さうでしたし、それから私は顔は見なかつたけれど、その横濱の病院長のお妾にしたつて、さうでせう。それから、あなたが、京都に行つてゐる時分、東京から訪ねていつた女を、すぐ追ひ返したこともあるでせう。」

「なるほど、さういはれてみれば、そんなこともありますねえ。どうもエヌ君に會つては、弱い尻を知つてゐるから、叶はない。はッはゝゝゝ。でも、可愛がりもし、が

られもしたが、今ぢや、がられもがりもせぬといふ、寄席でよくやる都々逸の文句のとほり、昔や泣きもし、泣かせもしたが、今ぢや泣かしも泣きもせぬで一向面白くもありません。清浄なもんです。」

「はツはゝゝゝゝ」

一と仕切り調子づいて饒舌つてみた田原は、やがて眞面目な顔をして、エム氏の方を見て、

「エム君、今何時ですか。」

エム君は腕時計を見ながら、

「今三時半です。」

「おう、これでは、もう急いでいかなければならん。……どうも有難うございました。」

田原は、とにかく金が調つたので安心したと見え、いかにも軽快な調子で、あとの三人に會釋をして、エム社を出て來た。

そして、丁度すぐ前を通りかゝつた圓タクを呼んで、それに飛び乗り、丸の内の保険會社へ走らした。

保險會社で三四十分手間を取つて、そこから又、一寸西銀座の方へ一ヶ處廻つて、それから銀座に出て、道を歩きながら、ふいと、その結城屋に立寄つて、出來心にネクタイを一本求め、

(さあ、これから一寸家に歸らうか。)

その晩早稲田の大隈會館で、知人の一周忌が六時からあるので、田原は、それに行くつもりでゐるのだが、まだ時間が一時間餘ある。朝出る時家に少しも錢を置かずに出たから、困つてゐるだらう。幸ひ少々保険料の拂ひ残りがある。一旦歸つて、夕飯の支度にこれを置いてやらう。

田原はさう思ふと、數寄屋橋から、すぐ圓タクに乗つて一直線に歸つて來た。

七

木立の多い、そこらの屋敷は、この頃になつて、すつかり若葉を茂らせた、鬱陶しいほどの新緑の爲に、永い初夏の日も、そろ／＼夕暮れかゝる時分であつたが、表の

通りで自動車を下りて、田原は、すたく歩いて、やがて自分の家の門をあけようとする。と、丁度内からも開いた。そこに上の子供が、ふつと顔を出した。

「お、どうしたの？」

「みつちゃん、病氣になつたの。」

田原は、戲談かと思ひながら、

「病氣だ？　ほんと？」

「え、ほんと。大變悪いんです。」

「なに、大變悪い？……どんな病氣？」

「疫痢になつたの。」

「なに、疫痢だ！」田原は、まだ本當とは思はなかつた。

玄關に飛込んで、急いで深ゴムの靴を蹴脱ぎながら、座敷に駆け上つていつた。見ると、そこには、母親と、書生の屋代とが寢床の兩脇から額を鳩めて、病兒の枕を擁してゐる。

書生の屋代は、足掛け六年も居つて、つい先月の末から、外で自炊生活をはじめ

て、ある受験の準備をしてゐるのだが、内の者同様に子供も親しんでゐた。

「みつちやんが疫痢になつたつて、本當か？」

田原は、入つて來ながら大きな聲を出した。

「お歸んなさい。えゝ醫者は疫痢だといふんです。」

おえつは靜かにいつた。

田原は、まるで、出し抜けに、眞向を、拳固で、いやといふほど毆られて、鼻血が出たやうな氣持がしたが、尙ほそこに突立つたまゝ、不動の姿勢で、上衣をかなぐり棄てゝ、

「醫者は疫痢だといふんですつて。狩野さんに診てもらつたらどう？」

田原は、大事とりの狩野醫師を信用して、もう十年以上つゞけて家族を診てもらつてゐるのである。

「狩野さん呼びにいつたら、狩野さんがゐないので、先に狩野さんが居つた跡へ開業してゐる秋田さんといふ人に診てもらつたら、さういふのです。」

おえつは、先刻からの事を、手短かに説明した。

「さうか。：：だから、いはないことぢやない。今からいふと、後の祭りだが、通じを長く見ないから、時々見ないといけないともうこの間から、お前にいつてゐるだらう。そして、便が悪かつたらヒマシ油を服ましなさいと、いつてゐた。現に今朝も、その事をいつた。ヒマシ油は伊達だてや飾りに、備へて置くのぢやないと、私がくどくいつてゐたぢやないか。」

田原老人は、相變らず突立つたまゝ、病兒を見るよりも、先にまづ小言こごとからいひはじめた。

「そして、今どうなんだ？」

「だから、ひどく悪いんです。秋田さん、疫痢として應急の手當てはして置きましたから、五時間や六時間の内に、どうといふことは大抵なからうと思ひますといつて、つい先刻さつき歸つたばかりのところですよ。細いのだの、太いのだの注射を何本もしてゐました。」

「だから、こんなことがありはしないかと思つて、不斷から、大便を注意するやうにいつて置いたんだ。：：やつと、今、方々のお情けで二た月も前から苦になつてゐた

保険料を拂つて、歸つて來たばかりのところだ。今晚こそは、一と晩でもいゝから、樂々と久しぶりに脚を伸ばして寢ようと思つてゐたんだ。……狩野にもすつと藥禮が滯つてゐる。もうこの上醫者に掛ることが出來ない。死んだつてお葬式を出す金もないぞ。前々とちがつて、とても金の融通が困難になつてゐるんだから。」

田原老人は、涙を出さないばかり、泣くやうな、唸るやうな調子でいひながら、近年目に立つて頭の白くなつてきた額の汗を頻りに拭いた。そして、そこに、どかりとばかり尻を落し、暫くの間凝乎と黙つたまゝ肩で息をしてゐた。が、やがて氣を變へたやうに、

「どれ、みつちちゃん、どんな具合だ。」

優しい聲でいひながら、病兒の傍に蹂り寄つて、顔を覗いた。

「これ、みち子ちゃん。お父さんだよ。」と母親に呼ばれて、大儀さうに、一寸白い眼を見開いたが、すぐ又閉ぢてしまつた。

「もう眼が上つてしまつてゐる。脈も數へられぬほど弱い。」

田原は、これは、とてもいけないと思ふと、自分も身體中の血が一時に凍つたやう

な氣がした。

そこへ玄關の方に誰か訪ふ音がした。やつと狩野醫師が來たのである。

「どうした〜!？」

狩野醫師は元氣な調子で土間から聲を掛けながら、上つて來た。

田原は、ばね仕掛のやうに立ち上つて、そつちへ出てゆきながら、

「やあ、どうも御苦勞さまで。實にどうも困つてしまひました。小さい方が疫痢だといふのです。」

狩野氏は、疫痢ときいて、忽ち面を曇らし、

「なに疫痢だ。あの、みつちやんが。……それで、誰かに診てもらつたですか。……僕丁度内にゐなかつたもんだから。歸ると、すぐやつて來たんだ。」

「さうですか。私も今日は朝から一日外に出てゐて、今歸つたばかりです。戻つて聽くと、貴方がお留守だつたから、手遅れになつてはいけないと思つて、その秋田さんに診てもらつたさうです。すると疫痢だといふんです。」

田原は、狩野醫師によつて、それが誤診であつたことを訂正してもらひたいやうな

氣持で哀訴するやうにいふのであつた。

「なに、もう秋田君が診たのか。」

「いや、それが、私も一日家にゐなかつたし、貴方も、さういつてゆくとお留守だつたから、容態が、どうも放つて置けないので爲方なく、近處の秋田さんに診てもらつたら疫痢だといふんださうです。」

「あ、さう。しかし秋田君が診て、もう疫痢と診断したものなら、秋田君に診てもらふより爲方がない。」

狩野醫師と田原とは、座敷を歩きながら、そんな會話を交換しい／＼、病室の方に近づいて來たが、狩野氏は、何だか、すこし氣持を悪くしたらしく、

「ぢや、僕が診たつて仕方がない。ずつと秋田君に診てもらつた方がいゝだらう。」

と、いつて、襖の外に立ち佇つた。

田原は心の中で、變なことをいふと思つたが、大事の場合なので、何處までも辭を低うして、

「私が家にゐたら、又何とかしたでせうが、何しろ、今申すとほり、一日ゐなくつ

て、貴方より一と足先に戻つたばかりのところ。とにかく生れぬ先から體歴を知つてゐる貴方に診ていたゞかないと、これきり死んだ時、殘念ですから。」

「あゝ、さうですか。ぢや、まあ一寸診よう。」

狩野氏はづか／＼と病兒の枕頭に近づいたが、いつもするやうに、とつて薦める座蒲團の上に落着きもせず、洋服の膝を突いたまゝ、一寸手頸を握つてみて、

「あゝ、ひどく脈が速い。」

田原老人は、おど／＼した調子で、顔を覗けながら、

「やつぱり疫痢でせうか。」

「確に疫痢ですねえ、秋田君が診て、さういふんだし。間違ひないです。」

狩野醫師は、田原の思惑などに會釋もなく、さういひ放つて、たゞ型ばかりに一寸聽診器を心臓の處にあてゝ、

「あゝ、心臓も衰弱してゐる。」

それから下腹部の方へ掌を挿入れてみて、

「腸をひどく悪くしてゐる。……疫痢ですよ。」

「やつぱり疫痢ですか。田原は唇を震はせて、

「疫痢ですと、どうしたら、いゝでせう？」

「避病院です。避病院にやる外爲方ない。」

田原の胸には、それがひどく冷酷に響いた。それとともに、五六年前上の子供が五つの時、それに似た病氣で狩野氏に治療してもらつたが、自宅で済ました。田原はその時のことをいつて、

「先の時は自宅うちで、やつていたゞいたのですが……」

「あれはたゞ大腸カタルの少し念の入つたくらゐのものだつたから、何でもないさ。」

「今度も、そんなことに願へませんか。」

「そんなことをしたら、醫師法違反で、僕が罪を着なければならんことになる。僕が迷惑することになる。」

「なるほど、それは御尤もで。……しかし、私は、その秋田さんにはまだ會はないんですが、今歸つて來て聴くところでは、秋田さんのいはれるのに、自分はまあ疫痢と思つて、手遅れのないやうに、その方の手當はして置くが、警察へは、自分の方から

は届け出ない。いづれ狩野さんが後で來診せられるであらうから、萬事狩野さんとよく御相談なさつたらいいでせう。御都合によつては、自分も一緒に御相談に與つてもいいといふのださうです。」

田原は言葉^せを急ぎせきだつたが、明晰にかういつた。

それでも狩野氏には、それがよく耳に入らないのか、

「僕によく相談してといつたつて、秋田君が先きに診て、疫痢と診断したものを、僕が、それをどうすることも出来ない。」

狩野氏は餘程昂奮してゐるらしく、さういつて、田原の言葉を突跳ねた。

傍で始終聽いてゐたおえつが、狩野氏と田原とを等分に見ながら、

「秋田さんは、疫痢とは、まだいひ切らないのです。たゞ、こんな病氣だから、手おくれになるといけないから、その方の應急處置だけはしておく。あとは、狩野先生によく相談して、そこは御都合のいゝやうになさいと仰有つて、つい先刻^{さつ}お歸りになつたばかりのところですよ。そして、自分の方からは警察へは、届けないからといふことを、くれぐれも念を押して仰有つてゐました。」

と、静かに口を挟んだ。

「あゝさうですか。しかし、自分で診て疫病といつて置きながら、どうして私に、よく後は相談せいといふんだらう。いくら相談したつて、僕がどうすることも出来やしない。今度は、まあ、秋田君にずつと診てもらつたがいゝでせう。」

狩野氏は投げ出すやうにいふとともに、いきなり起ち上つて、縁側の手洗器の處に出た。

田原はその後を追うて立つてゆき、

「秋田さんにやつていたゞくことになる、避病院にやるでせうねえ。」

田原老人の聲は、もうおろ／＼してゐた。避病院と聞いただけでも、病兒を火葬場の一つ手前に連れて行くやうな心地がする。

「え、無論避病院です。」

「それが、執拗しつこくいふやうですが、先の、上の子の時のやうに、貴方の手で内うちで何とかならないのですかねえ。」

「先とは違ひます。もし、僕がそんなことをしたら、僕が醫師法に問はれて、醫者を

止めなければならんことになる。」

狩野氏は、秋田氏が少し許り考慮の餘地を残していつたことが、どうしても胸に納まらないらしい。

「とにかく僕も急ぐことがあるから、歸らなけりやならん。まあ秋田君にやつてもらふんだねえ。もう、かうなつたら、それより外方法がない。都合によつては、私もまた見に来ます。」

狩野氏は疊を蹴るやうに急いで玄關の方に出てゆきながら、首を傾けて、
「僕に相談せいなんて、秋田の心が知れない。……人を陥れようとしてゐる。質なが悪
いんだから……」

獨りごとのやうに棄てぜりふをいつて、颯々と出て歸つた。

田原は、狩野醫師の不思議な態度に、半ば呆氣にとられ、半ば取り付く島もないやうな悲しい心地になり、それとともに少からぬ不愉快さも感じて、歸つて行つた後を暫く見送つてゐたが、今の場合何事も堪忍が大事と、凝乎と耐へながら、病兒の處に引返して來ると、

おえつも傍らの屋代も同じやうに呆れた顔に、微かな笑ひを浮べて、

「變な人ですなあ。きつと、自分を待つてゐないで、秋田さんに頼んだから、氣を悪くしたんでせう。」

「うむ。：：さうかも知れんが、それだつたら、向うが分らないんだ。一刻を争ふ病人に、何時來てくれるとも分らない醫者を、べん／＼待つてゐられない。そんなことが分らない筈もないと思ふが、今の口振りでは、多少そんなことがあるかも知れん。」

「この前だつて、一月にゆり子がヂフテリアに罹つた時、晩の五時にさういつていて、いくら待つても來ないで、やつと十一時になつて來てくれた。」

「うむ、あの時は、芝居にいつてゐたといつて、歸るとすぐ來てくれたんだ。幸に間に合つたから、よかつたが、ヂフテリアだつて、手遅れになると大變だ。この病氣はそれよりも急だ。そして五六時間は大丈夫だと秋田さんいつた？」

「えゝ、大抵六時間くらゐの内に、急に變つたことはなからうと思ひますと、歸る時にも、それを繰返して、云つていきました。」

「ぢや、このまゝに放つて置いたら、六時間、いや、もう四五時間で危い生命だ。早

く取留めてやる分別をしなければならん。爲方ない。その秋田といふ人に頼むか。いつ頃だい、来てくれたのは。」

「お父さん歸る一寸前に歸つたばかりですよ。長く居つてくれて灌腸をしたり、注射を何本も何本もして、あれで二時間近くも居つたでせう。」

「さうか。ぢや、もう一遍來てもらふか。」

「來てもらふたつて、つい先刻歸つたばかりですから、お父さん行つてみたらいでせう。向うでも、さういつてゐたんですから。御主人がおかへりになりましたら、お眼にかゝつて委しくお話致しますから、一寸御苦勞ねがひますといつてゐました。その事をお父さんに、いはうと思つてゐるところへ、狩野さんが來たから、いふ間がなかつたのです。」

「さうか、ぢや、すぐ行つて來よう。ゐるだらうか。」

「ゐるでせうとも。まだ、狩野さんのやうに、さう忙しくないんでせうから。」

田原は、それで、すぐ駆け出していつた。

八

「田原です。先程は、どうも有難うございました。」

そこは五六年前まで、狩野氏がやつぱり看板をかけてゐた家であつた。狭い玄關に立つて、さういふと、秋田醫師は、自分でそこへ立ち出で、

「いえ、どうぞお上んなさい。」

「こちらで失禮いたします。」

「まあ、さういはないで、どうぞ。お話もありますから。」

田原は、すぐ次の診察室に通つたまゝ、突立つてゐると、

「どうぞそれへお掛けになつて。」

「いえ、急ぎますから。お蔭で應急處置は施していただいてあるさうですが、後もう四五時間で危い生命ですから、何とか早く。」

「まあ、落着いて。さう御心配なされることもありません。」

田原は漸く椅子に尻を置いた。

「それで、大體奥さんから、お聴きになつたでせうが、そんな次第ですから、狩野さんと今後の事はよく御相談なさつたがよからうと思ひます。」

秋田氏は落着いた調子でいふ。

「えゝ、その狩野さんが、今來て下さつたんですが、貴方に來ていたゞいたことを申しますと、秋田君に診てもらつて、秋田君がさういふなら、秋田君につゞけて見てもらつたがいゝといふんですが、どうしても避病院に入れなければなりませんか。」

田原は、狩野氏の態度と意向とを簡單に話した。

「どうも狩野君少し誤解してゐるんぢやないかな。」

秋田氏は小頸を傾けてゐた。

「どうも、さうらしいんです。」

そこへ電話のベルが鳴つた。

「一寸待つて下さい。狩野君からかも知れん。」

秋田氏はすぐ傍の電話口に立つていつた。こちらからは單に受け答へばかりしてゐ

たが、たしかに狩野醫師らしい。暫く向うの話を聴取つた後、受話器を收めて、戻つて来て、

「狩野君です。狩野君も私に診て上げてくれといふのです。そして貴方の方のこと、前には診て居つたこともあるが今はさうでもないといつてゐました。」

田原は、心の中でいろんなことを疑つてみた。近ごろ大分薬價の滞りがちのこと、その理由の一つではあるまいかと思つてみた。

秋田氏は言葉をついで、

「それで今狩野君も避病院に入れた方がよからうといつてゐました。どちらにしても警察へ届けることになれば、避病院につれて行きます。」

「はあ。」田原は心の中で、飛んだ醫者に診てもらつたものだと思つた。

「どうしても避病院でなければいけませんか。」

「いや、隔離室のある處なら、どこでもいゝんですが、神田の瀬川は遠いし、慶應病院でもいゝが、やつぱり可なりあります。速くするには近い處がいゝんですから、近い處といへば、豊多摩病院です。」

田原は、すぐ前の江口氏の子供が、去年の秋、同じ病氣で秋田氏に掛つて、その病院に送られ全快して歸つたことを先刻おえつから聞いたが、それとともに、もう五六年前の秋口に、近所の、時々口をきゝ合つてゐたお婆さんが赤痢を病んで、そこに連れていかれて死んだことなど思ひ起して、ひたすら陰惨な感で胸が一杯になつた。

「なか／＼設備の届いた好い病院ですから、そこにお入れになつたら、どうです。」

「はあ、設備はいゝですか。」

田原は經費の事を眞先に考へなければならなかつた。だが、死ぬにしても、自分の負擔力の能ふかぎり、手厚い介抱をしてやりたかつた。さうすれば死んでも、せめてもの諦めにもなる。

「經費はほゞどのくらゐのものでせうか。」

「なに、大したことはありません。一等が五六圓ですか、一等は一人一室です。それから二等三等と、五等くらゐまである筈です。」

田原は、もう爲方なく觀念して、醫者のいふとほり避病院に入院さすよりほかはないと思つた。その場で秋田醫師は直ちに電話で警察へ届けた。一方避病院の方へも田

原の依頼によつて、一等室を準備してもらつとくやうに申込んだ。

田原はさう決定すると、急いで驅けて戻つた。

「どうしても避病院にやらなければいけないといふから、爲方ない、避病院に連れていかう。今、秋田さんの處から方々へ電話を掛けてもらつた。すぐ支度をして。……速くしないと、あともう三四時間で危い生命だ。」

おえつを急ぎ立てた。

彼女は重たさうな調子で、

「豊多摩病院といふのは、すぐ、先きの、電車から、その屋根の見えてる？」

「さうだ。すぐ近くだ。」

「ぢや、いつか、たあ、ちやんのお婆さんが、いつて死んだ處でせう。」

「さうだ。もう覺悟はして置け。」

「厭だなあ。どうしてこんな病氣になつたんだらうなあ。」

おえつは溜息を吐いた。

「でも、その江口さんの榮子ちゃん、やつぱり、あそこへ行つて、癒つてかへつた

のよ。」

上の子供が傍からいつた。

「さうだ。避病院にいつたつて、死ぬとも限らない。さあ、早くするんだ。」

「そして病院には、お父さん行きますか？」

「私も行くには、ゆくが、ずつと附き切りにはしてゐられない。やつぱりお前が附いてゐてやらなければ。そして屋代にも一緒にいつてもらはう。屋代、君は又、どうして、さう早く病氣といふことがよく分つたね？」

「屋代さんは、知らないで丁度騒いでゐる處へ來合はしたのです。屋代さんが來たので、私も氣がつよくなつたんです。」

「それは、よかつた。君御苦勞だがねえ、とにかく一緒に附いていつてくれ。私も後から一寸この始末をしておいてから行くから。」

それから大急ぎで、そこ／＼に手廻りの物を調べて、人力車に抱き載せ、まるで、死骸を門送りする心地で、ひつそりとして家の門を出た。それは、田原が外から歸宅してまだ二時間ほど経たない時分であつた。

出ていつた後は、思ひなしにか、電燈の光も薄暗くぼやけ、戸外は晝の青嵐も静まつて、夜氣が重い。家の中がそこらぢうレゾール消毒液の臭で、ぷん／＼鼻をつくやうである。

田原老人は、ワイシャツ一つの大童で、家の中に、しょんぼり寂しさうにしてゐる上の子供と、勝手の分らぬ田舎出の女中とに氣勢を附けながら、レゾール液で壘を拭かしたり、自分で便所を掃除したりして、一時間ばかりかゝつて、やつと荒片づけをして、ほつと一息吐いてゐるところへ、俵屋が人力車をもつて迎へて來た。

「どうも御心配です。只今病院から電話がかゝつて來まして、大變悪いから、俵に乗つて、早く來てもらひたいといふ、ことづけでした。」

田原老人は、又ぎくりとして、一そう顔を曇らし、

「ふむ、悪いといつて來たかねえ。」

「ひどく悪いから、早くお出でになるやうにと、いふことでした。」

田原は、俾の上で、わづか十町餘の道でありながら、十里もあるところへ行くやうに、もどかしがりながら、厭でも應でも病兒の死に直面しなければならぬ恐怖に怯えてゐた。自分の身體にも血の流動が止つてしまつたのか、全身麻痺したやうな氣持になつて、胸は鉛の如き物を詰めたやうである。

（それにしても、人の生命ほど果^はかないものはない。朝露夕雷の譬に洩れずとは、このことだ。今朝は元氣に出て行つたといふのに、夜をも待たず、もうこの世の人ではなくなる。……電車が自動車で轢殺されたと同じことだ。毎日幾つかそんなことが新聞にある。……まだ母の胎内に居つた時から、母體の重患を親と共に苦しみ、生まれてからも無事に成人することは覺束ないと思はれたが、よく九歳の今日まで生きて來たのが不思議だ。……あゝ、もう脈が止まつてしまつたか。それともまだか。……なに、そんなに脆く死にはせぬ。どうも死にさうに思はれぬ。……さう思ふのは、親の慾目

で、確たる事實を見そこなつて居るのであらうか。……)

先刻家を出る時、母親が、起つて衣服を改めようとすると、それまで、昏々として眼を瞑りつゞけてゐた病兒は、邊りの物の氣配に、かつと目を見開き、枕頭の母親のその姿をちらつと見ると、瀕死の脈でゐるにもかゝはらず、がばと身體を半分揜ぢ上げる恰好をして、

「お母ちゃん、どこへゆくの？」

と、泣聲を出して、呼んだ。

「お母ちゃん、どこへもゆかない。」

傍から口々に賺した。

田原は、その瞬間の光景を俤の上で、描いてゐた。不斷から、可笑しいほど、又どうかすると憎らしいほど、母親を慕ふ子供である。四十度に近い高熱で、菌毒は今全身を冒し、腦の機能も、心臓の働きも絶えだえになりつゝあるのに、

「お母ちゃん！」と、見えもなく、最も親しみのある家庭的の泣聲を發した。

田原は、その時、死んだ者が不意に蘇生したやうな悽愴な光景に、驚きよりも、む

しろ不氣味なものを感じた。と同時に、いかにも子供が切實に母親を愛慕してゐるかといふことを今更に考へさせられた。

生きてゐる物が、最後の際きはになつても發動する思慕の精神力の強さ！ 人の生命は到底物質ばかりのものではない、精靈の力もまた大きい。

（あの、可笑しいほどの念力が、菌毒に、どこまで抵抗出来るだらう。それが停止したら、萬事終りだ。：：忌まれる傳染病だから、勿論死んだら、病院から直ぐ、火葬場に持つて行かれるのだ。いとせめて遺骸を自宅に連れて戻り、懇ろに供養をしてやることも出来ぬのだ。：：あの、身丈みだけの小さい洋服や、子供らしい持ち物が、いつまでも後の思ひの種になつて困るだらう。：：考へてみると、自分は何の爲に、何を樂しみに、何を目的に、この老境にまで見つともなく生きてゐるのだ。そのためには、隨分心にもない恥辱を忍んでゐるのだ、：：さうだ。一人でも死んだら、それだけ責任が軽くなる。自分の眼の黒い間に子供の始末をしておけといふ、天の引導かも知れん。そしたら、自分は上の子だけ一人つれて、あの母親と別にならう。それがまた彼女の本願であるかも知れぬ。さうでもするより、哀傷の氣分を轉換する良法はないだ

らう。……だが、さうなると、やつぱり死兒に對する追憶の情が絡み合つて、やつぱり、さうもならないかな。）

田原の頭の中は、もう、そんな先の先の事まで、いろ／＼な空想と現實とが、梭を織る如く、入り亂れ、驅けめぐつてゐた。

解 説

宇 野 浩 二

『子の愛の爲に』は、大正十三年、(一千九百二十四年)、秋江が四十九歳の年の作で、「中央公論」の十二月號に發表された。

この小説は、四十八歳で初めて子を持つた作者が、長い間の身も心も爛らすやうな戀愛に倦み、少なからぬ金を使ひ果たし心根を磨り減らした戀愛に敗れ、結局、老後の殘生を子の愛によつて生きんとしたが、それも亦、彼が嘗て經驗したさまさまの戀愛同様、いろいろな人間や事件に邪魔されて、ままにならぬ顛末を書いた作品である。子の愛の爲めに苦しんだり喜んだりする小説は、花袋や藤村(例、『幼兒』、『芽生』など)その他にも勝れた作品は可なりあるが、子の愛の爲めに、「ある一つの目的物に

向つて全力の愛情を傾倒してゐる場合には、ちやうど鹿を逐ふ獵師の目に山が見えないといふ譬のとほり、その一つの目的物より外の物は殆ど考へられなかつた」(『子の愛の爲に』の中の言葉)といふやうな、盲目的な(本能的な)愛に溺れる物語を書いた小説としてはこの作品は類稀たぐひまれである。それは、この『子の愛の爲に』を讀んでも、この集の最後に收められてゐる『苦海』を見ても、十分わかる筈である。

秋江は、『別れた妻に送る手紙』から『黒髪』にいたるまでの幾篇かの愛慾を題材にした小説に就いて、それ等の小説を通じて讀むと、「ある一人の愚かしき男性が、いかに次ぎから次ぎへと女性に對する愛執の煩惱の虜になつてゐるかが窺はれる。」と書いてゐるが、この『子の愛の爲に』も「子に對する愛執の煩惱の虜」になつた男の殆ど偽りのない物語である。

秋江は、この「愛執の煩惱」に就いて、「それは、藝術の目的を功利的に考へる立場に立つ者にとつては、勿論唾棄すべきものであるが、人間の愛執の心理を純藝術的に認める者にとつては、簡單に冷笑し去るべきものではなからうと思ふ。」と自信をもつて述べてゐる。さうして、猶、その後あとに、かう書いてゐる。

「作者は、泰西の近代文學の中に、その種類の價值高きもの存することを知らんと共に、我が國の古典文學、就中謠曲に愛著煩惱の極致を歌つたもののある事を知つてゐる。」

「わが國の謠曲には、ひとり女性に對する愛執の極致を歌つてゐるばかりでなく、又、親子の間の深く且つ切實なる愛情を叙してゐるものがある。愛兒を人に凌ひ去られて、狂するまでに心を傷みたる慈母の表情を解する者にして、初めて藝術の價值を知ることが出来る。謠曲が、日本の過去の文學であるなどといふ、頭の簡單なる輕薄兒には、また文學を専ら功利的のものとして以外には解することの出来ない粗笨なる頭の持主には、遂に親子の愛情が如何に藝術の好き題材である事が分らない。ラファエルやミケランゼロの慈母の繪像、わが謠曲の『隅田川』の愛著の詩篇に、何處に淺俗低級なる功利的意味ありや。——『子の愛の爲に』は即ち親子の愛情が如何に人間に切實なものであるかを語つてゐるものである。」

『子の愛の爲に』の解説に、作者が謠曲の『隅田川』からラファエルやミケランゼロまで持ち出して來るところなどにも、たと縦ひそれが見當外れであるとしても、『子の

『愛の爲に』が獨得な作品である事と、その作者が獨得な人である事とが、誠によく分かるやうに思はれる。また、小説の題に『子の愛の爲に』と附けるところなども、十四五年前の『別れたる妻に送る手紙』といふやうな思ひ切つた題を思ひ合はされる。いづれにしても、妻に對する愛の執著と煩惱を書いた作品として、『別れたる妻に送る手紙』が或る意味で驚嘆すべき小説であるごとく、子に對する愛の執著と煩惱を取扱つた小説として『子の愛の爲に』は或る意味で驚異すべき作品と云へるであらう。

『意氣なこと』は、大正十四年、(一千九百二十五年) 秋江が五十歳の年の作で、「新潮」の八月號に發表された。

この小説は、第二卷に收められた、『伊年の屏風』が好短篇であるやうに、亦、好ましい短篇であるが、作者の年齢でいふと、三十五歳の年の作と五十歳の年の作といふ程の違ひはないが、強ひて『伊年の屏風』と比べると、落著きもあり、構想も巧みであり、作中の主人公が物分かりがいいやうに、物分かりのいい作者の書いた作品とも

いふべき、一種の味がある。

唯、老いても秋江らしいところを望む私などには、秋江らしいところもあるが、秋江の小説としては、何か特徴といふやうなものの少ないのが物足りない。しかし又、不斷に客觀的の形式の小説を書きたいと云ひ、五十になつて靜かな心境を味ひたいとも思つてゐたかも知れない作者が、六十の半ば近くになつて、この小説に取り分け愛著を覺えるといふ氣持も分からなくはない。

『夏姿』は、大正六年、(一千九百十五年、)秋江が四十二歳の年の作で、「新小説」に發表されたが、その何月號であつたかは作者の記憶にもないと云ふ。それで、この選集に入れたのは單行本から取つた。

假に、秋江の戀愛を題材にした小説を四種に分け、それを女主人公の身分によつて何何物といふ分け方で分けると、「別れた妻」物、「大阪の遊女」物、「京都の遊女」物、「鎌倉の妾」物、の四種になるが、この小説はその「鎌倉の妾」物の一つである。

この「鎌倉の妾」物は、たしか、この『夏姿』と『秘密』（大正七年一月—二月、「讀賣新聞」連載）の二篇であるが、『夏姿』は男主人公を元にして書き、『秘密』は女主人公を元にして書いたものである。さうして、作の出來榮は一長一短はあるが、『夏姿』の方が幾らか勝れてゐる。

この『夏姿』だけで云ふと、それ以前の三種の戀愛物と比べれば、主人公の男が、嘗て數度の戀愛に少なからぬ戀愛の苦勞を味つてゐる上に、年も取り、肉體も衰へ、一種の分別も出來てゐるから、危あぶない橋を渡りながら決して危あぶない所まで行かないところに特徴がある。つまり、この小説以前の幾つかの戀愛が危くない橋を渡りながらしばしば川に落ちてゐるのに比べて、この小説の戀愛はそれらの戀愛と全く反對であるところに特徴がある。

結局、この小説の男女の主人公は、共に戀愛の古強者ふるつわものだけに、前の數篇の小説の戀愛と比べると、實に巧みな戀愛をするところに、却つて色氣のごときものが生き生きと書かれてゐるやうに思はれる。

『小猫』は、明治四十五年、（一千九百一十二年）秋江が三十七歳の年の作で、『文章世界』の六月號に發表された。

この小説は、小説といふより、小品といふべき作品で、取り立てていふ程のものではないが、『意氣なこと』などと全く違つた意味で、六十歳の半ばに近い作者が、回想して、微笑される作品とでもいふべきものであらう。

『苦海』は、昭和八年、（一千九百三十三年）秋江が五十八歳の年の作で、『中央公論』の十二月號に發表された。

秋江は、「親子の愛情が如何に人間に切實なるものであるかを語つてゐるもの」と云ひ、「異性の戀愛から親子の情愛に變化してゆく人間の煩惱生活の過程を描き、人間生活の幸と不幸との眞諦、畢竟この二大愛情の完全に遂げらるると否とに依つて分るるものである事を暗示せんとした」と述べた『子の愛の爲に』（大正十三年十一月作）を

書いた年から、この『苦海』を書くまでの十年程の間に、『第二の出産』（大正十四年四月作）『兒病む』（昭和二年八月作）などを書いてゐる。

さうして、秋江は、『第二の出産』については『子の愛の爲に』の續篇とも見るべき作と云ひ、『兒病む』に就いては「長女疫病を病みて痛心す、即ちこの實録を草す」と述べてゐる。

秋江はしばしばこの實録といふ言葉を使ふが、秋江の數多の作品の中で、秋江らしい名作は、「別れた妻」物でも、「大阪の遊女」物でも、「京都の遊女」物でも、「鎌倉の妾」物でも、「子の愛」物でも、みな秋江の謂はゆる實録である。

勿論、秋江の小説が實録といふのは唯の（普通にいふ）實録ではない。それを秋江の言葉を借りて云ふと、かういふ意味である。

「自分の作には少なくとも作者の人爲的な脚色といふものがない。それは、しばしば作品としての大なる缺點となさるる事であるが、しかし、人爲的な脚色は、その代償として、人間に起つた眞實を虚飾せねばならぬ。藝術家が彼の巧妙なる技術によつて、人生を脚色し又は虚飾して、讀者の興味を飽滿せしむるのも、無論、藝術的仕事

として快心事であるには相違ないが、自分の飽くまでも眞實を重んずる徹底主義は、生半なまなかの脚色と虚飾によつて、折角人生に自然的に發生したる事實の眞實さを矯め且つ損傷するに忍びないのである。前に云つたとほり、自分が、これらの、愚かしい出來事を題材として、敢て自傳的なる作品を公おぼやけにするの恥辱を忍んだのは、他方、この人間に起つた眞實といふものの貴重なることを思つたからである。」

右の文章を見ると、秋江が、彼の自信のある小説を、(私たちが讀んでも秋江の全作品中の傑作であると考へる小説を)實録とか、近代式實録小説とか、卑下するやうな言葉を使つてゐながら、如何に並大抵でない自信を持つてゐるかが分かる。

しかし、これは、私の最眞目でなく、當然で、自分の作品に就いて、「飽くまでも眞實を重んずる徹底主義」と云ひ、「生半の脚色と虚飾によつて、折角人間に自然的に發生したる事實の眞實さを矯め且つ損傷するに忍びない」と述べ、「人間に起つた眞實といふものの貴重なること」を思つて、「敢て自叙傳的な作品を公に」した、と聲明できる作家は、大袈裟にいふと、秋江の外に、何人あるであらう。

「子の愛」物の最初の小説『子の愛の爲に』の最後に、「宇治(或ひは私)はそれから

毎日二ヶ處の病院を見舞つてゐたが、どういふものか母親の病院の方には足が快よく進まなかつたにも拘らず、子供の病院へは、ちやうど戀する者が戀人の處に通つて行くやうな樂さと慰めとを感じて、そつちの方へは毎時^{じつ}足が輕かつた。片方の苦々しい悪感^{あくかん}は、さうして子供の顔を見る間だけは忘れてゐることが出來た。病が癒えてくれなければ困るといふ事は分つてゐるにも拘らず、憎んでいいか憐んでいいか分らぬお悦（註、主人公の妻の名）の病室を見舞ふのは宇治には重い義務のやうな氣がするのであつた。宇治はお悦の病室を遁れ出ると、すつかり別な氣持になつて子供の處へ急ぐのであつた、：：」と書いてゐる秋江は、十年後の小説『苦海』の中で、かういふ事を書いてゐる。（しかし、讀者よ、右に引用した文章だけ讀んでも、『眞實』の嚴しさに打たれるではないか。秋江が謂ふ所の「自分の臟腑を恥かし氣もなく紙に打突け」てゐる文章ではないか。）

ところで、『苦海』の中の文章であるが『苦海』は、雑誌に出ただけで、單行本になつてゐないので、私がこの小説が出た當時に紹介風の批評をした文章の中に、その斷片を寫した文章があるから、その中から引くと、かういふのである。

「主人公の田原老人（註、私としてもいい）は、妻に先きに病兒を病院まで送らせ、「ワイシャツ一つの大童で（中略）自分で便所の掃除をしたりして（中略）ほつとと息ついてゐるところへ、」病院から病兒が悪いからと云つて迎への車が来る、その車の上での彼の感慨——それにしても人の生命ほど敢果ないものはない。朝露夕雷のたとへにも洩れずとはこの事だ。（中略）自分は何の爲なに、何を樂たみに何を目的に、この老境にまで、見つともなく生きてゐるのだ。そのためには、隨分心にもない恥辱を忍んでゐるのだ。：：さうだ。一人でも死んだら、それだけ責任が輕くなる、自分の目の黒い間に子の始末をつけておけといふ引導かも知れん。そしたら、自分は上の子だけ一人つれて、あの母親と別にならう、それがまた彼女の本願であるかも知れぬ。（中略）だが、やつぱり死兒に對する追憶の情が絡み合つて、やつぱり、さうもならないかな。」

右の引用文だけは、引用した私にも、よく分らないが、主人公がその妻と眞から氣が合はないらしい事が、『子の愛の爲に』の中にも、『苦海』の中にも、書かれてゐるところを見ると、この二つの小説からだけ考へれば、秋江は、四十七八歳の頃から

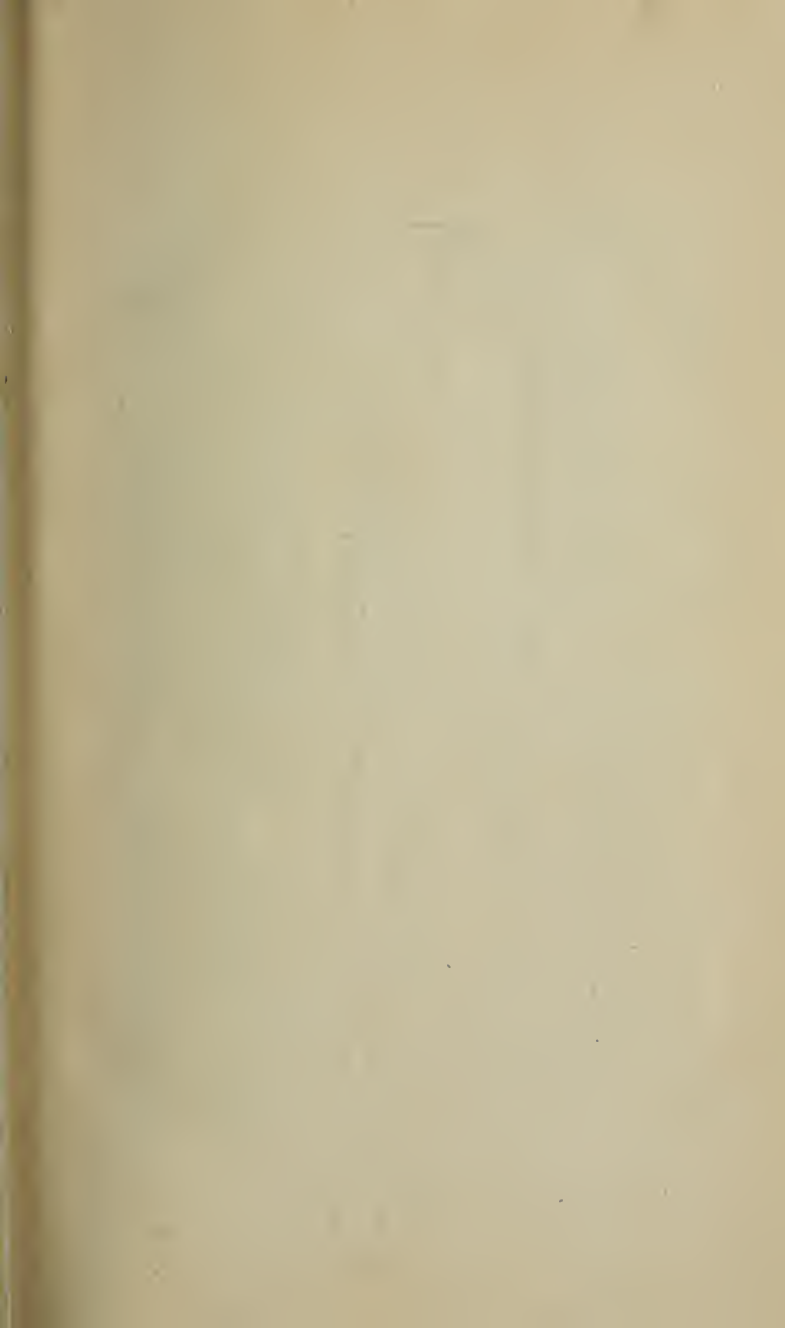
四十八九歳の頃まで、彼の妻とどうしても（殆ど辛抱できない程）解けない不和の状態にあるらしい。が、いづれにしても、この『苦海』の不十分な引用文だけ見ても、秋江が、如何に嚴しい眞實と戦ひ、如何に「自分の臟腑を紙に打突けた」文學（人生）と戦つてゐるかが分かる。

『苦海』とは、いふまでもなく、佛教で、「苦界の苦痛の深きことを海」に譬へた言葉である。

今年、六十四歳になられる近松秋江翁は今も猶『苦海』に居られると聞く。それを思ふと、この拙劣な解説を書く私の目は曇るのである。

同じ子の愛に苦しむ事を書いた、島崎藤村の『芽生』と、秋江の「子の愛」の物を比べて、この兩大家の文學を並べて、少し委しく書きたかつたのであるが、これは解説から離れるので割愛した。

最後に、この拙劣な解説の文章を終るに當つて、近松秋江先生の御健康の一日も早く全快されることを心から祈る。



昭和十四年十月五日印刷
昭和十四年十月十日發行

近松秋江傑作選集、第三卷

定價 一圓七十錢



著者

近松秋江

發行者

木田開

印刷者

堀修造

東京市麴町丸ノ内二丁目二番地

東京市牛込區櫻町七番地

發行所

東京市麴町丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルディング五八八區

中央公論社

振替口座 東京三四番

電話丸ノ内

五五五
三三三
八七六
番番番

近松秋江傑作選集——内容項目

第一卷

(内容)——處女作にして出世作たる『別れたる妻に送る手紙』は當時(明治四十三年)文壇を風靡してゐた自然主義の無情緒主義に嫌らぬ作者が、渾身よりの傑作であり、『黒髪』『狂亂』『霜凍る宵』の圓熟期の三連作と共に、明治大正文學史上に輝く不朽の金字塔である。

第二卷

(内容)——秋江としては珍しい長篇小説であり、ユウモアのある作品『二人の獨り者』を始め、最も秋江らしい作品であり、大阪の遊女を題材にした小説中の傑作『青草』、それに好短篇『伊年の屏風』を加へたるこの一卷は、秋江の持つ明るさを代表する珠玉集である。

御注意

各册定價一圓七十錢。豫約出版物ではありませんから、最寄りの書店にお申込みになればどれでもお好きな巻を直ぐ御届けします。各巻末の宇野浩二氏の解説は、近松秋江氏の文學を精細に解く稀有の名論文です。





PURCHASED FOR THE
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE
CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR
CHINESE AND JAPANESE STUDIES

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03050 8303